島根県出雲市

里方本郷遺跡
山持遺跡4（5区・7区）

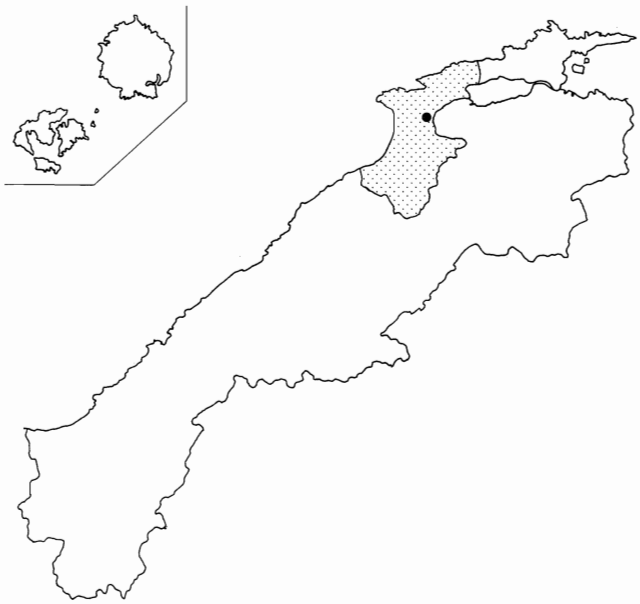
国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書6

2008年3月

島根県教育委員会

里方本郷遺跡
山持遺跡４（５区・７区）

国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 6



２００８ 年 ３ 月
島根県教育委員会

1. 里方本郷遺跡　弥生時代前期の土器

2. 山持遺跡５区　木質遺物

序

島根県教育委員会は島根県土木部から委託を受けて、国道431号道路東林木バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査をおこないました。

本書は、平成16年度から平成18年度にかけて実施した里方本郷遺跡、山持遺跡の発掘調査の成果を取りまとめたものです。

里方本郷遺跡は出雲市矢尾町から日下町にかけて所在します。弥生時代前期や古墳時代前期の土器が出土しただけでなく、古代や中世の土地の利用を考えるうえで重要な資料を得ることができました。

山持遺跡は出雲市西林木町・日下町に所在します。山持遺跡は平成14年度から調査が行われており、これまでに3冊の報告書が刊行されていますが、本書では5区・7区の調査成果を収録しています。

山持遺跡5区では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器と共に多くの木製品が出土しました。木製品には鋤や鍬のほか、精巧に作られた容器があり、当時の技術を考えるうえで貴重な資料となりました。山持遺跡7区では、溝から古墳時代中期から後期の土器が出土し、山持遺跡全体の動向を考えるうえで、重要な資料を提示できました。

これらの調査成果は島根県の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない貴重な成果です。本書が学術的な研究資料としてばかりでなく、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご協力いただきました地元の皆様、出雲市、島根県土木部をはじめとする関係の方々に心からお礼申し上げます。

平成20年3月

島根県教育委員会
教育長　藤　原　義　光

例　言

1．本書は、島根県教育委員会が平成16・17・18年度に実施した国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。本報告書は第6冊目に当たる。

2．発掘地は下記のとおりである。

里方本郷遺跡　　島根県出雲市矢尾町945ほか、日下町54ほか

山持遺跡（5区）島根県出雲市西林木町29-1ほか

山持遺跡（7区）島根県出雲市日下町358ほか

3．調査主体　　島根県土木部から委託を受けて島根県教育委員会が実施した。

調査組織は本文中に記した。

4．調査期間

里方本郷遺跡　　平成16年5月17日～9月28日、平成17年5月16日～10月25日

山持遺跡（5区）平成17年10月31日～12月2日、平成18年5月16日～9月25日

山持遺跡（7区）平成16年6月24日～8月12日

整理期間　　現地調査終了後および平成19年4月1日～平成20年3月31日

5．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標Ｘ軸の方向を指す。平面直角座標系ＸＹ軸は日本測地系による。レベルは海抜高を示す。

6．現地調査及び報告書作成では以下の方々から指導、助言、協力を頂いた。明記して深謝いたします。（五十音順、敬称略）

岩崎　茂（守山市教育委員会）、園山　薫（出雲市文化財課）、田畑直彦（山口大学埋蔵文化財資料室）、林　大智（(財）石川県埋蔵文化財センター）、久田正弘（(財）石川県埋蔵文化財センター）

出雲北稜高等学校、出雲市役所、鳶巣公民館

7．第1図は国土地理院発行の1/25,000図「出雲今市」「大社」（平成14年）、第2、3、84、111、130図は出雲市都市計画平面図を使用して作成した。

8．現地の実測図は調査員、調査補助員が作成した。本書に掲載した遺物の実測、製図は調査員、調査補助員、整理作業員が行った。本報告書の写真のうち、写真図版45-1の写真は島根県教育委員会編2007『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区　vol.2』の写真図版1-2を用いた。第7章の写真はパリノ・サーヴェイ株式会社が撮影した。その他の写真は中川が撮影した。

9．本調査に伴って行った自然科学分析およびその成果は第6章と第7章に掲載した。

花粉分析・プラントオパール・放射性炭素年代測定（文化財調査コンサルタント株式会社）、樹種同定（パリノ・サーヴェイ株式会社）

出土木製品の保存処理および保存処理木製品の樹種同定は㈱京都科学および(財）元興寺文化財研究所に委託して実施した。

10．本報告書の執筆は、第6章は渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、第7章は高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）がそれぞれ執筆し、それ以外の部分は中川が行った。編集は埋蔵文化財調査センターの職員の協力を得て中川が行った。

11．本報告書掲載の遺跡出土遺物、実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33）で保管している。

凡　例

1．本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

（1）遺構図　　1/10・1/20・1/40・1/60・1/80・1/100

（2）遺物実測図　土器：1/3・1/4　木製品：1/4・1/6・1/8　土製品：1/2　石器：1/1・1/2・1/3・1/4

2．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにした。木製品の断面は肉眼観察による木目の方向を示す。石器、土製品、石製品には断面に斜線を入れた。

3．挿図中に用いたスクリーントーンはそれぞれ以下のものを表す。

：遺構の底面　 ：撹乱・盛土・表土　 ：赤塗範囲

：炭化部分　 ：有機質の層

4．本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。

5．発掘調査時における遺構名・番号は報告書作成時に大幅に変更した。遺構名は遺構の性格にかかわらず、里方本郷遺跡、山持遺跡5区、山持遺跡7区ごとに連番とした。遺構の呼称は以下の略号で記したものがある。

SD：溝、SE：井戸、SK：土坑

6．土層や遺物観察表の色調は『標準土色帖』を参考にした。

7．本報告書で用いた土器の分類および編年観は基本的に下記の各論文・報告書を参考にした。

（1）弥生土器

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　1992　木耳社　414-482

（2）土師器・須恵器

島根県鹿島町教育委員会編　『南講武草田遺跡』　1992

松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相―大東式の再検討―」『島根考古学会誌』第8集　島根考古学会　1991　1-28

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994　39-82

本 文 目 次

第1章　調査の経緯……1
　第1節　発掘調査の経緯……1
　第2節　調査組織……2
第2章　遺跡の位置と環境……3
第3章　里方本郷遺跡……7
　第1節　調査の方法……7
　第2節　調査区の概要と遺構……10
　第3節　遺物……16
　第4節　小結……20
第4章　山持遺跡5区……91
　第1節　調査の方法と経過……91
　第2節　層序……97
　第3節　遺構……97
　第4節　遺物……99
　第5節　小結……103
第5章　山持遺跡7区……133
　第1節　調査の方法と経過……133
　第2節　層序……135
　第3節　遺構……135
　第4節　遺物……136
　第5節　小結……138
第6章　里方本郷遺跡の自然科学分析……157
第7章　里方本郷遺跡・山持遺跡から出土した木材の樹種……169
第8章　総括……183

挿 図 目 次

里方本郷遺跡
第 1 図　里方本郷遺跡・山持遺跡と周辺の遺跡（S=1/30,000）　4
第 2 図　里方本郷遺跡・山持遺跡 7 区調査区位置図（S=1/10,000）　7
第 3 図　里方本郷遺跡調査区位置図（S=1/5,000）　8
第 4 図　里方本郷遺跡トレンチ土層図（1）（S=1/80）　9
第 5 図　里方本郷遺跡トレンチ土層図（2）（S=1/80）　10
第 6 図　1 区平面図（S=1/200）　22
第 7 図　1 区西壁土層図（S=1/60）　22
第 8 図　1 区北壁土層図（S=1/60）　23
第 9 図　2 区平面図（S=1/200）　24
第 10 図　2 区土層図（S=1/60）　24
第 11 図　3 区平面図（S=1/200）　25
第 12 図　3 区土層図（S=1/60）　25
第 13 図　4 区グリッド配置図（S=1/400）　26
第 14 図　4 区土層図（S=1/60）　26
第 15 図　4 区遺構配置図（S=1/300）　27
第 16 図　4 区杭実測図（S=1/20）、土坑実測図（S=1/40）　27
第 17 図　4 区溝実測図（S=1/20・1/100）　28
第 18 図　5 区グリッド配置図（S=1/400）　29
第 19 図　5 区土層図（S=1/60）　29
第 20 図　5 区平面図（S=1/300）　30
第 21 図　5 区溝実測図（S=1/20・1/100）　31
第 22 図　6 区グリッド設定図（S=1/400）　32
第 23 図　6 区土層図（S=1/60）　32
第 24 図　6 区遺構配置図（S=1/300）　33
第 25 図　6 区砂礫層上面、砂礫層完掘コンター（S=1/500）　34
第 26 図　6 区溝実測図（S=1/20・1/100）　35
第 27 図　6 区遺構図（1）（S=1/20・1/60）　36
第 28 図　6 区遺構図（2）（S=1/60・1/40・1/10）　37
第 29 図　7 区平面図（S=1/300）　38
第 30 図　7 区南壁土層図（S=1/80）　39
第 31 図　7 区西壁土層図（S=1/80）　40
第 32 図　7 区平面図（S=1/200）　41
第 33 図　7 区溝平面図（S=1/100）、土層図（S=1/20）　42
第 34 図　7 区遺構図（S=1/10・1/20）　43
第 35 図　8 区グリッド設定図（S=1/400）　44
第 36 図　8 区土層図（S=1/60）　44
第 37 図　8 区遺構・遺物状況図（S=1/300）　45
第 38 図　8 区遺構図（S=1/20）　45
第 39 図　8 区杭断面図（S=1/20）　46
第 40 図　9 区グリッド配置図（S=1/400）　47
第 41 図　9 区土層図（S=1/60）　47
第 42 図　9 区遺物出土状況図（S=1/200）　48
第 43 図　9 区加工木・杭実測図（S=1/20）　49
第 44 図　10 区平面図（S=1/200）　50
第 45 図　10 区土層図（S=1/60）　50
第 46 図　11 区平面図（S=1/200）　51
第 47 図　11 区土層図（S=1/60）　51
第 48 図　12 区平面図（S=1/200）　52
第 49 図　12 区土層図（S=1/60）　53
第 50 図　13 区平面図（S=1/200）　54
第 51 図　13 区北壁土層図（S=1/60）　54
第 52 図　13 区東壁土層図（S=1/60）　55
第 53 図　14 区平面図（S=1/200）　56
第 54 図　14 区土層図（S=1/60）　56
第 55 図　15 区平面図（S=1/400）　57
第 56 図　15 区北壁土層図（S=1/60）　57
第 57 図　15 区東壁土層図（S=1/60）　58
第 58 図　15 区遺構・遺物出土状況図（S=1/200）　59
第 59 図　15 区土坑実測図（S=1/20）　60
第 60 図　15 区遺物出土状況図（1）（S=1/300）　61
第 61 図　15 区遺物出土状況図（2）（S=1/60）　61
第 62 図　16 区平面図（S=1/200）　62
第 63 図　16 区土層図（S=1/60）　62
第 64 図　17 区平面図（S=1/200）　63
第 65 図　17 区土層図（S=1/60）　63
第 66 図　17 区東壁土層図（S=1/60）　64
第 67 図　里方本郷遺跡・山持遺跡 7 区土層柱状図（S=1/80）　65
第 68 図　土器実測図（1）（S=1/3）　66
第 69 図　土器実測図（2）（4 区）（S=1/3・1/4）　67
第 70 図　土器実測図（3）（5 区）（S=1/3・1/4）　68
第 71 図　土器実測図（4）（6 区）（S=1/3・1/4）　69
第 72 図　土器実測図（5）（6 区）（S=1/3・1/4）　70
第 73 図　土器実測図（6）（8 区）（S=1/3・1/4）　71
第 74 図　土器実測図（7）（8 区）（S=1/4）　72
第 75 図　土器実測図（8）（8 区）（S=1/3・1/4）　73
第 76 図　土器実測図（9）（8 区）（S=1/4）　74
第 77 図　土器実測図（10）（8 区）（S=1/4）　75
第 78 図　土器実測図（11）（9 区）（S=1/3・1/4）　76
第 79 図　石器実測図（1）（S=1/4）　77
第 80 図　石器実測図（2）（S=1/2）　78
第 81 図　木質遺物実測図（1）（3・4・6・9・12・15 区）（S=1/4・1/8）　79
第 82 図　木質遺物実測図（2）（4・8 区）（S=1/6）　80
第 83 図　木質遺物実測図（3）（9 区）（S=1/6）　81
山持遺跡 5 区
第 84 図　山持遺跡 5 区調査区位置図（S=1/6,000）　91
第 85 図　山持遺跡 5 区グリッド配置図（S=1/800）　92
第 86 図　5 区土層図（1）（S=1/60）　92
第 87 図　5 区土層図（2）（S=1/60）　93
第 88 図　5 区土層図（3）（S=1/60）　94
第 89 図　5 区遺構位置図（S=1/300）　96
第 90 図　5 区土坑実測図（1）（S=1/10）　105
第 91 図　5 区土器出土状況図（S=1/10）　106
第 92 図　5 区溝実測図（S=1/60・1/20）、土坑実測図（2）（S=1/20）　107
第 93 図　5 区杭・根株実測図（S ＝ 1/20）、建築部材実測図（S=1/30）　108
第 94 図　5 区遺物出土状況図（1）（S=1/200）　109
第 95 図　5 区遺物出土状況図（2）（S=1/200）　110
第 96 図　土器実測図（1）（S=1/3・1/4）　111
第 97 図　土器実測図（2）（S=1/4）　112
第 98 図　土器実測図（3）（S=1/3・1/4）　113
第 99 図　土器実測図（4）（S=1/3・1/4）　114
第 100 図　土器実測図（5）（S=1/3・1/4）　115
第 101 図　土器実測図（6）（S=1/3）　116
第 102 図　土器実測図（7）（S=1/3・1/4）　117
第 103 図　石器・土製品実測図（S=1/1・1/2・1/3）　118
第 104 図　木質遺物実測図（1）（S=1/4）　119
第 105 図　木質遺物実測図（2）（S=1/4）　120
第 106 図　木質遺物実測図（3）（S=1/6）　121
第 107 図　木質遺物実測図（4）（S=1/6）　122
第 108 図　木質遺物実測図（5）（S=1/8）　123
第 109 図　木質遺物実測図（6）（S=1/8）　124
第 110 図　木質遺物実測図（7）（S=1/8）　125
山持遺跡 7 区
第 111 図　山持遺跡 7 区調査区位置図（S=1/6,000）　133
第 112 図　7 区平面図（S=1/300）　134
第 113 図　7 区土層図（S=1/60）　139
第 114 図　7 区 SD01、SD02 平面図（S=1/60）　140
第 115 図　7 区 SD01 立面図（S=1/20）　141
第 116 図　7 区 SD01 遺物出土状況図（S=1/40）　142
第 117 図　7 区遺構図（1）（S=1/20）　143
第 118 図　7 区遺構図（2）（S=1/20）　144
第 119 図　7 区遺構図（3）（S=1/20）　145
第 120 図　7 区遺物出土状況図（1）（S=1/40）　146
第 121 図　7 区遺物出土状況図（2）（S=1/40）　147
第 122 図　7 区遺物出土状況図（3）（S=1/100）　148
第 123 図　7 区遺物出土状況図（4）（S=1/100）　149
第 124 図　7 区遺物出土状況図（5）（S=1/100）　149
第 125 図　土器実測図（1）（S=1/3・1/4）　150
第 126 図　土器実測図（2）（S=1/3・1/4）　151
第 127 図　土器実測図（3）（S=1/4）　152
第 128 図　土器・石器・土製品実測図（S=1/3・1/4）　153
第 6 章
第 129 図　里方本郷遺跡の位置（S=1/80,000）　162
第 130 図　試料採取地点（調査区、トレンチ）の配置（S=1/10,000）　162
第 131 図　1 区、3 区の模式柱状図と年代測定試料採取層準　163
第 132 図　9 区の花粉ダイアグラム　164
第 133 図　15 区の花粉ダイアグラム　165
第 134 図　T45 のプラント・オパール分析ダイアグラム　166
総括
第 135 図　里方本郷遺跡 4 ～ 6 区溝平面図（S=1/1,000）　183
第 136 図　山持遺跡木質遺物一覧（1）（S=1/12・1/6）　185
第 137 図　山持遺跡木質遺物一覧（2）（S=1/12・1/6）　186
第 138 図　山持遺跡木質遺物一覧（3）（S=1/20・1/12）　187
第 139 図　古墳時代中期～後期の遺構（S=1/800）　188
第 140 図　土器に付着した炭化物（S=1/6）　190
第 141 図　木質遺物の炭化範囲（S=1/6・1/8）　192

写 真 図 版 目 次

巻頭カラー図版　1. 里方本郷遺跡　弥生時代前期の土器
2. 山持遺跡 5 区　木質遺物

第 7 章

図版 1　里方本郷遺跡の木材 (1)
図版 2　里方本郷遺跡の木材 (2)
図版 3　里方本郷遺跡の木材 (3)
図版 4　里方本郷遺跡の木材 (4)
図版 5　里方本郷遺跡の木材 (5)
図版 6　山持遺跡の木材 (1)
図版 7　山持遺跡の木材 (2)

里方本郷遺跡

写真図版 1　1. T25
2. T26
3. T28
写真図版 2　1. T32
2. T33
3. T53
写真図版 3　1. 調査前
2. 1 区 AB ライン土層
3. 2 区 AB ライン土層
写真図版 4　1. 2 区粘土採掘坑検出
2. 2 区粘土採掘坑完掘
3. 3 区 AB ライン土層
写真図版 5　1. 4 区 SD02（右）, SD03 完掘
2. 4 区 AB ライン土層
写真図版 6　1. 4 区 SD02 土層
2. 4 区 SK01 完掘
写真図版 7　1. 4 区木質遺物　(179, 180) 検出
2. 4 区杭 2
3. 4 区杭 4
写真図版 8　1. 5 区 AB ライン土層
2. 5 区完掘
写真図版 9　1. 5 区 SD04 完掘
2. 5 区 SD04 土層
写真図版 10　1. 6 区 AB ライン土層
2. 6 区遺構完掘
写真図版 11　1. 6 区 SD06AB ライン土層
2. 6 区 SK08 検出
写真図版 12　1. 6 区 SK08 土層
2. 6 区 SK08 完掘
写真図版 13　1. 6 区 SK09
2. 6 区 SK09 土器出土状況
写真図版 14　1. 6 区 SK09 土層
2. 6 区 P29 土層
3. 6 区 SD06, SD07　EF ライン土層
写真図版 15　1. 7 区 AB ライン土層 (1)
2. 7 区 CD ライン土層
写真図版 16　1. 7 区 SD10（左）, SD11 完掘
2. 7 区 AB ライン土層 (2)
写真図版 17　1. 7 区完掘（南から）
2. 7 区完掘（北から）
写真図版 18　1. 8 区 AB ライン土層
2. 8 区 CD ライン土層
写真図版 19　1. 8 区 SK14 完掘
2. 8 区完掘
写真図版 20　1. 8 区 SK14 土層
2. 8 区杭 1 ～ 4
3. 8 区杭 5
写真図版 21　1. 9 区 AB ライン土層
2. 9 区 CD ライン土層 (1)
写真図版 22　1. 9 区 CD ライン土層 (2)
2. 9 区 CD ライン土層 (3)
写真図版 23　1. 9 区加工木検出
2. 9 区完掘
写真図版 24　1. 9 区加工木の穿孔
2. 9 区杭 1
3. 9 区杭 2
176 写真図版 25　1. 12 区 AB ライン土層
177　2. 12 区完掘
178 写真図版 26　1. 15 区 SD14 完掘
179　2. 15 区 SK19 完掘
180 写真図版 27　1. 16 区 AB ライン土層 (1)
181　2. 16 区 AB ライン土層 (2)
182 写真図版 28　土器 1
写真図版 29　土器 2
写真図版 30　1. トレンチ, 1 区, 3 区, 7 区, 10 ～ 13 区出土土器
2. 4 区, 14 ～ 17 区出土土器
写真図版 31　1. 5 区出土土器
2. 5 区, 6 区出土土器
写真図版 32　1. 6 区出土土器 1
2. 6 区出土土器 2
写真図版 33　1. 6 区出土土器 3
2. 8 区出土土器 1
写真図版 34　1. 8 区出土土器 2
2. 8 区出土土器 3
写真図版 35　1. 8 区出土土器 4
2. 8 区出土土器 5
写真図版 36　1. 8 区出土土器 6
2. 8 区出土土器 7
写真図版 37　1. 8 区出土土器 8
2. 8 区出土土器 9
写真図版 38　1. 8 区出土土器 10
2. 8 区出土土器 11
写真図版 39　1. 9 区出土土器 1
2. 9 区出土土器 2
写真図版 40　1. 石器 1
2. 石器 2
写真図版 41　木質遺物 1
写真図版 42　木質遺物 2
写真図版 43　木質遺物 3

山持遺跡 5 区

写真図版 45　1. 山持遺跡調査前（5 区, 6 区）
2. 山持遺跡 5 区調査前
写真図版 46　1. CD ライン土層
2. EF ライン土層
写真図版 47　1. ML ライン土層
2. KJ ライン土層
写真図版 48　1. 第 11 層検出
2. 土器溜
写真図版 49　1. SK01 検出
2. SK01 土層
写真図版 50　1. SK01 完掘
2. SK01 土器出土状況
写真図版 51　1. SK02 検出
2. SK02 土器出土状況 (1)
写真図版 52　1. SK02 土器出土状況 (2)
2. SK02 土器出土状況 (3)
3. 杭 3
写真図版 53　1. SD03 検出
2. SD03 完掘
写真図版 54　1. SD03AB ライン土層
2. SD03CD ライン土層
3. 木質遺物出土状況（166a ～ c）
写真図版 55　1. SK04 検出
2. SK04 完掘
写真図版 56　1. 土器出土状況 (3)
2. 木質遺物出土状況 (171)
写真図版 57　1. 建築部材出土状況 (1)
2. 建築部材出土状況 (2)

写真図版 58　1. 土器出土状況（23, 40）
2. 根株 1
3. 根株 2
写真図版 59　1. 完掘（東側）
2. 完掘（西側）
写真図版 60　SK01, SK02　土師器・須恵器
写真図版 61　土師器
写真図版 62　弥生土器・土師器
写真図版 63　1. 土師器・須恵器
2. 土師器 1
写真図版 64　1. 土師器 2
2. 土師器 3
写真図版 65　1. 土師器 4
2. 土師器 5
写真図版 66　1. 弥生土器 1
2. 弥生土器 2
写真図版 67　1. 弥生土器 3
2. 弥生土器 4
写真図版 68　1. 弥生土器 5
2. 弥生土器 6
写真図版 69　1. 石器
2. 石鏃・製塩土器
写真図版 70　木質遺物 1
写真図版 71　木質遺物 2
写真図版 72　木質遺物 3
写真図版 73　木質遺物 4
写真図版 74　木質遺物 5
写真図版 75　木質遺物 6
写真図版 76　木質遺物 7
写真図版 77　木質遺物 8
写真図版 78　木質遺物 9

山持遺跡 7 区
写真図版 79　1. SD01（北東から）
2. SD01（南東から）
写真図版 80　1. SE03 検出
2. SE03 土層
3. SE03 完掘
写真図版 81　1. SK04 検出
2. SK05 検出
3. SK07 検出
写真図版 82　1. SK08 検出
2. SK08 完掘
3. 調査風景
写真図版 83　土師器
写真図版 84　土師器・須恵器
写真図版 85　1. SE03, SK06, SK07, SK08, SD01 出土土師器
2. SD01 出土土師器 1
写真図版 86　1. SD01 出土土師器 2
2. SD01 出土土師器 3
写真図版 87　1. SD01 出土須恵器
2. 土師器
写真図版 88　1. 土師器・須恵器
2. 弥生土器・土師器・須恵器・石器

表 目 次

表 1　周辺の遺跡一覧表　5
表 2　里方本郷遺跡遺構一覧表　82
表 3　里方本郷遺跡土器観察表　83
表 4　里方本郷遺跡石器観察表　86
表 5　里方本郷遺跡木質遺物観察表　86
表 6　里方本郷遺跡土器数量表　87
表 7　里方本郷遺跡剥片一覧表　90
表 8　山持遺跡 5 区遺構一覧表　126
表 9　山持遺跡 5 区土器観察表　126
表 10　山持遺跡 5 区石器・土製品観察表　128
表 11　山持遺跡 5 区木質遺物観察表　128
表 12　山持遺跡 5 区土器数量表　129
表 13　山持遺跡 5 区剥片一覧表　131
表 14　山持遺跡 7 区遺構一覧表　154
表 15　山持遺跡 7 区土器観察表　154
表 16　山持遺跡 7 区石器観察表　155
表 17　山持遺跡 7 区土器数量表　155
表 18　微化石概査結果　167
表 19　AMS 年代測定結果　168
表 20　里方本郷遺跡の樹種同定結果　170
表 21　山持遺跡 5 区の樹種同定結果　173

第1章　調査の経緯

第1節　発掘調査の経緯

(1) 事業の概要

一般国道431号道路は、出雲市を起点として旧平田市から松江市・境港市を経て米子市に至る総延長95.8㎞の道路である。一般国道431号東林木バイパスの建設は宍道湖・中海北岸の市町村を連結する地域高規格道路「境港出雲道路」の一部を構成するとともに、現道の線形不良および交通混雑の解消を目的としている。出雲市矢尾町から出雲市東林木町に至る延長4.2㎞の本線4車線、副道および歩道両側設置の計画で、平成10年12月地域高規格道路の整備計画に組み込まれた。東林木町内については平成16年度より一部供用が開始されている。

(2) 調査までの協議

島根県教育委員会は平成11年度に出雲土木建築事務所（現・出雲県土整備事務所）から遺跡照会を受けて、平成12年3月に事業予定地内の分布調査を実施し、青木遺跡、馬渡り遺跡、山持遺跡、里方本郷遺跡、下澤遺跡の5遺跡を発見するとともに、平成12年3月に遺跡の存在と取り扱いについて協議が必要な旨を回答した。平成12年7月に土木部と協議を行い、同年10月から青木遺跡と馬渡り遺跡のトレンチ調査を実施することとなった。

出雲市西林木町に位置する山持遺跡5区については、平成13年度にトレンチ調査を実施し、発掘調査が必要な旨、平成14年1月15日付け島教文財第427号で土木部出雲土木建築事務所長あて通知した。

出雲市矢尾町から日下町に位置する里方本郷遺跡、山持遺跡（7区）、下澤遺跡については平成15年度にトレンチ調査を実施し、遺物を確認した範囲について発掘調査が必要な旨、平成16年2月4日付け島教文財第1595号で土木部道路建設課長あて通知した。

(3) 調査と遺跡の取り扱い

平成16年度の調査では、平成16年3月31日付け道建第1675号で調査の依頼があり、同年3月31日付け島教文財第1800号で調査受託を回答し、同年5月17日から調査を開始した。里方本郷遺跡と山持遺跡7区の調査を9月28日まで行った。調査終了後は平成17年1月24日付け島教文財第461号の3により土木部道路建設課長あてに平成16年度の調査結果を通知し、平成16年度調査分を記録保存としての取り扱いを行った。

平成17年度の調査では、平成17年3月25日付け道建第571号で調査の依頼があり、同年3月31日付け島教文財第957号で調査受託を回答し、同年5月16日から調査を開始した。里方本郷遺跡4～6区、8区、9区の調査を10月21日まで行った後、山持遺跡5区の調査を同年10月24日から12月2日まで行った。調査終了後は平成18年2月7日付け島教文財第208号の6により土木部道路建設課長あてに平成17年度の調査結果を通知し、平成17年度調査分を記録保存としての取り扱いを行った。

平成18年度の調査では、平成18年3月23日付け道建第566号で調査の依頼があり、同年3月31日付け島教文財第860号で調査受託を回答し、同年5月16日から調査を開始し、9月25日に調査を終了した。5区の調査終了後は山持遺跡6区の調査を行った。調査終了後は平成19年1月23日付け島教文財第32号の14により土木部道路建設課長あてに平成18年度の調査結果を通知し、

平成18年度調査分を記録保存としての取り扱いを行った。

東林木バイパスの建設に伴う埋蔵文化財調査は平成12年度から行い、これまで青木遺跡、山持遺跡の報告書を計5冊刊行した。

本報告書は平成16～18年度調査の里方本郷遺跡、山持遺跡5区、山持遺跡7区の報告である。

第2節　調査組織

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

平成16年度（里方本郷遺跡・山持遺跡7区調査）

［事務局］山根正巳（埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（副所長）、永島静司（総務グループ課長）、川原和人（調査第1グループ課長）、今岡一三（調査第1サブグループリーダー）

［調査員］内田律雄（調査第1サブグループ主幹）、松尾充晶（同主事）、石橋弥生（同調査補助員）、糸川寿幸（同調査補助員）、保科邦彦（同調査補助員）、松山智弘（同調査補助員）

平成17年度（里方本郷遺跡・山持遺跡5区調査）

［事務局］卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（総務グループ課長）、川原和人（調査第1グループ課長）、内田律雄（調査第1サブグループリーダー）

［調査員］中川　寧（調査第1サブグループ文化財保護主事）、渡邊真二（同調査補助員）、小池康明（同調査補助員）

平成18年度（山持遺跡5区調査）

［事務局］卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（総務グループ課長）、川原和人（調査第1グループ課長）、内田律雄（調査第1サブグループリーダー）

［調査員］中川　寧（調査第1サブグループ文化財保護主任）、渡邊真二（同調査補助員）、竹下尚志（同調査補助員）

平成19年度（報告書作成）

［事務局］卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（調整監）、坂本憲一（総務グループ課長）、廣江耕史（調査第3グループ課長）

［調査員］中川　寧（調査第3グループ文化財保護主任）、渡邊真二（同調査補助員）

これまでに里方本郷遺跡、山持遺跡5区・7区について下記の報告を行ったが、本報告を以て最終的な報告とする。

「国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う発掘調査　(1) 里方本郷遺跡」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報13　平成16年度』島根県教育委員会　2005　36頁

「国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う発掘調査　(1) 山持遺跡、(2) 里方本郷遺跡」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報14　平成17年度』島根県教育委員会　2006　29.30頁

「国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う発掘調査　(1) 山持遺跡」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報15　平成18年度』島根県教育委員会　2007　30頁

山持遺跡の調査区の表記はこれまで「Ⅱ区」、「Ⅲ区」、「Ⅳ区」とローマ数字で行っていたが、調査区が増加しローマ数字では見えにくい部分があると考えたので、担当調査員の間で話し合い、「5区」、「6区」、「7区」とアラビア数字で表記することにした。

第２章　遺跡の位置と環境

里方本郷遺跡、山持遺跡は出雲平野の北側、北山山系南麓の平野部に位置している。

縄文時代　旧石器時代の遺物は出雲市内では見つかっていない。この地域で最も古い遺跡は、縄文時代早期の「菱根式」の標識遺跡である菱根遺跡である。これまでは縄文時代の遺跡は出雲平野南側の神戸川下流域に多く認められていたが、平成18・19年度の山持遺跡６区の調査では、弥生後期以前の土器を含む砂礫層から縄文土器が出土した。土器は摩滅しているが、調査箇所の近くにも未確認の縄文時代の遺跡が存在することが推測される。縄文晩期には出雲大社境内遺跡や蔵小路西遺跡で土器が出土しており、特に蔵小路西遺跡では突帯文期の火処が検出された。

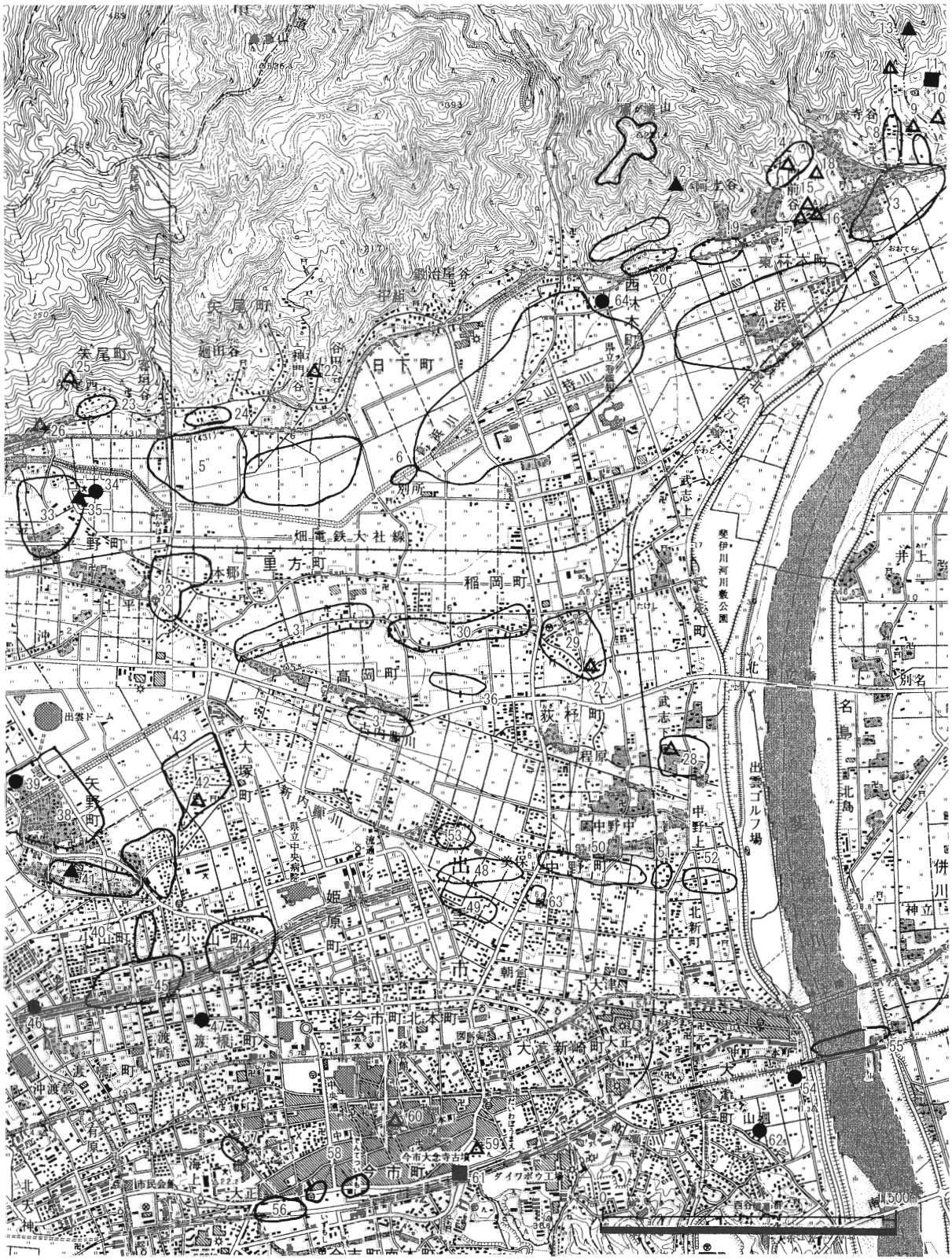
弥生時代　弥生時代の遺跡は前期から見つかっており、「原山式」の標識遺跡である原山遺跡や矢野遺跡で遺構や遺物が確認されている。矢野遺跡では土笛が出土していることに加え、木質遺物も多く出土していることから出雲西部における中心的な位置を占めていたことがうかがえる。出雲平野中部から北部では弥生中期の遺跡として中野美保遺跡や青木遺跡がある。中野美保遺跡では焼成時破損土器が出土した土坑があるほか、Ⅲ様式の方形貼石墓が確認されている。また、青木遺跡の四隅突出型墳丘墓は中国山地山間部と同時期のⅣ様式の例であり、系譜や交流を考える上で重要な資料である。また、墳丘墓の覆土中から出土した土器にはⅢ～Ⅳ様式の土器が多く含まれているが、両刃石斧や石包丁様石器、分銅形土製品なども遺跡から出土しており、墓域の北側には集落域が存在する可能性が強い。弥生後期の青木遺跡では後期後葉を中心とした時期の四隅突出型墳丘墓が３基確認された。また、銅鐸の飾り耳や人骨が残る土坑墓を確認した。山持遺跡では後期中葉以降遺物量が増え、遺構は明瞭ではないものの、吉備系の特殊器台や勒島式土器が出土しており、広範な地域との交流をうかがうことができる。その他、姫原西遺跡や門前遺跡では掘立柱建物が見つかっている。

古墳時代　古墳時代前期には、出雲東部の安来市荒島丘陵に大型の方墳が築かれる一方、出雲平野では大型の古墳は見つかっておらず、前期後葉になって大寺１号墳や山地古墳、浅柄Ⅱ古墳などの古墳が築かれる。大寺１号墳は全長約52ｍの前方後円墳であり、竪穴式石槨から鉄製刃先などの鉄製品が出土した。古墳時代中期には出雲平野の南側に全長64ｍの前方後円墳である北光寺古墳が築かれる。調査区周辺にはあまり大きな古墳は築かれていないようである。古墳時代後期になると大念寺古墳や上塩冶築山古墳などの大型の古墳が築かれる。この地域には膳棚山古墳群、平林寺山古墳群、矢尾横穴墓群のような群集墳や横穴墓群が築かれる。

集落遺跡では、山持遺跡４区で古墳時代前期の溝や土坑、長棟の掘立柱建物（SB04）が見つかったほか、溝を中心に大量の前期～中期の土器が出土した。遺跡からはガラス玉も出土している。

また、中野清水遺跡、大津町北遺跡、姫原西遺跡、小山遺跡では前期の土器が大量に出土している。これらの遺跡では居住域の縁辺部に相当する場所から土器が出土しているが、溝などの遺構が確認できない部分からも密集して土器が出土することがある。なお、中野清水遺跡では土製の生漆採集容器が出土しており、採取の季節を示すと共に、漆の用途も注目される。中期以降の集落遺跡は井原遺跡や白枝本郷遺跡などがあるが、前期と比べて不明な部分が多い。

奈良時代・平安時代　この地域は出雲郡伊努郷に位置する。青木遺跡では礎石建物や石敷き井泉遺構を検出した。遺物では神像や絵馬、1,105点におよぶ墨書土器、86点の木簡などが出土した。



第１図　里方本郷遺跡・山持遺跡と周辺の遺跡（S=1/30,000）

表1　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種　別	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸以降	備　　考	遺跡番号
1	里方本郷遺跡	包含層							本報告書	W220
2	山持遺跡	集落跡							山持川川岸遺跡を含む、本報告書、発掘調査	W108
3	青木遺跡	集落跡・墳墓							発掘調査	W213
4	馬渡り遺跡	包含層								W218
5	下澤遺跡	包含層								W221
6	里方別所遺跡	散布地							弥生土器、土師器、須恵器、埴輪	W16
7	大寺三蔵遺跡	散布地							木柱、土師質土器、須恵器	W64
8	大寺谷遺跡	散布地							瓦、須恵器	W178
9	大寺1号墳	古墳							市指定、発掘調査	W13
10	小早川正平の墓	古墓							宝筐印塔	X119
11	興源寺元寺	経塚								X128
12	広瀬古墳	古墳							消滅	W66
13	堀切城跡	城跡							郭、堀切	X289
14	平林寺山古墳群	古墳								W179
15	古前背後横穴墓群	横穴								W63
16	傘屋背後横穴墓群	横穴							消滅	W65
17	古前西北崖上横穴墓	横穴								W67
18	膳棚山古墳群	古墳							古前北方古墳群を含む	W68
19	門前遺跡	集落跡							発掘調査、門善谷遺跡を改称	W264
20	東組遺跡	散布地							須恵器、土師器	W175
21	鳶ヶ巣城跡	城跡							市指定	W91
22	矢尾横穴墓群	横穴								W12
23	熊見谷遺跡	散布地							須恵器	W173
24	前口遺跡	散布地							土師器	W174
25	大前山古墳	古墳							横穴式石室	W181
26	石臼古墳	古墳							横穴式石室	W182
27	荻杼古墓	古墓							国指定（青磁、甕）	W82
28	荻杼Ⅰ遺跡	古墓								W167
29	荻杼Ⅱ遺跡	散布地							五輪塔	W168
30	稲岡遺跡	散布地							水田跡、弥生土器、土師器、土師質土器、高尾遺跡を含む、発掘調査	W169
31	高岡遺跡	散布地							弥生土器、土師器、土師質土器	W170
32	高浜Ⅰ遺跡	散布地							弥生土器、土師器	W171
33	高浜Ⅱ遺跡	散布地							土師器、須恵器	W172
34	里方八石原遺跡	散布地							須恵器、土師器、砥石、土錘、水晶、粘土採掘坑、発掘調査	W180
35	岡田城跡	城跡							岡田屋敷	W223
36	高岡遺跡第２地点	散布地								
37	高岡Ⅱ遺跡	散布地								W265
38	矢野遺跡	集落跡･貝塚地							市指定、発掘調査	W3
39	八野神社附近遺跡	散布地							弥生土器、土師器	W7
40	小山遺跡	集落跡							四絡公民館附近遺跡を含む、発掘調査	W15
41	三木氏館跡	館跡							郭、土塁、堀	W224
42	大塚古墳	古墳								W11
43	大塚遺跡	散布地							弥生土器、土師器	W93
44	姫原西遺跡	その他							発掘調査	W72
45	蔵小路西遺跡	集落跡・館跡							発掘調査	W211
46	渡橋沖遺跡	集落跡							発掘調査	W210
47	渡橋遺跡	散布地							土師器	W188
48	中野美保遺跡	集落跡							発掘調査	W230
49	中野一黒竹遺跡	集落跡								W231
50	中野清水遺跡	集落跡							発掘調査	W232
51	大津町北遺跡	集落跡							発掘調査	W233
52	大津大河内遺跡	集落跡								W234
53	中野西遺跡	集落跡							発掘調査	W74
54	石土手遺跡	散布地							土師器、木片他	W5
55	斐伊川鉄橋遺跡	散布地							弥生土器、土師器	W34
56	善行寺遺跡	散布地							土師器、発掘調査	W164
57	海上遺跡	散布地							弥生土器、木製品、発掘調査	W209
58	藤ヶ森遺跡	集落跡							発掘調査	W219
59	大念寺古墳	古墳							国指定　出土品市指定	W8
60	塚山古墳	古墳							市指定、横穴式石室、家形石棺	W9
61	樋野祐平窯跡	窯跡								W17
62	神田遺跡	散布地							須恵器	W183
63	太歳遺跡	散布地							土師質土器他	W111
64	龍善寺東遺跡	散布地							陶磁器、土師質土器	W33

紡績や漆工に関連する遺物が出土していることとあわせて、出雲郡家の出先的機能を備えていたことが想定されている。また、掘立柱建物の中には神社遺構と想定できるものがあり、神像の出土とあわせて宗教的な側面もうかがうことができる。

山持遺跡6区では8世紀後半～9世紀の道路状遺構と、「吉祥天女」と考えられる女性を描いた板絵が出土した。墨書土器も多く出土している。道路状遺構は自然河道を横切る部分では杭や矢板など大量の木材を人頭大の石と組み合わせて強固に築くものである。山持遺跡4区では畠の畝間溝や水田が、牛の蹄の痕と共に確認されている。

なお、大寺薬師には薬師如来像をはじめ重要文化財に指定されている仏像が9躯あり、9世紀から10世紀にかけて製作されたと考えられている。

鎌倉時代・室町時代・戦国時代　青木遺跡では多数の掘立柱建物や井戸が検出されている。青木遺跡の一帯は平安時代末に九条家の荘園「林木庄」となっていたことから、関連が注目される。蔵小路西遺跡では一町四方の溝に囲まれた中に建物が築かれる方形の居館跡で、出土した陶磁器類から12世紀後半から15世紀のものと考えられる。同時期の遺跡には渡橋沖遺跡がある。また、荻杼古墓からは13世紀代の青磁碗や青磁皿、常滑焼の大甕が出土しており、国の重要文化財に指定されている。

鳶ヶ巣城は毛利元就が出雲平野に侵入して最初に築いた陣城であり、山頂郭群とその南側に山麓郭群が位置する。その他、この時期の城館には堀切城跡、三木氏館跡、岡田城跡などがある。

矢尾町の永泉寺の岩には観音菩薩坐像と信者の姿が彫られており、岩観音と呼ばれている。

江戸時代以降　斐伊川上流域で鉄穴流しが盛んに行われたことにより、斐伊川による堆積作用が大きく進んだことによって、それまでは東西へ流れていた斐伊川が17世紀中頃には完全に東へ流れるようになった。このことに関連してか、現在の西林木町周辺は出東郡から後に楯縫郡に、日下町、矢尾町周辺は神門郡に帰属していた。また、新田開発が堀尾氏、京極氏、松平氏の代々の松江藩主によって進められ、出雲市内では来原岩樋や只谷間府が築かれて水利の便がはかられた。

【文献】（東林木バイパスのみ）

島根県教育委員会編『青木遺跡（中近世編）』　国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　2004

島根県教育委員会編『山持遺跡　Vol.1』　国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　2005

島根県教育委員会編『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』　国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　2006

島根県教育委員会編『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区　Vol.2』　国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　2007

島根県教育委員会編『山持遺跡Ⅳ区　Vol.3』　国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　2007

第３章　里方本郷遺跡

里方本郷遺跡は出雲市矢尾町から日下町にかけて所在する。遺跡が立地するところは水田で、標高は３～４ｍである。西側の標高は３ｍであるが、東側へ向けて少しずつ高くなっており、最も東のT53では標高４ｍである。

平成16年度の調査は平成16年５月17日から調査を開始した。里方本郷遺跡１～３区、７区、10～17区及び山持遺跡７区の調査を９月28日まで行った。

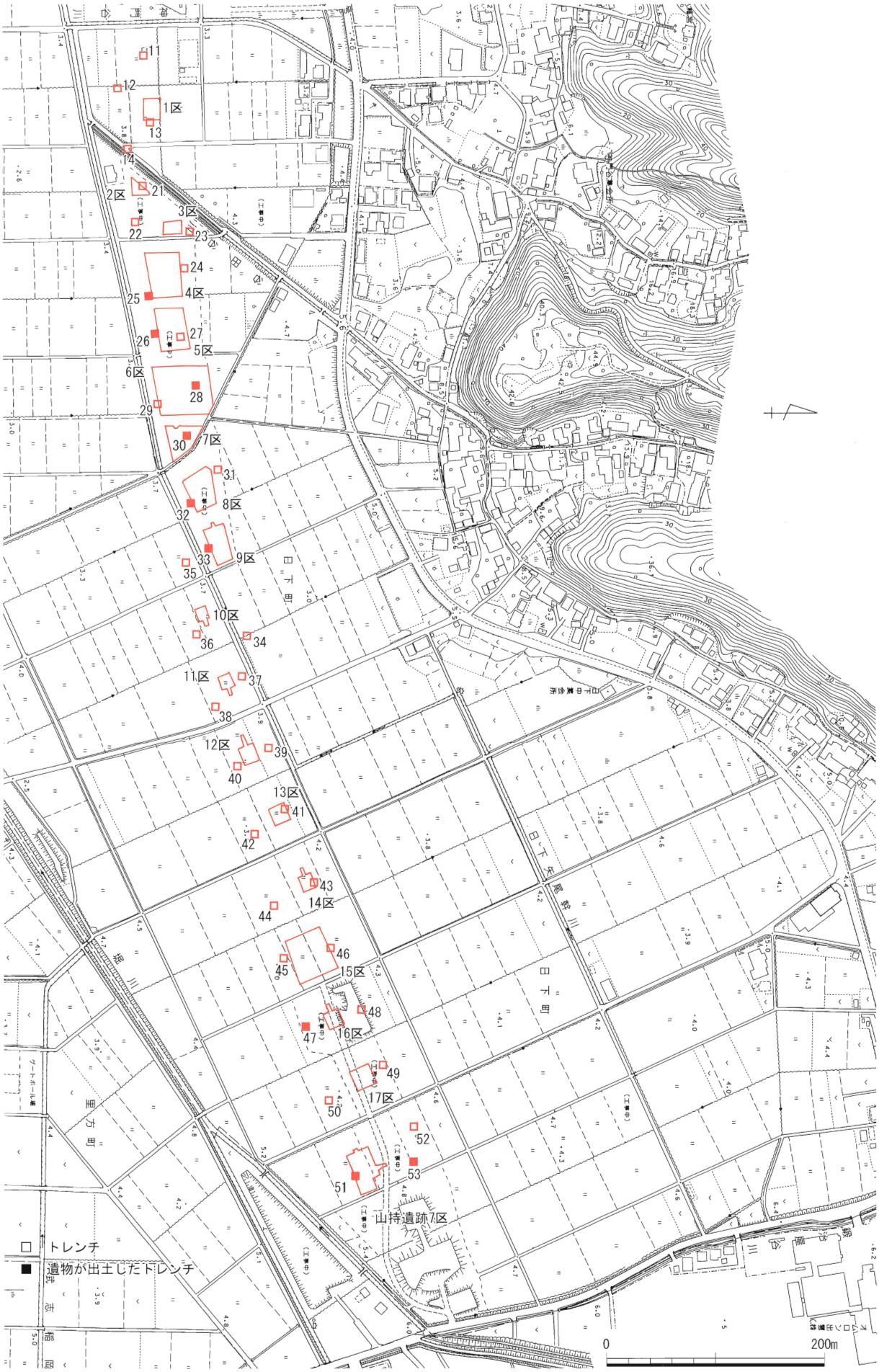
平成17年度の調査は平成17年５月16日から調査を開始し、４～６区、８区、９区の調査を行った。途中、７月１日と31日には大雨で５区や６区が冠水し、調査に支障が出ただけでなく、調査機材も被害を受けた。里方本郷遺跡の調査は10月21日に調査を終了した。調査終了後は整理作業を行い、平成18年２月には田畑直彦氏（山口大学）に弥生前期の土器について指導を受けた。平成19年度も引き続いて整理作業を行った。出土した遺物はコンテナ約60箱である。里方本郷遺跡では、調査が終了した調査区から随時埋め戻しを行ったので、現地説明会を開催しなかったが、山持遺跡４区の現地説明会（平成17年11月26日）に際して遺物や写真の展示を行った。また、パンフレット『山持遺跡・里方本郷遺跡の調査　東林木バイパス発掘調査概報』（平成19年３月）を刊行した。

第１節　調査の方法

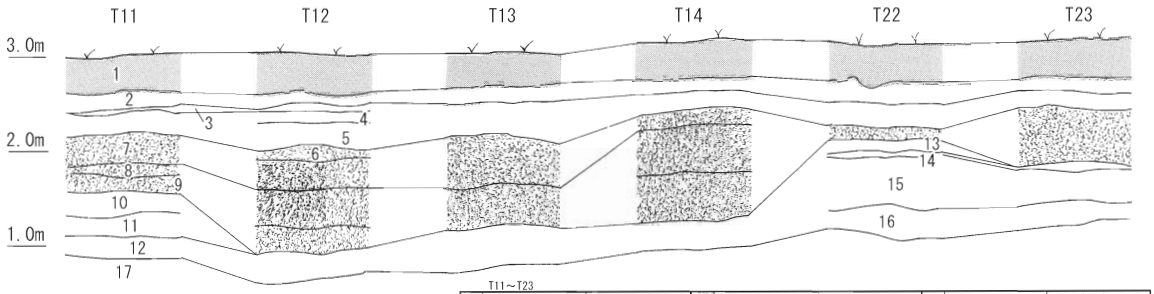
平成15年度にトレンチ調査を行い、Ｔ11から東の部分を里方本郷遺跡として調査範囲を確定した（第３図）。その中でＴ11～23の範囲とＴ34～50の範囲は、出土した遺物の量が少なかったので、この部分を先行して調査し、遺跡の様相をより詳しく把握することとした。この部分の調査の方法としては、平成16年度に10ｍ×10ｍから15ｍ×15ｍ程度の調査区を設定し、遺構や遺物の確認状態を見極めながら必要に応じて調査区を拡張する、という方法を取った。また、Ｔ24～33の中央部分については平成17年度に調査を行ったが、表土掘削や排土処理のための重機が通行する部分をとらなくてはならず、調査区の範囲が制限された。

トレンチの土層の状態は、表土の下には耕作土が堆積しており、表土の下約50cm～１ｍの深さ

第２図　里方本郷遺跡・山持遺跡７区調査区位置図（S=1/10,000）

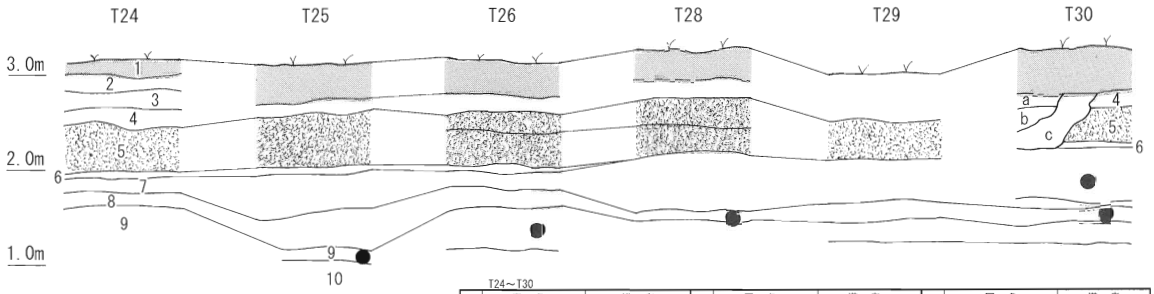


第３図　里方本郷遺跡調査区位置図（S=1/5,000）



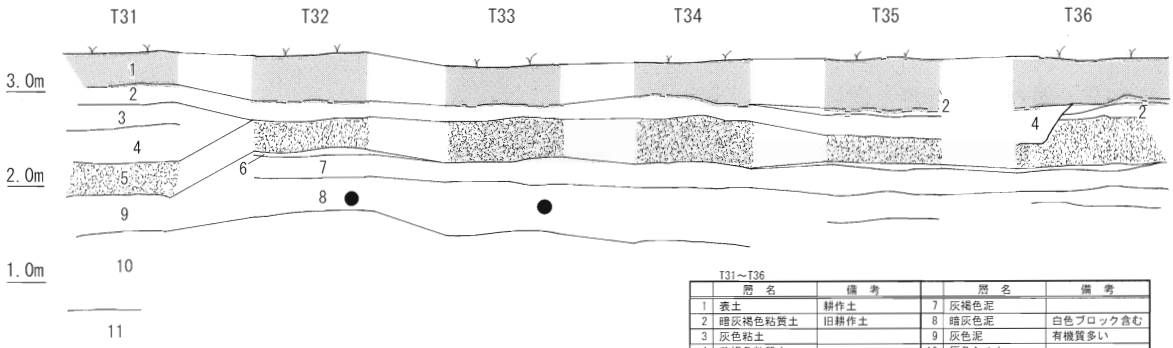
T11～T23

	層　名	備　考		層　名	備　考		層　名	備　考
1	表土	耕作土	7	黒茶褐色腐植土	オモカス層	13	灰褐色泥	
2	黒褐色粘質土	旧耕作土	8	黒色腐植土	オモカス層	14	灰白色粘質土	洪水の末端の泥
3	灰褐色細砂	洪水砂	9	茶褐色腐植土	オモカス層	15	灰褐色泥	
4	灰茶褐色粘質土		10	黒灰褐色粘質土		16	淡灰褐色シルト	
5	茶褐色粘質土		11	黒色粘質土		17	灰色細砂	
6	黒色腐植土	オモカス層	12	灰褐色泥				



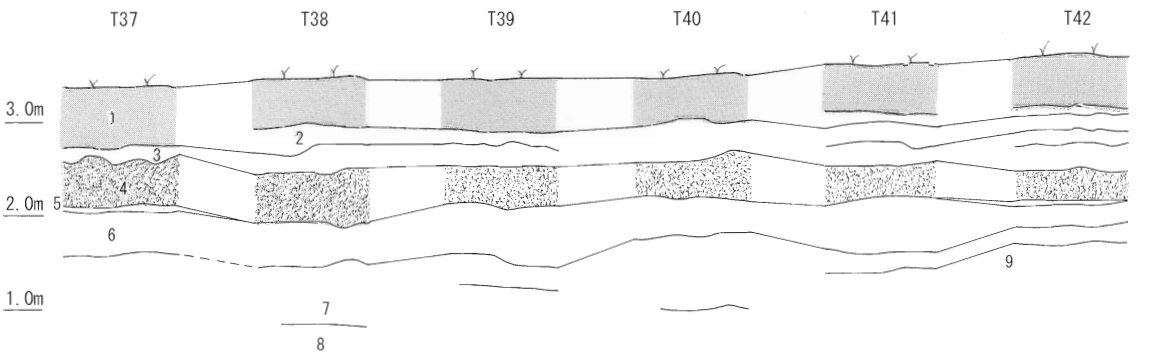
T24～T30

	層　名	備　考		層　名	備　考		層　名	備　考
1	表土	耕作土	6	灰白色粘質土	洪水の末端の泥	a	灰褐色土	遺構？
2	黒褐色粘質土	旧耕作土	7	灰褐色泥		b	茶褐色土	遺構？
3	灰褐色粘質土		8	茶褐色泥		c	灰色泥	遺構？
4	茶褐色粘質土		9	灰色砂				
5	黒茶褐色腐植土	オモカス層	10	黒褐色シルト				



T31～T36

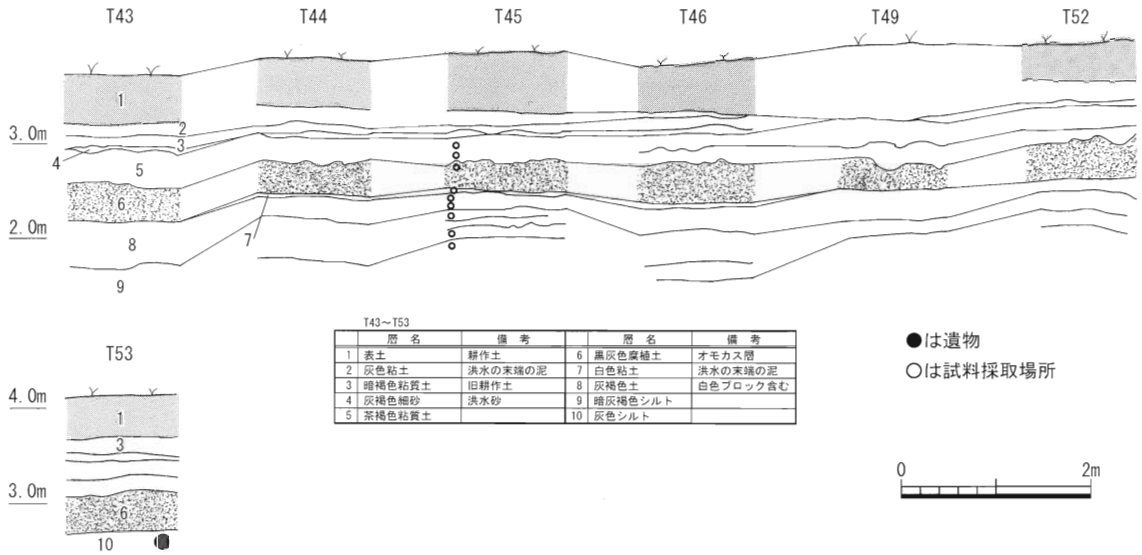
	層　名	備　考		層　名	備　考
1	表土	耕作土	7	灰褐色泥	
2	暗灰褐色粘質土	旧耕作土	8	暗灰色泥	白色ブロック含む
3	灰色粘土		9	灰色泥	有機質多い
4	茶褐色粘質土		10	灰色シルト	
5	黒灰色腐植土	オモカス層	11	灰色シルト質粘土	
6	灰色粘土	洪水の末端の泥	a	灰色粘質土	



T37～T42

	層　名	備　考		層　名	備　考
1	表土	耕作土	6	灰褐色泥	白色ブロック含む
2	灰褐色粘質土		7	灰褐色シルト	
3	暗褐色粘質土	旧耕作土	8	灰色砂	
4	黒灰色腐植土	オモカス層	9	灰褐色細砂	
5	灰白色粘土	洪水の末端の泥			

第４図　里方本郷遺跡トレンチ土層図（1）（S=1/80）



	層名	備考		層名	備考
1	表土	耕作土	6	黒灰色腐植土	オモカス層
2	灰色粘土	洪水の末端の泥	7	白色粘土	洪水の末端の泥
3	暗褐色粘質土	旧耕作土	8	灰褐色土	白色ブロック含む
4	灰褐色細砂	洪水砂	9	暗灰褐色シルト	
5	茶褐色粘質土		10	灰色シルト	

第5図　里方本郷遺跡トレンチ土層図（2）（S=1/80）

にはオモカス層が堆積していた（第4・5図）。オモカス層の厚さは40cmから厚い部分では1m近くある部分が存在した。オモカス層の下の、標高1～2mの泥層や砂層から弥生前期や中期の土器、土師器が出土した。第68図1は弥生前期の甕、2は土師器の椀である。内外面に赤彩が施されている。トレンチから出土した土器は小片が多かったが、弥生前期と土師器が多く出土した。

なお、T45ではプラントオパール分析を行った（第6章）。

第2節　調査区の概要と遺構

調査区は包含層まで深いことが予想されたので、傾斜をつけて十分な勾配を取り、必要に応じて二段に傾斜をつけるなどの措置をとった。なお、調査区の番号は調査当時と変えて、西から1区、2区、3区と東へ向けて数を増やし、最も東側の17区まで設定した（第2・3図）。出雲平野北側の水田地帯の東西約900mの範囲に合計17箇所の調査区を設定したことになる。

1区

1区は調査範囲の最も西の部分に位置する。長方形の調査区である（第6図）。土層はほぼ水平に堆積していた。オモカス層が厚く堆積しており、90cm前後の厚さがあった（第7・8図）。

遺物は弥生前期の甕が1点出土した（第68図3）。

なお、オモカス層の堆積した時期を調べるために、AMSによる年代測定を行った（第7図、第6章）。第7層（オモカス層）の上位で鎌倉時代後半～室町時代前半、第9層上位（オモカス層の下）で奈良時代末～平安時代、北壁の第9層下位で古墳時代に相当する年代が測定された。

2区

2区は三角形の調査区である。表土から70～90cm掘り下げた標高2.2m付近で、オモカス層の上面から掘り込まれた、平面形が長方形や正方形の土坑を検出した。一部二段に掘り込んである土坑もあった（第9図）。埋土は2層に分けることができた（第10図）。遺物は出土しなかったが、オモカス層の上から掘り込まれていること、平面形が出雲市内の中野清水遺跡や高岡遺跡などの例

と似ていることから、中世以降の粘土採掘坑と考えられる。

オモカス層が約1mの厚さがあったため、オモカス層の厚さや下層の堆積状況は確認できなかった。

3区

長方形の調査区である（第11図）。標高0m付近まで掘削した。粘質の白色土をはさんで、オモカスが二層に分かれていた。遺物は弥生中期の壺底部が1点出土した（第68図4）。1区同様にオモカス層の堆積した時期を調べるため、AMSによる年代測定を行った（第12図、第6章）。第6層（上位のオモカス層）で平安時代後半、第11層（下位のオモカス層）で平安時代に相当する年代が測定された。

4区

長方形の調査区である（第13図）。平成17年6月21日から7月20日まで調査を行った。調査では10mグリッドを設定した。3区に比べてオモカス層が薄く、標高1.0m付近の第7層（淡灰色砂層）から遺物が出土した。遺構は第7層の上面で土坑SK01、溝SD02、SD03、ピットP01～08を検出し、第7層掘削中に杭1～4を検出した。第7層を掘りあげた後は土がきわめて軟質で、湧水も著しいため、第8層（淡灰褐色泥層）の上面の等高線の測量や深さは実施できずに4区の調査を終了した。

SK01（第16図）　楕円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

SD02、SD03（第17図）　SD02はほぼ南北に伸びている。ほぼ直線で、現存の長さ約10m、上面の幅は約30cm、検出時の深さは最大で約20cmである。北側は調査区外へ伸びており、南側は残りが悪く検出することができなかった。埋土は2層に分かれている。SD03は北西－南東方向に伸びている。わずかにカーブしており、現存の長さ約17m、上面の幅は最大で約50cm、深さは約20cmである。SD02同様、北側は調査区外へ伸び、南側などの溝の一部は検出することができなかった。埋土は1層である。SD02、SD03共に遺構内から遺物は出土しなかった。

杭（第16図）　杭は残りの良かった杭2、杭4を実測した。

《遺構の時期》　第7層の上位で出土した土師器を除くと、第7層から出土した土器は、弥生前期～中期である。このことから、4区の遺構の時期は弥生中期以降と考えられる。

5区

長方形の調査区である（第18図）。平成17年7月20日から8月11日まで調査を行った。調査では10mグリッドを設定した。4区と同様に、標高1.2m付近の第8層（灰白色砂層）から遺物が出土した。この5区第8層は4区第7層と対応すると考えられる。遺構は第8層の上面で溝SD04、ピットP09～13を検出した。この調査区も4区同様に、第8層を掘りあげた後は土が軟質で、湧水も著しく、急な雨で調査区が水没することもあったため、第10層（黄灰色泥層）の上面の等高線は測量できたが、第10層の深さは確認できずに5区の調査を終了した。

SD04（第21図）　SD04は北西－南東方向に伸びている。調査区外へ伸びると考えられるが、溝の両端は残りが悪く、検出することができなかった。若干屈曲しており、現存の長さ約20m、上

面の幅は最大で50cm、深さは約25cmである。後述する6区SD06に続くと考えられる。遺構内から遺物は出土しなかった。

《遺構の時期》 第8層から出土した土器は、確認できるものはすべて弥生前期～中期である。このことから、5区の遺構の時期は弥生中期以降と考えられる。

6区

6区は正方形に近い調査区である。10ｍグリッドを設定する際に機械の操作を誤ったため、方位と各グリッドの向きが一致していない（第22図）。平成17年5月16日から調査を開始した。遺物包含層である第7層（青灰色砂層）を確認し、第7層上面の等高線を測量した後、第7層上面で検出した遺構を掘削し、さらに第7層を掘り下げ始めたが、湧水が著しく、調査区の壁が崩壊するおそれが出てきたので、調査の途中であったが、6月15日で調査を終了することとした。

遺構は第7層上面で溝SD05～SD07、土坑SK08、SK09、ピットP14～53を検出した（第24図）。調査区の西側で多く確認したが、これは第7層を精査した際に確認したものが多い。第7層は調査区の北東側には分布していなかったが、それ以外の部分では標高1.25ｍ付近で確認することができ、層の厚さは最大で約30cmであった。全体に南側が厚い（第25図）。

SD05（第26図） 調査区の中央、D2グリッドの南側に位置する。北端の部分を確認し、調査区の南側へ伸びると考えられる。SD06に接するように、北側の部分は東へ屈曲する。現存の長さは約4ｍ、幅は最大で約60cmである。遺物は出土しなかった。

SD06（第26図） 調査区の中央の東側から南西に伸びる。「L」字上に屈曲している。北側の部分に離れている部分があるが、検出が難しかったので掘り飛ばしてしまった部分があるのかもしれない。南西隅の部分では標高1.4ｍ付近で検出した。現存の長さは約30ｍ、幅は最大で90cm、深さは30cmである。第26図EFラインを観察すると、後述するSD07を切る。溝の断面は逆台形と浅い「U」字形の部分がある。遺物は細片で時期の特定ができないものがほとんどである。唯一時期の分かる土器として第71図63があるが、遺構の時期を示すものではない。

SD07（第26図） 調査区の中央、D2グリッドに位置する。屈曲しており、現存の長さは6ｍ、幅約25cm、深さ10cm以下である。断面は浅い「U」字形である。SD06に切られる。遺物は細片で時期の特定ができなかった。

SK08（第27図） 調査区の南西、E2グリッドに位置する。長方形の土坑で、溝状に細長く調査区外へと伸びている。段状に深い部分がある。東側が最も深く30cmである。上面から土師器の鼓形器台（第71図52）が出土した。鼓形器台は5つの破片に分かれて出土し、約80cm離れていたが、すべて接合した。SK08の時期は弥生後期末～古墳前期と考えられる。

SK09（第28図） 調査区の中央、D2・D3グリッドに位置する。細長い楕円形の土坑である。南東側が最も深く、約30cmの深さがあった。土坑の埋土は灰色土の1層であるが、砂や暗褐色土がブロック状に混じっており、穴を埋め戻した際の堆積と似ていた。南東側の隅から弥生後期の甕（第71図53）が出土した。甕は口縁を横にして出土した。SK09は埋め戻しのようなブロック状の堆積を示すこと、甕が1個体出土したことから、粘土採掘坑の可能性がある。SK09の時期は弥生後期と考えられる。

P29（第27図） 調査区の中央やや西側、C4グリッドに位置する。長楕円形の土坑である。断面

は逆台形である。土層の堆積は、SK09のように砂や暗褐色土がブロック状に混じっており、粘土採掘坑の可能性がある。埋土中から弥生前期の土器（第71図61、62）が出土したが、細片であるので遺構の時期を示すものではない。

なお、他のピットは埋土が1層のものがほとんどで、P29のような堆積をしたものはなかった。また、ほとんどのピットから遺物は出土しなかった。

《遺構の時期》SK08、SK09は土器が出土したので時期が判明したが、それ以外の溝やピットについては、第7層出土土器が弥生前期～中期であることから、弥生中期以降と考えられ、4区、5区の様相とも合うものである。

7区

7区は三角形の調査区である（第29図）。平成16年8月26日から9月28日まで調査を行った。隣接する6区や8区とは調査年度が異なるので、土層の対応関係を直接検討することができなかったが、6区第7層と7区第17層が対応すると考えられる。

第10層を全掘して、第11～17層を検出した段階で、溝SD10、SD11、土坑SK12、SK13、石A、Bを検出した。また、第9層から10層の掘削中に遺物が出土した。遺物は調査区の全体から出土し（第32図）、器種による傾向や遺構との関連を認めることができなかったが、甑形土器の破片（第68図12）が調査区の北側で出土した。

SD10（第33図）　調査区の中央を北東から南西へ斜めに伸びる。直線ではなく屈曲している。現存の長さ約24m、幅は最大で約1.4m、深さは検出面から約25cmである。埋土は1層である。上面から遺物が出土したが、埋土からは出土しなかった。SD11の西側に平行しており、南側では重複してSD11を切り、SD11より後出する。

SD11（第33図）　SD10同様、調査区の中央を北東から南西へ斜めに屈曲して伸びる。現存の長さ約22m、幅はSD10よりも狭く40cm、深さは約20cmである。SD10に先行する。埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

SK12（第34図）　調査区の南側に位置する。円形の土坑である。埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

SK13（第34図）　調査区の南西隅に位置する。隅丸方形の土坑である。埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

石A、B（第34図）　第10層を掘削中に東側で人頭大の石が出土した。調査区の周囲には石が混じる堆積を示す部分は無いので、遺構の可能性が強いと考えた。石Aは1個、石Bは3個の石を組んだり置いたりしている。

《遺構の時期》7区の遺構からは時期を示す遺物が出土しなかったが、第9～10層出土の土器では第68図8、10、11が最も新しい土器であることから、遺構の時期は古墳前期と考えられる。この点は6区の土層対応関係の想定と合うものである。

8区

8区は不整四角形の調査区である（第35図）。平成17年8月12日から9月21日まで調査を行った。4区～6区のように砂層を確認することができなかった。特に第5層より下では土質が軟質で、長

靴がはまるような状態で調査を行った。遺物はABラインの第5層、CDラインの第5～7層から出土した。遺構はSK14、杭1～6を検出したが、土質が軟質で遺構の検出が困難であった。遺構出土のものを除くと遺物は調査区の全体から出土し、弥生前期と中期の土器が混じって出土した。特にB1、C2グリッドで出土量が多い（表6-5　88頁）。

SK14（第38図）　調査区の北西隅、B1グリッドに位置する。土器が出土したので遺構があることが判明したが、軟質な土質のために深さや範囲については不明確な部分がある。遺構の第1層と第2層の間では土器や炭が多く出土した。出土土器は第73図91～100である。すべて弥生前期の土器であり、破片が大きいことから、SK14の時期は弥生前期と考えられる。

杭1～6(第37･39図)　杭1～4､6はB2グリッドに位置する。このうち杭1～4は密集している。杭1が最も太い。杭5はB1グリッドに位置する。いずれの杭も末端の部分が折れており、当初の杭の高さはいずれも不明である。杭1～5の実測図は第82図189～193である。杭の時期は不明であるが、8区で最も新しい土器として第77図152、153の土師器があることから、古墳中期以前の可能性がある。

9区

9区は長方形の調査区である（第40図）。平成17年9月30日から10月21日まで調査を行った。9区では遺構は確認できず、土器もわずかしか出土しなかったが、杭1～5および木製品の桶や流木などが出土した。

弥生前期～中期の土器が出土した第22層を､弥生後期の土器が出土した第6～10層の河道が切っている。この河道は北西－南東方向に伸びているが（第42図）、北西隅の土層の対応関係を検討することができなかったので、土層は一部不明瞭な部分がある。河道の北東側の肩部を確認することはできたが、もう一方の肩部は確認できなかったので、調査区の南西側にあると考えられる。河の上流部がどの方向に位置するのかはわからなかった。土器や木質遺物は河道の部分から多く出土した。

杭1～5のうち、遺存状態が比較的良好であった杭1、2を実測することができた（第43図）。調査区の南西隅で長さ2.3ｍ、直径約40cmの木が先端を北に向けて、斜めに倒れて出土した。遺構の判断がつかなかったので、「加工木」と呼称した。先端は主に二方向から加工をする。末端の三分の一は上の部分が折れたように欠けている（第43図）。末端から約80cmの部分には長楕円形の穴があいていた（写真図版24-1）。伐採した後の移動の際などに紐をかける部分の可能性がある。この加工木は大きくて移動することができなかったので、先端の加工部分をサンプルとして採取した。なお、樹種はオニグルミであることがわかった（第7章　170頁）。

また、第10層の掘削中に調査区内の5箇所で根株を確認した。弥生後期の河道に切られていると判断したので、弥生前期と考えられる。樹種同定の結果は第7章に掲載している。

標高0.4ｍまで掘削したが、土質が軟質になったことと遺物が出土しなくなったので、9区の調査を終了した。

なお、自然科学分析を行うために、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して、調査区の北壁（第41図右下の黒丸の部分）と調査区底面から試料を採取した（第6章）。

10区

10区は長方形の調査区で、調査範囲のほぼ中央に位置する（第44図）。第7層のオモカス層の上から第6層が掘り込まれていたが、遺物は出土しなかった。また、第7層の厚さは西隣の9区に比べて厚かった。第8層から土師器の壺（第68図13）など土師器2点が出土した。第9層は砂層と粘土層の互層であり、また、第10層は細砂であることから、第9層、第10層は河など流水の影響を受けやすい環境であったことがうかがえた。遺物が出土しなくなったので、調査を終了した（第45図）。

11区

11区は正方形の調査区で、調査範囲のほぼ中央に位置する（第46図）。第6層、第7層の様子が、10区の第9層、第10層の様子に似ていることから、11区でもオモカス層の下位では流水の影響を受けやすい環境であったことがうかがえた。11区では土師器の甕胴部が1点出土した（第68図14）。

12区

12区は長方形の調査区で、調査範囲の中央やや東よりに位置する（第48図）。第10層のオモカス層が40～60cmの厚さで堆積していた。標高約1.2mにある第11層から、弥生中期の甕胴部が出土した（第68図15）。標高0.5m付近まで掘り下げたが、遺物が出土せず、湧水が激しくなったので調査を終了した。

13区

13区はほぼ正方形の調査区である（第50図）。平成16年5月27日から6月7日まで調査を行った。オモカス層が厚く、約80cmの厚さの部分があり、4つに分けることができた（第51・52図）。遺物は調査区北東隅、第15層より土師器の甕（第68図16）が1点出土した。第20層は砂層と粘土層の互層になっており、標高1.0m以下は流水の影響を受けやすい環境であったことがうかがえた。標高0.6m付近まで掘り下げたが、遺物が出土せず、湧水が激しくなったので調査を終了した。

14区

14区は長方形の調査区であり、調査範囲の東側に位置する（第53図）。第12層から土師器の甕口縁部（第68図17）が出土した。下位の土層の確認のために標高－1.0m付近まで一部掘り下げたところ、標高1.0m以下は粘土質の層が堆積していた。

15区

15区は長方形の調査区であり、調査範囲の東側に位置する（第55図）。平成16年6月7日から8月13日まで調査を行った。オモカス層は4つに分けることができ、最大約60cmの厚さがあった（第56・57図）。遺構は第15層を完掘した後に溝SD14、土坑SK15～SK20を検出した（第58図）。遺構内から遺物は出土しなかった。遺物は第14層と第15層で出土した。出土した土器からは第14層が古墳中期から奈良・平安時代、第15層が弥生後期から古墳中期と考えられる。出土した土器

では古墳時代の土師器片が最も多く出土した。第20層を掘削中に木質遺物が出土した（第61図）。北西－南東方向に軸があるように見える。出土した木質遺物はすべて流木で、加工したものはなかった。

なお、自然科学分析を行うために調査区の東壁から試料を採取した（第57図の黒丸の部分、第6章）。遺物包含層より下位の第20層や第25層では、縄文時代晩期に相当する年代が測定された。

SD15（第59図） 調査区の中央に位置する。北西側から東西方向へ屈曲し、さらに南側へ屈曲する。調査区の土層を測量した範囲と離れていたが、第15層の上面から掘り込まれていたと考えられる。現存の長さ約46m、幅は最大で40cm、深さは約20cmである。溝の上面から扇片（182）が出土したほか、溝の南端では、溝の下位から弥生土器（18）が出土した。

SK16（第59図） 調査区の中央やや北側に位置する。楕円形の土坑である。15区の土坑では最も規模が大きい。

SK17（第59図） 調査区の中央やや北側、SK16の東に位置する。不整形の土坑である。

SK18（第59図） 調査区の中央、SK16の南に位置する。円形の土坑である。他の土坑に比べて浅い。

SK19（第59図） 調査区の中央やや西側に位置する。不整楕円形の土坑である。

SK20（第59図） 調査区の西側に位置する。円形の土坑である。埋土は5つに分けることができた。

SK21（第58図） 調査区の東隅に位置する。円形の小さな土坑である。

《遺構の時期》15層の時期が弥生後期～古墳中期であることから、弥生後期～古墳中期の可能性がある。

16区

16区はほぼ正方形の調査区であり、調査範囲の東側に位置する（第62図）。遺構は確認できなかった。第11層から赤彩土師器の椀（第68図23）が出土した。標高1.0m付近まで掘り下げたが、遺物が出土しなかったので、調査を終了した。

17区

17区はほぼ正方形の調査区であり、調査範囲の最も東側に位置する（第64図）。平成16年6月28日から7月12日まで調査を行った。遺構は確認できなかった。遺物は第10層から出土したが（第68図24～26）、その分布に傾向を見出すことはできなかった。

第3節 遺物

里方本郷遺跡4～6、8、9区とその他の調査区では、遺物の出土量に大きな差があったので、4～6、8、9区については調査区の順に述べ、その他の調査区については第68図にまとめて掲載することとした。

トレンチ出土土器（第68図1.2） 1は弥生前期の甕である。全体に摩滅が著しい。2は赤彩の土師器である。トレンチ出土土器で図示できるものはこの2点である。

1.3.7.10～17区出土土器（第68図3～26） 3は弥生前期の甕である。胴部径よりも口縁部径のほうが若干大きいので、古い様相を示している。4は内面の調整が丁寧なナデであることから壺と判断した。8の口縁端部は丸くおさめている。胴部下半の破片もあるが、傾きが判らず図示しな

かった。口縁部下端の稜は鈍く、稜の下から頸部は強くヨコナデがされている。以上の特徴から、古墳前期初頭（草田6期）と考えられる。9は口縁端部が一部欠けており、口径がさらに大きくなる可能性がある。12は大形の土器であることや縦方向のヘラケズリがあることから、甑形土器の破片と判断した。8、10、11の土器の様相と合うものである。15は14と比べて薄いことや胎土から弥生土器の可能性があると判断した。18の頸部にある押し引きの刺突は弥生後期前葉（Ⅴ-1）によく見られる特徴である。22～24は奈良・平安時代の土器である。全体に弥生土器や古墳時代の土師器が多く、奈良・平安時代の土師器や須恵器は少ない（表6-1　87頁）。

4区出土土器（第69図）　29～33は弥生前期の土器である。30は有軸羽状文の下にも沈線がある。31は沈線が上下しているので貝殻による沈線と判断した。27、28、34は弥生中期の土器である。27は広口壺であるが、遺存状態が悪く、全形を復元することはできなかった。34は胴部に2列の刺突文がある。直接接合はしないが、胎土が似ていることから27と34は同一個体の可能性がある。35は他の4区出土土器と比べて遺存状態が良い。包含層が形成された時期を示唆する。

4区では調査区の全体から土器が出土しているが、弥生前期の土器がB1やB4グリッドに多いのに対し、弥生中期はA4グリッドから多い。

5区出土土器(第70図)　36、37、49は弥生前期の土器である。36は胎土から弥生前期と判断した。小形の鉢の可能性がある。38～41は弥生中期の広口壺である。38は胴部の最大径付近を欠く。口縁部の刺突は不規則である。43は炭化物が外面に付着していないので大形の鉢と考えた。5区でも土器の内外面は摩滅しているものが多い。

5区ではC2、C3、C4グリッドから多く土器が出土している。弥生前期よりも弥生中期が多いが、A3グリッドでは弥生前期の土器が多く出土している。

6区出土土器（第71、72図）　第72図に弥生前期の土器、第71図にそれ以外の土器を図示した。

SK08（52）　受部外面はヨコナデの後に不規則にタテヘラミガキを行う。口径に対して器高が高いので、弥生後期末～古墳前期初頭（草田4～5期）と考えられる。

SK09（53）　大形の甕である。胴部の調整は粗い繊維で行っているので、ハケ調整のような単位が不明瞭である。底部は凸レンズ状で自立できない。口縁部に櫛描直線文を施し、施文後のナデが顕著ではないので、弥生後期後葉（Ⅴ-3）と考えられる。

P18（60）　土師器の甕の口縁部である。遺構の時期を示していると考えられる。

P29（61、62）　弥生前期の甕である。

SD06（63）　弥生前期の甕の底部である。61～63は包含層中の土器が混入したと考えられる。

72～82、84～90は弥生前期の土器である。72は頸部と胴部に段がある。87、88は口縁端部に大きな刻み目がある。接合しないが、同一個体の可能性がある。84がやや古い傾向があるが、それ以外は前期後葉～末（Ⅰ-3～4）と考えられる。

54～56、64～67、83は弥生中期の土器である。55は口縁部を拡張しない壺である。55と64は頸部に3条の突帯があり、胎土が似ているので、同一個体の可能性がある。凹線文が顕著ではないので、これらの土器は中期中葉（Ⅲ-1～2）と考えられる。83は中期前葉（Ⅱ）の可能性がある。

68は弥生後期の土器である。頸部に刺突文が上下にある。口縁部が上に伸びる。後期前葉（Ⅴ-1）と考えられる。

57～59、69は古墳時代の土師器である。57、58は口縁部が短いので、古墳時代前期でも新しい

段階に相当すると考えられる。

70は中世の土師器の坏である。71は製塩土器である。外面は火を受けて器壁が変質している。この2点は上層からの混入と考えられる。

6区では調査区の西側から多く土器が出土しており、7層の分布範囲と一致する。C3、C4、D3、D4グリッドで多く出土している。特に弥生前期の土器が多い。

8区出土土器（第73～77図）　第73～75図は縄文土器、弥生前期の土器、第76、77図は弥生中期と古墳中期の土器を示した。

SK14（91～100）　91、93、94は直接接合しないが、図示した以外にも破片が多くあり、同一個体の可能性がある。91は頸部の段を接合部で表現している。93は肩部に沈線を段状に表現しているが、沈線は浅い。92は段と貝殻直線文がある。貝殻の鋸歯状の圧痕は上を向いている。後述する119、155、162も同様である。95は他にも破片があるが接合しない。96は2条の沈線の間に列点文がある。列点の中には木目がある。97はミガキで丁寧に調整されているので鉢と考えた。98はほぼ完形の無頸壺である。99は口縁が内側へすぼむ形態である。SK14の土器は壺の段が低いこと、甕の沈線が1～2条のものが多いことから、前期中葉（Ⅰ-2）が中心と考えられる。

101～136は縄文土器と弥生前期の土器である。101は壺であるが口縁部の内外に炭化物が付着する。105は蓋である。内面に一部炭化物が付着する。106の胴部の段は接合部で表現している。鉢と考えられる。108も鉢である。106と108は似ているが別個体と判断した。110～112は無文の甕である。112の胴部はミガキのような調整であるが、火を受けており甕と判断した。

113の外面は火を受けており、調整は観察できない。口縁端部は面を持ち、指で凹凸をつけている部分がある。116、117は縄文土器である。外面をケズリ調整し、薄手であることから縄文晩期前半の可能性がある。里方本郷遺跡では縄文土器がこの2点しか出土しなかった。119は直線文や羽状文と考えられる文様は貝殻による。120の沈線は半截竹管ではなく一本ずつ引いている。122aは貝殻による重弧文を描く。124は口縁部の下に強くヨコナデを行う。127は口縁端部全面に、129は口縁端部の下に刻みがある。128～132は沈線の間に刺突がある。131は3条の沈線の間にある刺突がずれている部分がある。132は沈線の間に3列の列点がある。器壁が薄いので鉢の可能性がある。133は擬朝鮮系無文土器である。遺存状態が悪いが、口縁部は玉縁状に丸くなり、粘土紐を貼り付けている。134は横に長い列点文がある。内面に炭化物が付着しているので、甕の胴部下半から底部付近と考えられる。135は破片を図上で復元したものであるが、口縁部がすぼまる器形であり、口縁部の下には小孔がある。丁寧なナデやミガキで調整されており、土笛の可能性もある。

136は壺である。ヘラ描直線文の下に三角形の刺突文を施し、肩部から胴部にかけて三組の文様帯がある。底部はわずかに突出する。

これら弥生前期の土器は、109のように甕の沈線が3条のものがあること、120や136のように多条沈線があることから、SK14より新しい時期のものを含み、前期後葉（Ⅰ-3）～前期末（Ⅰ-4）が中心であると考えられる。

137～151は弥生中期の土器である。137は口縁部を欠くが、櫛描直線文を頸部に密に施し、その下に櫛描波状文を施す。138～142は広口壺である。口縁端部が垂下し、頸部には粘土紐の上を指や工具で押す突帯を1～2条貼り付ける。強いヨコナデや凹線文は見られない。140は破片が多いが胴部上半と下半を図示した。143は胴部上半に楕円形の刺突文がある。

144の肩部の文様は太いが一度に引いているように見える。145～148は甕である。146の口縁端部は丸くおさめており、拡張しない。147の口縁部は上向きに曲がり、端部は上方へ伸びる。148は口縁端部が上方へ伸びて面を持つ。149は短頸壺と考えられる。137、143、144は中期前葉(Ⅱ)、広口壺や146は中期中葉（Ⅲ-1)、147は中期中葉（Ⅲ-2)、148、149は中期後葉（Ⅳ-1）と考えられる。

152、153は土師器である。152は大形の甕で、破片は多いが器形を復元することはできなかった。口縁部、肩部、底部を図示した。厚手で焼成が悪くきわめて軟質である。底部と考えられる破片には、内面に指の痕が明瞭に残る。153の高坏と共に、古墳中期と考えられる。

8区ではSK14のあるB1とC2グリッドで特に多く土器が出土している。弥生前期の土器が多いが、B1やB3グリッドでは弥生中期の土器も多く出土している。

9区出土土器（第78図）　154～159、161～164は弥生前期の土器である。口縁部は水平に突出する。154は肩部に削り出し突帯があり、その上に2条の沈線がある。155は肩部が大きく張る器形で、頸部と肩部に2条ずつの刻み目突帯があり、貝殻直線文3条と羽状文がその下にある。貝殻による施文は里方本郷遺跡出土土器の中で最も明瞭である。羽状文の斜線は短く、比較的小ぶりな貝で施文されたことがうかがえる（田畑2003　63頁)。159は内外面のヘラミガキを丁寧に行っている。162は貝殻で文様を施文している。直線文の間に羽状文を施し、その下には斜格子文がある。155に比べると文様が細く薄い。小さい貝殻で施したようである。164は口縁部が水平方向に伸び、逆L字状である。これらの土器の中では154や159が古い要素を持つが、そのほかの土器は前期後葉（Ⅰ-3）～前期末（Ⅰ-4）と考えられる。165は弥生中期の鉢と考えられる。胎土が砂質で弥生前期の土器とは異なる。166～168は弥生後期の土器である。166は口縁端部が上方に伸びる。後期前葉（Ⅴ-1）と考えられる。167は口縁端部が摩滅しており文様は不明であるが、後期後葉（Ⅴ-3）と考えられる。168は胴部に列点文がある。160は古墳前期の土器である。口縁部と胴部は接合せず、図上で復元した。口縁部は直線的に伸び、口縁端部は面を持つ。口縁端部の特徴や口縁部と胴部の比率から、古墳前期初頭（草田6期）と考えられる。

9区は全体の土器の量が少ないが、主にA1、A2グリッドから出土している。弥生前期のほか、弥生中期や後期の土器も出土している。

石器（第79、80図）　169、170は6区から出土した打製石斧である。169はほぼ完形である。基部から刃部にかけてゆるやかに幅が広がる。側面は敲打により刃潰しをしている。170は基部を欠損しているが、169よりも大きい。これも側面は敲打で刃潰しをしている。共に使用に伴う摩滅は見られない。171、172は太型蛤刃石斧である。共に基部を欠損している。171の刃部には欠損が無いが、172は刃部が潰れている。171は6区、172は8区から出土した。173は8区から出土した砥石である。全体に摩滅しているが、四面とも砥石として使用されている。174は石斧と考えられる。外面に研磨は見られない。175は石皿の可能性がある。使用の痕は見られない。

176は6区から出土した黒曜石のスクレイパーである。177は8区から出土した磨石の破片である。外面はよく使用されている。178は石斧の破片である。

木質遺物（第81～83図）　木質遺物の分類は、容器・装飾具・漁労具？・施設材（杭）・施設材または器具材・その他の部材に分類した。

179、180は4区の壁面から出土した。179は断面が逆U字である。180は断面が台形で、図面の

下の方は一段薄くなっている。先端が尖っていることから銛状木製品とした。2点とも5層から出土したので古墳前期より新しい時期のものである。181は6区から出土した板である。中央が段状に幅が狭くなっている。182、183は15区から出土した。182は扇の破片である。先端を欠損している。要の部分には孔が一つあり、若干幅が広くなる。末端の部分は丸くなる。扇は青木遺跡から8～9世紀の例が、出雲国府跡から12世紀の例が出土している[1]。183は4ヶ所の孔があることから、容器の底板の可能性がある。共に奈良・平安時代に属すると考えられる。184は9区から出土した刳物桶である。高さが34.7cmあり、桶として大形の部類になる。上面から見た形が楕円形になるタイプと考えられる。底板をとめる孔の他に、側面に小孔がある。破損しているが、他の側板と組み合わせるための孔の可能性がある。185は3区から出土した一端に段のある棒状の材である。端部は向かい合う二方向から加工を行い、段の部分も主に二方向から加工を行う。段の無い側は直線的にカットされている。186は12区から出土した棒状の材である。断面が長方形の角材である。一端は細くなっている。図面の上側の折れている部分は炭化している。187～193は杭である。187、188は4区の杭である。187は断面長方形に加工しており、四方から加工を行い先端を尖らせている。杭の上部は破損が進んでいるが、炭化している。188は分割した材を二方向から加工している。樹種はクリである。189～193は8区の杭である。189は先端を主に一方向から加工しており、「斜段状加工a」[2]に相当すると考えられる。190は分割材を四方から加工し、先端は尖る。191、192は先端を二方向から加工し、加工面が端部の全周を覆わないことから「斜段状加工b」に相当すると考えられる。192の樹種はアカガシ亜属である。193は芯持ち材であるが全体を六角形に加工している。先端は一方向から加工しており、「斜段状加工a」に相当すると考えられる。194～200は9区から出土した材である。194は図の上の方は破損しているが、図の下の部分に軸状に突出する部分があるので、扉材を転用した可能性がある。195は短辺側が曲線を描いている部分があるので、容器の底板または蓋板の可能性がある。196～198は板材である。197は一端が斜めに加工されている。198は中央に孔があいている。199、200は杭である。共に二方向から加工を行うので、「斜段状加工b」に相当すると考えられる。樹種は200はヒサカキである。

第4節　小結

里方本郷遺跡の調査は、出雲市北部の水田地帯を東西に通る道路用地内に大きなトレンチ状の調査区を設定して調査を行い、調査区によって遺物の出土量に大きく差があることがわかった。特に調査範囲の西側、4区から9区にかけては、トレンチ調査で遺物が出土していたこともあるが、弥生時代前期～中期の土器や木質遺物、古墳時代前期の遺構（4～6区）など、遺構・遺物を確認することができた。これは特に4～6区には青灰色～灰白色の砂層が堆積しており、砂層中に弥生前期～中期の土器が含まれていたこと、また、砂層の上から土坑や溝などの遺構が掘り込まれており、遺構の検出が比較的容易であったことに拠ると考えられる。一方1～3区や10～17区では、遺物の出土があまり見られず、15区を除いては遺構も少なかった。

---

[1] 島根県教育委員会編　2004『史跡出雲国府跡2』 風土記の丘地内発掘調査報告書15　32-29～32
島根県教育委員会編　2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』 国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　137-W081

[2] 杭の先端の加工は東村山市遺跡調査団編　2006『下宅部遺跡Ⅰ』(1)　82.83を参考にした。

2区では粘土採掘坑を確認したが、出雲市内では高岡遺跡（出雲市教育委員会編2000）、中野清水遺跡（島根県教育委員会編2004）で近世以降の粘土採掘坑が確認されている。また、里方本郷遺跡の西に位置する里方八石原遺跡（出雲市教育委員会編1998）では明治時代以降の「畝状遺構」が確認されているが、高岡遺跡や中野清水遺跡の例から考えると、これも粘土採掘坑の可能性がある。2区の粘土採掘坑はオモカス層の上面から掘り込まれているが、この遺構の時期は、高岡遺跡や中野清水遺跡の年代から考えると近代まで下る可能性がある。また、6区SK09やP29は埋め戻しのようなブロック状の堆積をしており、粘土採掘坑であると考えられる。兵庫県朝来市筒江浦石遺跡では弥生後期末～古墳前期初頭のブロック状の埋土が見られるほかに5つの特徴を示す「粘土採掘土坑」を確認している（兵庫県教育委員会編2007　77-79頁）。SK09とP29の周囲に他の粘土採掘坑が確認できなかったことは、密集することが多い粘土採掘坑の事例に合わない部分があるほか、SK09やP29が掘り込まれた砂層がどの程度粘土として有効であるかについて今回の調査では検討することができなかったが、形や堆積の状況から粘土採掘坑と判断した。

1区と3区ではオモカス層のAMS年代測定を行い、オモカス層は奈良時代または平安時代から鎌倉時代にかけて堆積したと考えられることがわかった。

【参考文献】

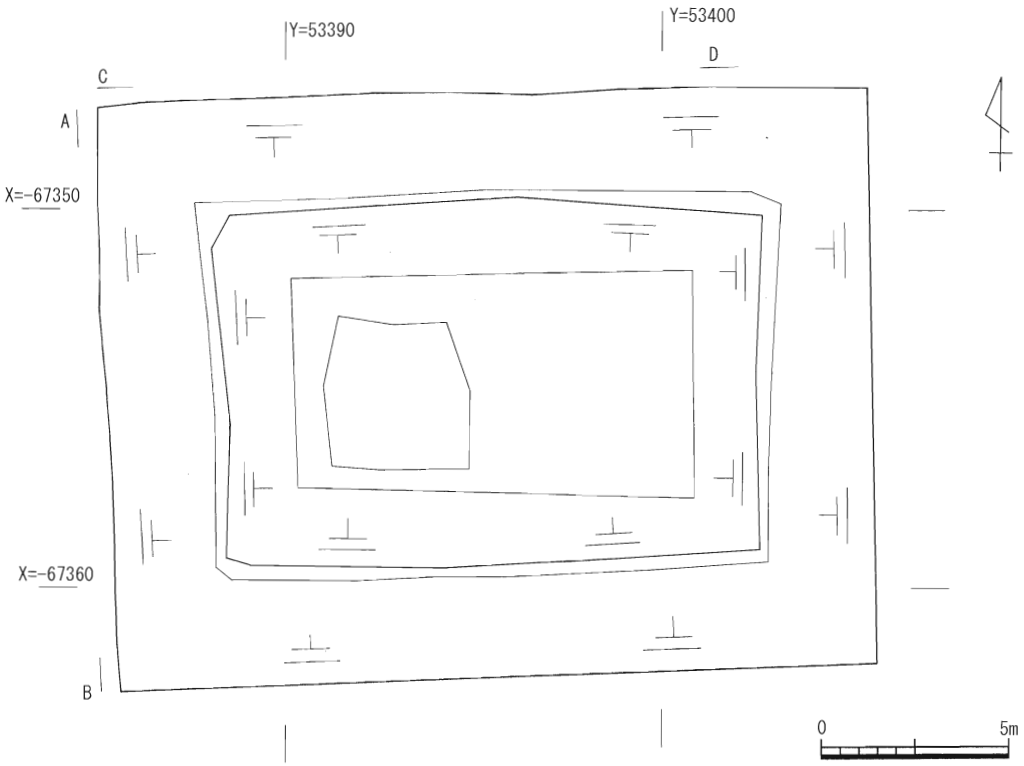
田畑直彦　2003「山陰地方における綾羅木系土器の展開」『山口大学考古学論集　近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会　47-72

出雲市教育委員会編　1998「里方八石原遺跡」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集　1-10

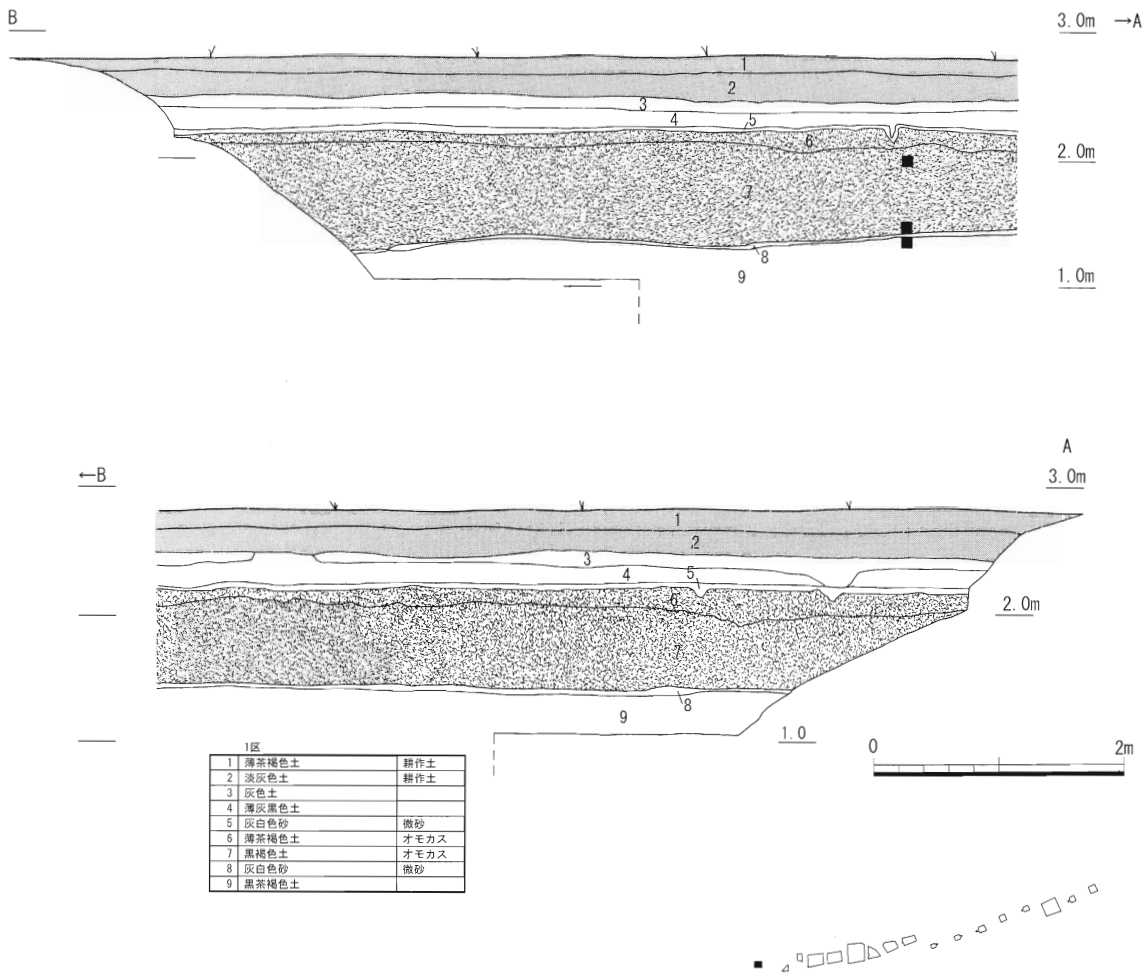
出雲市教育委員会編　2000『高岡遺跡』

島根県教育委員会編　2004『大津町北遺跡　中野清水遺跡』一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5

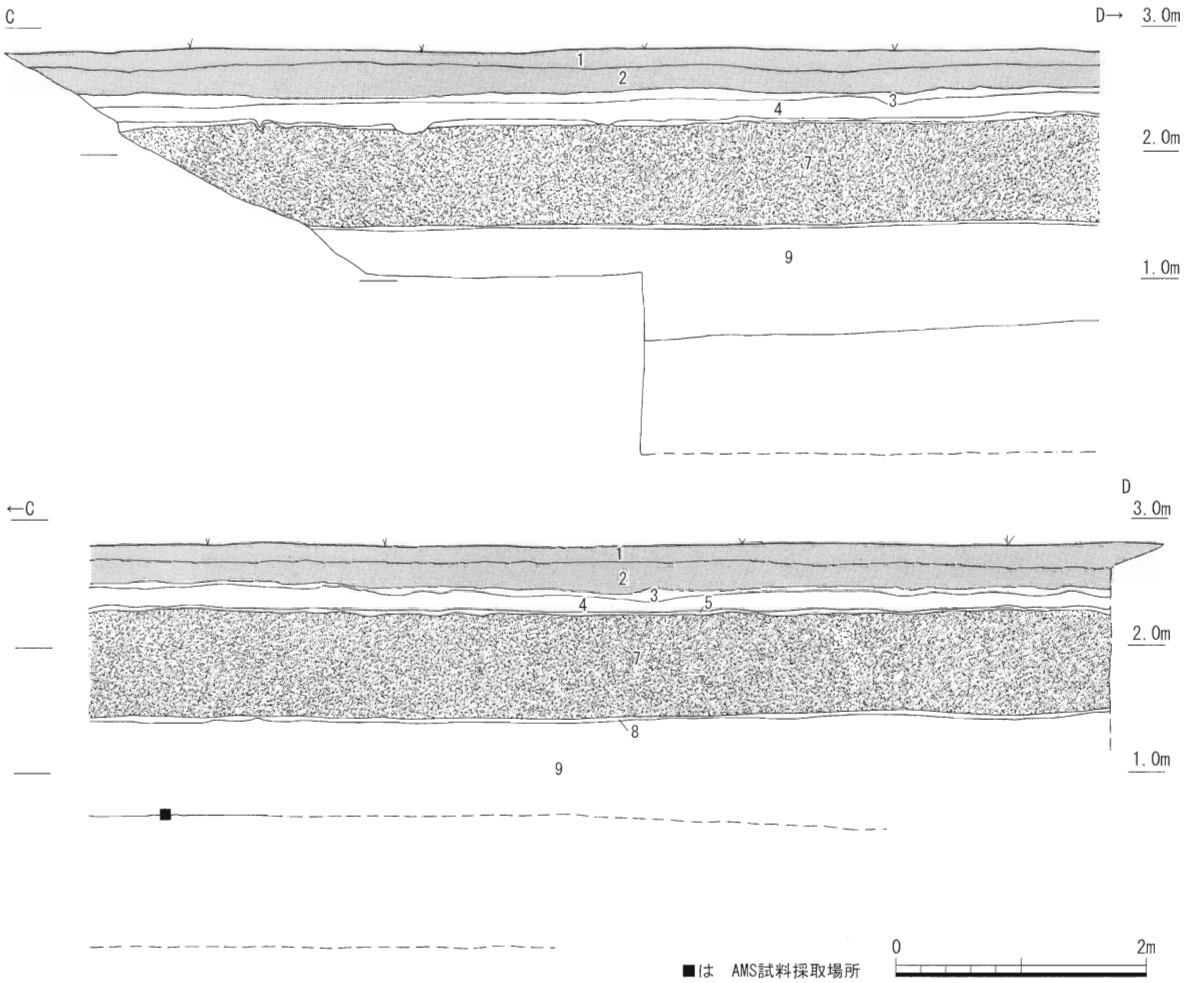
兵庫県教育委員会編　2007『筒江浦石遺跡』一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ



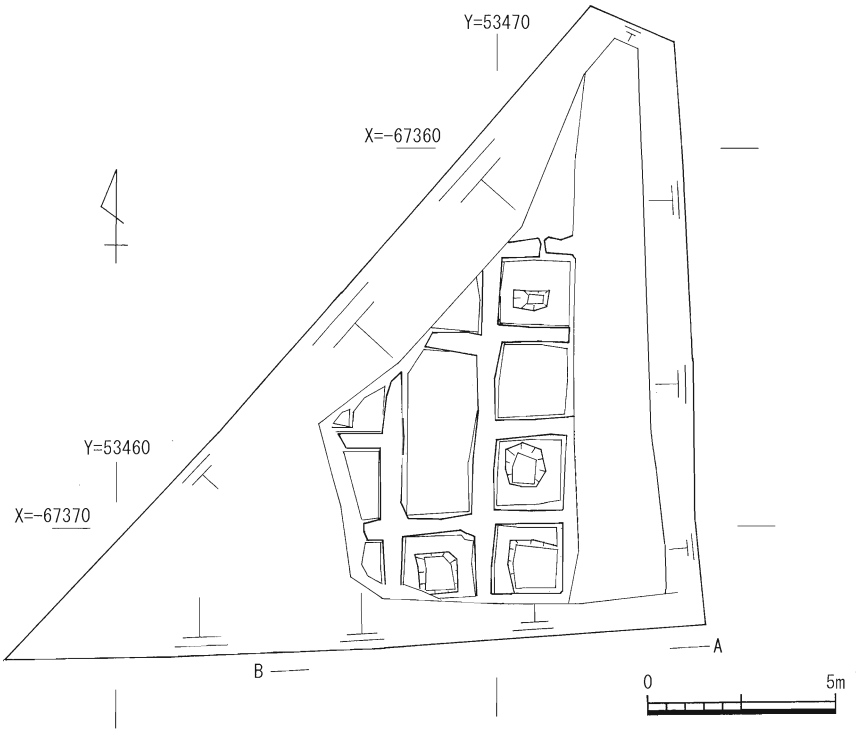
第6図　1区平面図 (S=1/200)



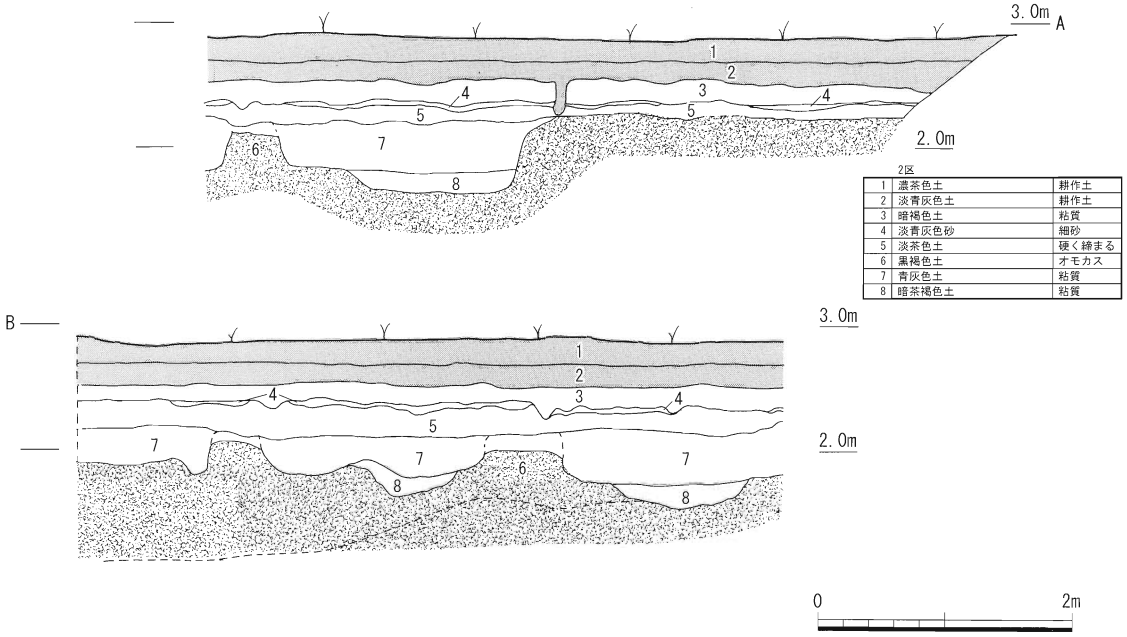
第7図　1区西壁土層図 (S=1/60)



第８図　１区北壁土層図（S=1/60）



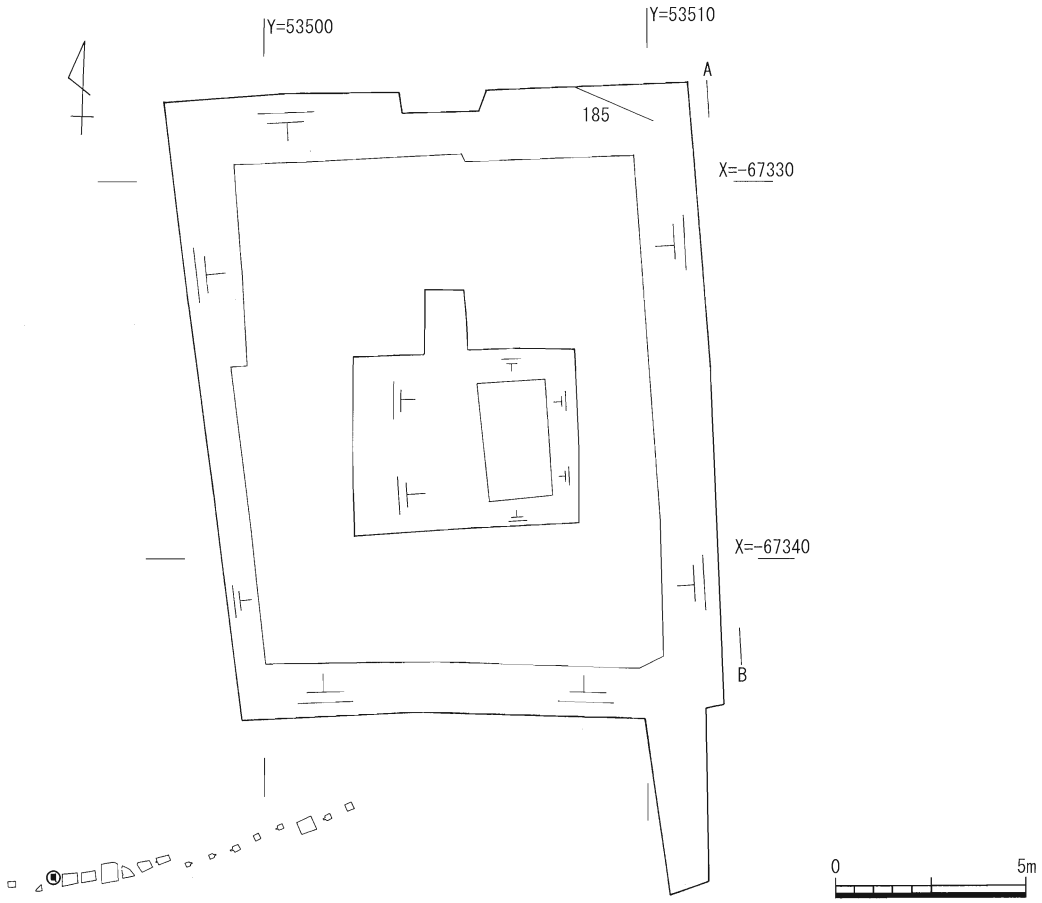
第 9 図　2 区平面図 (S=1/200)



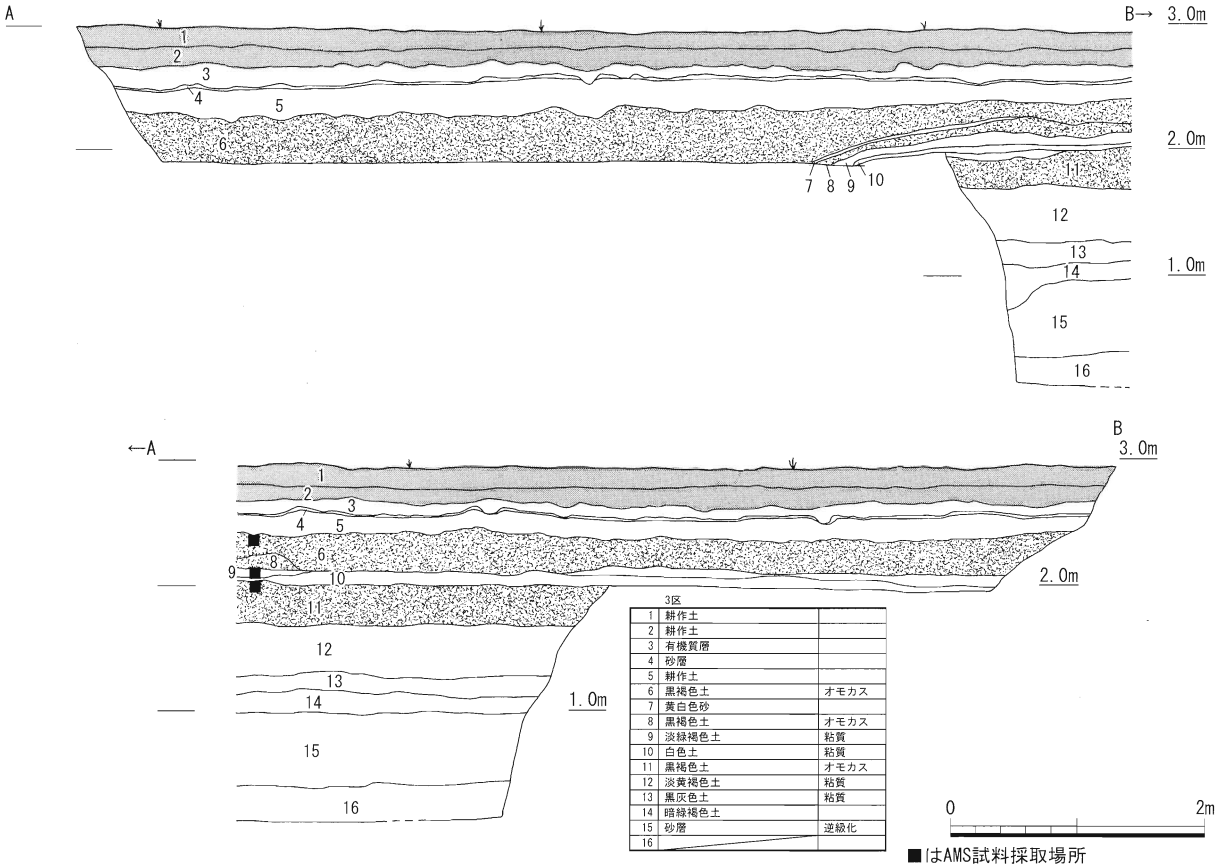
2区

1	濃茶色土	耕作土
2	淡青灰色土	耕作土
3	暗褐色土	粘質
4	淡青灰色砂	細砂
5	淡茶色土	硬く締まる
6	黒褐色土	オモカス
7	青灰色土	粘質
8	暗茶褐色土	粘質

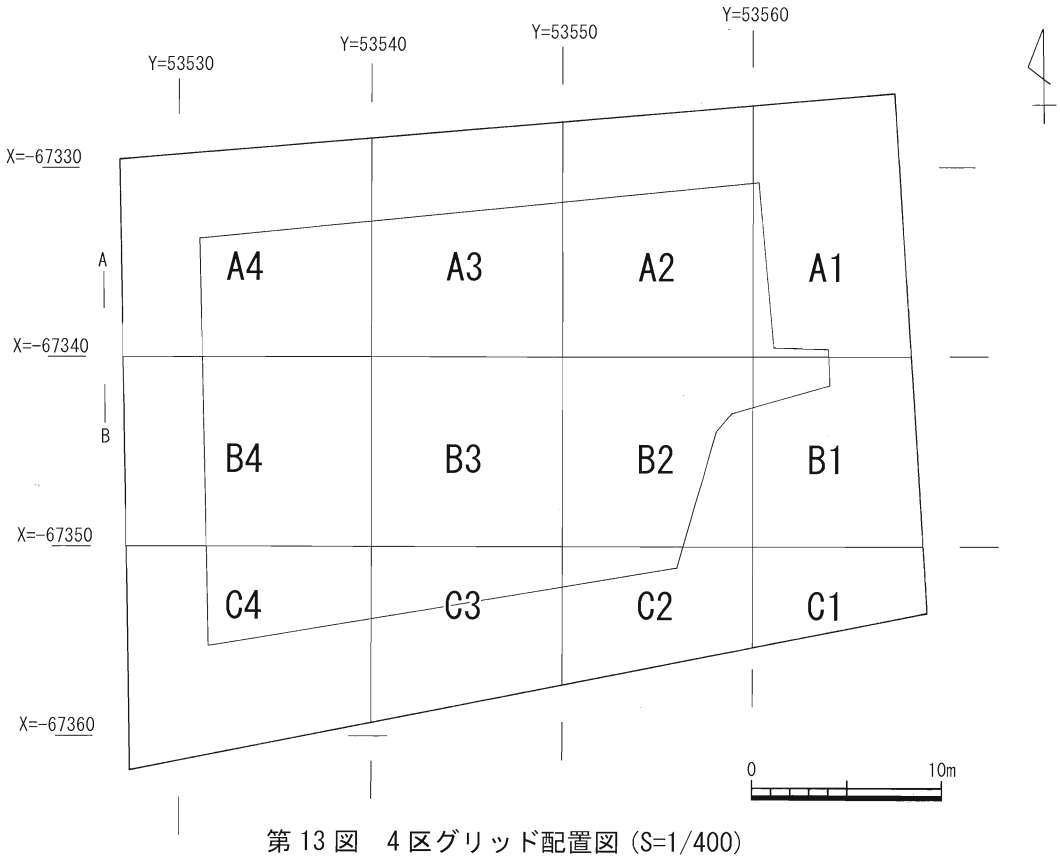
第 10 図　2 区土層図 (S=1/60)



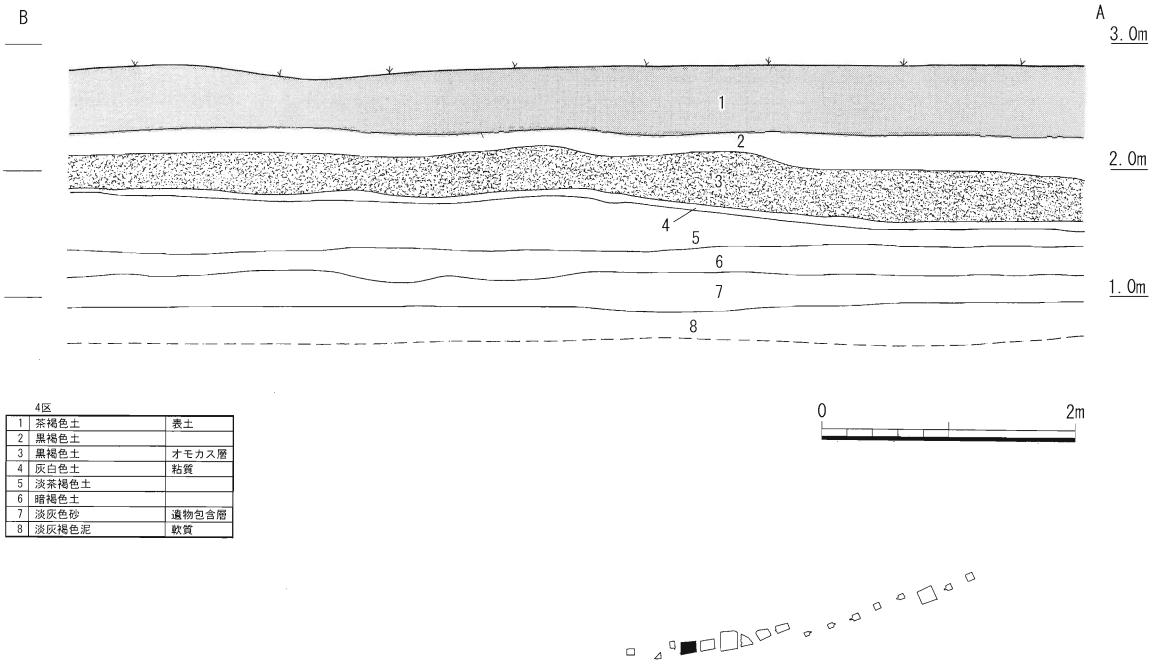
第 11 図　３区平面図 (S=1/200)



第 12 図　３区土層図 (S=1/60)



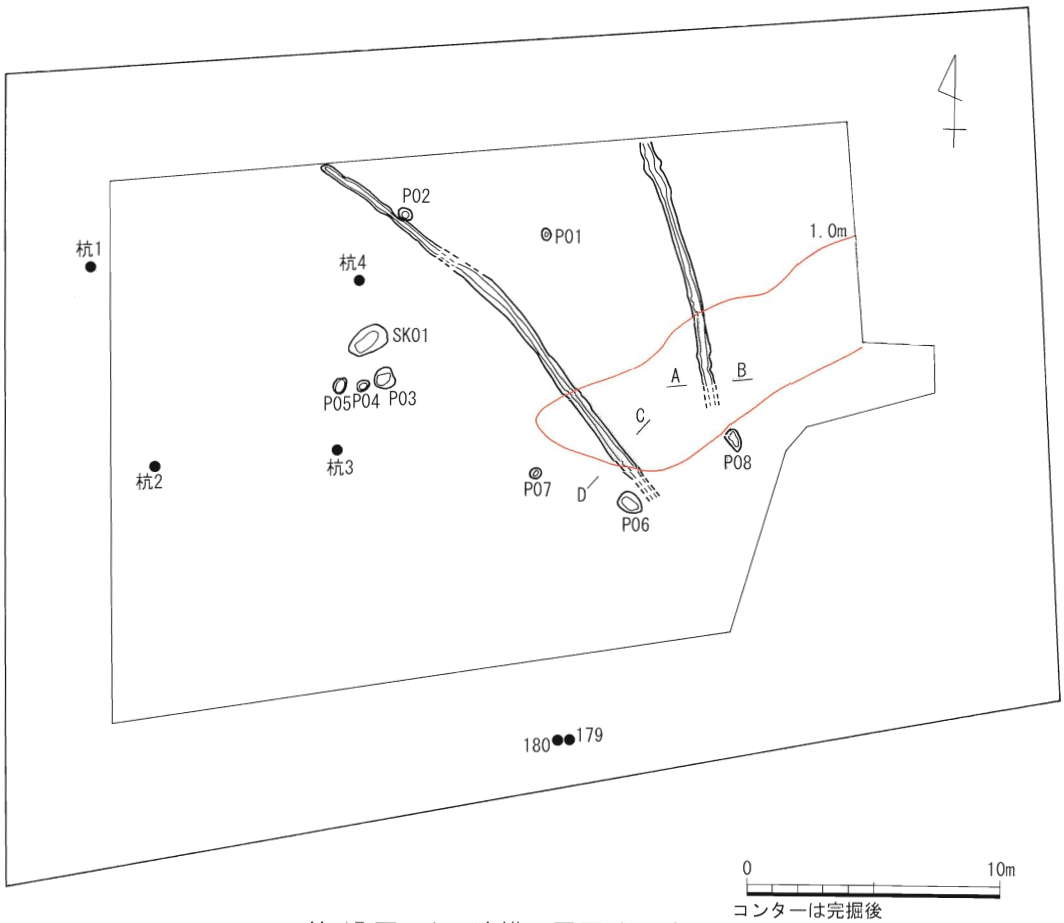
第 13 図　4 区グリッド配置図 (S=1/400)



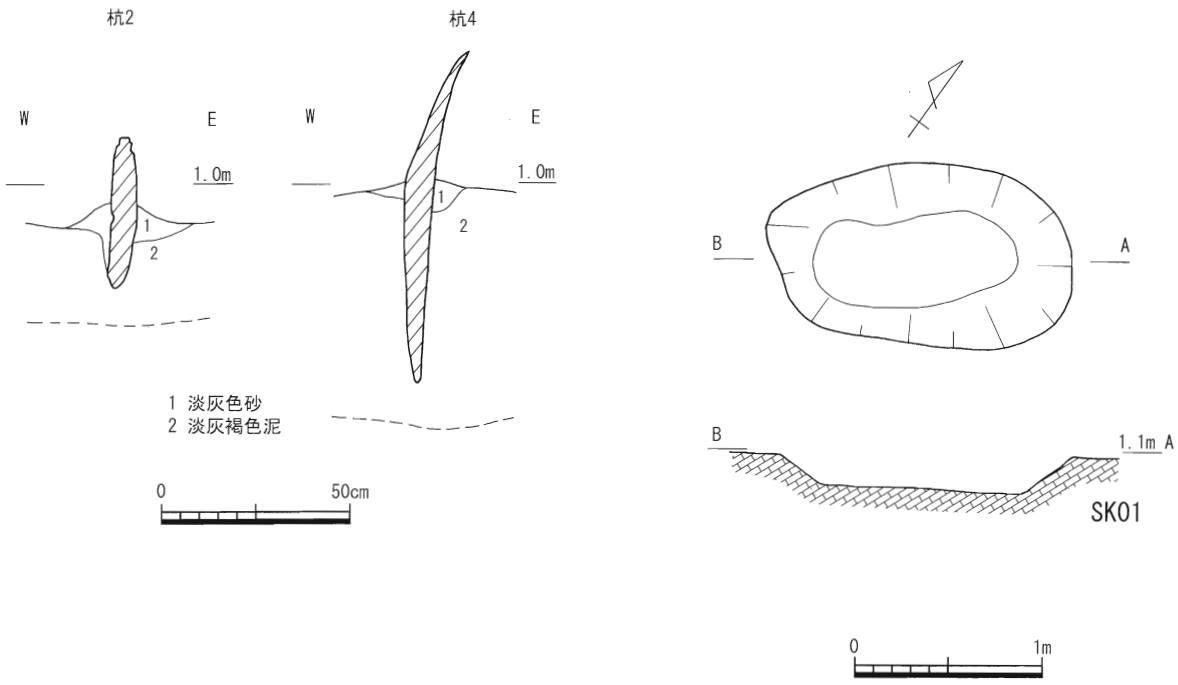
4区

1	茶褐色土	表土
2	黒褐色土	
3	黒褐色土	オモカス層
4	灰白色土	粘質
5	淡茶褐色土	
6	暗褐色土	
7	淡灰色砂	遺物包含層
8	淡灰褐色泥	軟質

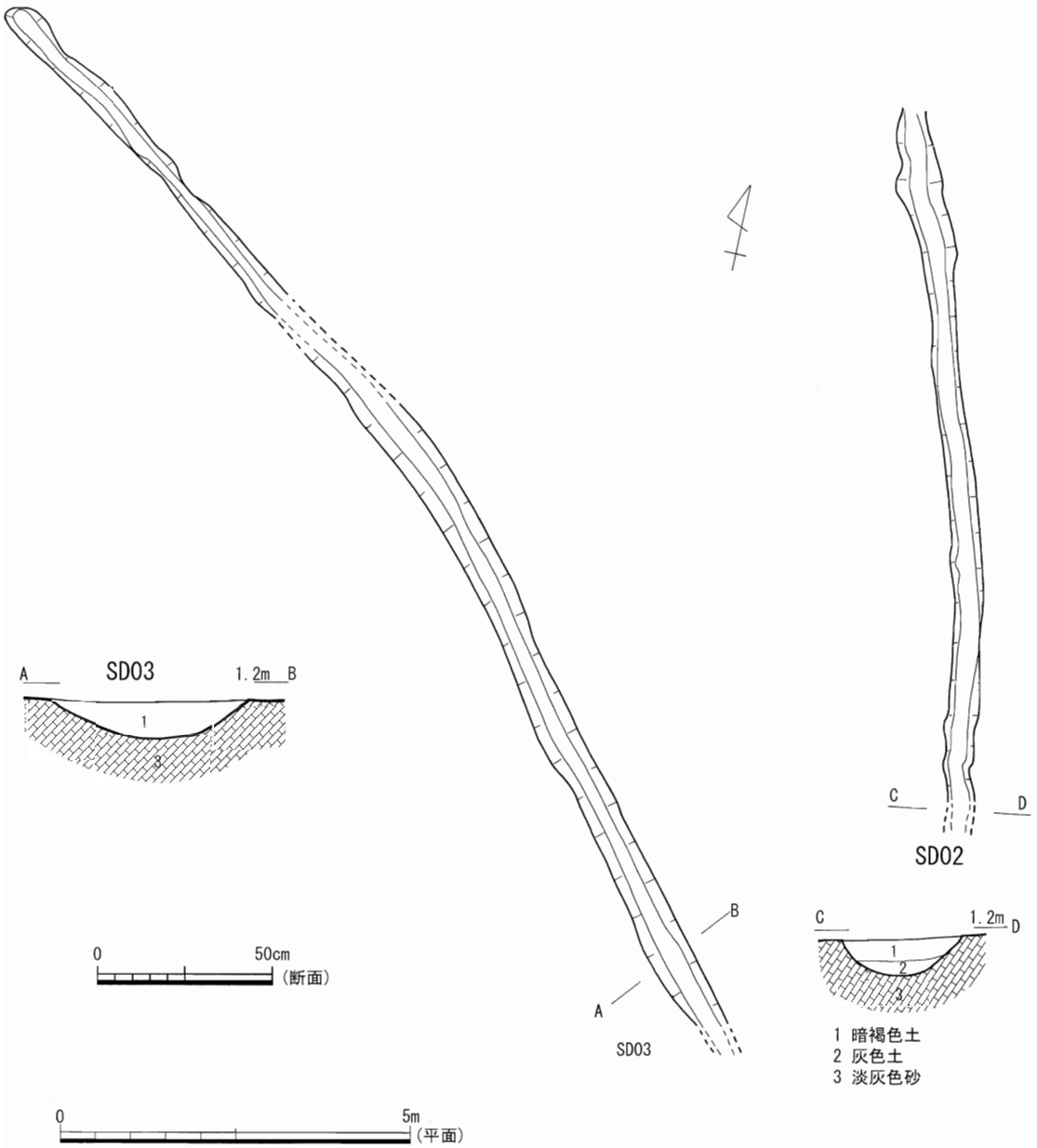
第 14 図　4 区土層図 (S=1/60)



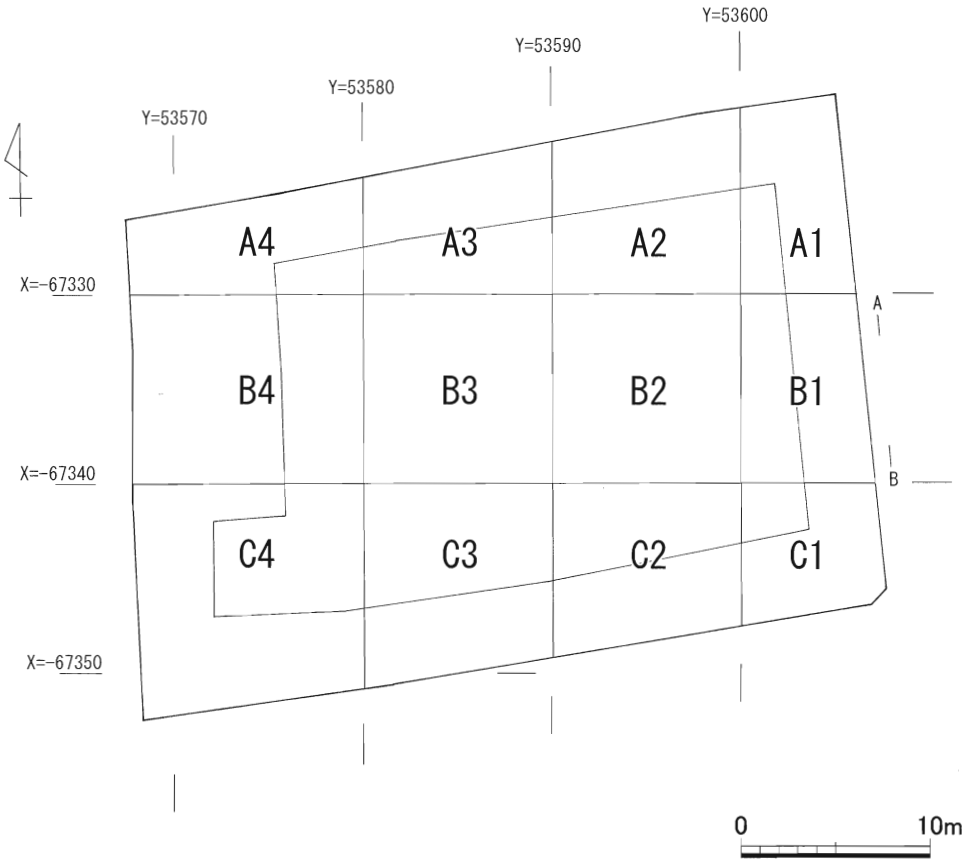
第 15 図　4 区遺構配置図 (S=1/300)



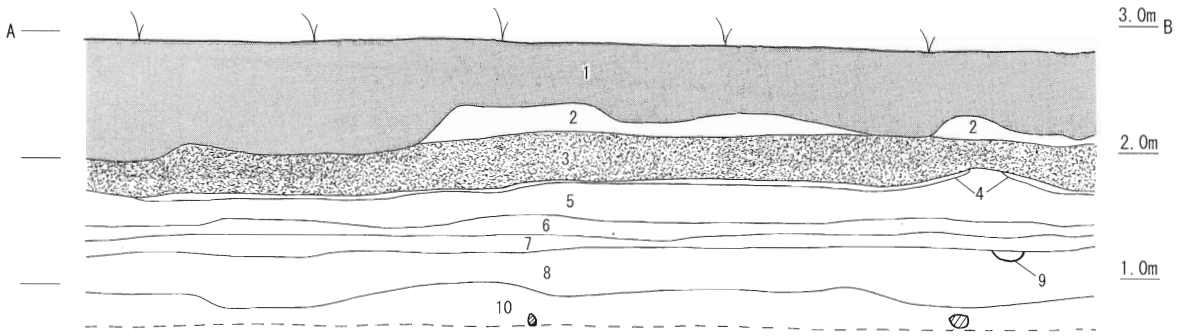
第 16 図　4 区杭実測図 (S=1/20)、土坑実測図 (S=1/40)



第 17 図　4 区溝実測図 (S=1/20・1/100)



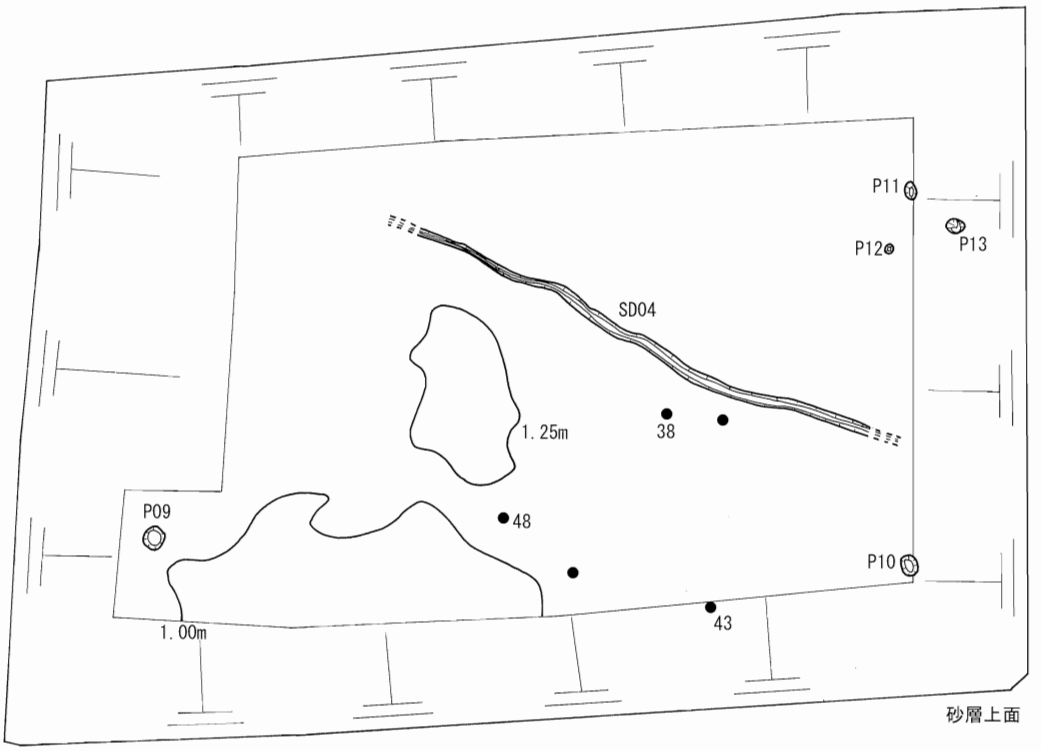
第 18 図　5 区グリッド配置図 (S=1/400)

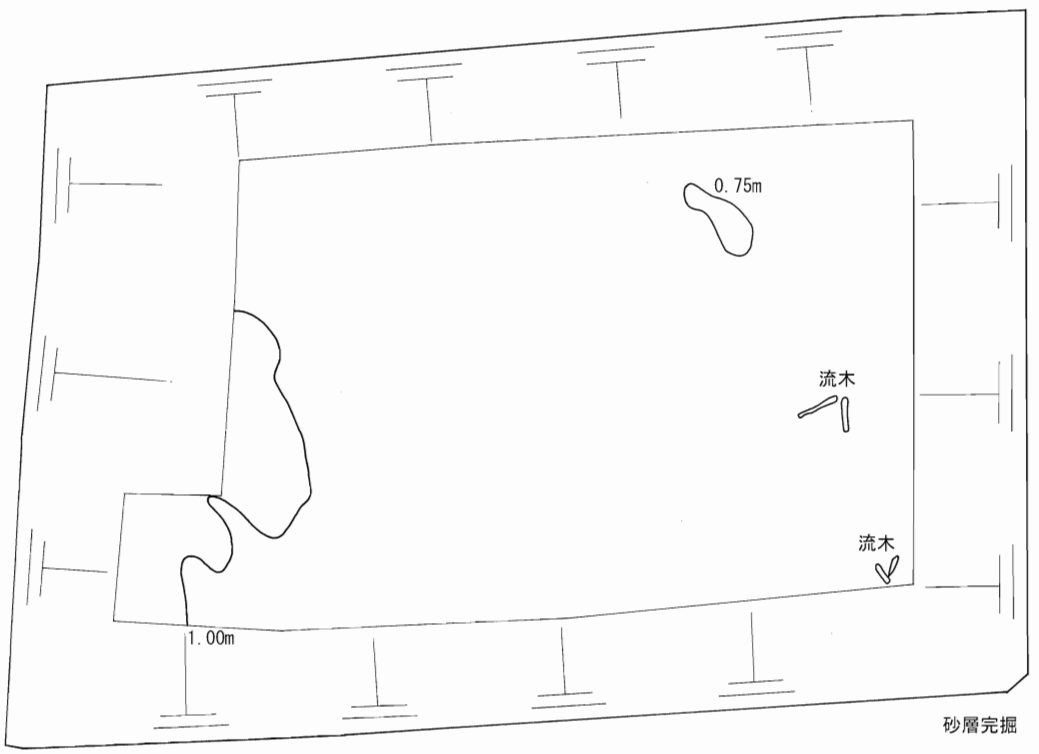


5区

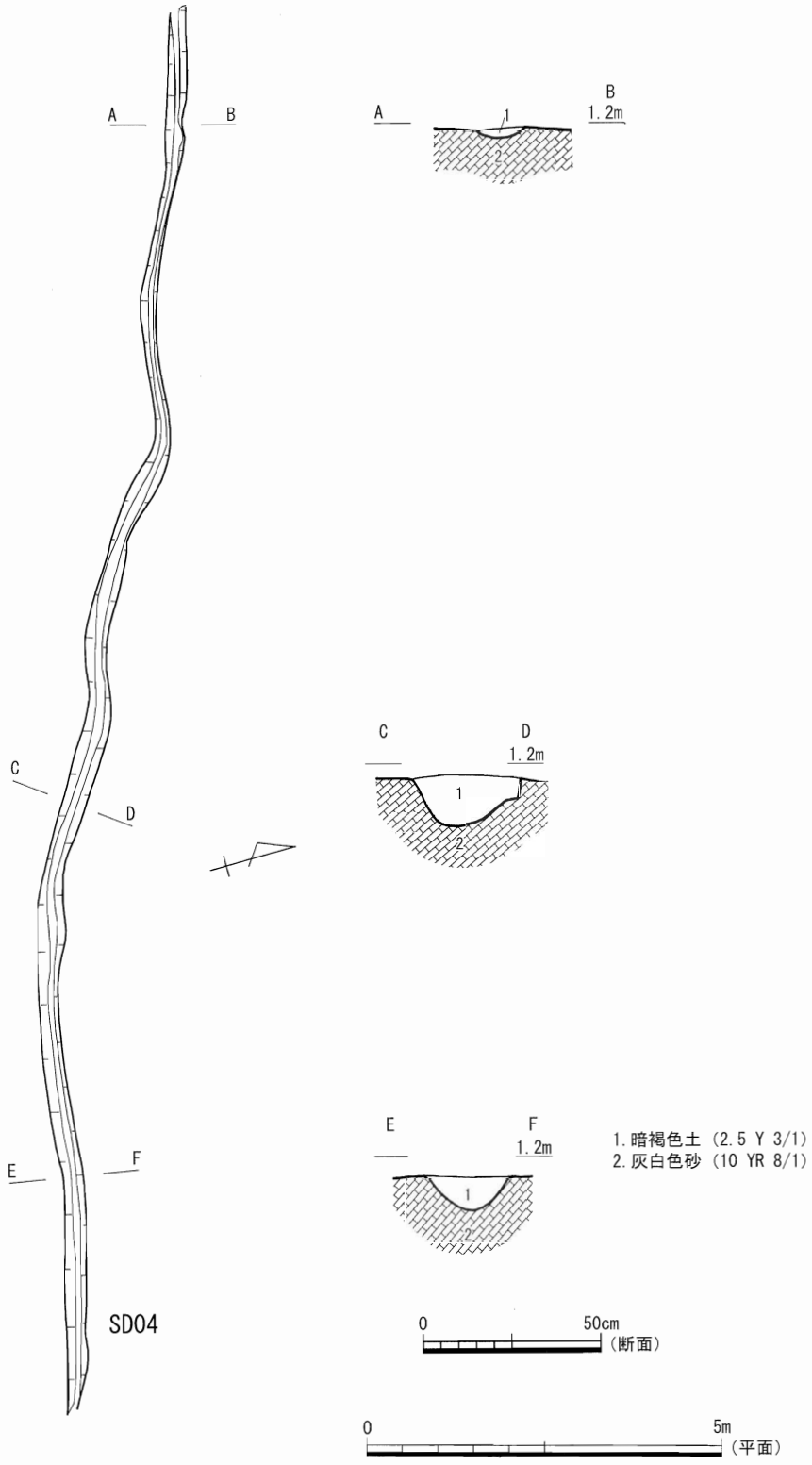
1	灰黄褐色土	10YR6/2	表土
2	黒褐色土	10YR2/3	
3	黒色土	10YR2/1	オモカス層
4	灰白色粘土	10YR8/2	
5	にぶい黄橙色土	10YR6/3	
6	褐灰色土	10YR4/1	
7	褐灰色土	10YR6/1	砂含む
8	灰白色砂	10YR8/1	遺物包含層
9	黒褐色土	2.5Y3/1	遺構の埋土
10	黄灰色泥	2.5Y5/1	軟質

第 19 図　5 区土層図 (S=1/60)

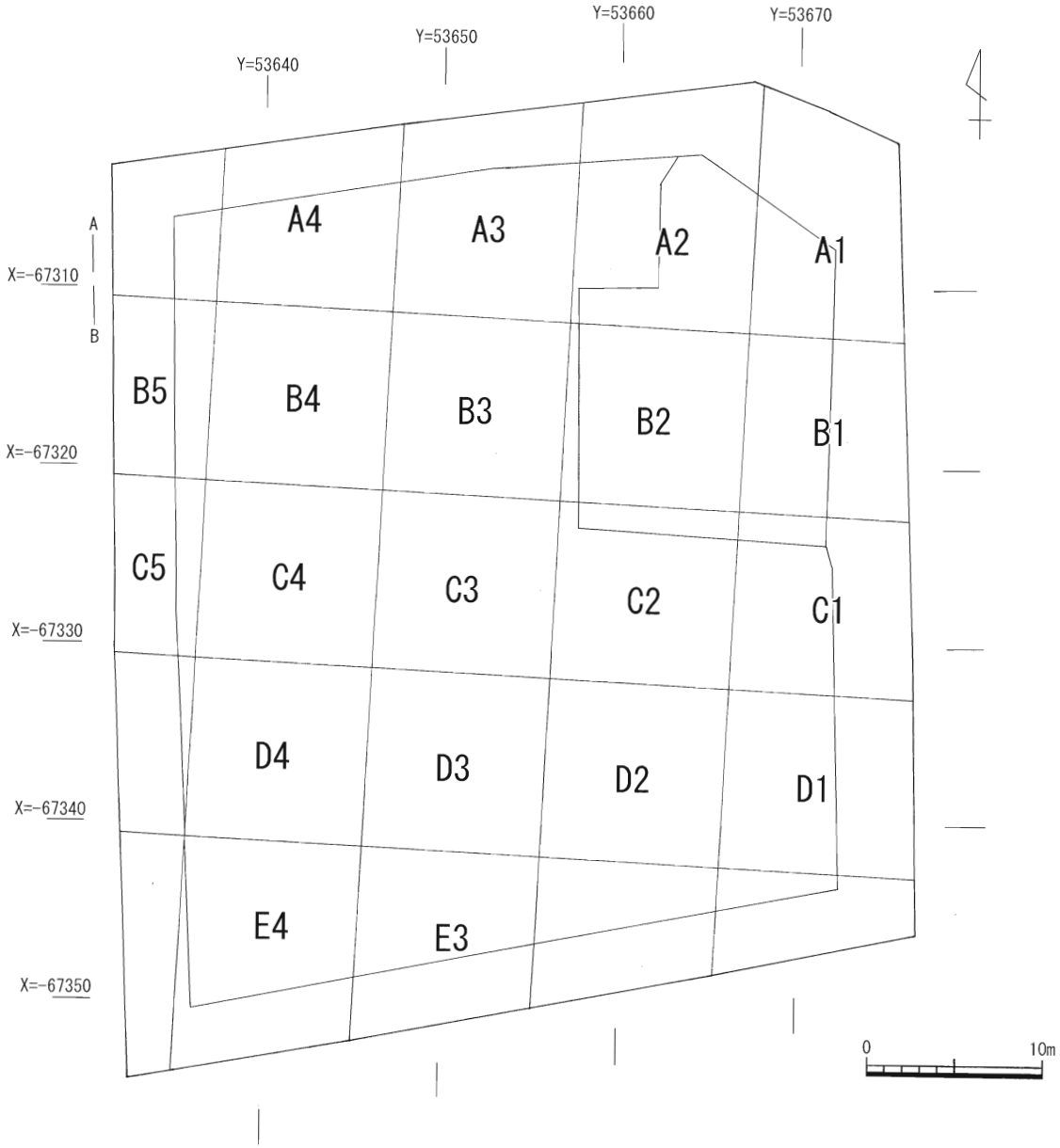




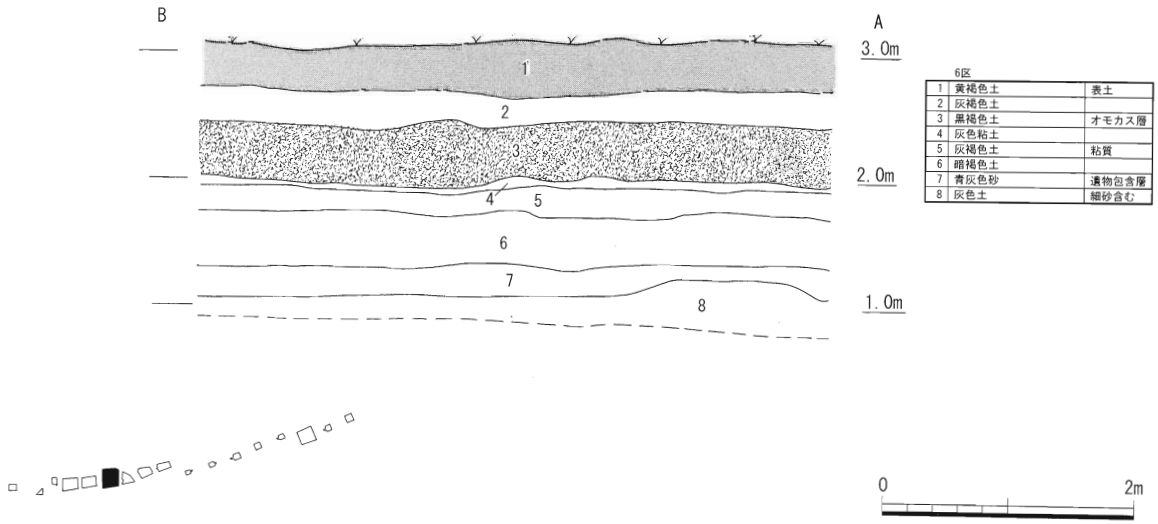
第 20 図　5 区平面図 (S=1/300)



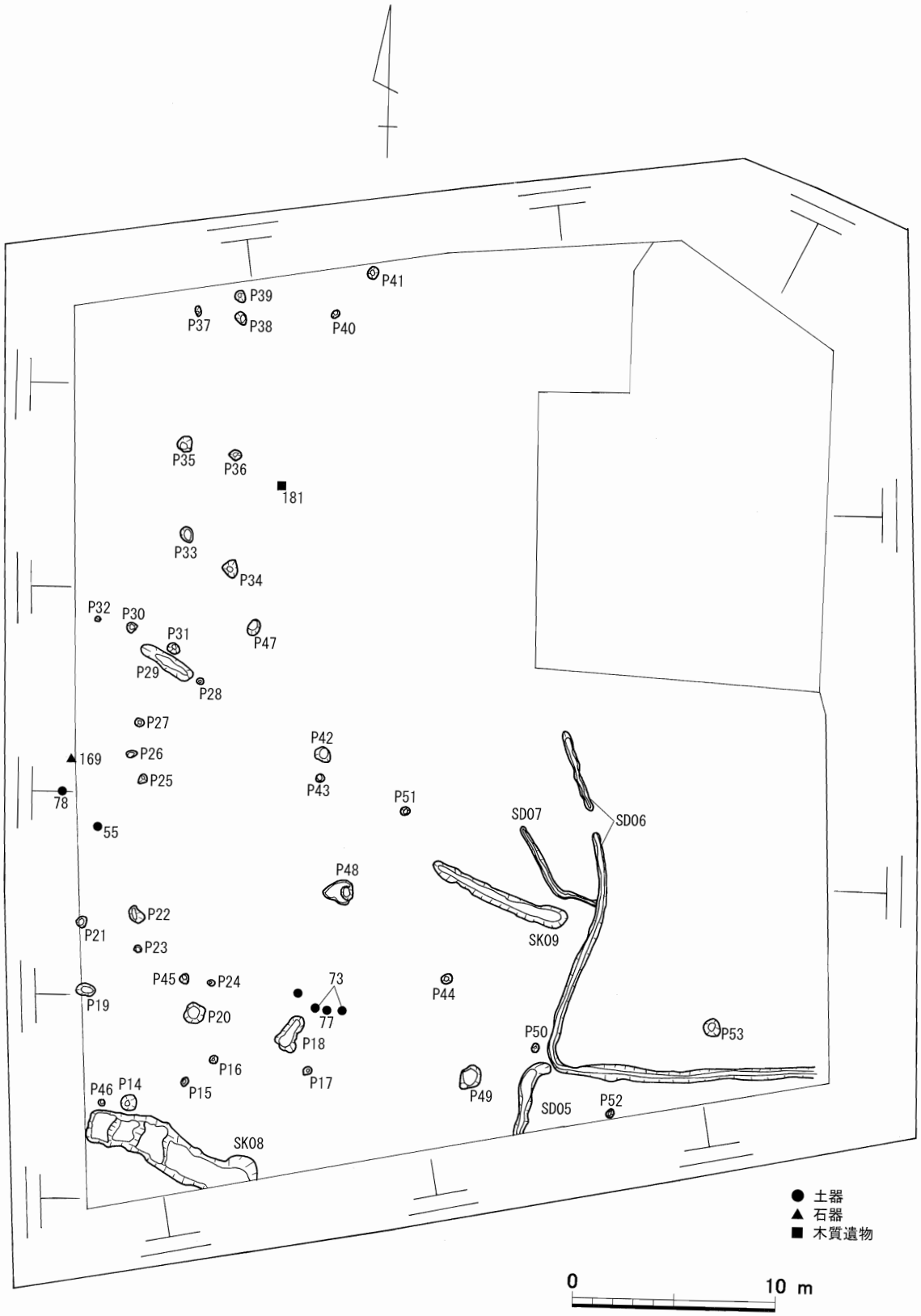
第 21 図　5 区溝実測図（S=1/20・1/100）



第 22 図　6 区グリッド設定図 (S=1/400)



第 23 図　6 区土層図 (S=1/60)



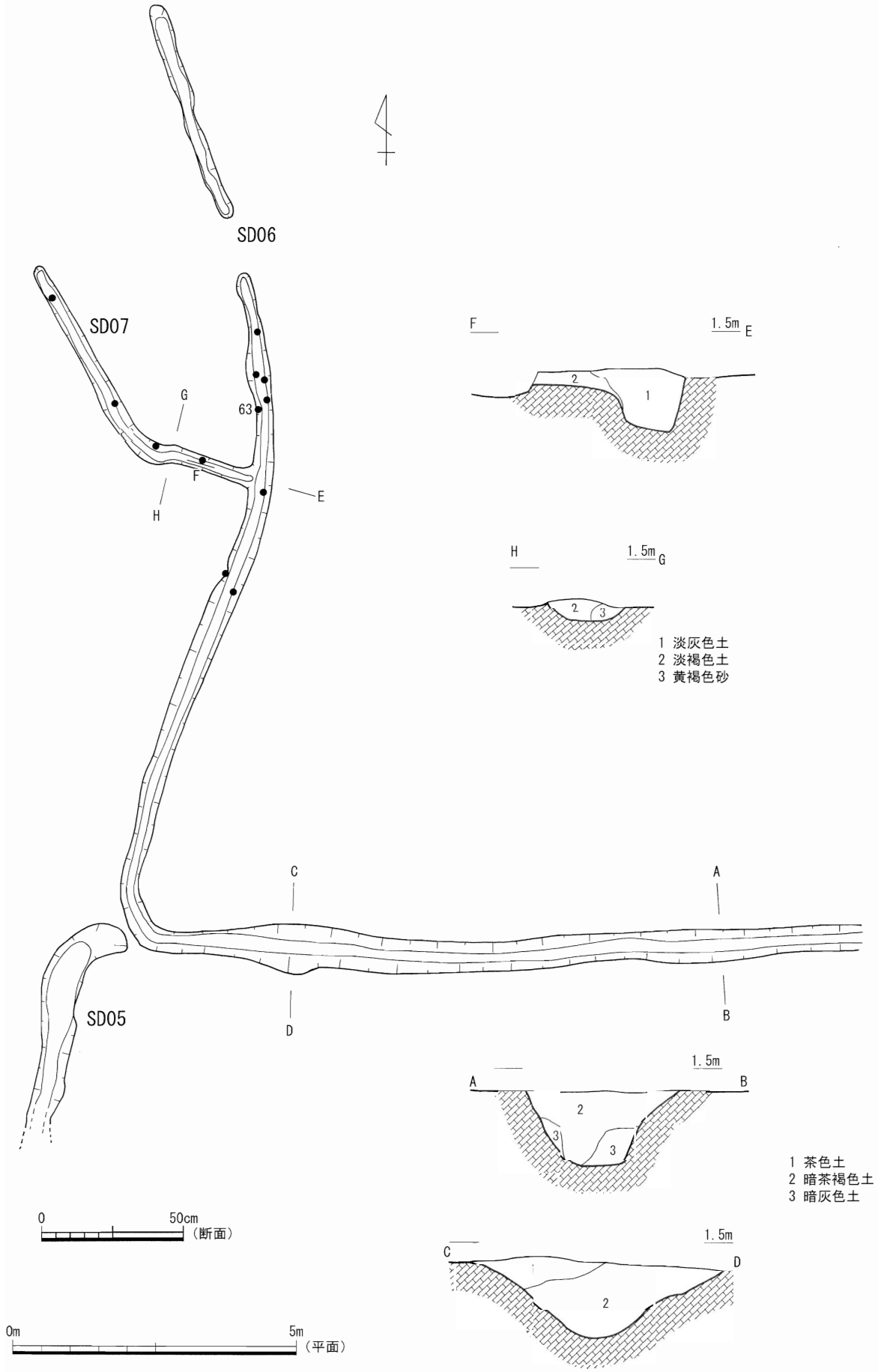
第 24 図　6 区遺構配置図 (S=1/300)

砂礫層上面コンター

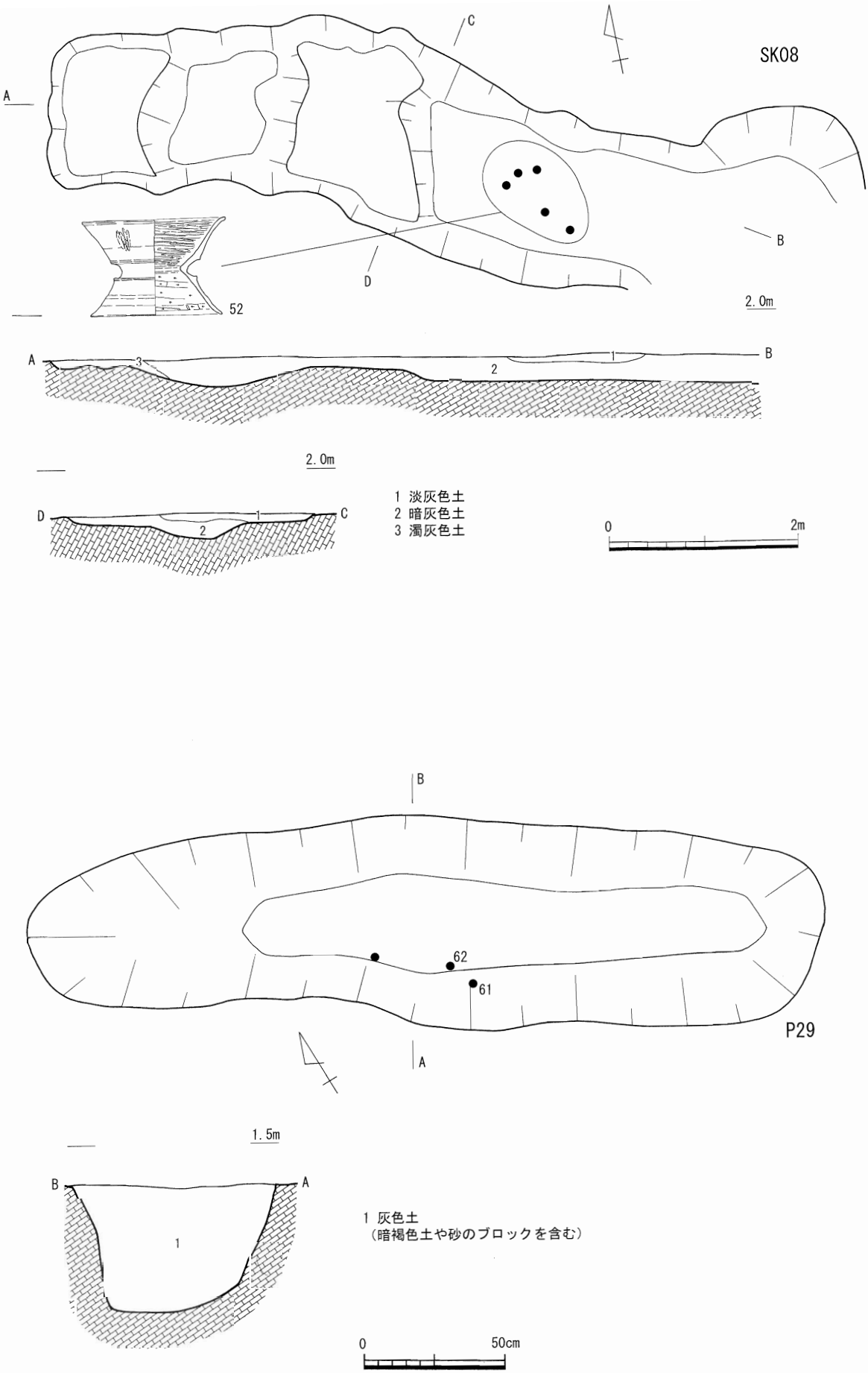
砂礫層完掘コンター

0
20m

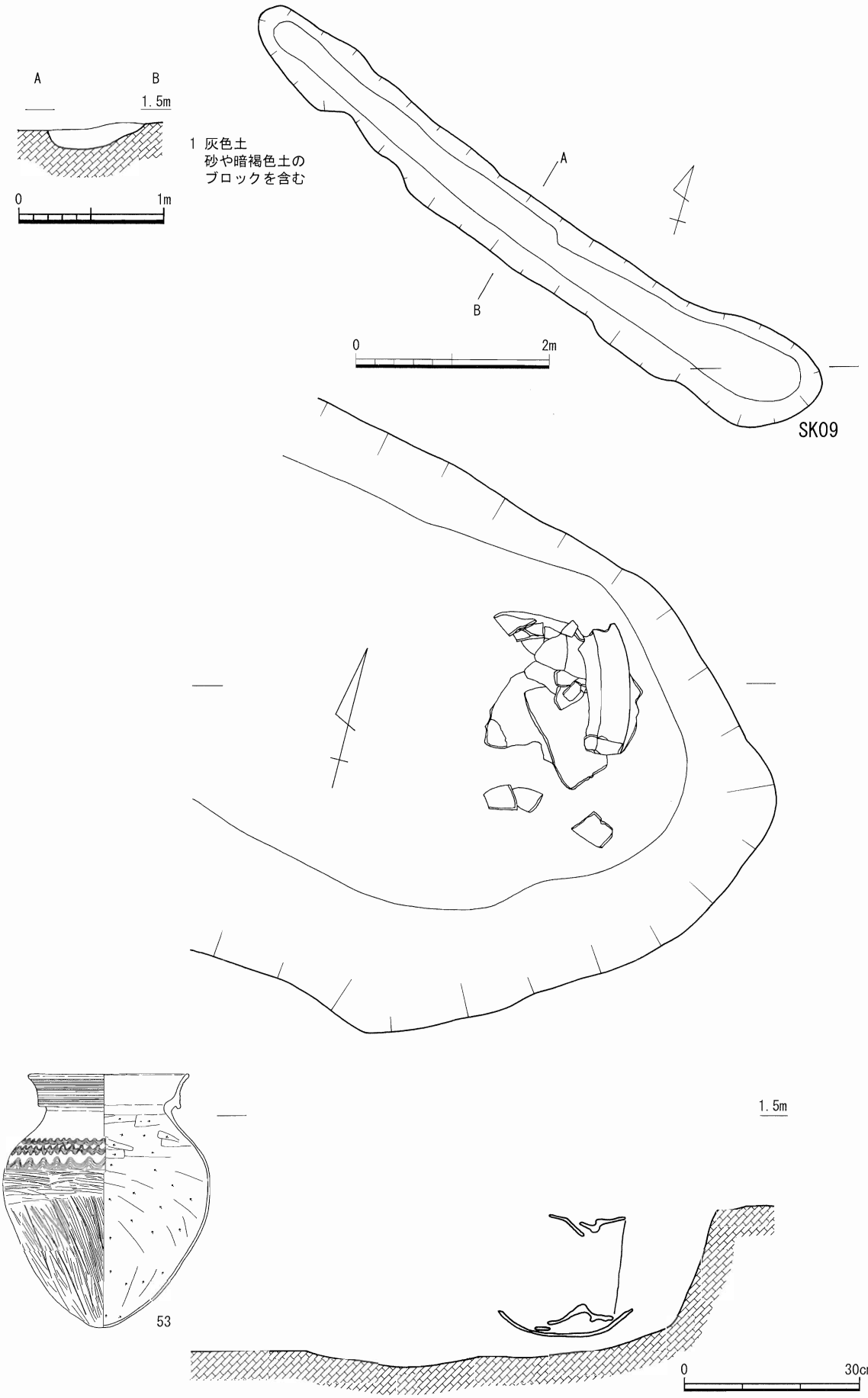
第 25 図　6 区砂礫層上面、砂礫層完掘コンター (S=1/500)



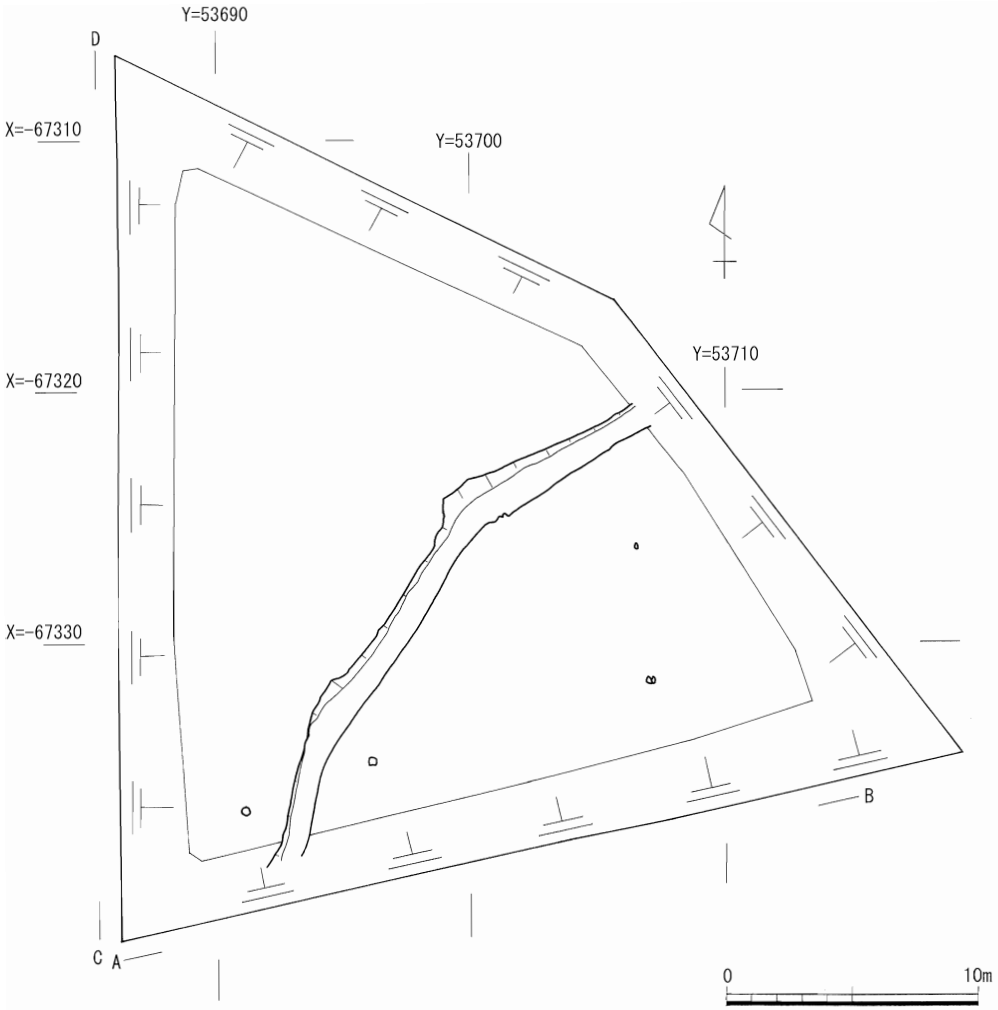
第 26 図　6 区溝実測図 (S=1/20・1/100)



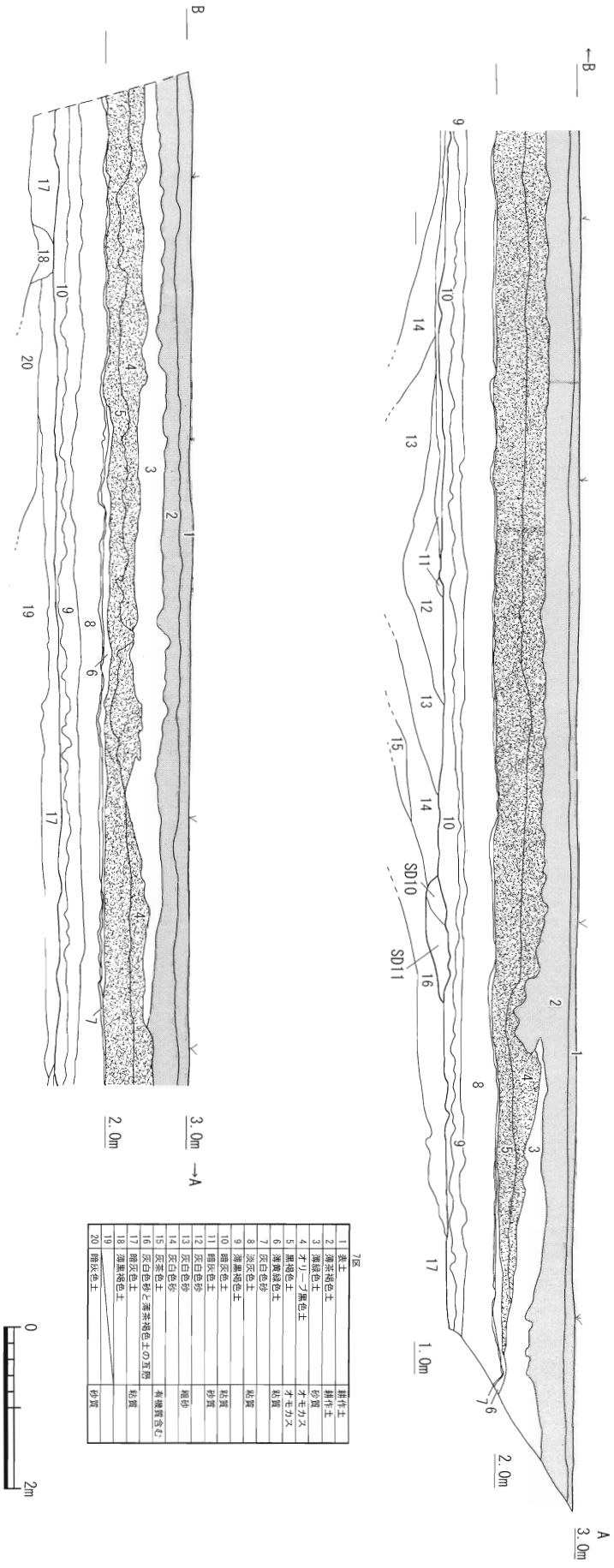
第 27 図　6 区遺構図 (1) (S=1/20・1/60)



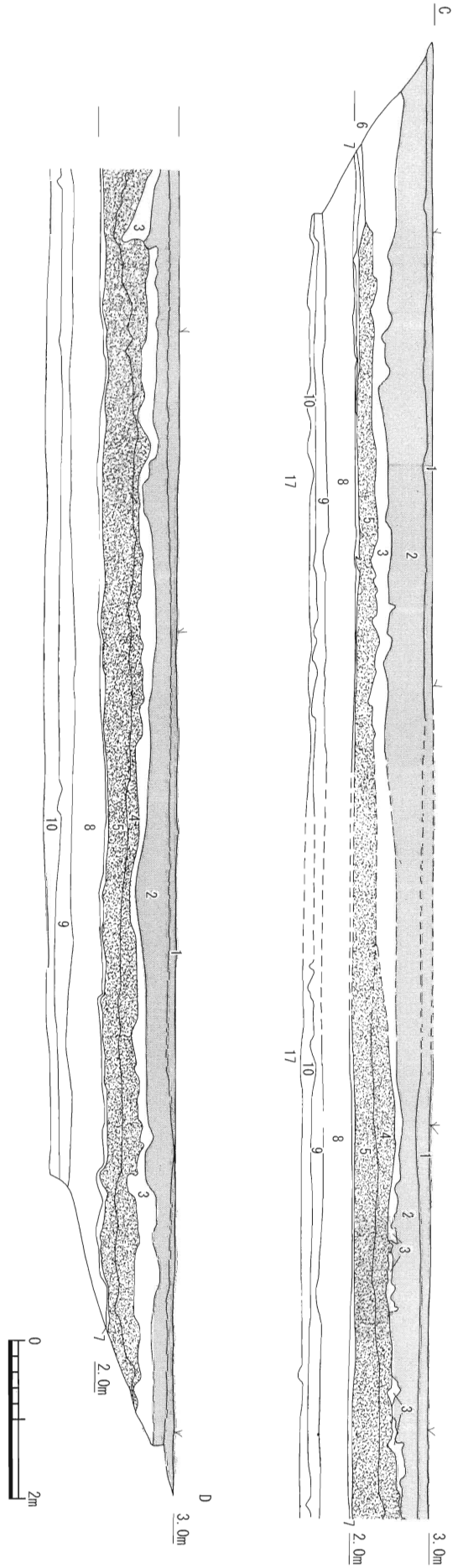
第 28 図　6 区遺構図 (2) (S=1/60・1/40・1/10)



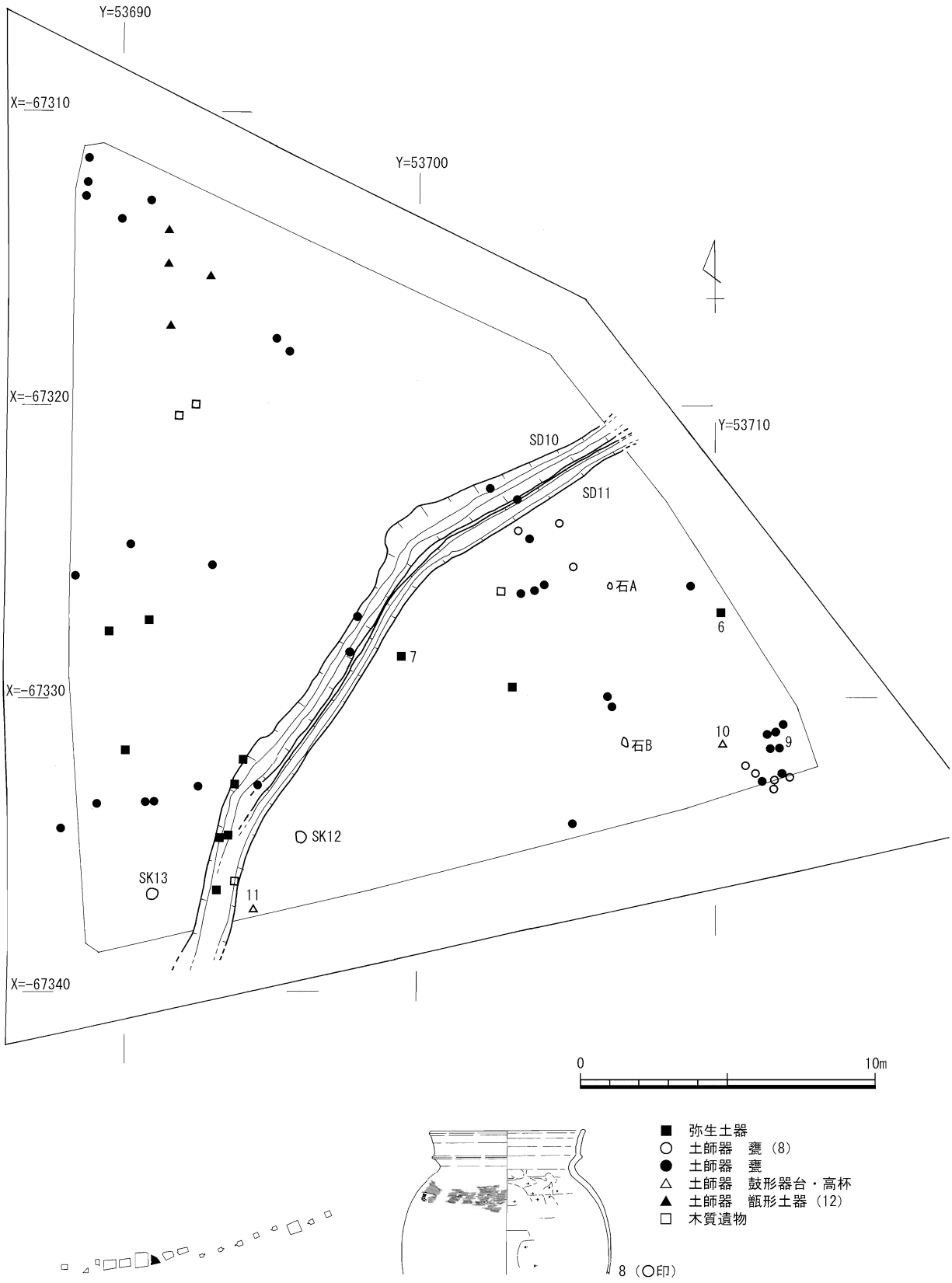
第 29 図　7 区平面図 (S=1/300)



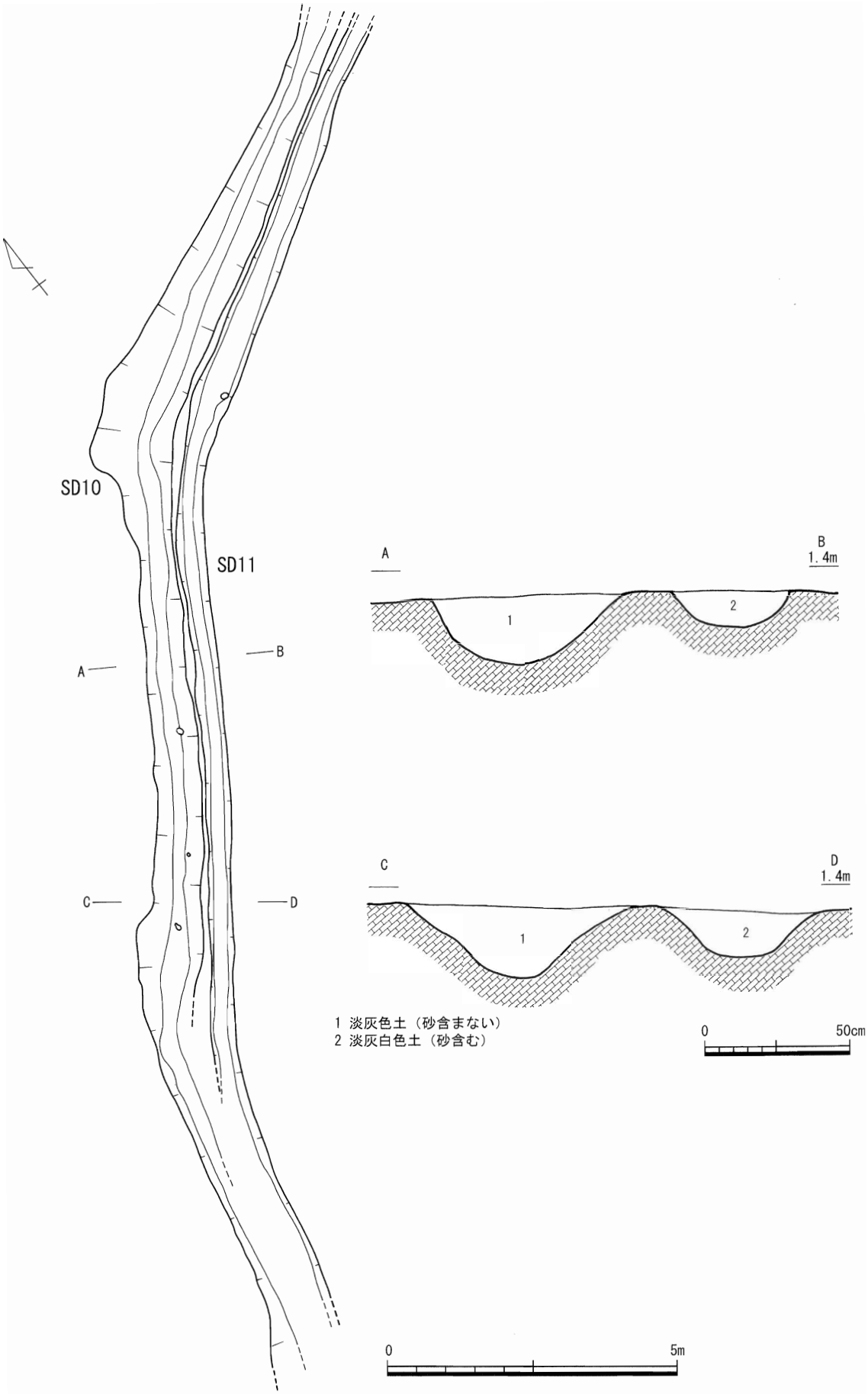
第 30 図　7 区南壁土層図 (S=1/80)



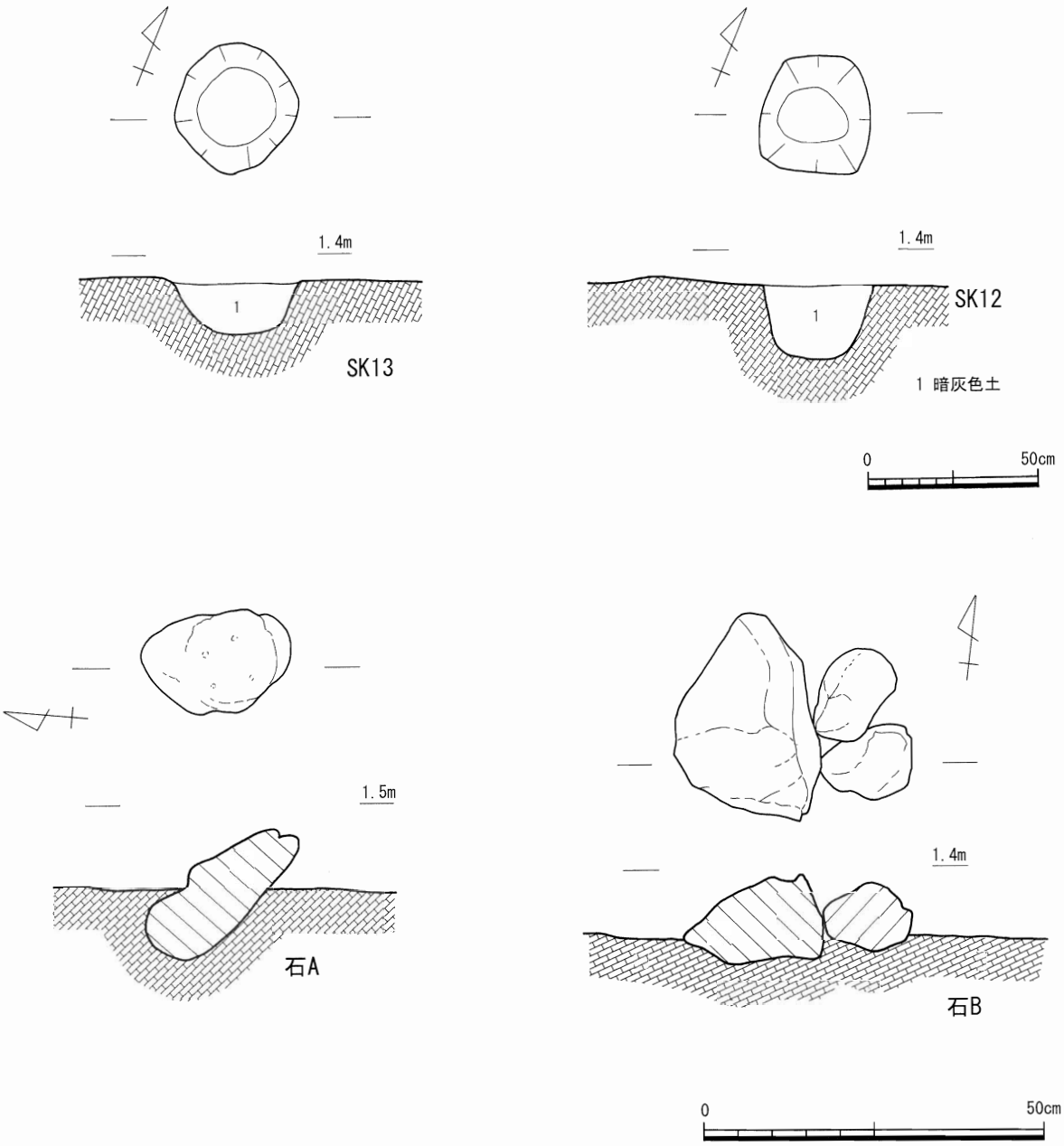
第 31 図　7 区西壁土層図 (S=1/80)



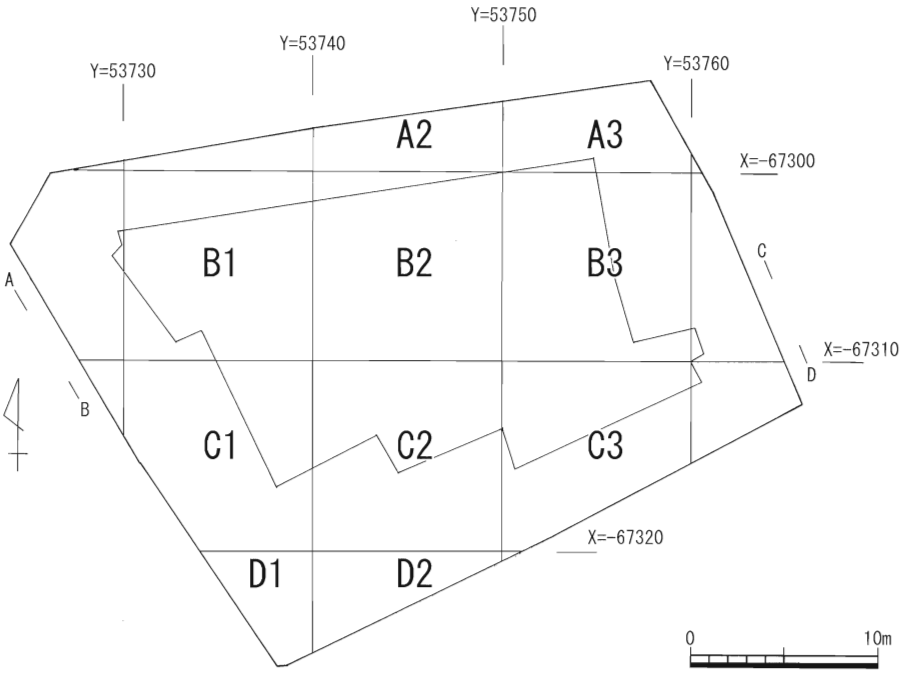
第 32 図　7 区平面図 (S=1/200)



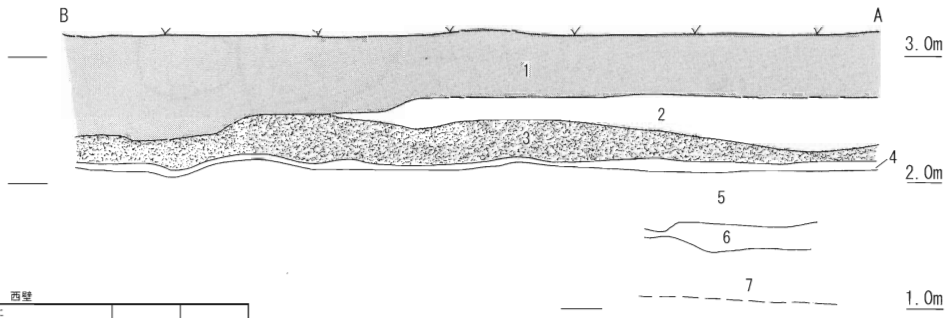
第 33 図　7 区溝平面図 (S=1/100)、土層図 (S=1/20)



第34図　7区遺構図 (S=1/10・1/20)



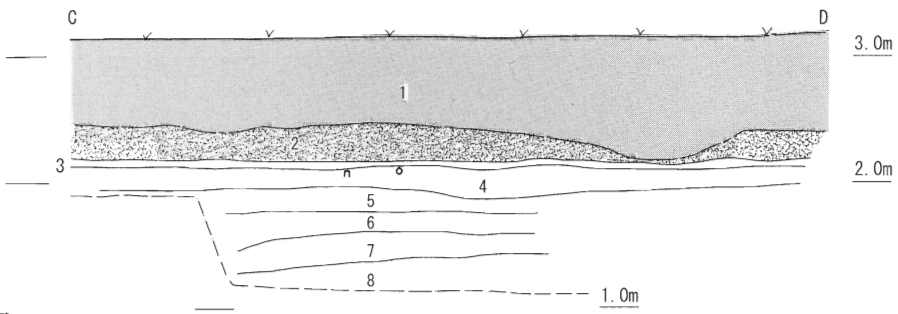
第 35 図　8 区グリッド設定図 (S=1/400)



8区　西壁

1	表土		
2	暗オリーブ灰色土	2.5GY4/1	
3	黒褐色土（オモカス層）	5YR2/1	
4	明灰褐色土	5YR7/1	
5	青灰色粘土	5PB5/1	遺物包含層
6	青灰色粘土	5B5/1	
7	青灰色シルト	5B6/1	

西壁



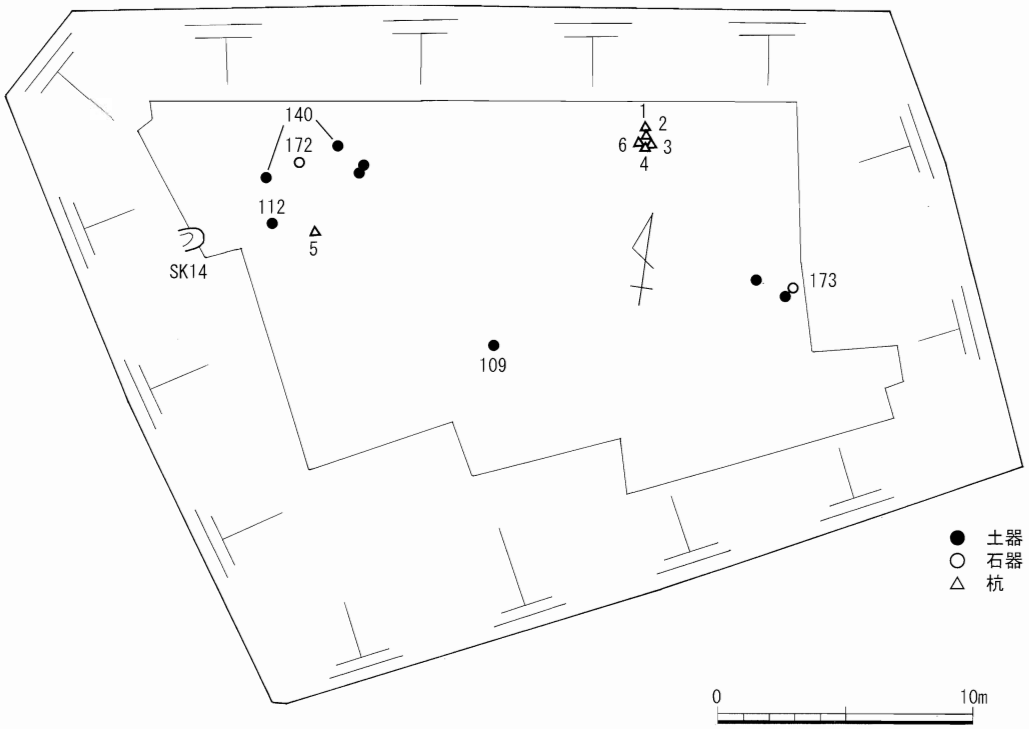
8区　東壁

1	表土		
2	黒褐色土（オモカス層）	5YR2/1	
3	明灰褐色土	5TR7/2	
4	灰色土	10YR5/1	
5	にぶい黄橙色細砂	10YR6/4	遺物包含層
6	灰オリーブ色細砂	7.5Y5/2	遺物包含層
7	灰色泥	7.5Y4/1	遺物包含層
8	灰色泥	10Y6/1	

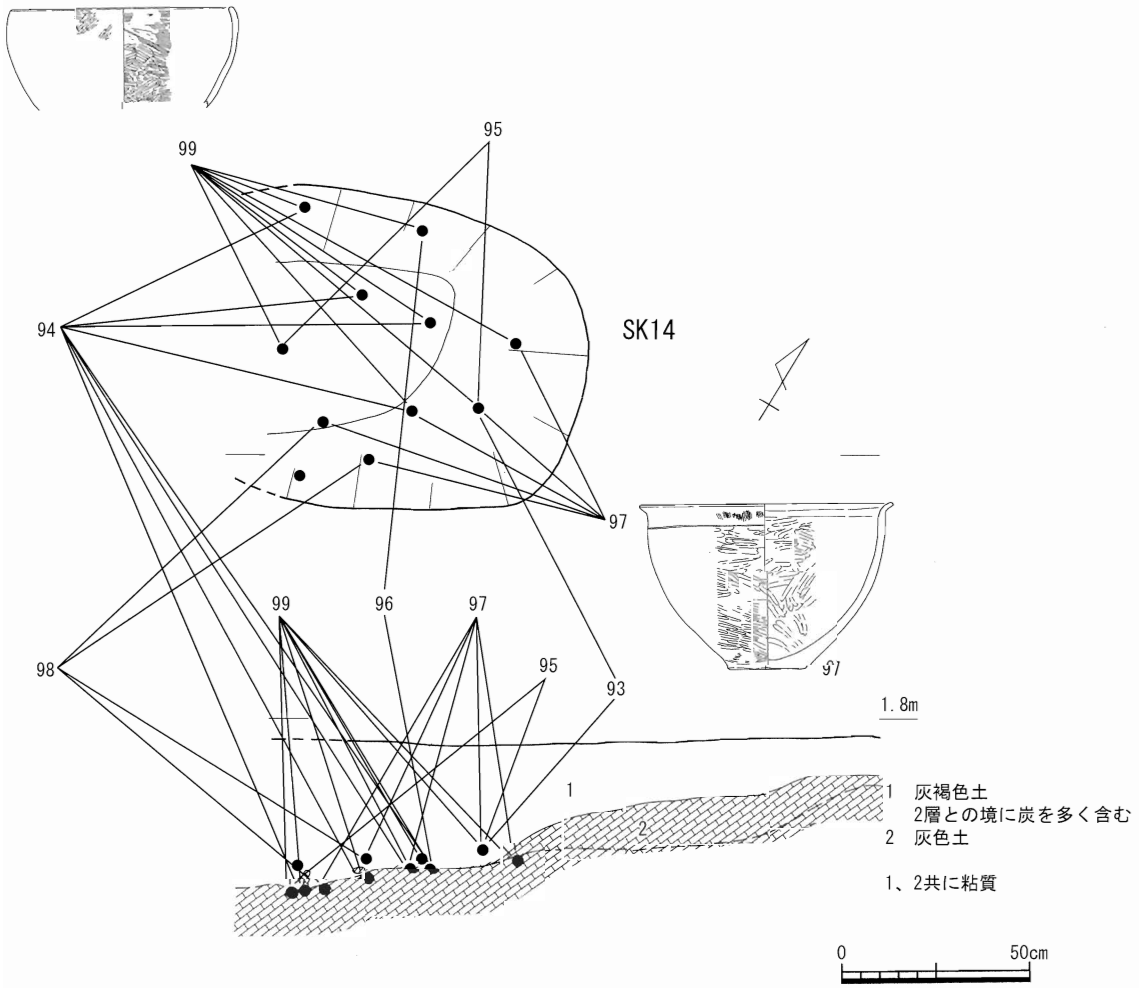
東壁

0　2m

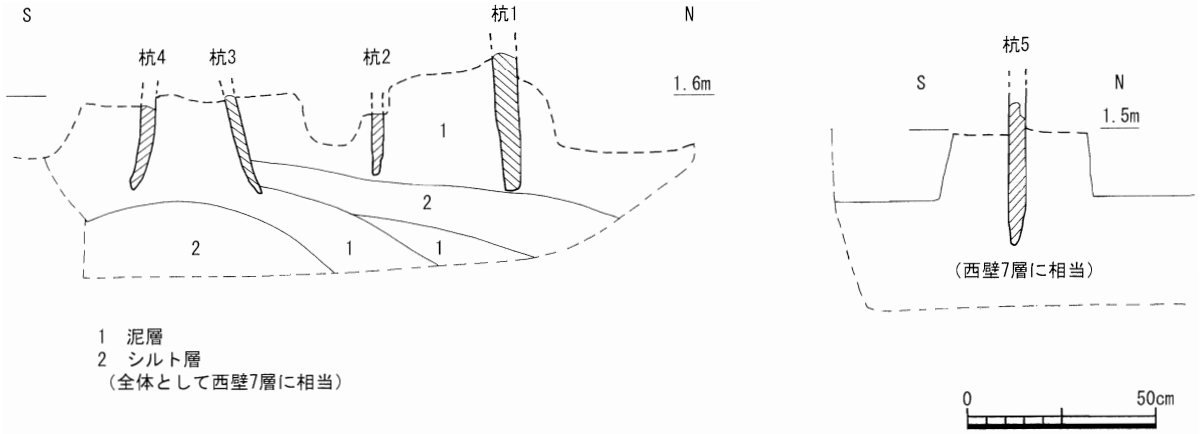
第 36 図　8 区土層図 (S=1/60)



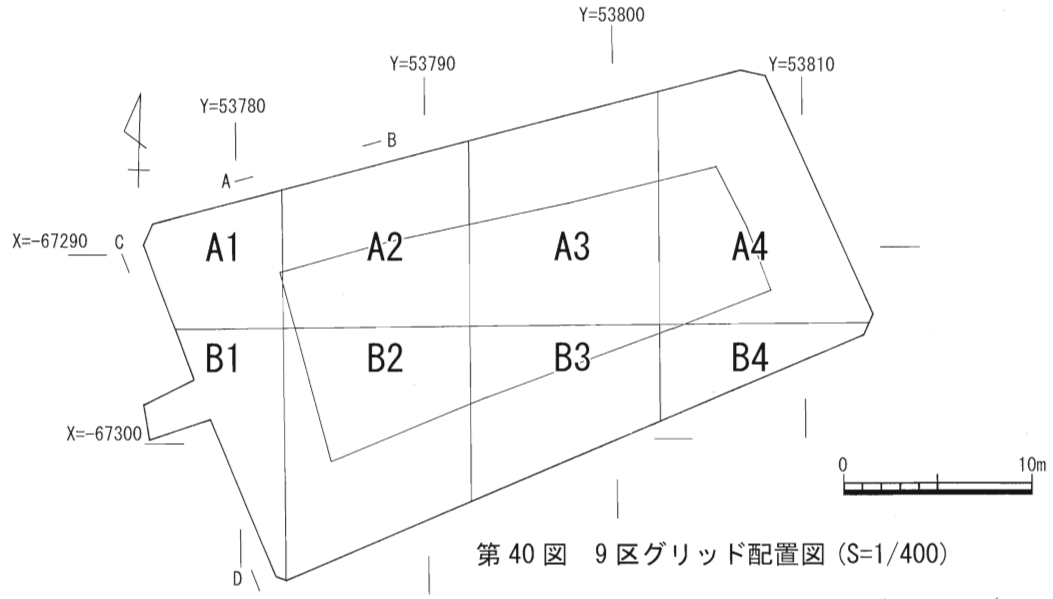
第 37 図　8 区遺構・遺物状況図 (S=1/300)



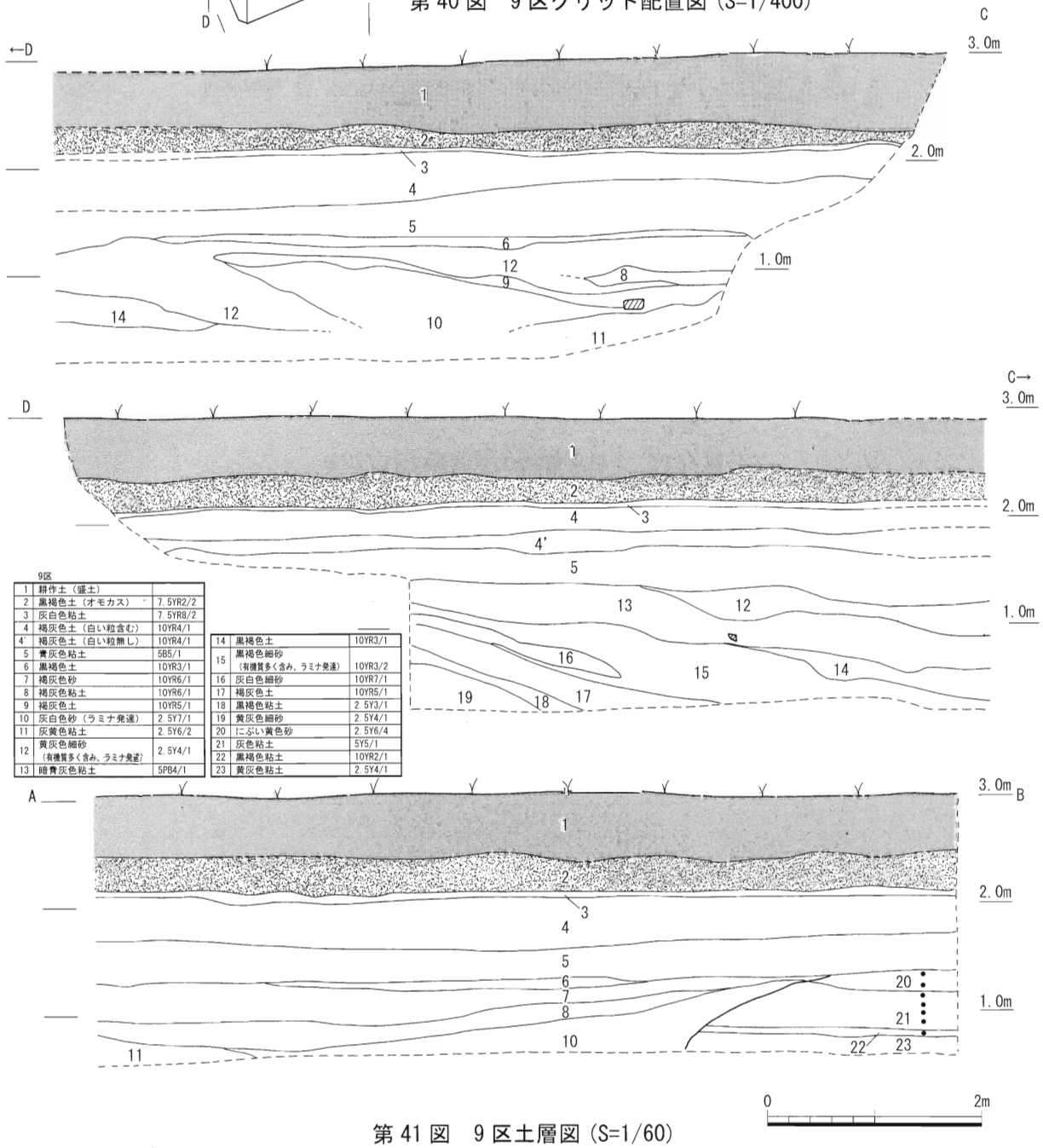
第 38 図 8 区遺構図 (S=1/20)



第 39 図　8 区杭断面図 (S=1/20)



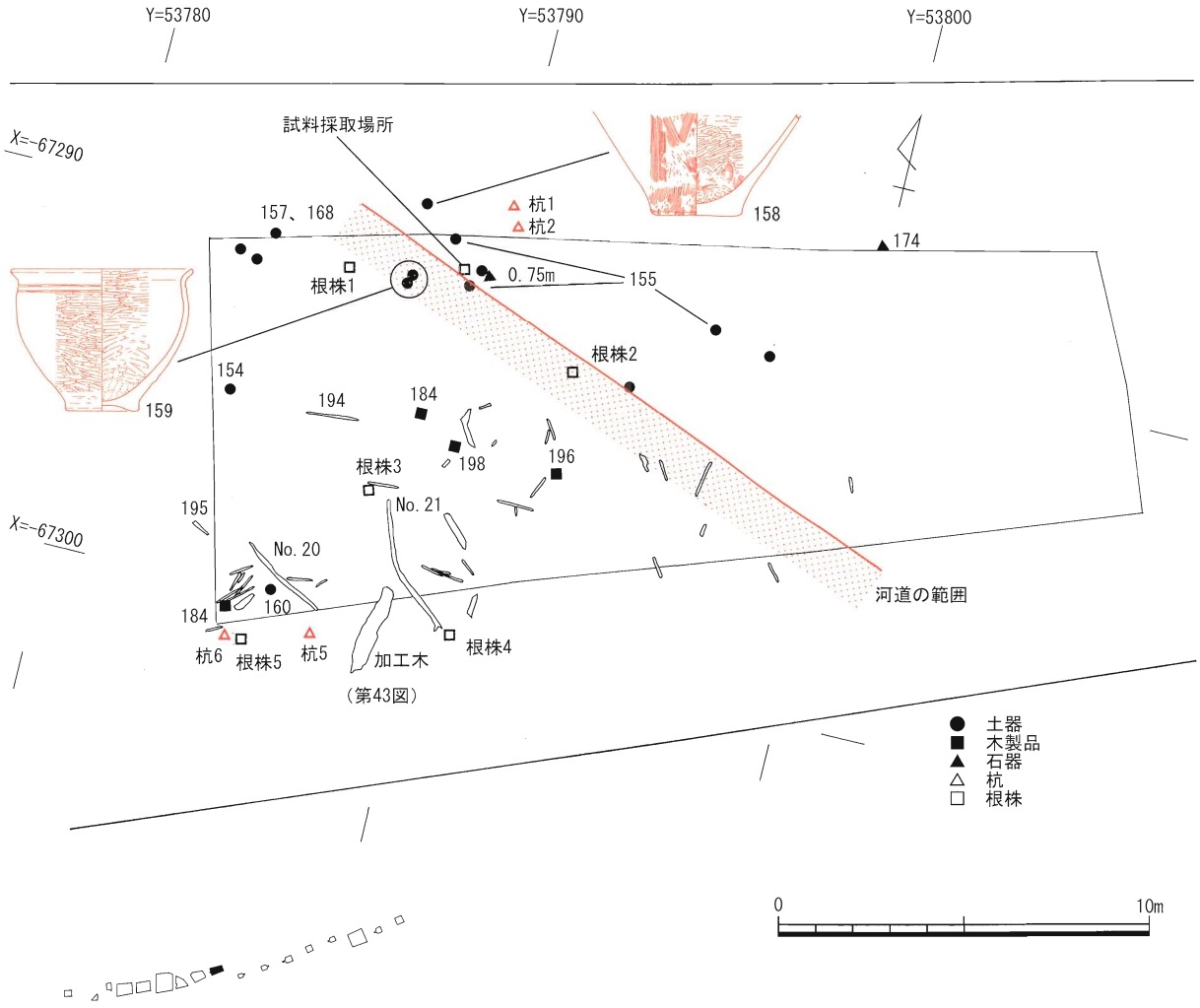
第 40 図　9 区グリッド配置図 (S=1/400)



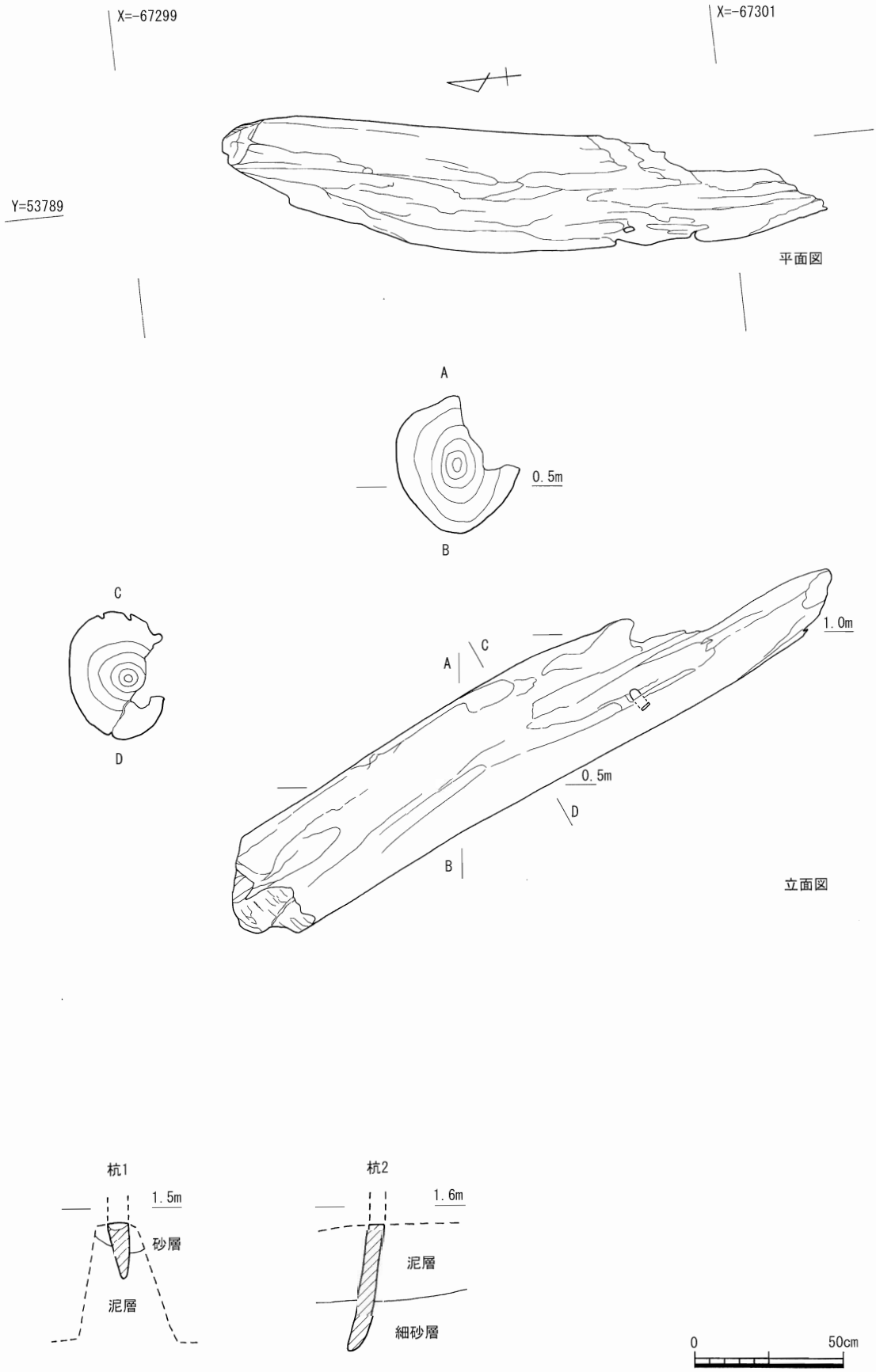
9区

1	耕作土（盛土）	
2	黒褐色土（オモカス）	7.5YR2/2
3	灰白色粘土	7.5YR8/2
4	褐灰色土（白い粒含む）	10YR4/1
4'	褐灰色土（白い粒無し）	10YR4/1
5	青灰色粘土	5B5/1
6	黒褐色土	10YR3/1
7	褐灰色砂	10YR6/1
8	褐灰色粘土	10YR6/1
9	褐灰色土	10YR5/1
10	灰白色砂（ラミナ発達）	2.5Y7/1
11	灰黄色粘土	2.5Y6/2
12	黄灰色細砂（有機質多く含み、ラミナ発達）	2.5Y4/1
13	暗青灰色粘土	5PB4/1
14	黒褐色土	10YR3/1
15	黒褐色細砂（有機質多く含み、ラミナ発達）	10YR3/2
16	灰白色細砂	10YR7/1
17	褐灰色土	10YR5/1
18	黒褐色粘土	2.5Y3/1
19	黄灰色細砂	2.5Y4/1
20	にぶい黄色砂	2.5Y6/4
21	灰色粘土	5Y5/1
22	黒褐色粘土	10YR2/1
23	黄灰色粘土	2.5Y4/1

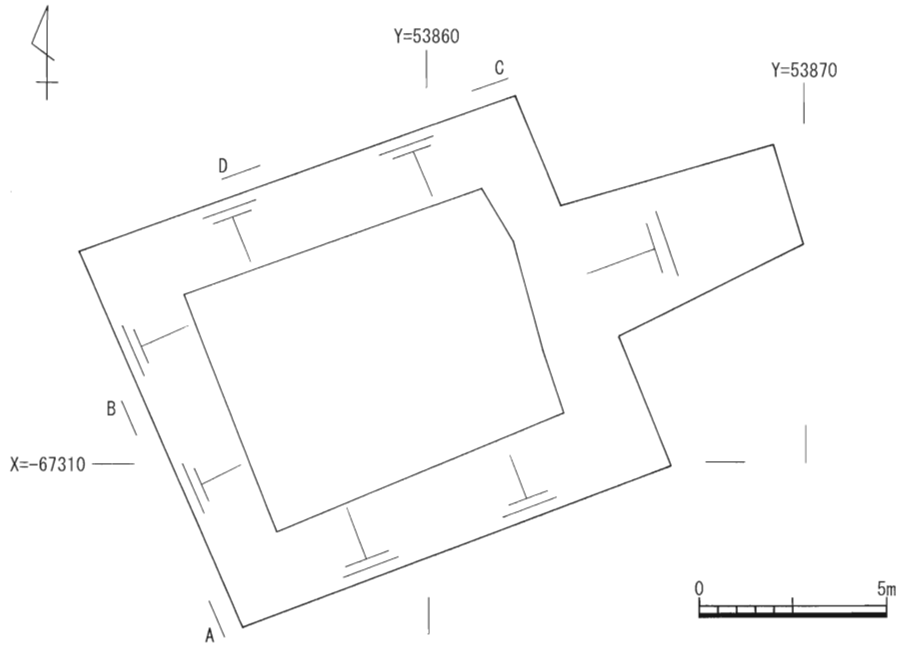
第 41 図　9 区土層図 (S=1/60)



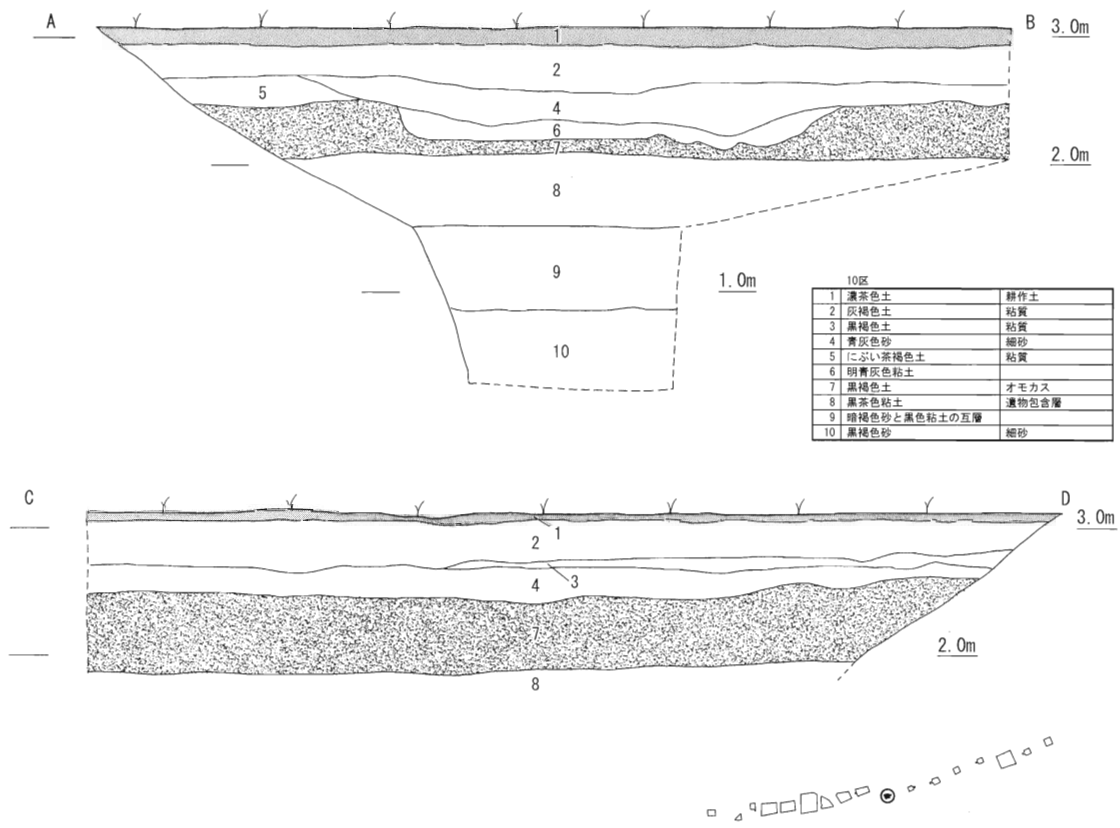
第 42 図　9 区遺物出土状況図 (S=1/200)



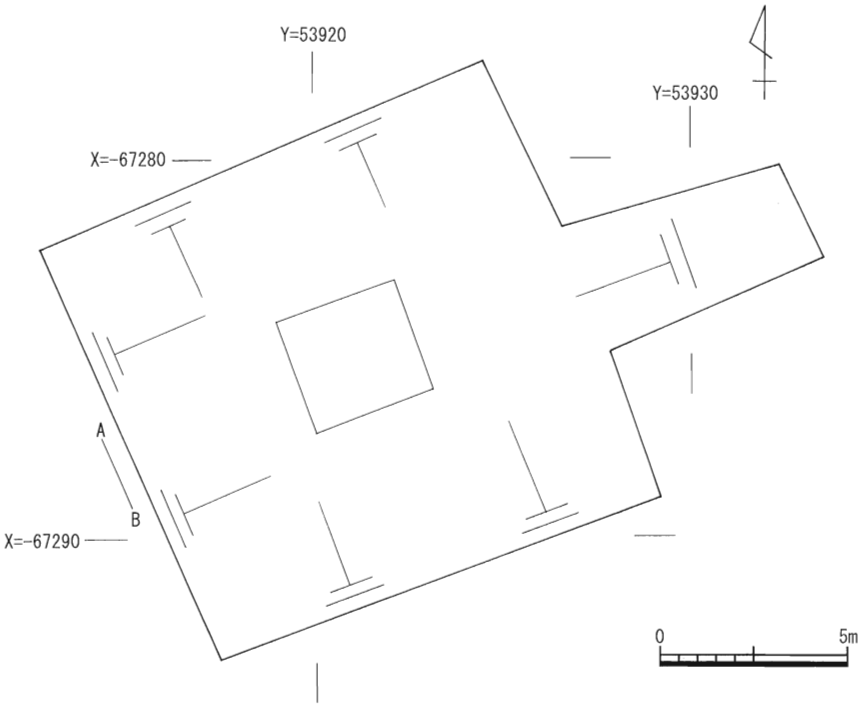
第 43 図　9 区加工木・杭実測図 (S=1/20)



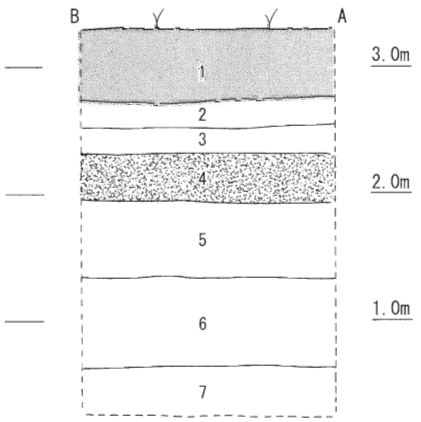
第 44 図　10 区平面図 (S=1/200)



第 45 図　10 区土層図 (S=1/60)

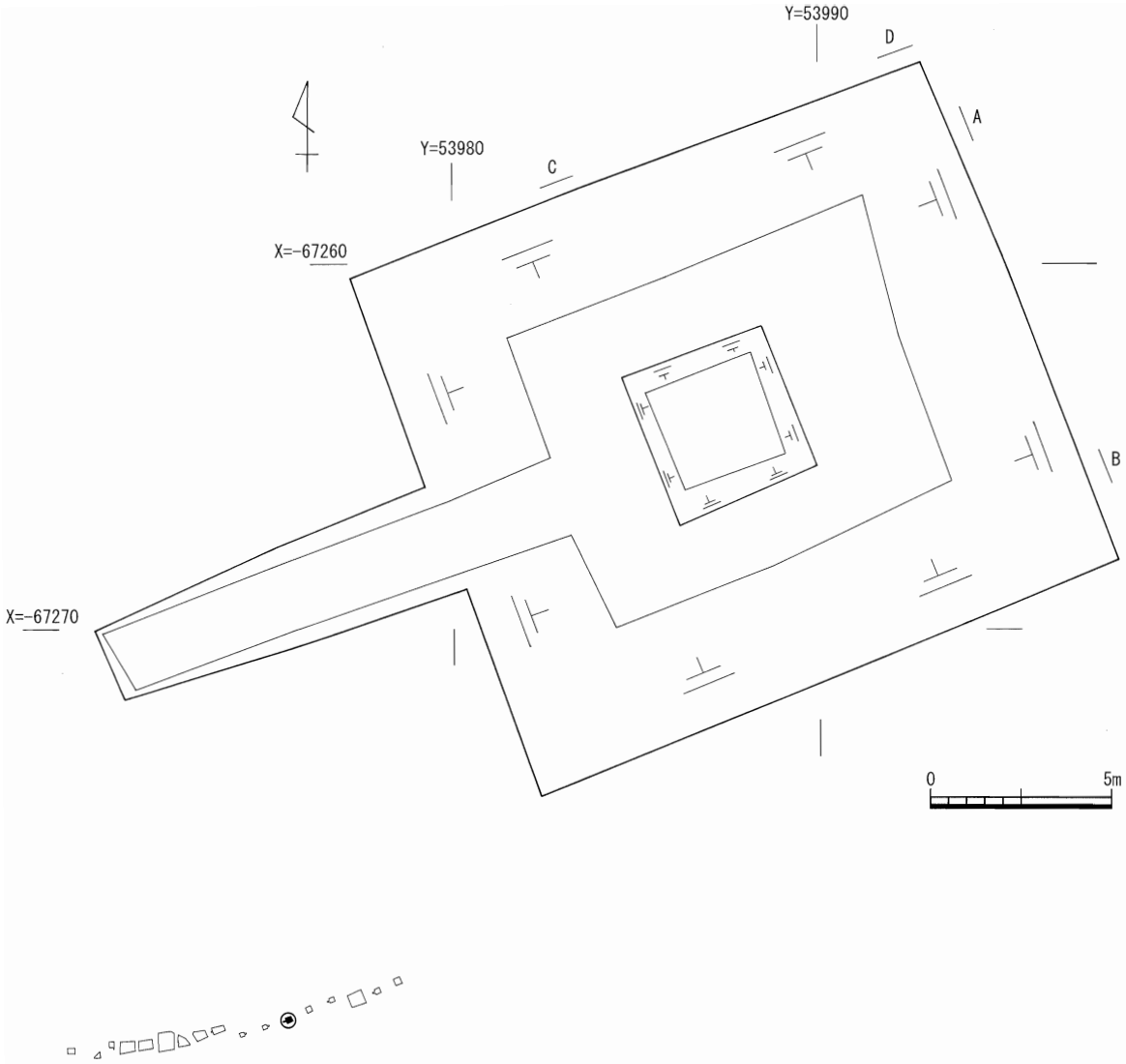


第 46 図　11 区平面図 (S=1/200)

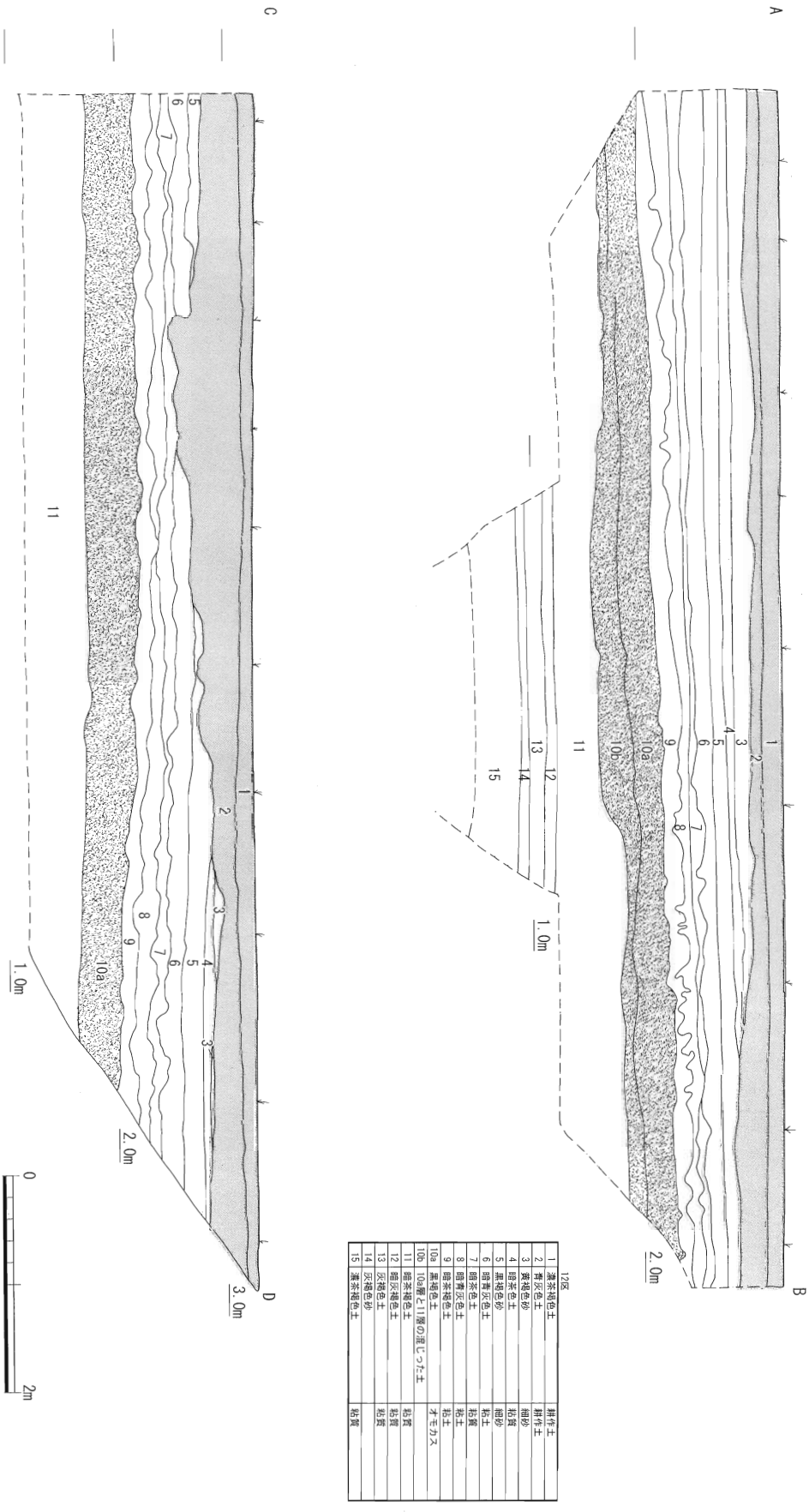


11区		
1	耕作土	
2	にぶい褐色土	粘質
3	暗茶色土	粘質
4	黒褐色土	オモカス
5	黒茶色粘土	
6	褐色シルトと黒色粘土の互層	
7	褐色シルト	細砂含む

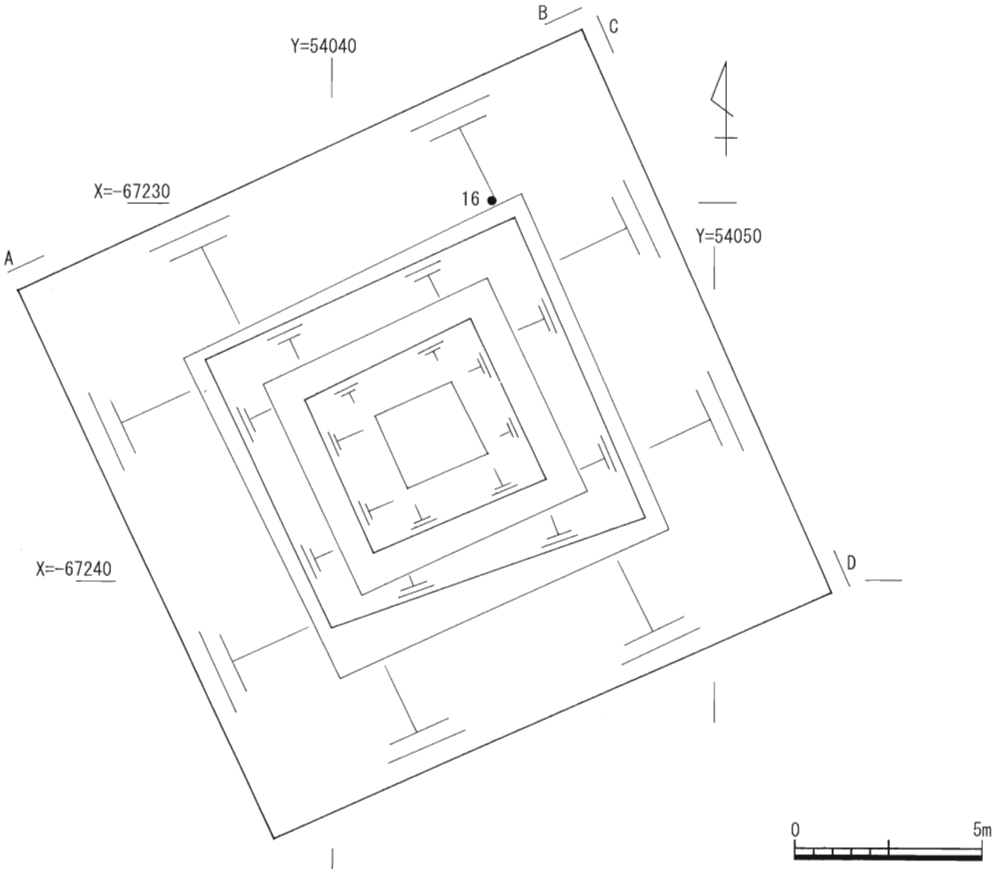
第 47 図　11 区土層図 (S=1/60)



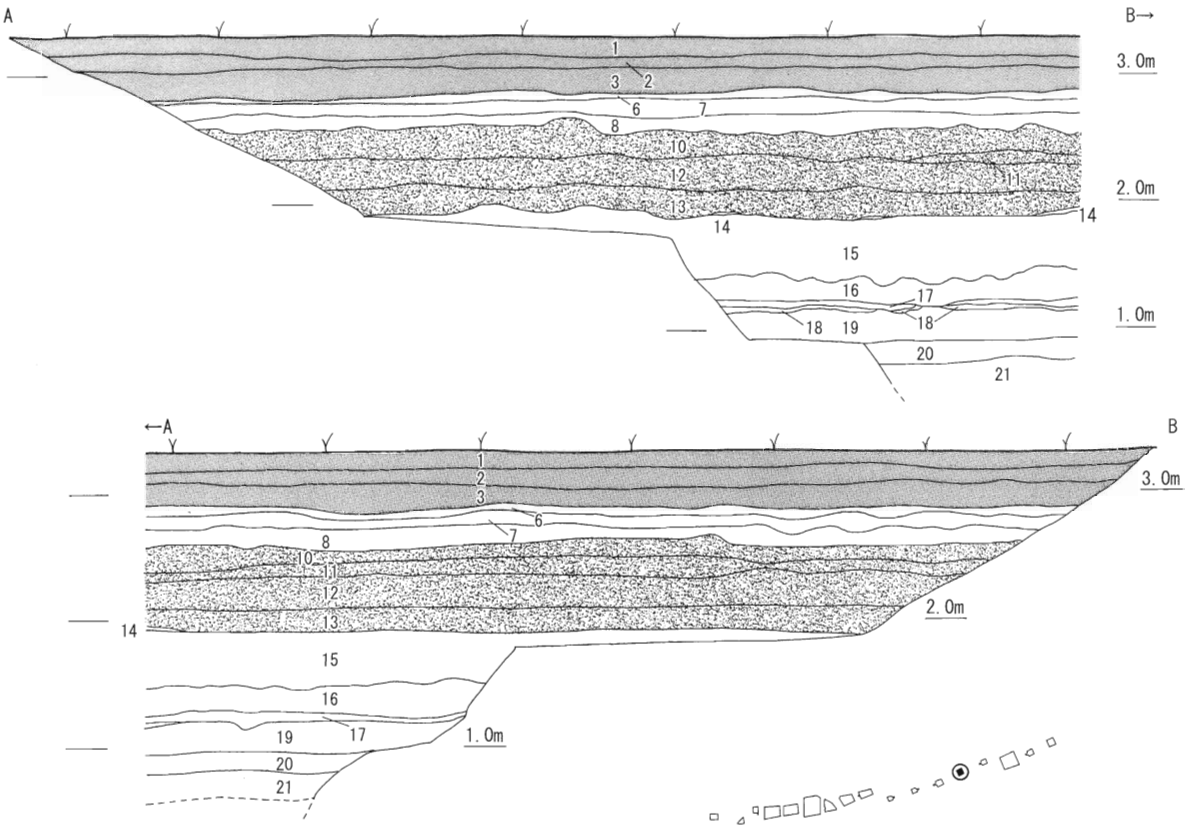
第 48 図　12 区平面図 (S=1/200)



第 49 図　12 区土層図 (S=1/60)

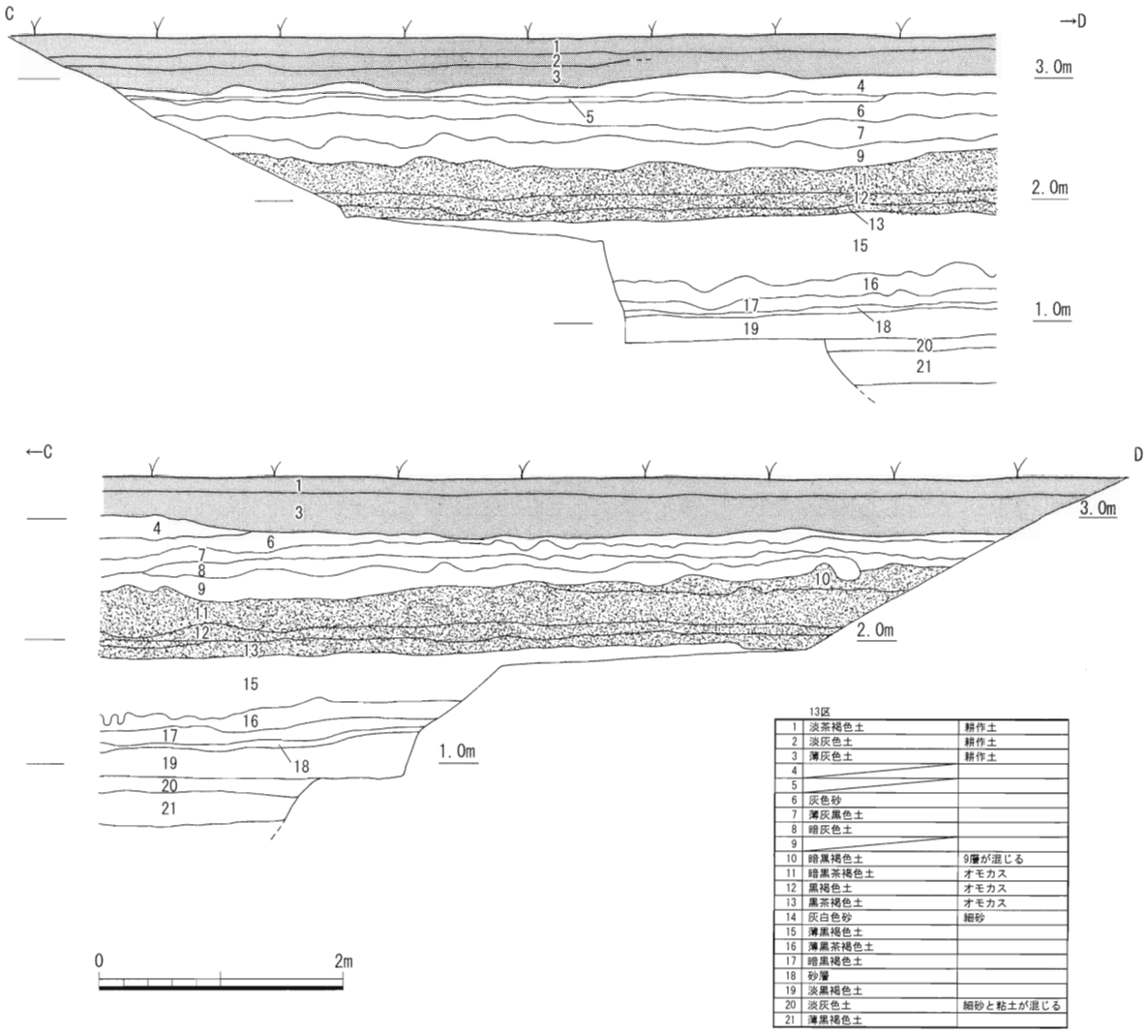


第 50 図　13 区平面図 (S=1/200)



0　2m

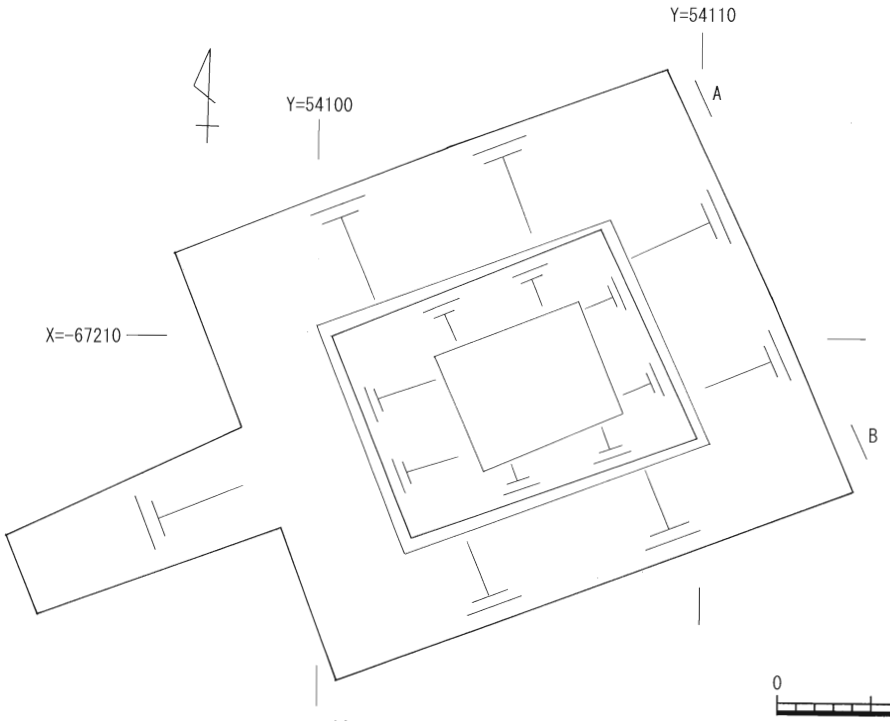
第 51 図　13 区北壁土層図 (S=1/60)



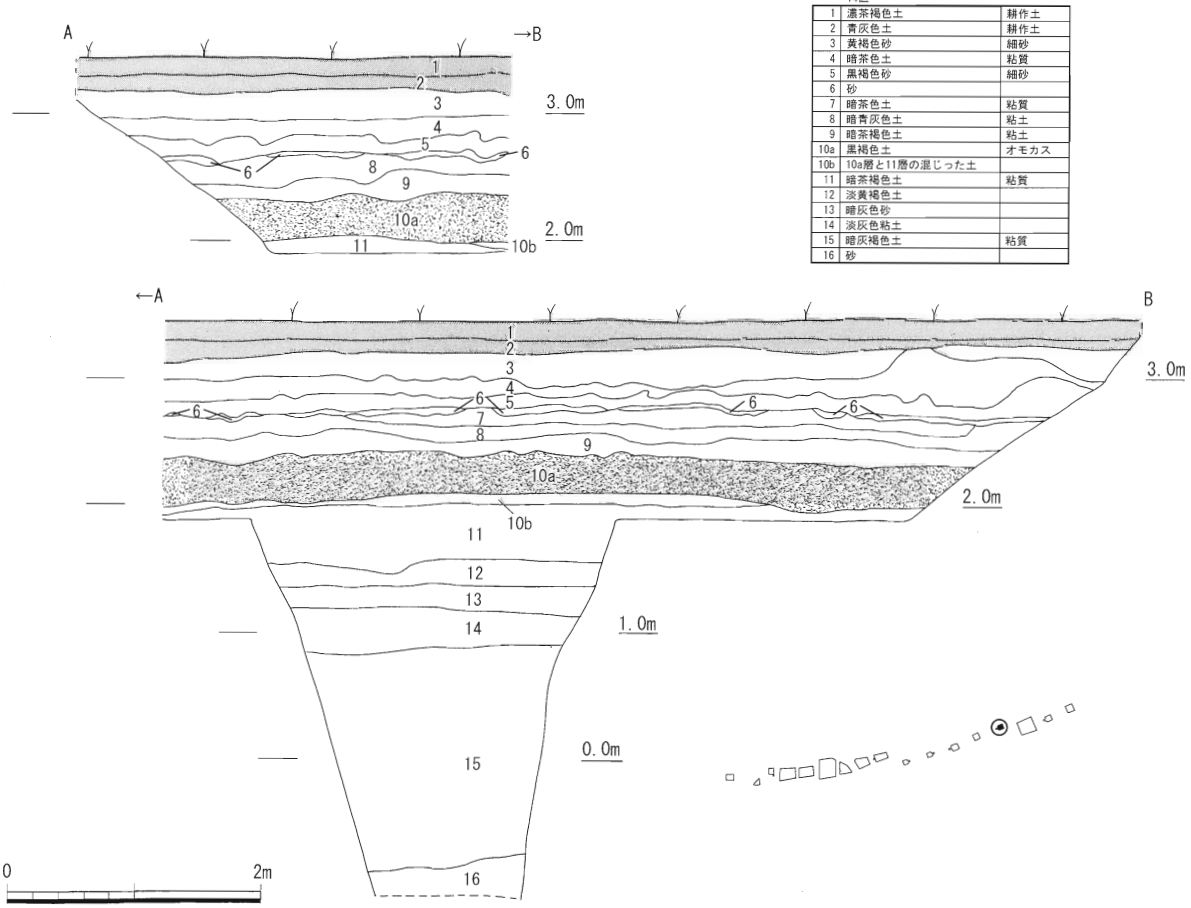
13区

1	淡茶褐色土	耕作土
2	淡灰色土	耕作土
3	薄灰色土	耕作土
4		
5		
6	灰色砂	
7	薄灰黒色土	
8	暗灰色土	
9		
10	暗黒褐色土	9層が混じる
11	暗黒茶褐色土	オモカス
12	黒褐色土	オモカス
13	黒茶褐色土	オモカス
14	灰白色砂	細砂
15	薄黒褐色土	
16	薄黒茶褐色土	
17	暗黒褐色土	
18	砂層	
19	淡黒褐色土	
20	淡灰色土	細砂と粘土が混じる
21	薄黒褐色土	

第 52 図　13 区東壁土層図 (S=1/60)



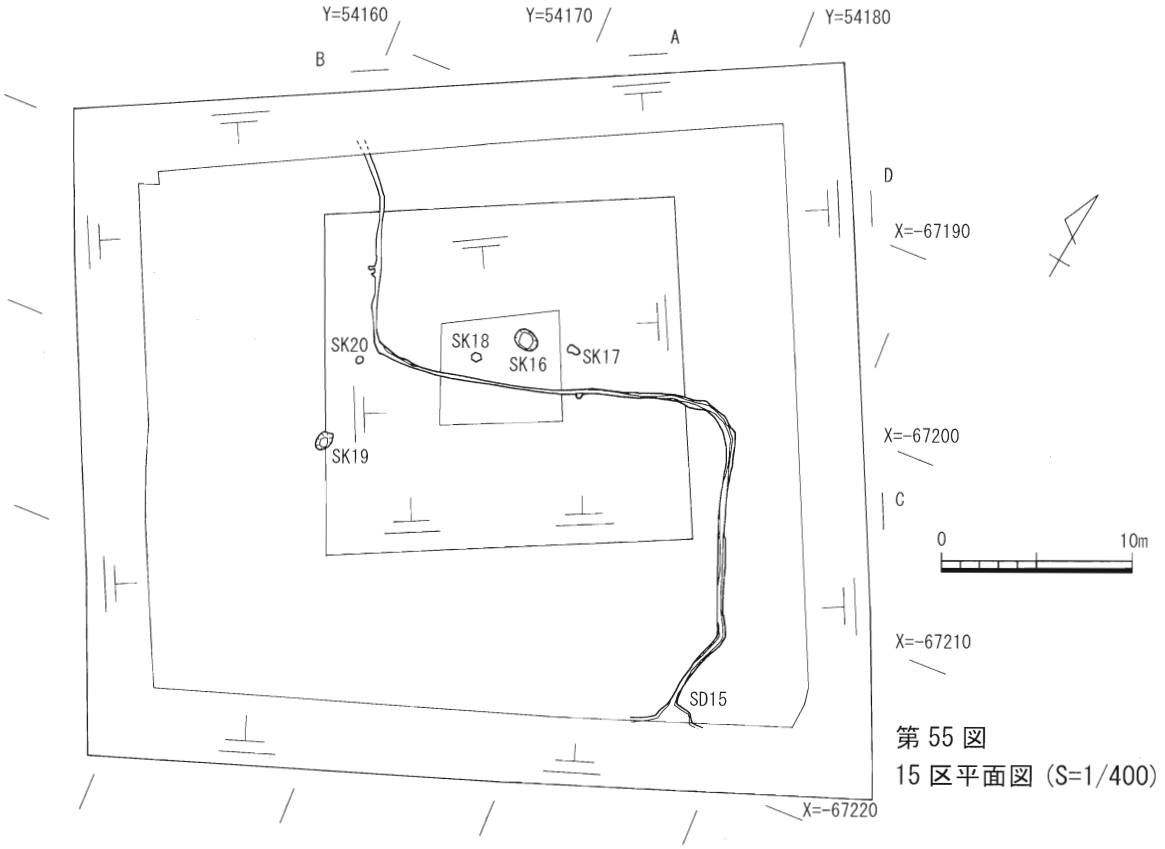
第 53 図　14 区平面図 (S=1/200)



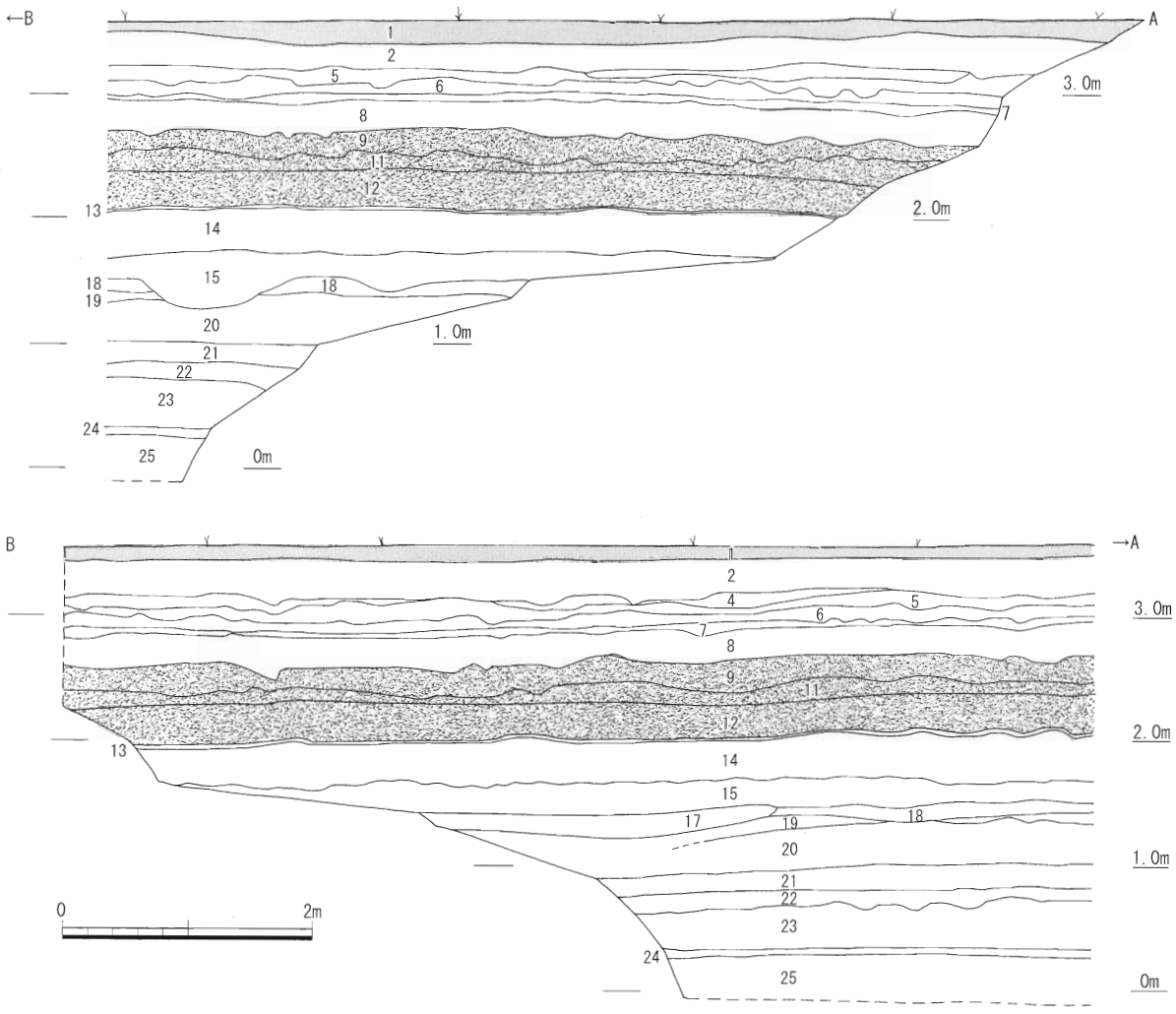
14区

1	濃茶褐色土	耕作土
2	青灰色土	耕作土
3	黄褐色砂	細砂
4	暗茶色土	粘質
5	黒褐色砂	細砂
6	砂	
7	暗茶色土	粘質
8	暗青灰色土	粘土
9	暗茶褐色土	粘土
10a	黒褐色土	オモカス
10b	10a層と11層の混じった土	
11	暗茶褐色土	粘質
12	淡黄褐色土	
13	暗灰色砂	
14	淡灰色粘土	
15	暗灰褐色土	粘質
16	砂	

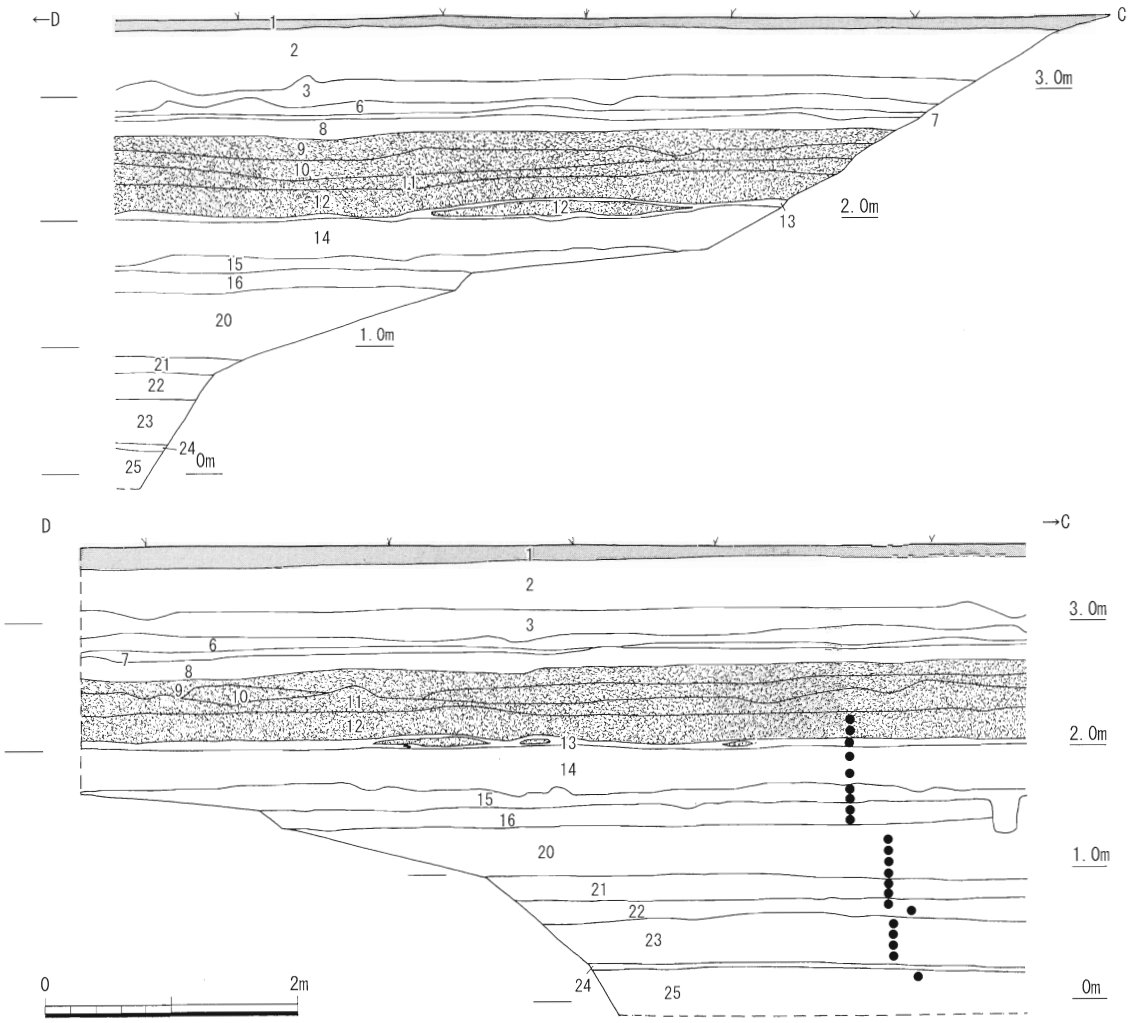
第 54 図　14 区土層図 (S=1/60)



第 55 図
15 区平面図 (S=1/400)



第 56 図　15 区北壁土層図 (S=1/60)

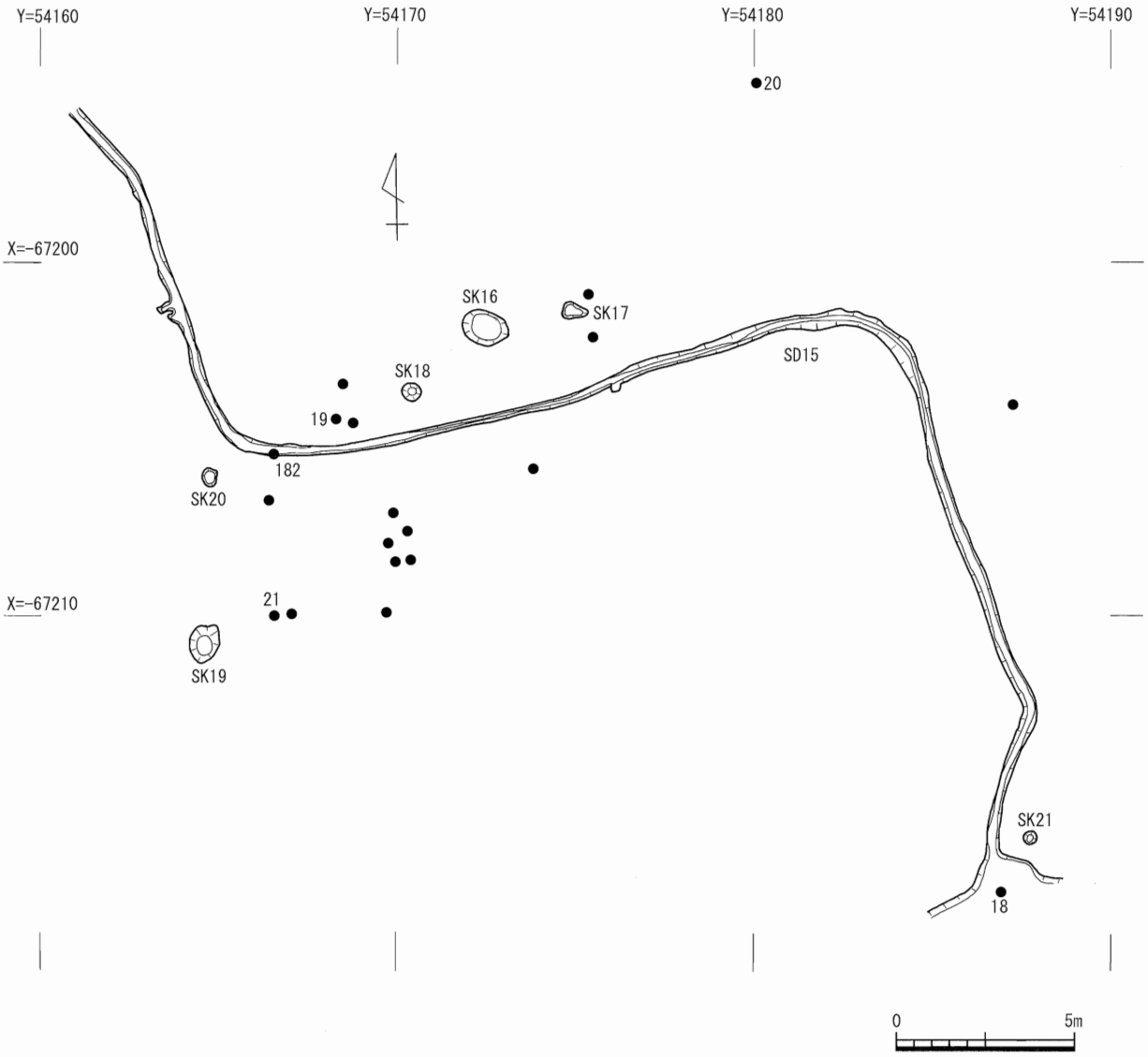


●は試料採取場所

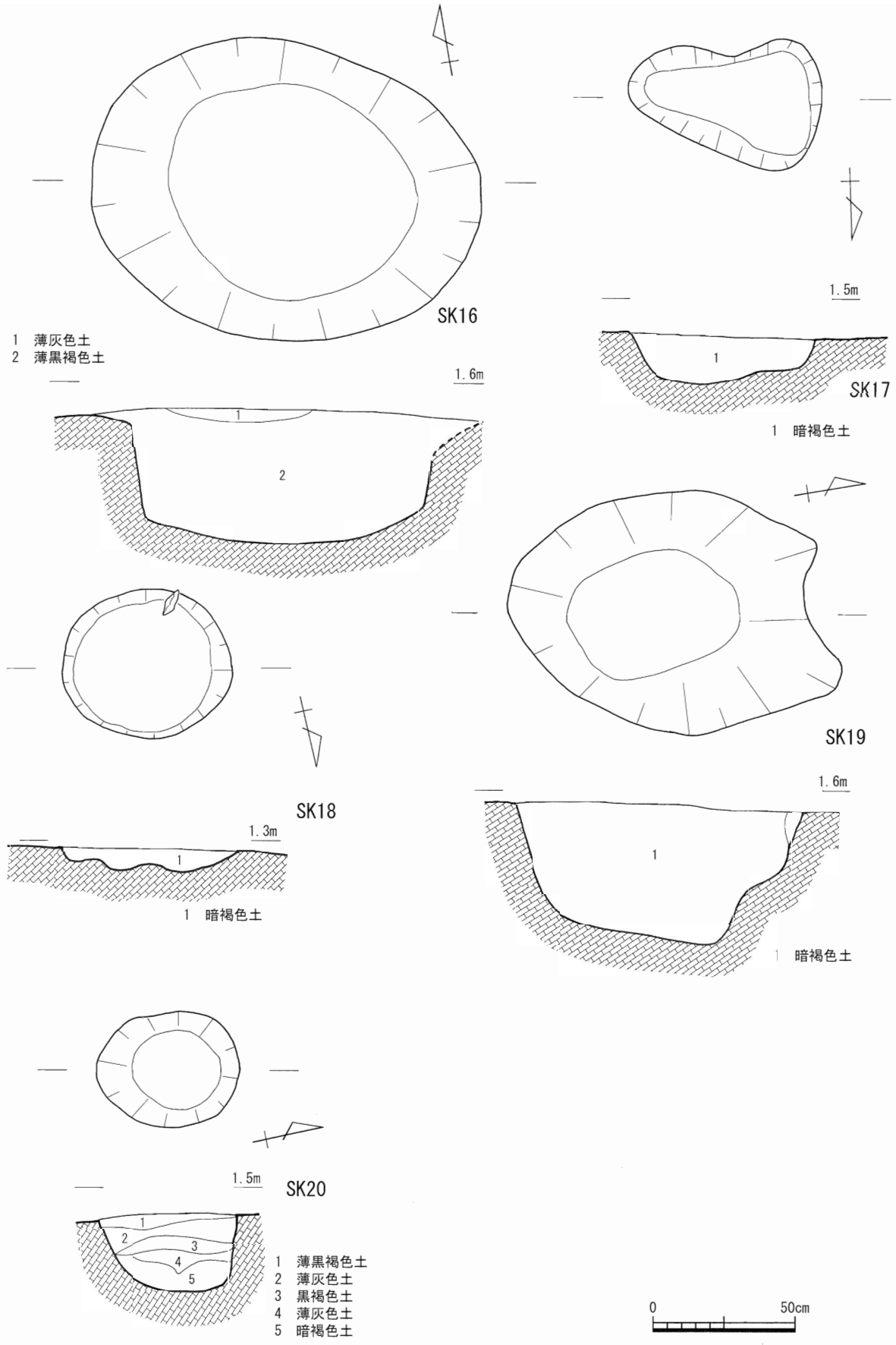
第 57 図　15 区東壁土層図 (S=1/60)

15区

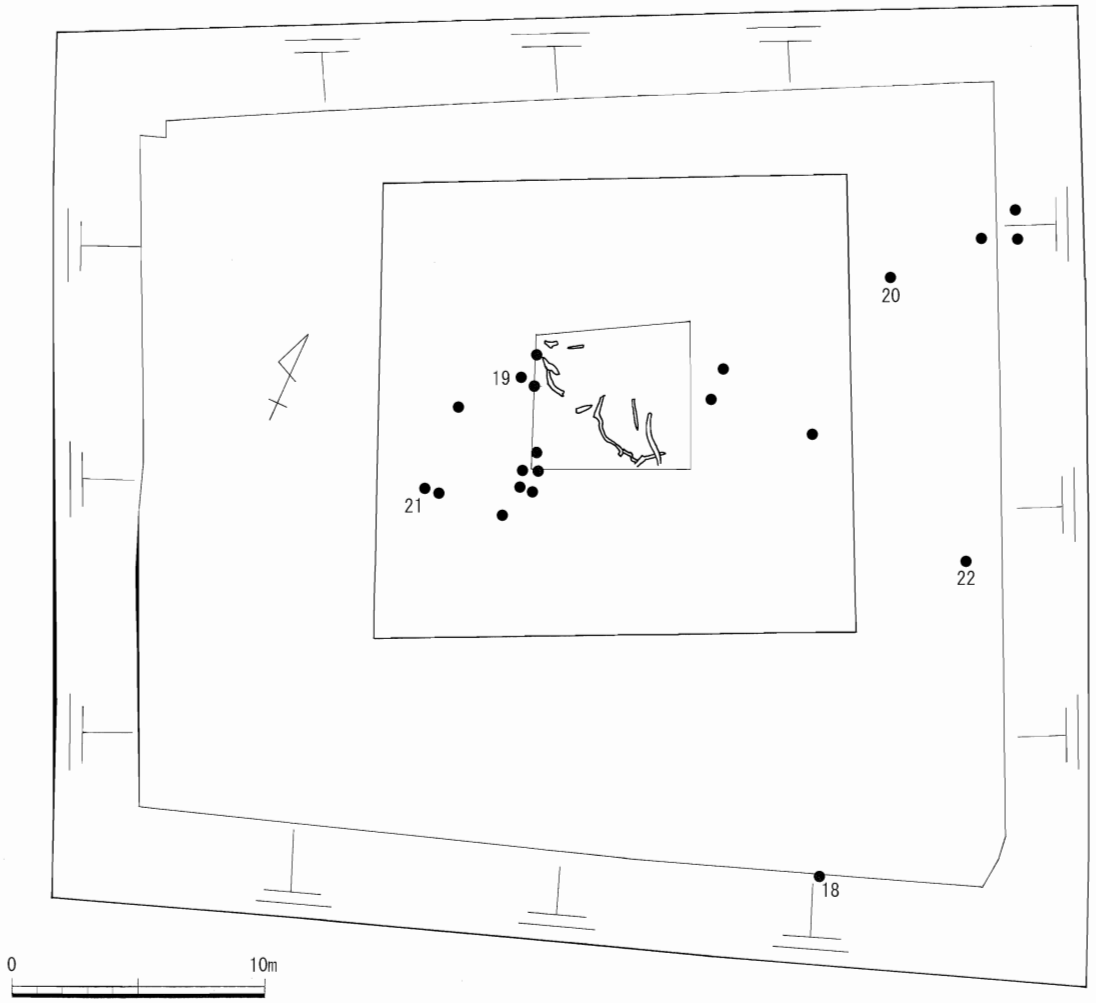
1	暗茶褐色土	耕作土
2	薄灰色土	砂質
3	薄灰色粘土	
4	薄青灰色土	
5	薄茶褐色土	砂質
6	薄灰色粘土	
7	淡黄褐色土	砂質
8	薄灰色粘土	
9	薄茶褐色土	オモカス
10	黒褐色土	オモカス
11	薄黒茶褐色土	オモカス
12	暗茶褐色土	オモカス
13	灰白色粘土	
14	淡灰色土	粘質
15	薄黒褐色土	炭化物含む
16	淡灰色土	粘質
17	薄黒褐色土	粘質
18	薄黒褐色土	
19	暗青灰色土	砂質
20	青灰色砂	
21	黒茶褐色土	
22	薄黒茶褐色土	
23	薄黒茶褐色土	粘質
24	灰色粘土	
25	茶褐色土	



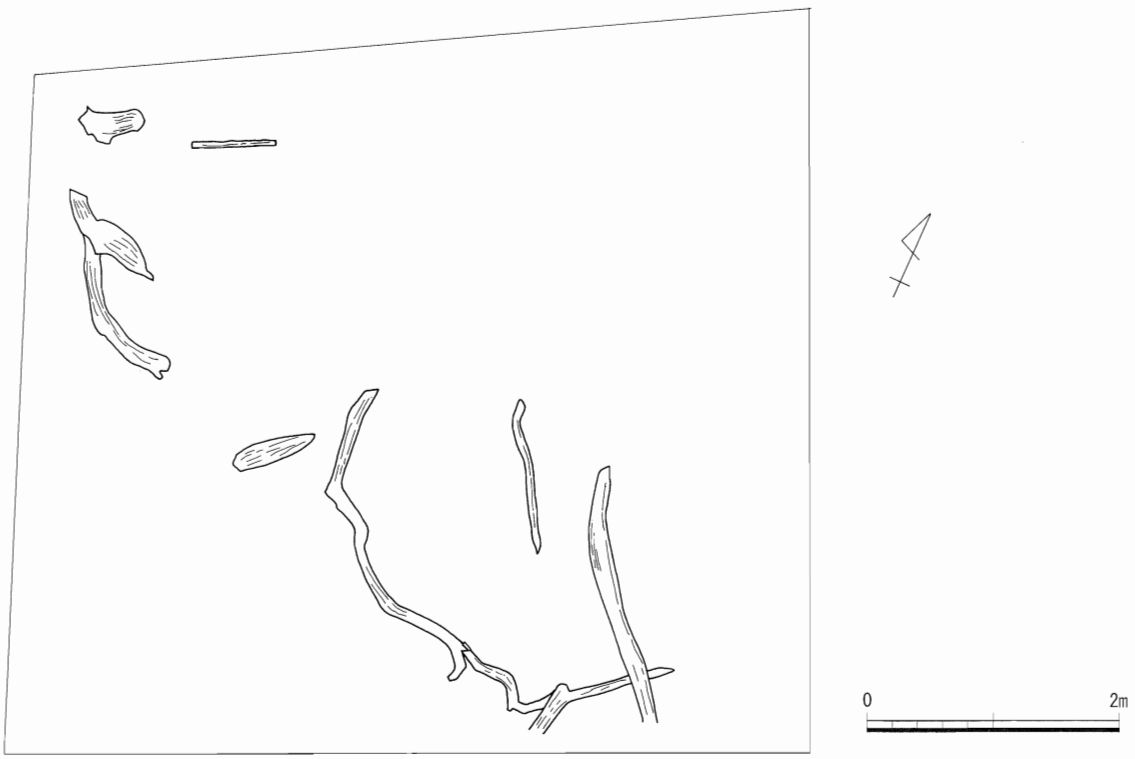
第 58 図　15 区遺構・遺物出土状況図 (S=1/200)



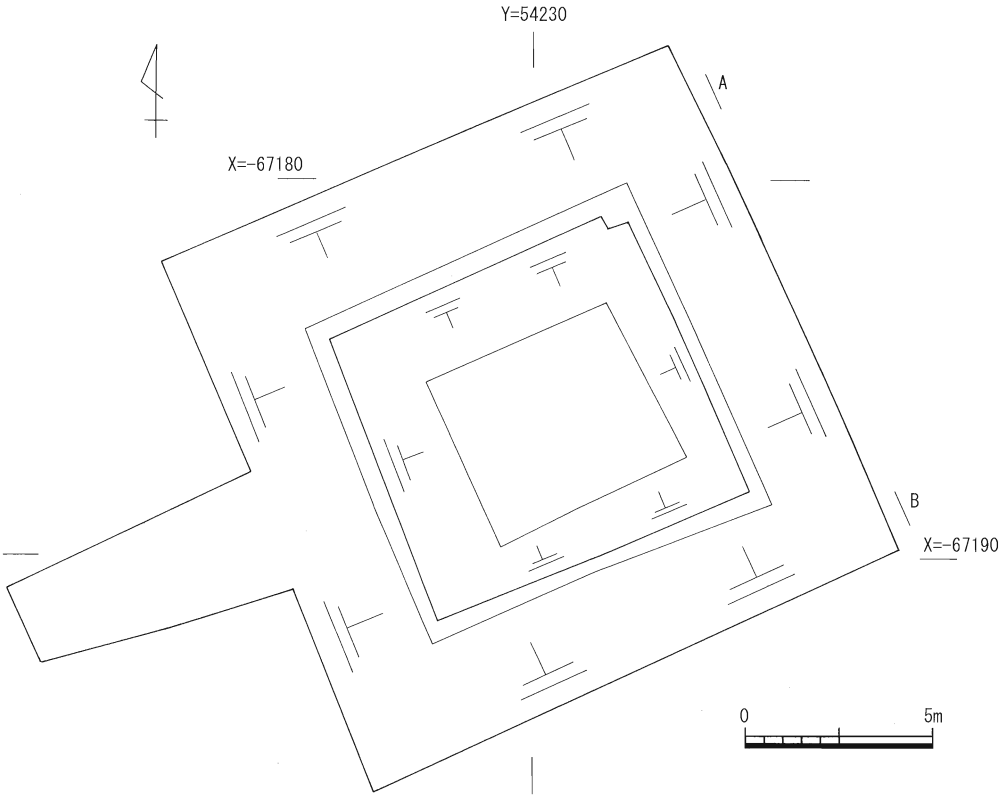
第 59 図　15 区土坑実測図 (S=1/20)



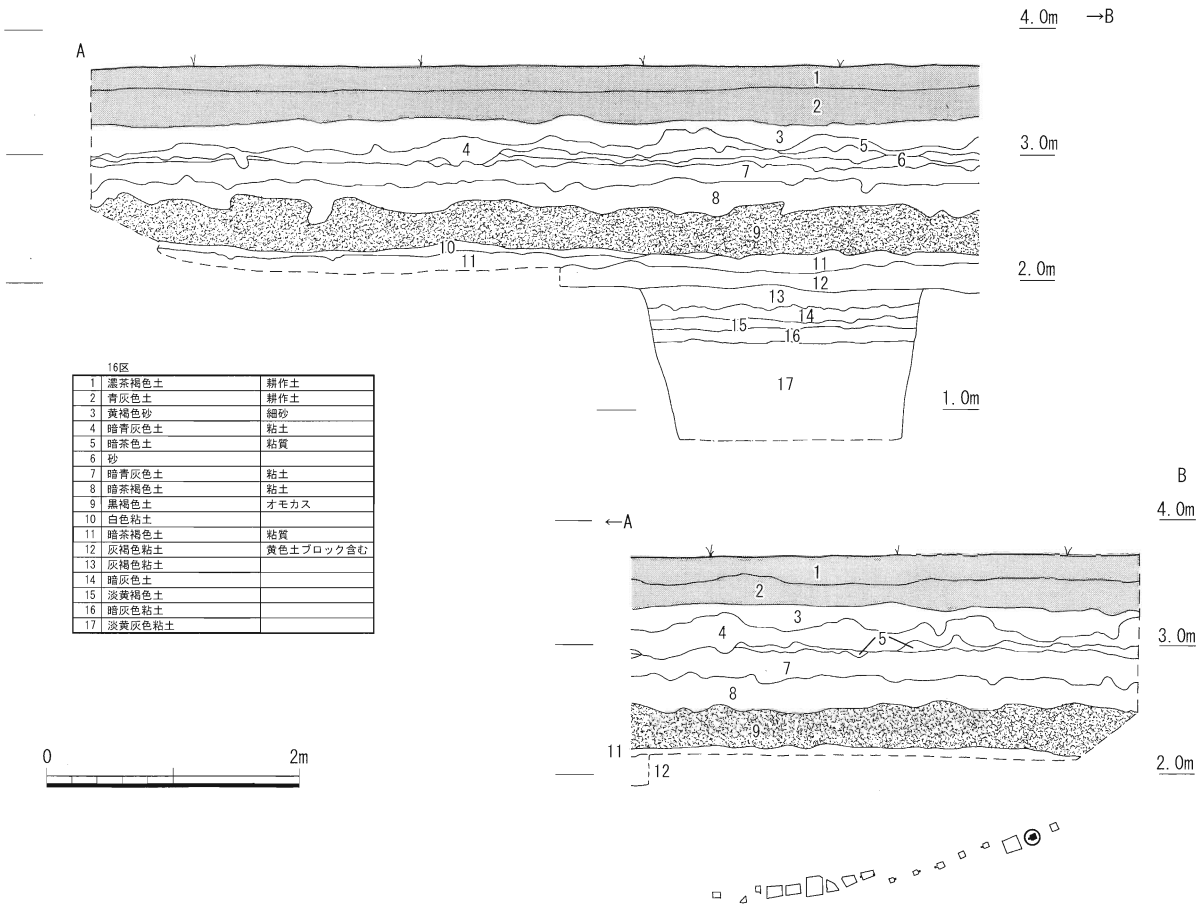
第 60 図　15 区遺物出土状況図 (1) (S=1/300)



第 61 図　15 区遺物出土状況図 (2) (S=1/60)



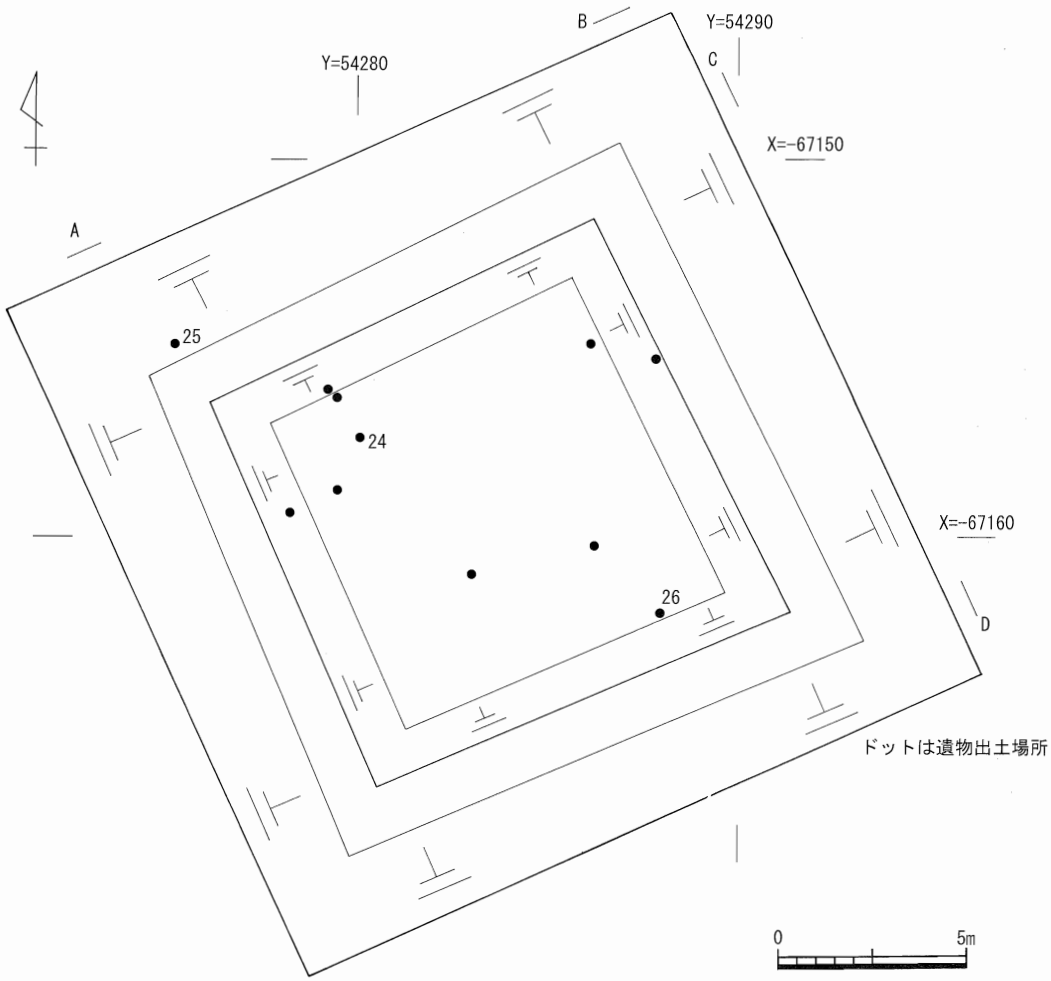
第 62 図　16 区平面図 (S=1/200)



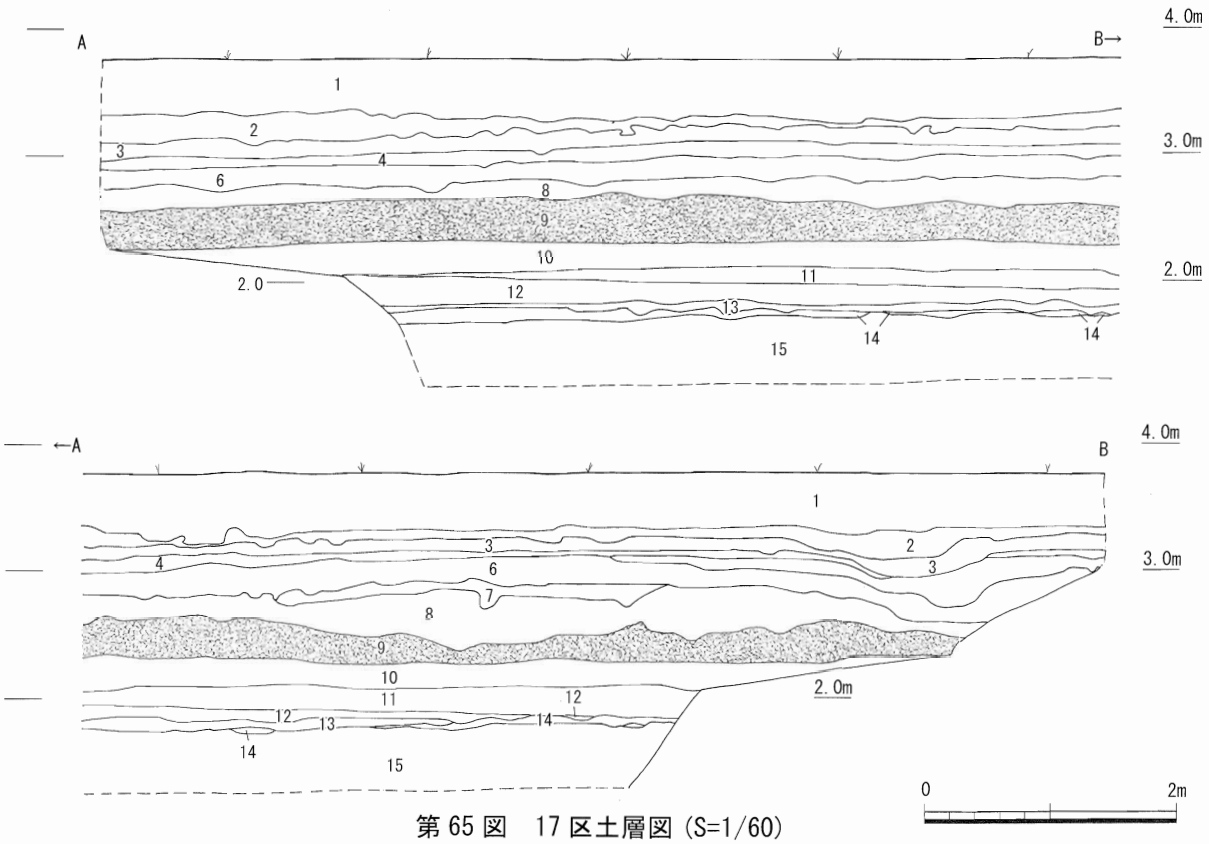
16区

1	濃茶褐色土	耕作土
2	青灰色土	耕作土
3	黄褐色砂	細砂
4	暗青灰色土	粘土
5	暗茶色土	粘質
6	砂	
7	暗青灰色土	粘土
8	暗茶褐色土	粘土
9	黒褐色土	オモカス
10	白色粘土	
11	暗茶褐色土	粘質
12	灰褐色粘土	黄色土ブロック含む
13	灰褐色粘土	
14	暗灰色土	
15	淡黄褐色土	
16	暗灰色粘土	
17	淡黄灰色粘土	

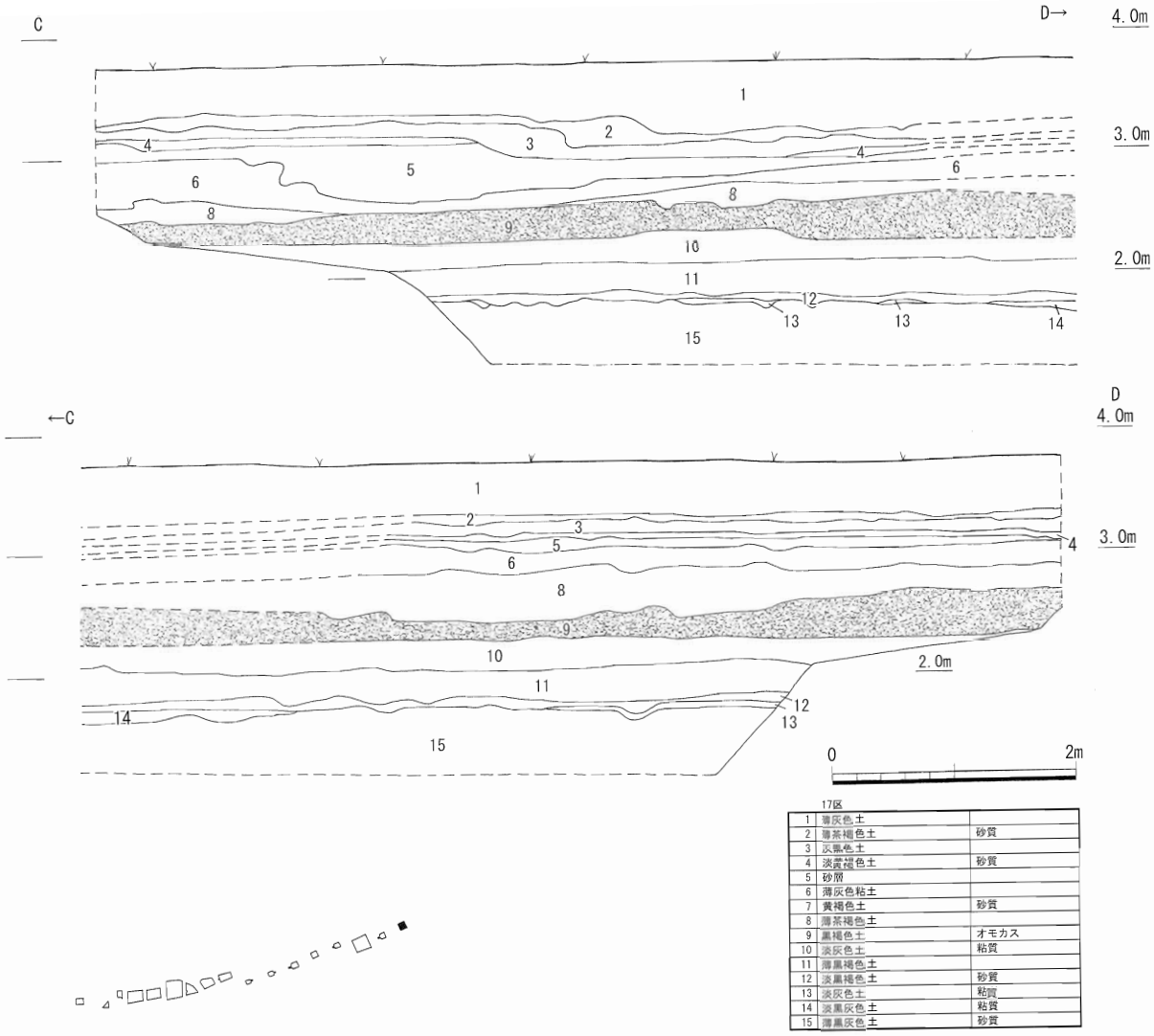
第 63 図　16 区土層図 (S=1/60)



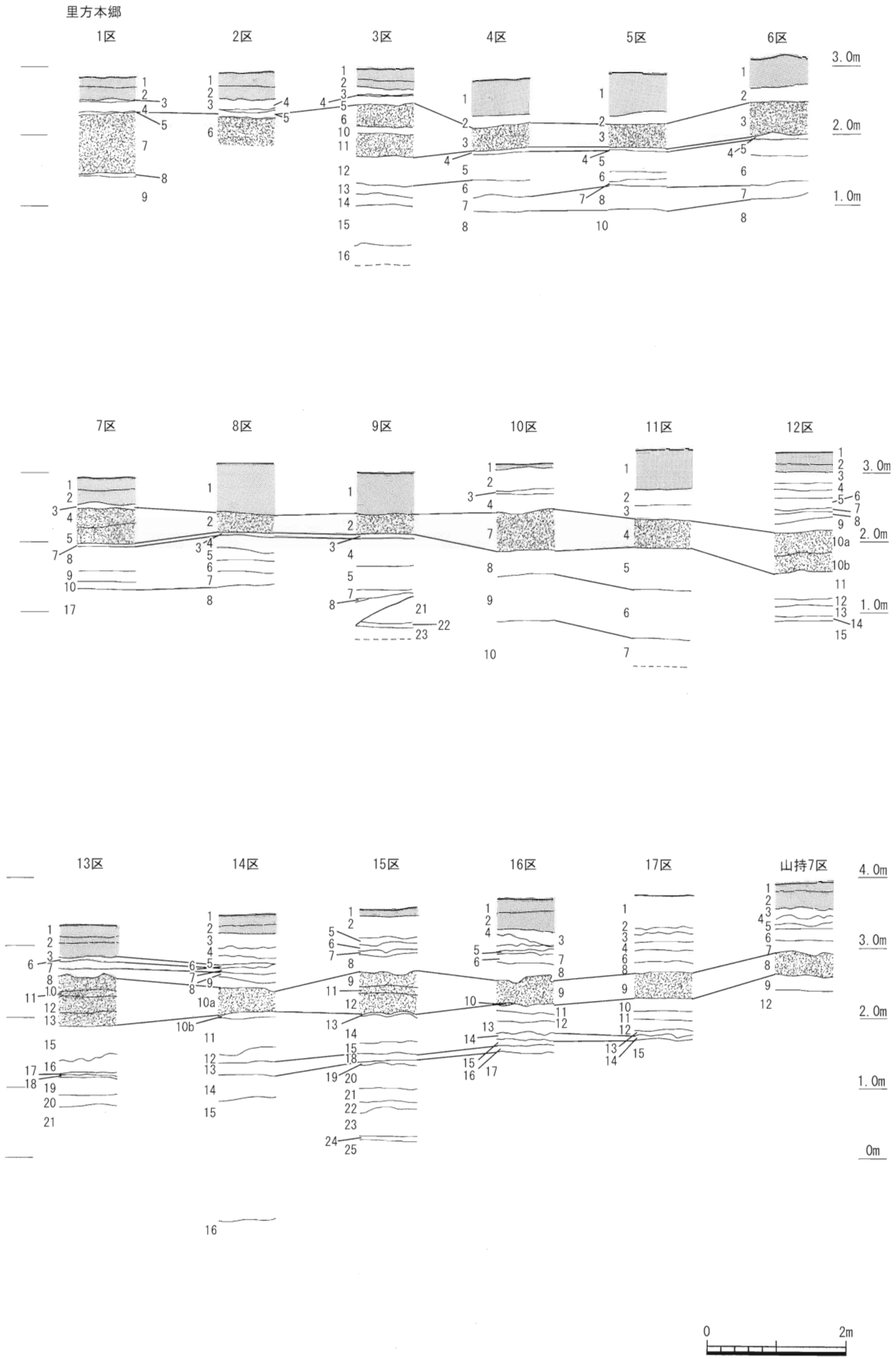
第 64 図　17 区平面図 (S=1/200)



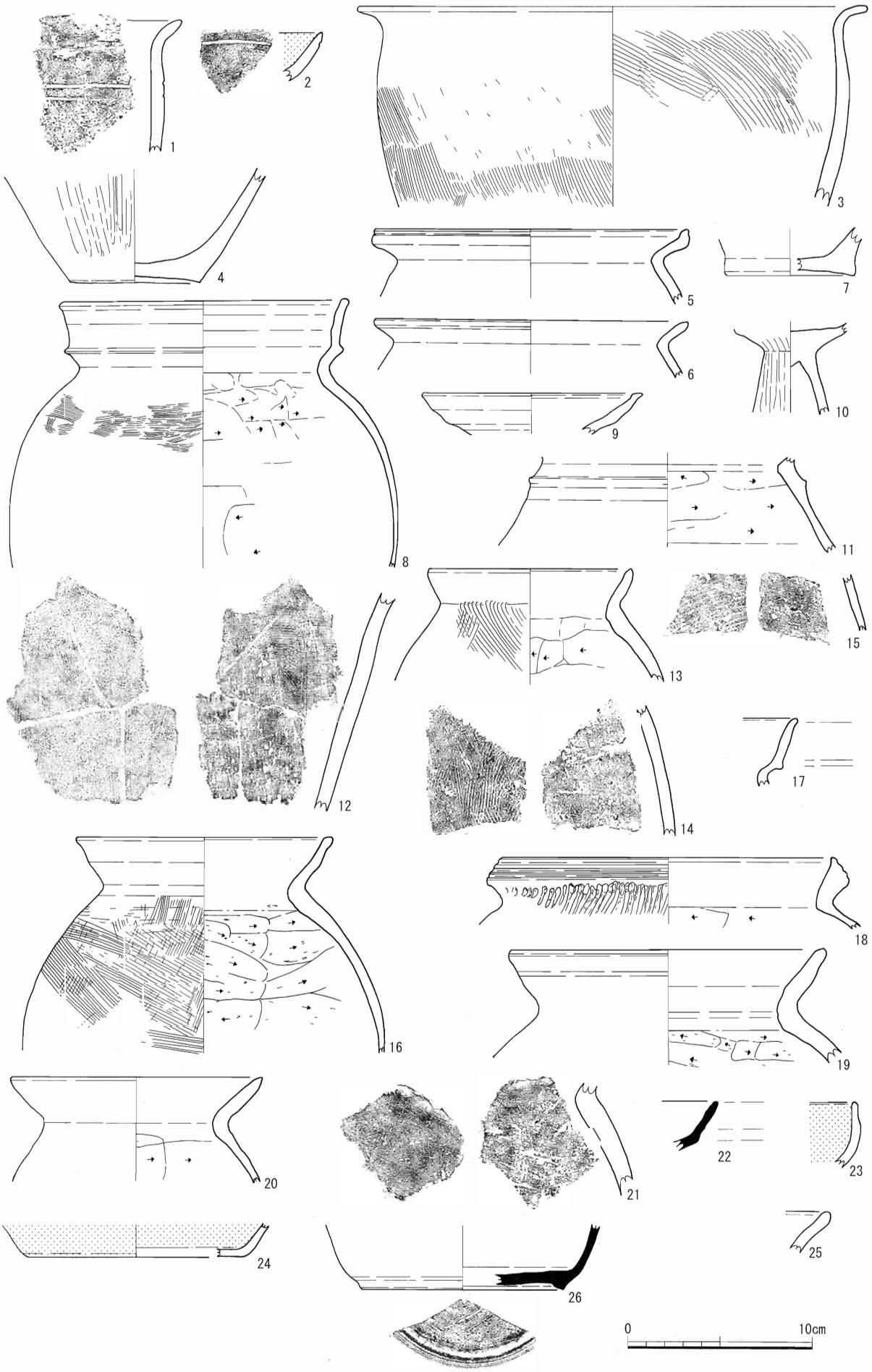
第 65 図　17 区土層図 (S=1/60)



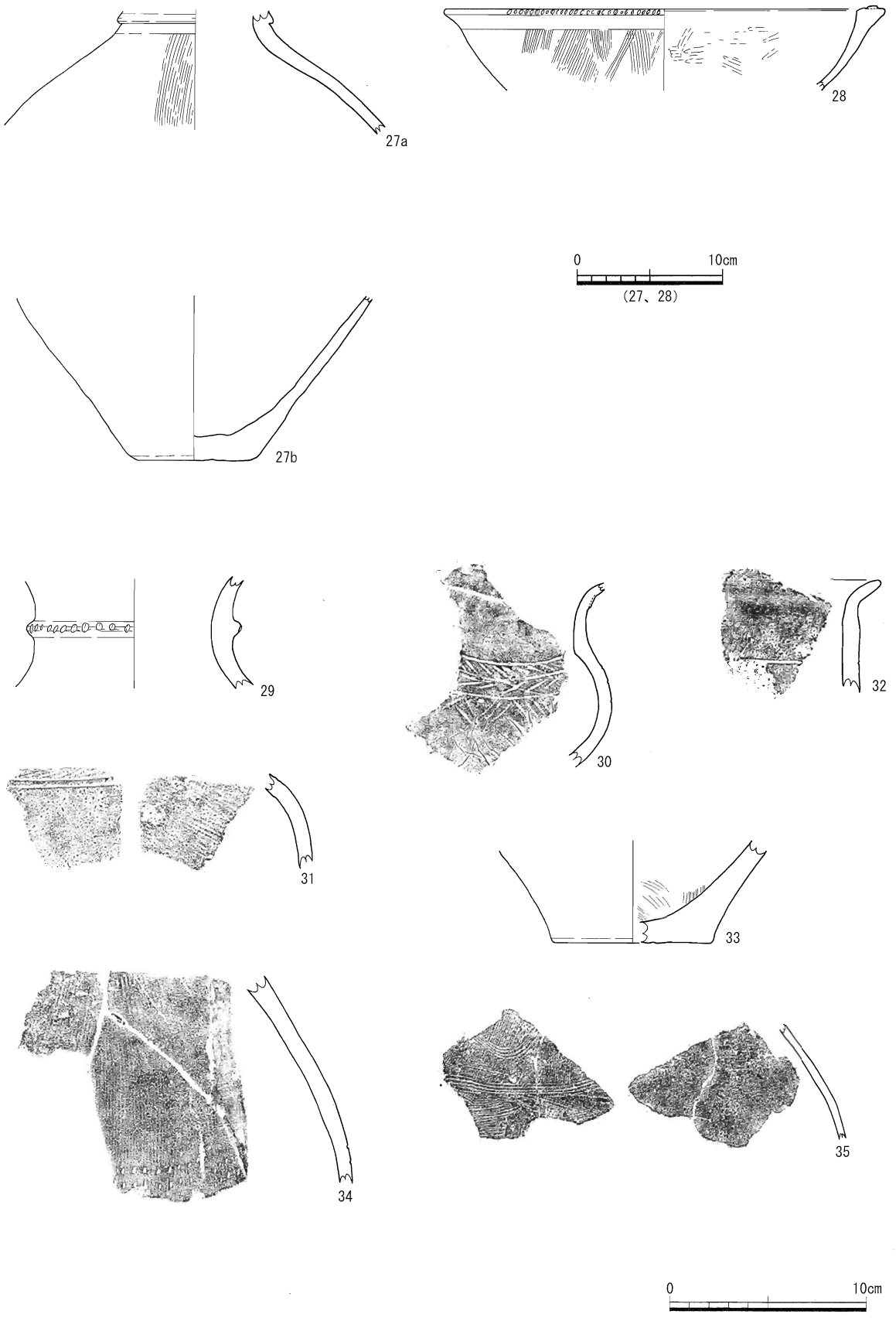
第 66 図　17 区東壁土層図 (S=1/60)



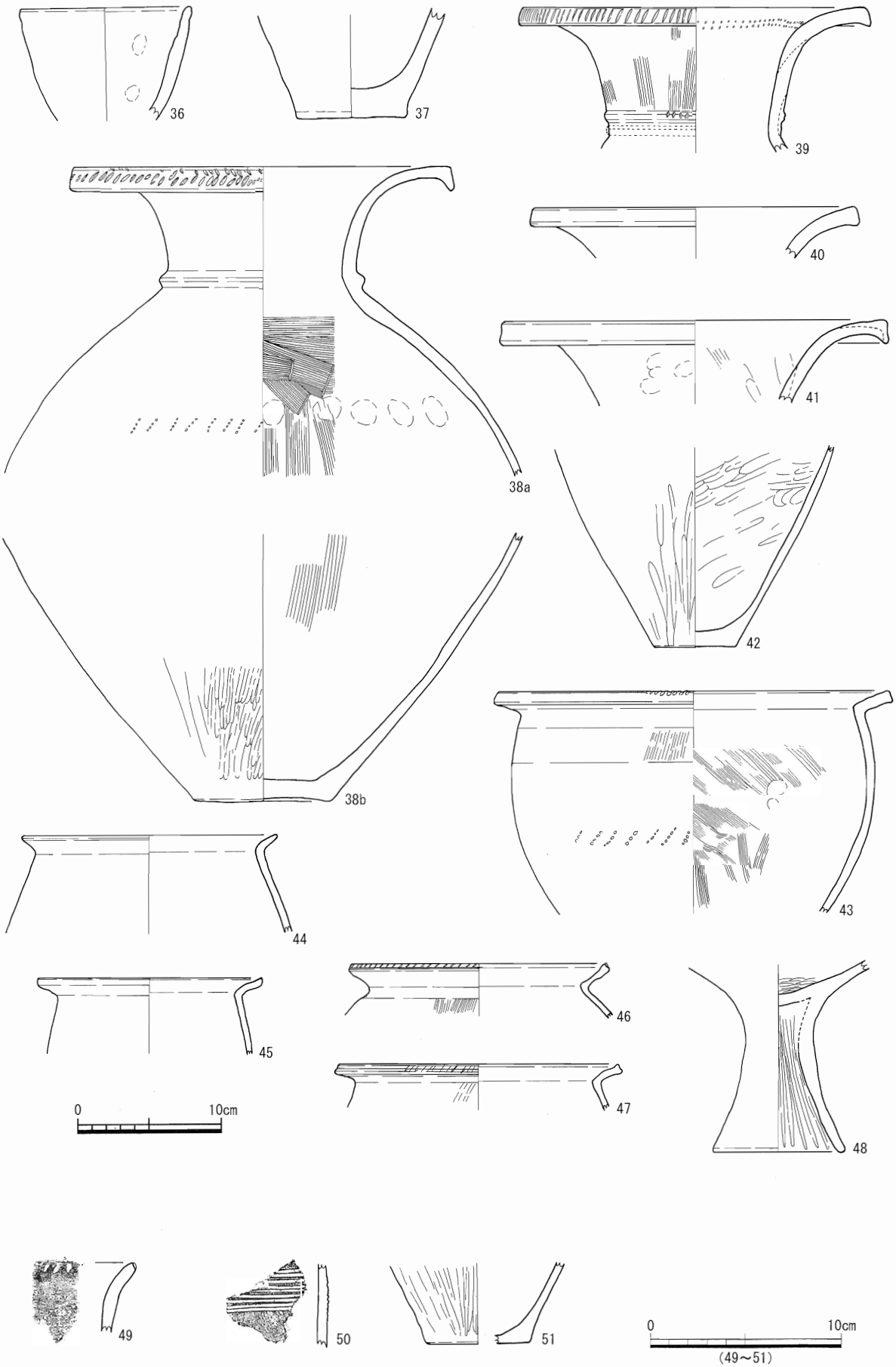
第 67 図　里方本郷遺跡・山持遺跡 7 区土層柱状図 (S=1/80)



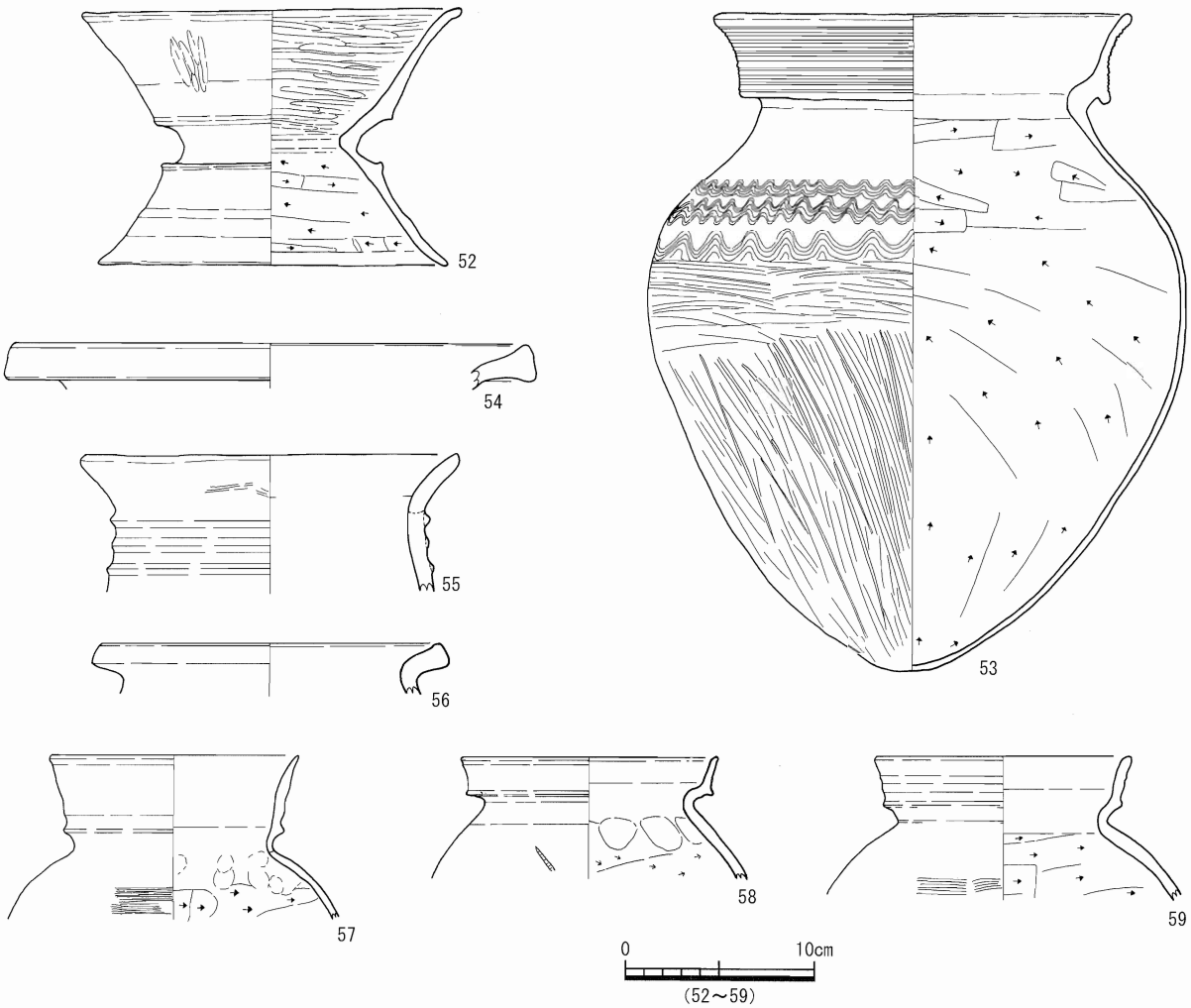
第 68 図　土器実測図 (1) (S=1/3)

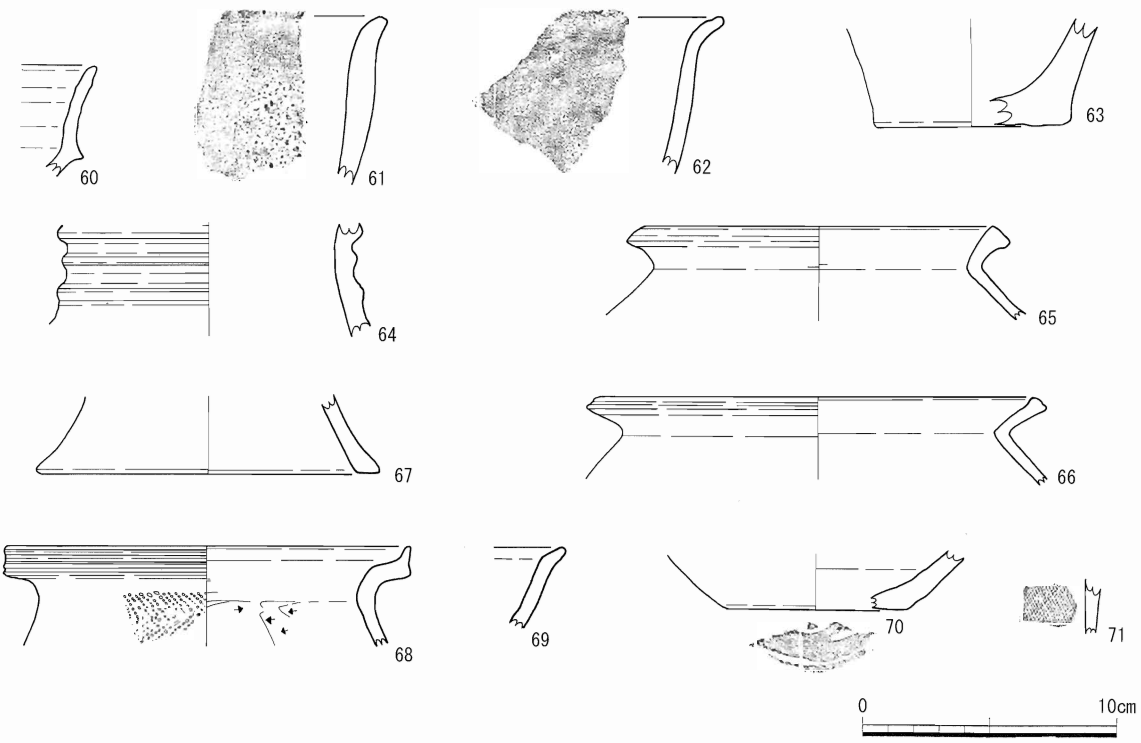


第 69 図　土器実測図 (2) (4 区) (S=1/3・1/4)

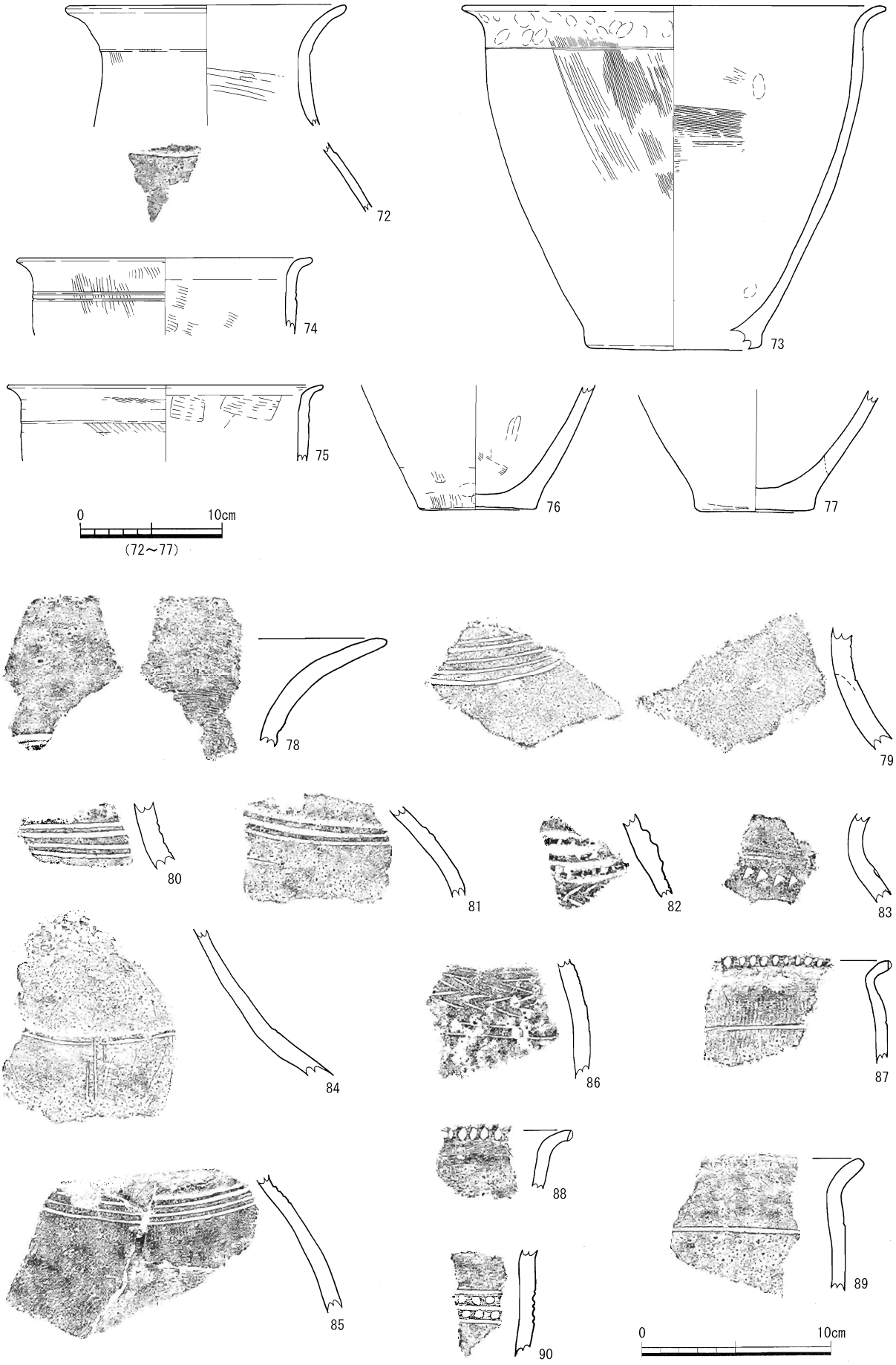


第 70 図　土器実測図 (3) (5 区) (S=1/3・1/4)

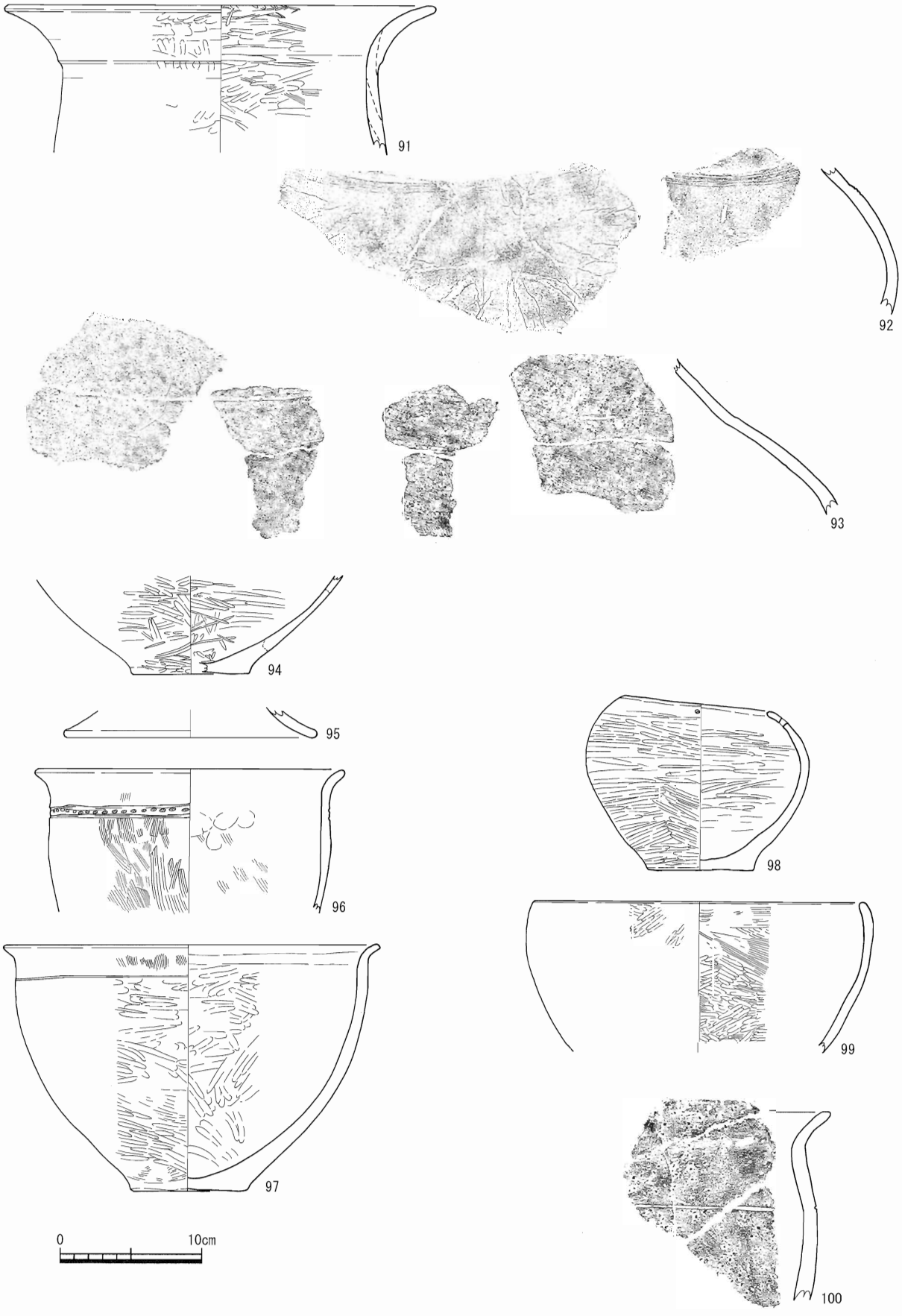




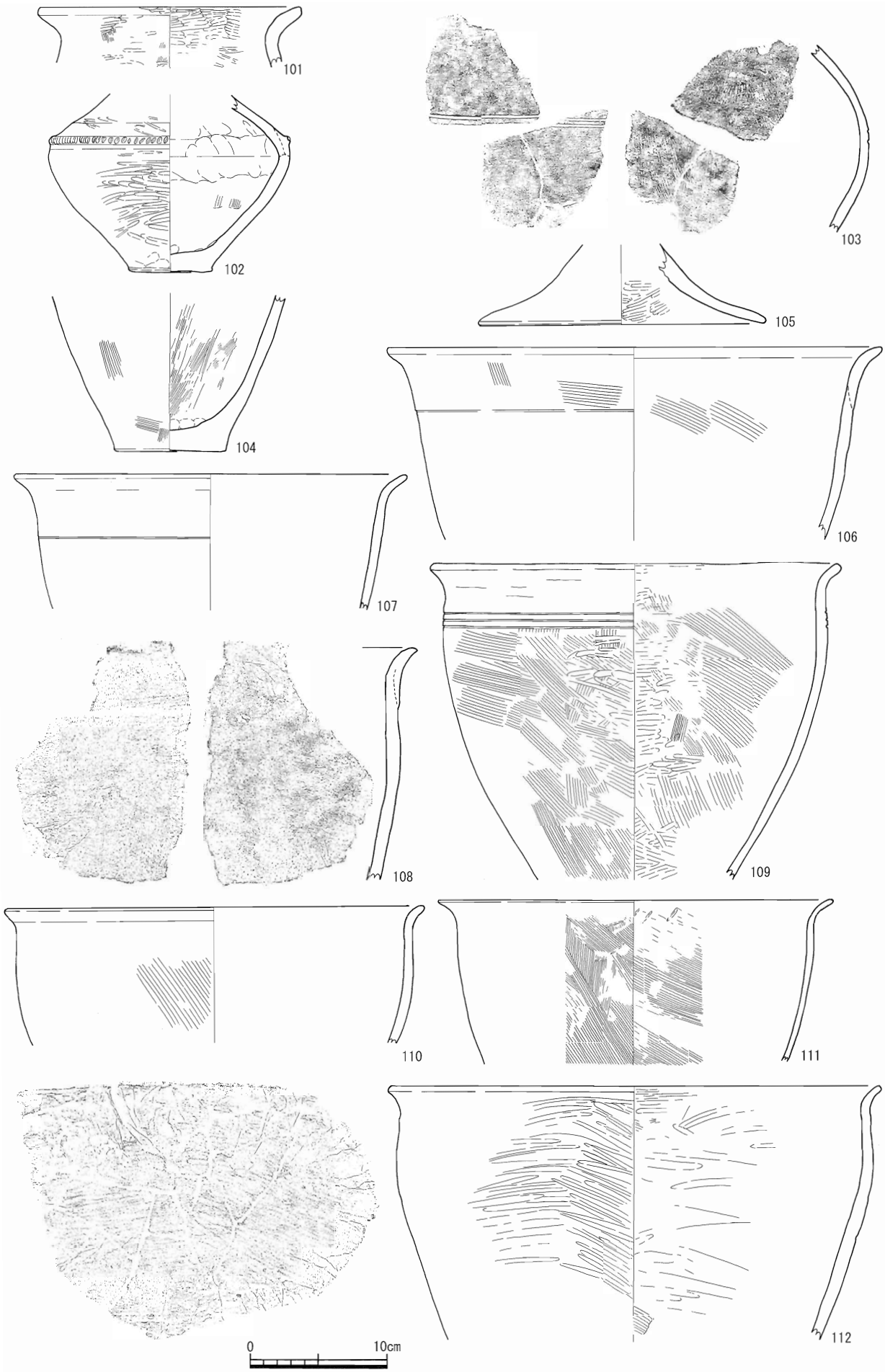
第 71 図　土器実測図 (4) (6 区) (S=1/3・1/4)



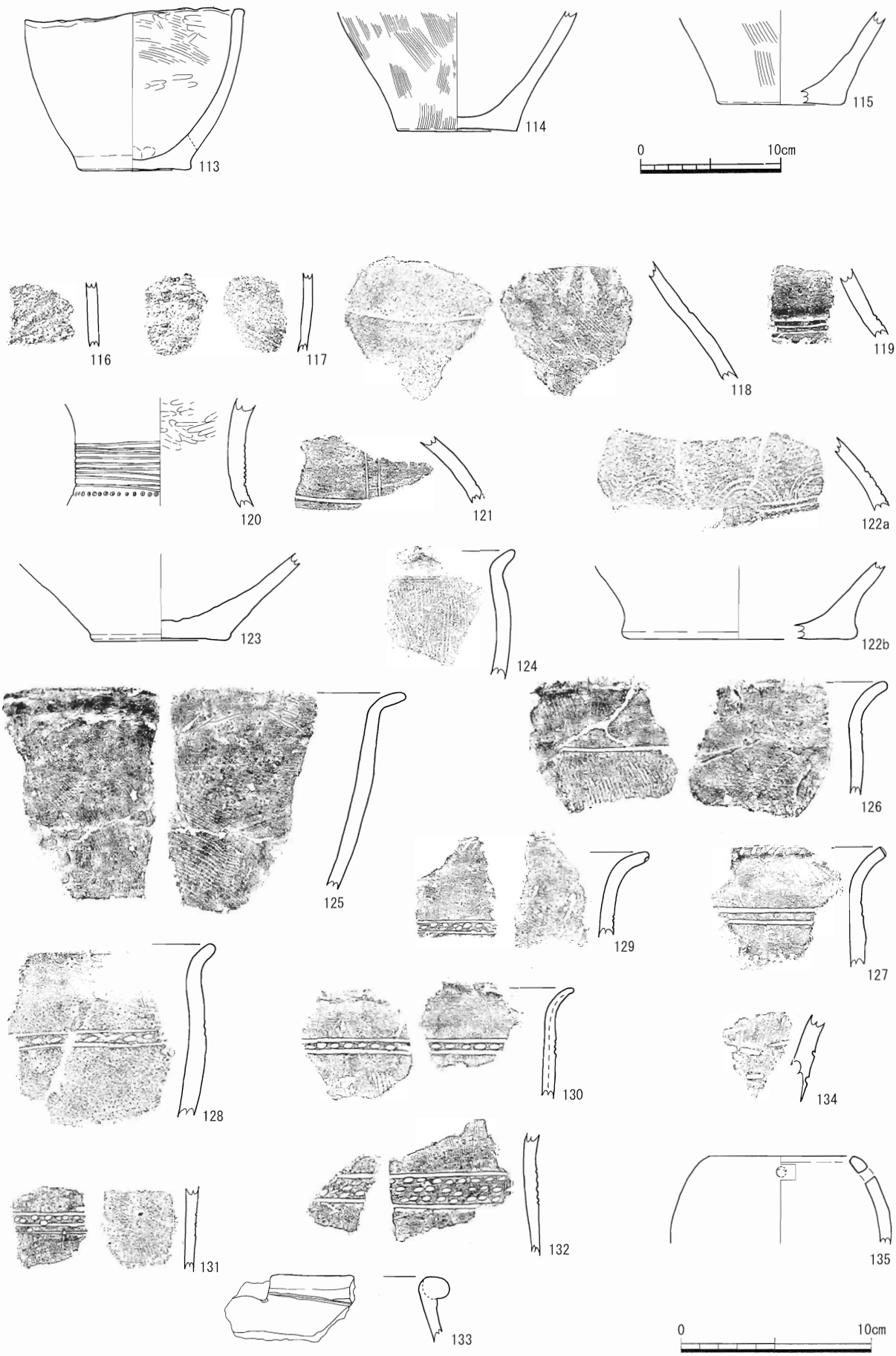
第 72 図　土器実測図 (5) (6 区) (S=1/3・1/4)



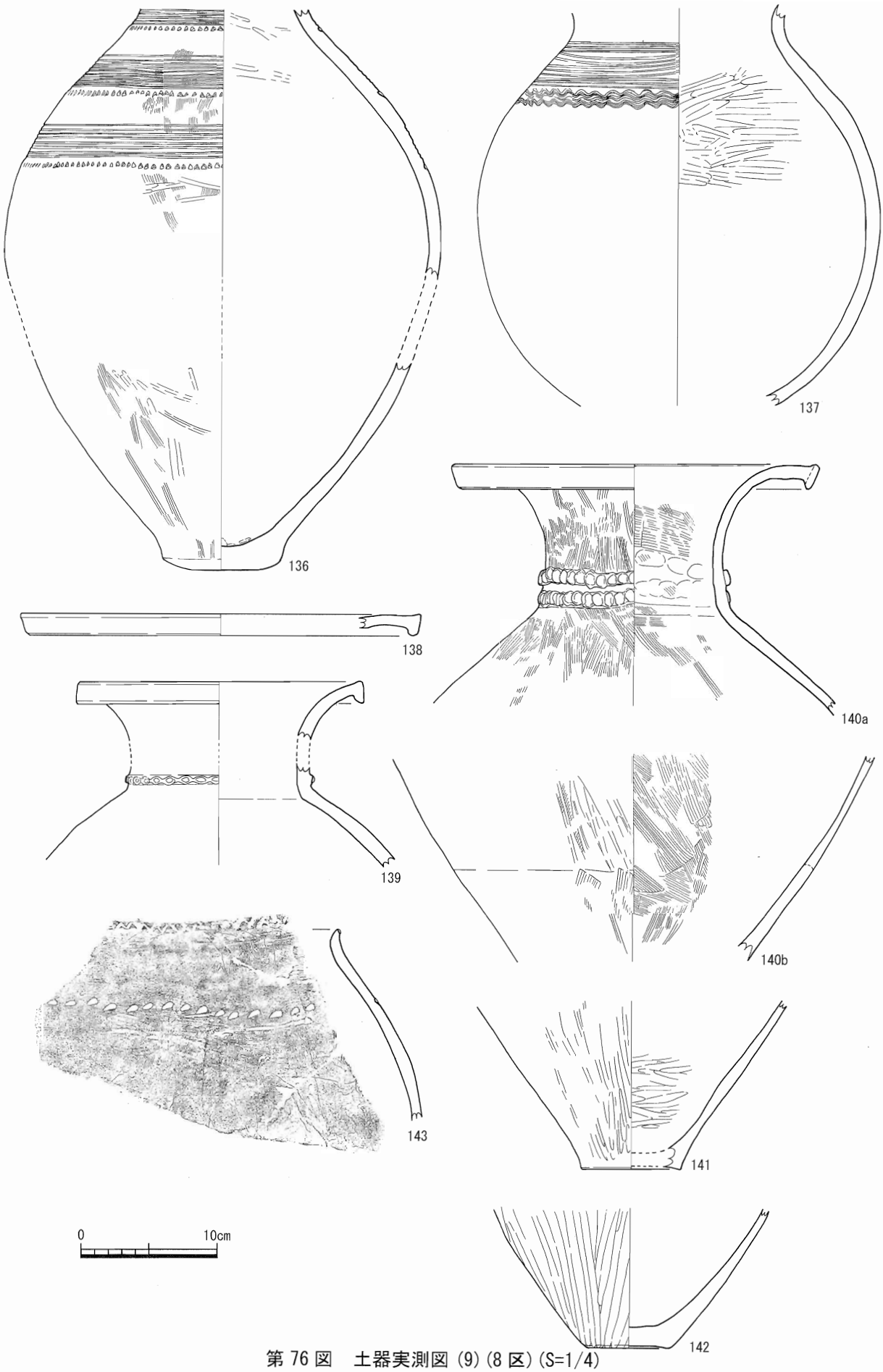
第 73 図　土器実測図 (6) (8 区) (S=1/3・1/4)



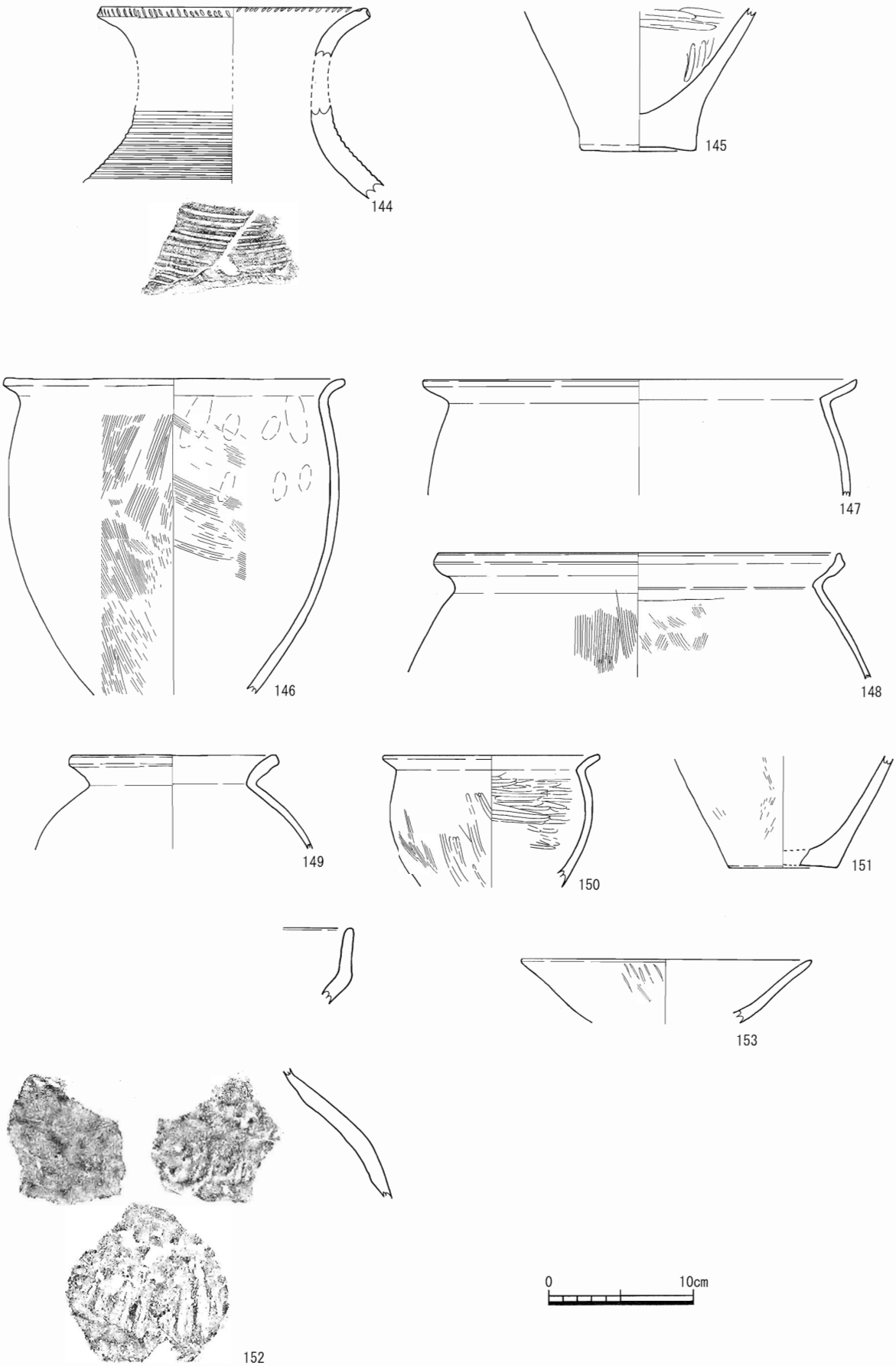
第 74 図　土器実測図 (7)(8 区)(S=1/4)



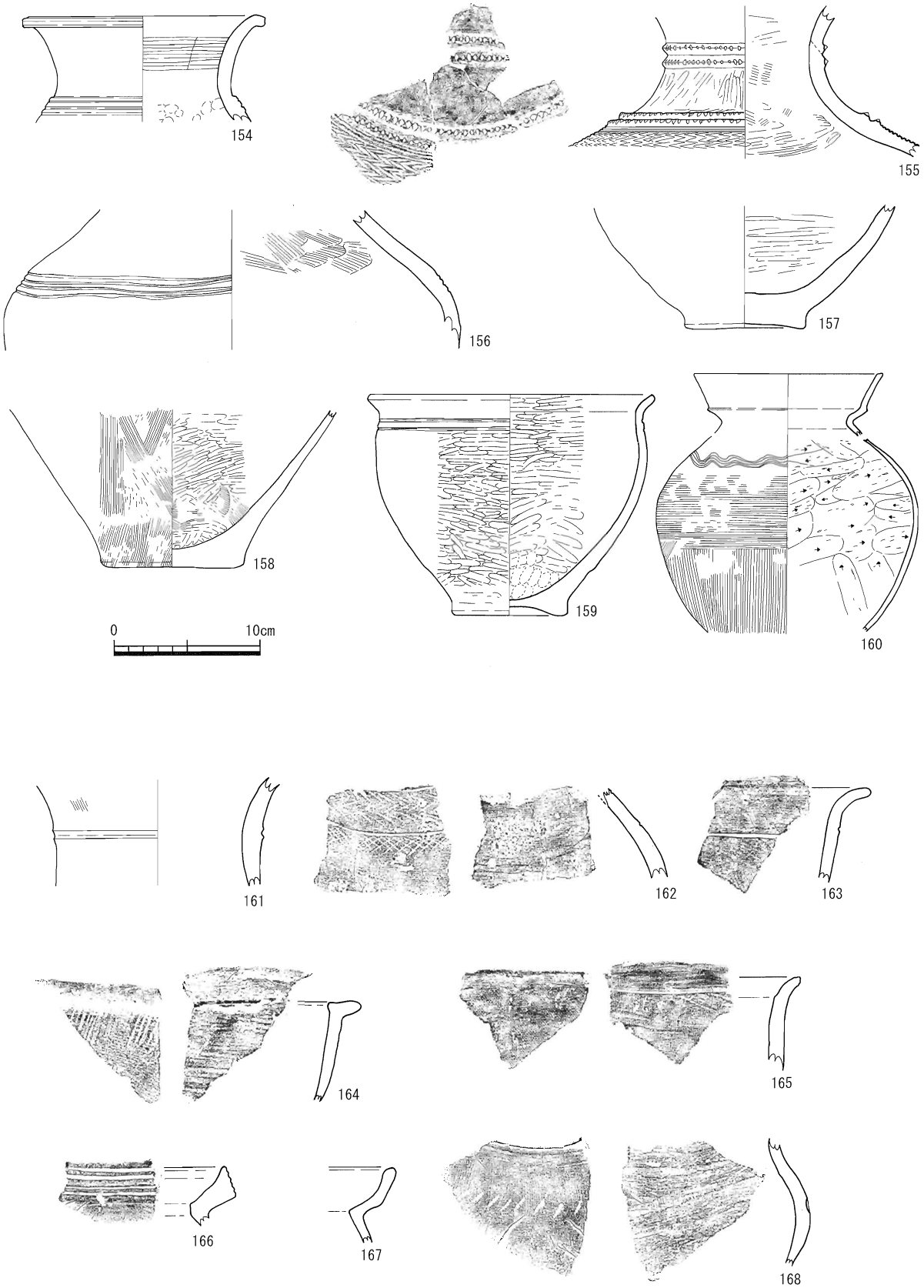
第 75 図　土器実測図 (8) (8 区) (S=1/3・1/4)



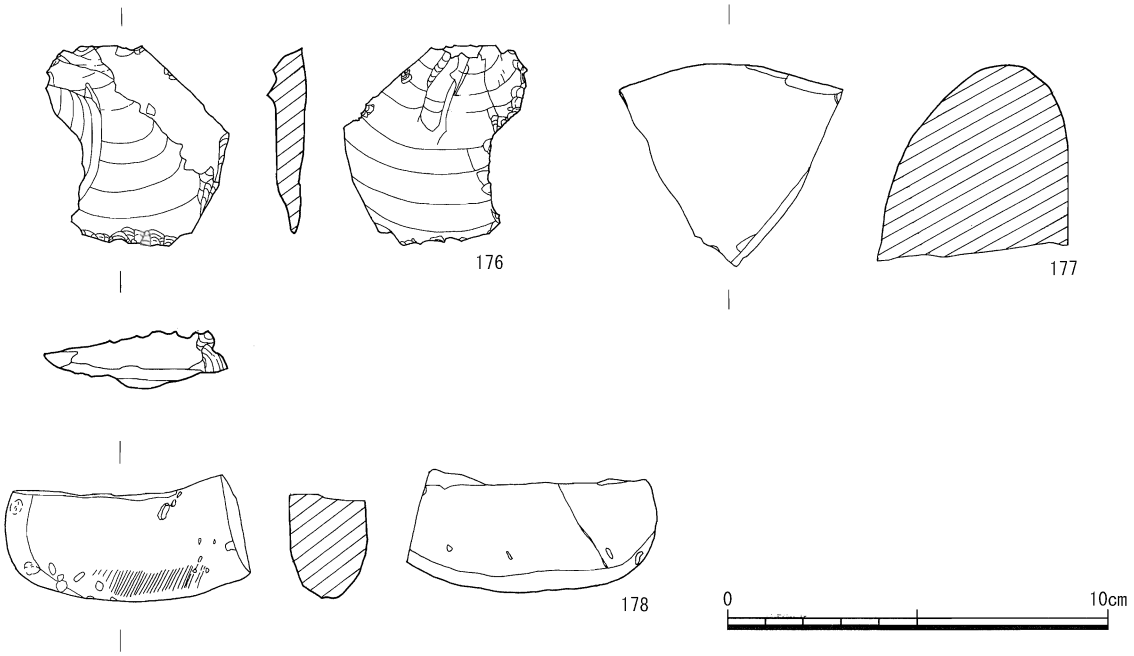
第 76 図　土器実測図 (9) (8 区) (S=1/4)



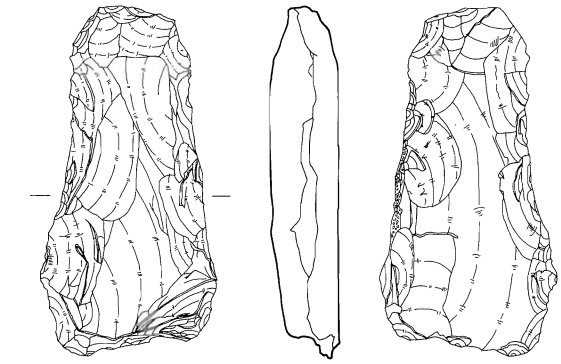
第 77 図　土器実測図 (10) (8 区) (S=1/4)

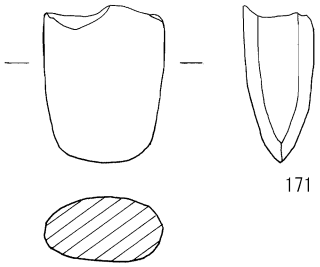


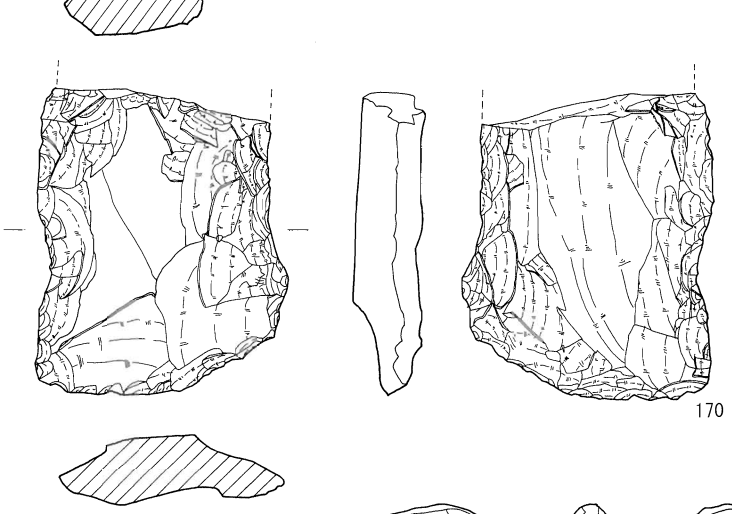
第 78 図　土器実測図 (11) (9 区) (S=1/3・1/4)

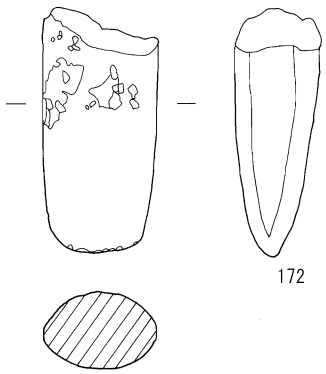


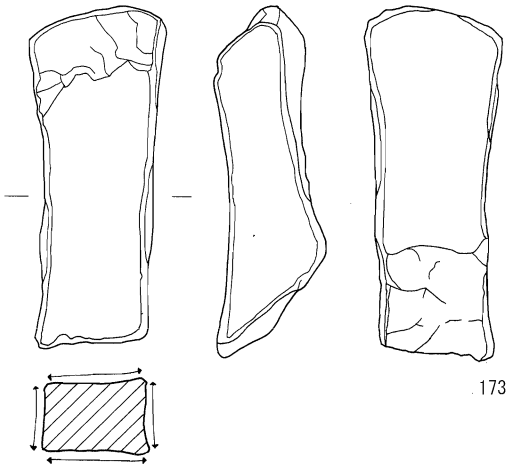
第 80 図　石器実測図 (2) (S=1/2)

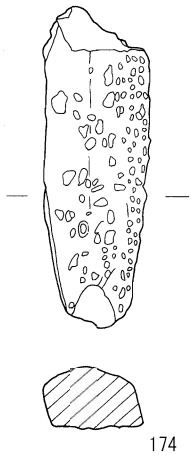


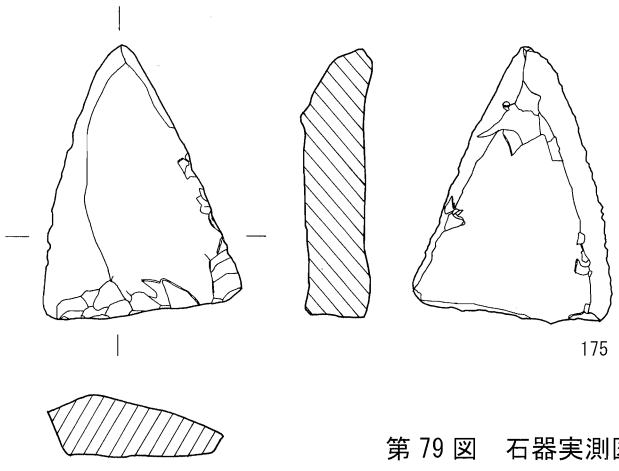




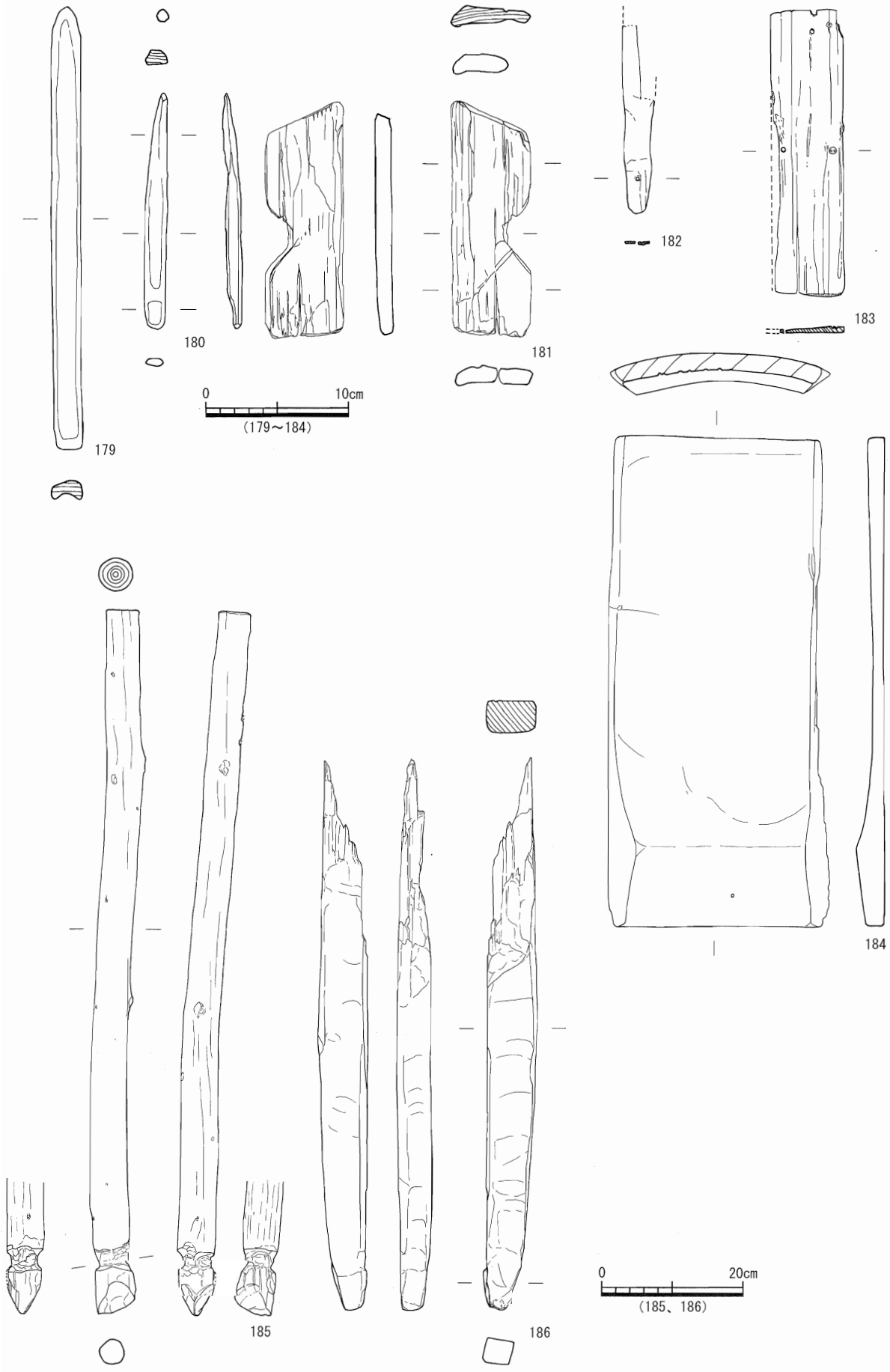






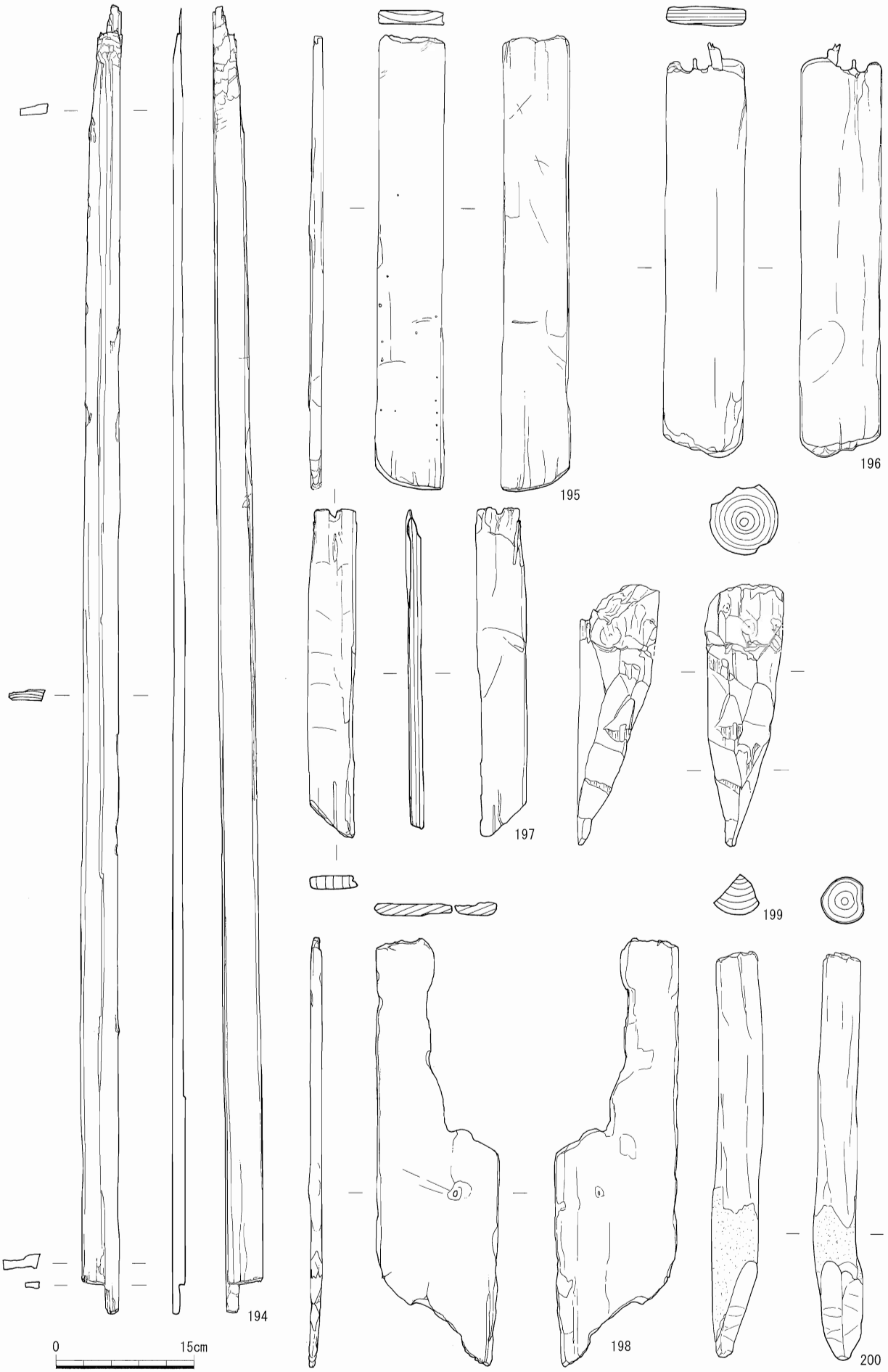


第 79 図　石器実測図 (1) (S=1/4)



第81図　木質遺物実測図(1)（3・4・6・9・12・15区）(S=1/4・1/8)

第 82 図　木質遺物実測図 (2) (4・8 区) (S=1/6)



第 83 図　木質遺物実測図 (3) (9 区) (S=1/6)

表2　里方本郷遺跡遺構一覧表

地区名	遺構名	挿図	位置（グリッド）	形態		規模(cm)				床面の標高（m）	備考
				上面	下面	上面		下面			
						長軸	短軸	長軸	短軸		
4区	P01	15	A3	円形	楕円形	41	35	16	12	0.97	
4区	P02	15	A3	楕円形	円形	59	49	37	34	0.94	
4区	P03	15	B3	隅丸方形	不整楕円形	83	79	65	44	0.97	
4区	P04	15	B3	楕円形	隅丸方形	51	35	33	25	0.97	
4区	P05	15	B3	不整楕円形	楕円形	68	53	63	45	0.89	
4区	P06	15	B2	不整楕円形	長楕円形	99	71	71	43	0.94	
4区	P07	15	B3	不整円形	楕円形	45	38	29	23	0.99	
4区	P08	15	B2	不整形	不整形	92	56	75	40	1.03	
4区	SK01	16	A3.B3	隅丸長方形	不整楕円形	156	97	108	47	0.87	
4区	SD02	17	A2.B2	直線的	直線的	(1000)	65	(1000)	30	1.17	
4区	SD03	17	A3.A4.B2.B3	直線的	直線的	(1770)	55	(1404)	30	0.94	
5区	P09	20	C4	隅丸方形	不整楕円形	80	72	59	47	1.05	
5区	P10	20	C1	隅丸長方形	隅丸長方形	72	54	54	33	1.11	
5区	P11	20	A1	長楕円形	隅丸長方形	63	39	28	16	0.95	
5区	P12	20	A1	不整円形	長楕円形	36	33	20	15	0.93	
5区	P13	20	A1	円形	円形	59	53	12	11	1.05	
5区	SD04	21	A1.A2.A3	蛇行	蛇行	(1980)	35	(1975)	15	1.01	SD06に続く
6区	P14	24	E4	円形	楕円形	77	73	30	25	1.05	土器出土
6区	P15	24	E4	長楕円形	長楕円形	44	29	18	9	1.21	
6区	P16	24	E4	不整形	不整形	36	36	16	14	1.22	
6区	P17	24	E3	不整形	不整形	41	35	18	17	1.17	
6区	P18	24	E3	不整形	不整形	182	80	145	34	1.08	
6区	P19	24	D4	長楕円形	長楕円形	90	55	54	36	1.25	
6区	P20	24	D4	隅丸方形	隅丸方形	98	91	61	60	1.24	
6区	P21	24	D5	不整形	楕円形	44	44	32	24	1.28	
6区	P22	24	D4	不整形	不整形	84	51	57	22	1.25	
6区	P23	24	D4	円形	隅丸方形	36	34	25	23	1.33	
6区	P24	24	D4	楕円形	楕円形	28	22	11	10	1.31	
6区	P25	24	C4	不整円形	楕円形	48	40	18	14	1.22	
6区	P26	24	C4	楕円形	不整形	50	37	36	24	1.25	
6区	P27	24	C4	不整円形	円形	45	38	19	17	1.15	
6区	P28	24	C4	楕円形	不整円形	30	25	11	10	1.16	
6区	P29	27	C4	長楕円形	不整楕円形	281	74	186	34	0.80	土器出土
6区	P30	24	C4	不整楕円形	不整形	50	41	30	30	1.11	
6区	P31	24	C4	円形	不整円形	59	54	28	24	1.10	
6区	P32	24	C5	不整円形	不整円形	23	21	12	12	1.17	
6区	P33	24	B4	楕円形	不整楕円形	68	55	61	39	0.99	
6区	P34	24	B4	不整形	円形	87	75	30	28	0.81	土器出土
6区	P35	24	B4	不整形	隅丸方形	81	78	36	33	0.98	
6区	P36	24	B4	隅丸方形	不整形	49	45	23	19	0.86	
6区	P37	24	A4	楕円形	不整形	45	34	14	12	0.96	
6区	P38	24	A4	楕円形	楕円形	68	52	36	27	1.03	
6区	P39	24	A4	不整形	楕円形	57	50	22	15	1.00	
6区	P40	24	A3.A4	長方形	楕円形	46	28	22	17	1.07	
6区	P41	24	A3	隅丸方形	長方形	57	51	30	22	0.72	
6区	P42	24	C3	不整楕円形	円形	81	63	50	42	1.02	
6区	P43	24	C3	不整円形	不整円形	40	37	26	23	1.17	
6区	P44	24	D3	不整円形	隅丸方形	51	44	27	26	1.20	
6区	P45	24	D4	不整形	円形	43	39	23	22	1.31	
6区	P46	24	E4	円形	楕円形	30	26	18	12	1.24	
6区	P47	24	C4	楕円形	楕円形	79	57	52	41	0.90	土器出土
6区	P48	24	D3	不整形	不整形	145	116	45	29	1.05	
6区	P49	24	E3	不整形	不整形	132	95	80	72	0.93	
6区	P50	24	E2	楕円形	円形	40	32	16	15	1.16	
6区	P51	24	C3	長方形	不整楕円形	42	33	27	21	1.13	
6区	P52	24	E2	隅丸長方形	不整楕円形	42	31	24	18	1.21	
6区	P53	24	D1	不整円形	不整円形	86	82	44	39	1.18	
6区	SD05	26	E2	屈曲	屈曲	384	66	294	48	1.16	
6区	SD06	26	C1.D1.D2	L字に屈曲	L字に屈曲	(2862)	90	(2826)	27	0.98	SD07を切る、一部はSD04に続く

地区名	遺構名	挿図	位置（グリッド）	形態		規模（cm）				床面の標高（m）	備考
				上面	下面	上面		下面			
						長軸	短軸	長軸	短軸		
6区	SD07	26	C2.D2	屈曲	屈曲	564	36	558	18	1.10	SD06に切られる
6区	SK08	27	E4	不整形	不整形	(867)	197	(436)	117	1.10	
6区	SK09	28	D2～D3	不整形	不整形	693	69	650	33	0.95	
7区	SD10	33		わずかに屈曲	わずかに屈曲	(2472)	144	(2400)	48	1.06	
7区	SD11	33		わずかに屈曲	わずかに屈曲	(2280)	78	(2274)	60	1.12	
7区	SK12	34		隅丸方形	楕円形	33	32	20	16	1.05	
7区	SK13	34		隅丸方形	円形	35	35	23	22	1.16	
8区	SK14	34	B1	隅丸長方形	長方形	(78)	82	(46)	45	1.28	
15区	SD15	58		2度屈曲	2度屈曲	(4600)	50	(4600)	20	1.15	
15区	SK16	59		楕円形	円形	134	102	81	69	1.14	
15区	SK17	59		不整形	不整形	67	45	57	36	1.23	
15区	SK18	59		円形	円形	61	51	46	44	1.20	
15区	SK19	59		不整楕円形	楕円形	119	84	59	41	1.08	
15区	SK20	59		隅丸方形	不整楕円形	46	40	40	33	1.16	
15区	SK21	59		円形	円形	33	31	20	19	1.43	

（）は現状での寸法

表3　里方本郷遺跡　土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区	グリッド/遺構名	層位	種別/時期	器種	形態・文様の特徴	色調（外面）	色調（内面）	遺存（%）	口径（cm）	器高（cm）	胴径（cm）	底径（cm）
1	68	30-1	T32		灰色粘土層	弥生前期	甕	沈線2条	淡黄色　2.5Y 8/4	黄灰色　2.5Y 4/1					
2	68	30-1	T47		灰色泥層	赤彩土師器	鉢？	内外面に赤彩、口縁端部に沈線状の凹み	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4					
3	68	30-1	1区		不明	弥生前期	甕		灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 6/2	20	(27.6)			
4	68	30-1	3区		16層	弥生中期	壺	内面に黒色物付着	淡黄橙色　10YR 8/3	にぶい黄橙色　10YR 7/4	60				6.9
5	68	30-1	7区	C1南溝	10層	弥生中期	甕	調整不明、口縁部に凹線1条	黄色　2.5Y 8/6	淡黄色　2.5Y 7/4	10	(17.0)			
6	68	30-1	7区	B2	10層	弥生中期	甕	調整不明	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	10	(17.0)			
7	68	30-1	7区	B1	10層	弥生中期	甕	調整不明	灰黄色　2.5Y 7/2	淡黄色　2.5Y 8/3	20				(7.0)
8	68	28	7区		9～10層	土師器	甕	肩部ヨコハケ	にぶい橙色　7.5YR 7/4	にぶい橙色　7.5YR 7/4	口縁完存	15.9			
9	68	30-1	7区		9～10層	土師器	甕	内側に肥厚	浅黄橙色　7.5YR 8/6	浅黄橙色　7.5YR 8/6	15	(11.8)			
10	68	30-1	7区		9～10層	土師器	高坏	脚部内面は下から棒状工具で押す	浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	脚部完存				
11	68	30-1	7区		10層	土師器	鼓形器台		淡黄橙色　10YR 8/4	淡黄橙色　10YR 8/4	10				
12	68	30-1	7区		10層	土師器	甑形土器？		淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3					
13	68	30-1	10区		8層	土師器	壺		浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	20	(11.0)			
14	68	30-1	11区		5層	土師器	甕		浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4					
15	68	30-1	12区		11層	弥生土器？	甕		浅黄色　2.5Y 7/4	黒褐色　5YR 3/1					
16	68	30-1	13区		15層	土師器	甕	口縁と胴部外面に炭化物付着	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 6/2	25	(13.8)			
17	68	30-2	14区		12層	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4					
18	68	30-2	15区		15層	弥生後期	甕	3条の凹線文、頸部に連続刺突文	にぶい黄褐色　10YR 5/3	灰黄色　2.5Y 7/2	10	(18.0)			
19	68	30-2	15区		14層	土師器	甕		にぶい黄橙色　10YR 7/3	にぶい黄橙色　10YR 7/4	20	(17.0)			
20	68	30-2	15区		15層	土師器	甕		黄橙色　10YR 8/6	黄橙色　10YR 8/6	20				
21	68	30-2	15区		15層	土師器	甕		にぶい黄橙色　10YR 7/4	にぶい黄橙色　10YR 7/4					
22	68	30-2	15区		14層	須恵器	坏?	回転ナデ	灰白色　5Y 8/2	淡黄色　2.5Y 8/4					
23	68	30-2	16区		11層	赤彩土師器	椀	内面に赤彩、回転ナデ	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4					
24	68	30-2	17区		10層	土師器	坏?	内外面赤彩、回転ナデ	淡黄色　5YR 8/4	淡黄色　5YR 8/4	10				(12.0)
25	68	30-2	17区		10層	土師器	甕		黄色　2.5YR 8/6	黄色　2.5YR 8/6					
26	68	30-2	17区		10層	須恵器	高台付坏	底部外面にヘラの痕	明青灰色　5B 7/1	明青灰色　5B 7/1	20				(11.0)
27a	69	28	4区	A2・A3・A4・B1・B4	7層	弥生中期	広口壺	頸部に突帯1条、遺存状態不良	にぶい黄橙色　10YR 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	10				
27b	69	28	4区	A2・A3・A4・B1・B4	7層	弥生中期	広口壺	調整不明、遺存状態不良	にぶい黄橙色　10YR 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	底部完存				7.4
28	69	30-2	4区	A3	7層	弥生中期	高坏	口縁端部平坦面に円形浮文	灰オリーブ色　5Y 5/2	灰黄色　2.5Y 6/2	10	(30.0)			
29	69	30-2	4区	A	7層	弥生前期	壺	刻み目のある貼付け突帯、ナデ	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	25				
30	69	30-2	4区	B3・C2	7層	弥生前期	壺	有軸羽状文とその上下に1条の沈線、斜行する沈線	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 6/2					
31	69	30-2	4区	A3	7層	弥生前期	壺	羽状文、2条の貝殻直線文	灰色　10Y 5/1	浅黄色　2.5Y 7/3					
32	69	30-2	4区	A3	7層	弥生前期	甕	沈線1条	灰白色　10YR 8/1	灰白色　10YR 8/1					
33	69	30-2	4区	B2	7層	弥生前期	壺		浅黄色　2.5Y 7/3	浅黄色　2.5Y 7/4	30				(8.0)
34	69	30-2	4区	A3・A4	7層	弥生中期	壺	刺突文	浅黄橙色　5Y 7/4	浅黄色　5Y 7/4					
35	69	30-2	4区		7層	土師器	甕	波状文、直線文	灰白色　2.5Y 7/1	灰白色　2.5Y 7/1					
36	70	31-1	5区	A3	8層	弥生前期	鉢？		黄褐色　2.5Y 5/3	黄褐色　2.5Y 5/3	10	(11.8)			
37	70	31-1	5区	B3	8層	弥生前期	甕		浅黄橙色　7.5YR 8/6	灰黄褐色　10YR 6/2	80				7.4
38a	70	28	5区	B2・B3	8層	弥生中期	広口壺	口縁端部に斜行する刻み目、頸部に突帯文、胴部に刺突文	黄灰色　2.5Y 6/1～にぶい黄色　2.5Y 6/3	灰オリーブ色　5Y 6/2	頸部完存	(26.0)			
38b	70	28	5区	B2・B3	8層	弥生中期	広口壺	摩滅著しい	黄灰色　2.5Y 6/1～にぶい黄色　2.5Y 6/3	灰オリーブ色　5Y 6/2	底部完存				9.2
39	70	31-1	5区	A2	8層	弥生中期	広口壺	口縁内面に列点文、口縁端部に短線文、頸部に刻み目のある突帯を2条	にぶい橙色　5YR 7/4	にぶい橙色　5YR 7/4	25	(23.8)			
40	70	31-1	5区	C2	8層	弥生中期	広口壺	摩滅により調整不明	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	15	(22.4)			

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区	グリッド/遺構名	層位	種別/時期	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	遺存(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
41	70	31-1	5区	B2	8層	弥生中期	広口壺	口縁端部ヨコナデ	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	25	(26.6)			
42	70	31-1	5区	B2・C2	8層	弥生中期	壺		灰色 5Y 6/1	灰色 5Y 6/1	30				(5.8)
43	70	31-1	5区	C2	8層	弥生中期	鉢	口縁端部に刻み目、胴部に列点文	浅黄色 2.5Y 7/3	浅黄色 2.5Y 7/3	35	(27.2)		(25.4)	
44	70	31-2	5区	B2・C3	8層	弥生中期	甕	調整不明	灰白色 5Y 7/1	灰白色 5Y 7/1	20	(17.6)			
45	70	31-2	5区	B2	8層	弥生中期	甕	口縁は上方へ伸びる	灰白色 2.5Y 8/2	灰黄色 2.5Y 7/2	10	(15.6)			
46	70	31-2	5区	B1	8層	弥生中期	甕	口縁端部に1条の凹線と刻み目	浅黄色 2.5Y 7/4	浅黄色 2.5Y 7/4	10	(17.6)			
47	70	31-2	5区	A3	8層	弥生中期	甕	口縁端部に2条の凹線と斜行の刻み	黄灰色 2.5Y 4/1	灰黄色 2.5Y 7/2	10	(19.5)			
48	70	28	5区	B3	8層	弥生中期	高坏	外面は摩滅が著しい	灰白色 5Y 7/2	灰白色 5Y7/2	25				(9.2)
49	70	31-2	5区	A4	8層	弥生前期	甕	口縁端部に刻み目、風化のため調整詳細不明	にぶい黄橙色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 6/2					
50	70	31-2	5区	B3	8層	弥生中期	甕	9条の櫛描文	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4					
51	70	28	5区	A4	8層	弥生中期	甕	内面に炭化物付着	浅黄橙色 10YR 8/3	灰白色 5Y 8/1	60				5.4
52	71	28	6区	SK08	2層	土師器	鼓形器台	口縁部外面に炭化物付着	淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4	筒部以下完形	20.1	13.8		18.4
53	71	28	6区	SK09	1層	弥生後期	甕	口縁に19条の櫛描直線文、胴部に波状文3列、胴部の調整は粗い原体	灰白色 2.5Y 8/2	にぶい黄色 2.5Y 6/3	口縁部完存	21.7	35.3	28.6	
54	71	31-2	6区	C1	7層	弥生中期	広口壺	調整不明	浅黄色 2.5Y 7/4	淡黄色 2.5Y 8/4	20	(27.4)			
55	71	31-2	6区	D4	7層	弥生中期	壺？	3条の突帯、摩滅著しい	黄灰色 2.5Y 5/1	黄灰色 2.5Y 6/1	20	(19.6)			
56	71	31-2	6区	B3	7層	弥生中期	壺	摩滅して調整不明	灰白色 2.5Y 8/2	灰白色 2.5Y 8/2	20	(17.8)			
57	71	31-2	6区	北西隅・北側	6層	土師器	壺または鉢		淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	40	(13.0)			
58	71	31-2	6区	北西	7層	土師器	甕	胴部に刺突文	浅黄橙色 10YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	10	(13.4)			
59	71	31-2	6区	北溝・北西隅	7層	土師器	甕		淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4	15	(13.4)			
60	71	31-2	6区	P18	不明	土師器	甕		淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4					
61	71	32-1	6区	P29	1層	弥生前期	甕	摩滅により調整不明	浅黄橙色 7.5YR 8/6	灰白色 7.5YR 8/2					
62	71	32-1	6区	P29	1層	弥生前期	甕		浅黄色 2.5Y 7/4	浅黄橙色 10YR 8/4					
63	71	32-1	6区	SD06	1層	弥生前期	甕	火を受けて変質	橙色 5YR 6/8	にぶい黄橙色 10YR 7/4	20				(7.8)
64	71	32-1	6区	C5	7層	弥生中期	壺	頸部に3条の突帯	浅黄色 2.5Y 7/4	灰色 5Y 5/1	25				
65	71	32-1	6区	E4	7層	弥生中期	甕	調整不明	黄色 2.5Y 8/6	浅黄色 2.5Y 8/4	15	(13.6)			
66	71	32-1	6区	南溝	7層	弥生中期	甕		浅黄橙色 10YR 8/4	灰白色 2.5Y 7/1	15	(17.0)			
67	71	32-1	6区	C1	7層	弥生中期	高坏	調整不明	浅黄色 2.5Y 7/3	浅黄色 2.5Y 7/3	10				(13.1)
68	71	32-1	6区	東側溝	不明	弥生後期	甕	口縁に4条の凹線、頸部に列点文	灰黄色 2.5Y 7/2	灰白色 2.5Y 8/2	15	(15.7)			
69	71	32-1	6区	南西隅	不明	土師器	鉢	丁寧なナデ	淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3					
70	71	32-1	6区	西壁	6層	中世の土師器	坏	回転糸切り、回転ナデ	淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4	25				(7.0)
71	71	32-1	6区		6層	製塩土器		内面に布目	橙色 7.5YR 6/6	橙色 7.5YR 6/6					
72	72	32-1	6区	南溝	6層	弥生前期	壺	段	灰白色 7.5Y 7/1	灰白色 5Y 8/2	10	(19.6)			
73	72	33-1	6区	D3	7層	弥生前期	甕	沈線1条	浅黄色 2.5Y 7/3～黒褐色 2.5Y 3/2	灰黄色 2.5Y 6/2～黒褐色 2.5Y 3/1	40	(29.0)	24.7		(11.4)
74	72	32-1	6区	D3	7層	弥生前期	甕	沈線2条	褐灰色 10YR 6/1	褐灰色 10YR 6/1	15	(20.6)			
75	72	28	6区	D3	7層	弥生前期	甕	緩やかな段、摩滅	淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	30	(22.4)	(20.4)		
76	72	28	6区	D3	7層	弥生前期	甕	外面が被熱	淡橙色 5YR 8/4	浅黄橙色 10YR 8/4	底部完存				8.0～8.5
77	72	28	6区	D3	7層	弥生前期	甕	摩滅により調整不明	黄橙色 7.5YR 7/8	浅黄橙色 10YR 8/3	底部完存				8.7～9.5
78	72	32-1	6区	西側	7層	弥生前期	壺	沈線を段状に施す	明黄褐色 10YR 6/8	明黄褐色 10YR 6/8					
79	72	32-1	6区	C5	7層	弥生前期	壺	頸部に5条の沈線	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/3					
80	72	32-2	6区	西溝中央	7層	弥生前期	壺	4条の沈線	オリーブ黄色 5Y 6/3	浅黄色 2.5Y 7/4					
81	72	32-2	6区	E4	7層	弥生前期	壺	段と2条の沈線	灰白色 10YR 8/1	浅黄橙色 10YR 8/4					
82	72	32-2	6区	C4	7層	弥生前期	壺	刻み目のある突帯3条と羽状文	にぶい黄橙色 10YR 6/4	にぶい黄橙色 10YR 6/4					
83	72	32-2	6区	E3	7層	弥生中期	壺	3条の櫛描文と刺突文	浅黄色 2.5Y 8/4	浅黄色 2.5Y 8/4					
84	72	32-2	6区	D3	7層	弥生前期	壺	沈線2条、縦に3条の短い沈線	灰白色 5Y 7/2	灰白色 5Y 8/2					
85	72	32-2	6区	C4	7層	弥生前期	壺	肩部に段と3条の沈線、調整は不明	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4					
86	72	32-2	6区	E3	7層	弥生前期	壺	段と2条の沈線、羽状文	淡黄色 5Y 8/3	淡黄色 2.5Y8/3					
87	72	32-2	6区	C3	7層	弥生前期	甕	口縁端部に刻み目、胴部に沈線1条、内面の調整は風化が著しく不明	淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4					
88	72	32-2	6区	C4		弥生前期	甕	口縁端部に刻み目、調整は不明	灰白色 2.5Y 8/2	淡黄色 2.5Y 8/3					
89	72	32-2	6区	C4	7層	弥生前期	甕	沈線1条、調整は不明	淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4					
90	72	32-2	6区	D4	7層	弥生前期	甕	3条の沈線とその間に竹管文	明黄褐色 10YR 7/6	褐灰色 10YR 6/1					
91	73	33-2	8区	SK14	1層	弥生前期	壺	頸部に段	灰白色 2.5Y 7/1	灰白色 2.5Y 7/1	10	(30.5)			
92	73	33-2	8区	B1・SK14	1層	弥生前期	壺	段と貝殻沈線3条	黒褐色 10YR 3/1～にぶい黄橙色 10YR 7/3	黒褐色 2.5Y 3/1～灰黄色 2.5Y 6/2					
93	73	33-2	8区	SK14	1層	弥生前期	壺	沈線による浅い段	にぶい黄橙色 10YR 7/2	灰黄褐色 10YR 6/2					
94	73	29	8区	SK14	1層	弥生前期	壺		にぶい黄橙色 10YR 5/3	灰黄色 2.5Y 6/2	底部完存				8.3
95	73	34-1	8区	B1・SK14	1層	弥生前期	蓋		灰黄色 10YR 5/2	灰黄色 10YR 5/2	15				(19.4)
96	73	34-1	8区	B1・SK14	1層	弥生前期	甕	沈線2条、その間に列点文	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	20	(21.2)			
97	73	29	8区	SK14	1層	弥生前期	鉢	浅い沈線1条、ミガキ	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	55	(26.7)	17.5		8.0
98	73	29	8区	SK14	1層	弥生前期	無頸壺	口縁部に向かい合う円孔	黄灰色 2.5Y 6/1～浅黄色 2.5Y 7/3	黄灰色 2.5Y 6/1～浅黄色 2.5Y 7/3	95	10.5	12.4		7.4
99	73	34-1	8区	SK14	1層	弥生前期	鉢？		にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰黄色 2.5Y 6/2 黒色 N *1.5/	10	(23.0)			
100	73	34-1	8区	SK14	1層	弥生前期	甕	摩滅により調整不明	淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4					
101	74	34-1	8区	C3	5層	弥生前期	壺	内外面に炭化物付着	黄灰色 2.5Y 4/1～黒色 5Y 2/1	黄灰色 2.5Y 4/1～黒色 5Y 2/1	20	(19.0)			
102	74	34-1	8区	B3	5層	弥生前期	壺	胴部に大きいV字状の刻み目の突帯1条	灰白色 2.5Y 8/2～橙色 5YR 6/6	灰白色 2.5Y 8/2	30				(6.2)
103	74	34-1	8区	B1	5層	弥生前期	壺	沈線2条	橙色 2.5YR 7/8～黄灰色 2.5Y 4/1	にぶい黄色 2.5Y 6/3					
104	74	29	8区	C2	5層	弥生前期	壺	摩滅により調整不明、	浅黄橙色 7.5YR 8/4	淡黄色 2.5Y 8/3	80				8.0
105	74	34-1	8区	B3・C3	5層	弥生前期	蓋	摩滅により調整不明、	にぶい褐色 7.5YR 6/3～5/3	黒色 10YR 3/2	20	(20.6)			
106	74	34-2	8区	B1	4・5層	弥生前期	鉢	接合部で段を表現	淡黄色 2.5Y 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4	10	(35.8)			

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区	グリッド/遺構名	層位	種別/時期	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	遺存(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
107	74	34-2	8区	C1	5層	弥生前期	甕	沈線1条、調整不明	灰白色　10YR 8/2	灰白色　10YR 8/2	25	(28.7)			
108	74	34-2	8区	B1	5層	弥生前期	鉢	接合部で段を表現	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3					
109	74	35-1	8区	B2	5層	弥生前期	甕	ヘラ描直線文3条	黒褐色　2.5Y 3/1～黒色　2.5Y 2/1	黒褐色　2.5Y 3/2	50	29.4			
110	74	34-2	8区	C2	5層	弥生前期	甕	摩滅により調整不明	オリーブ黒色　10Y 3/1	黄橙色　7.5Y 7/8	10	(30.0)			
111	74	34-2	8区	C1	5層	弥生前期	甕	外面に薄く煤が付着	にぶい黄褐色 10YR 5/3	にぶい黄橙色 10YR 6/3	10	(28.8)			
112	74	35-2	8区	B1	5層	弥生前期	壺	外面は火を受け変質	にぶい黄褐色 10YR 5/4	にぶい黄褐色 10YR 4/3	15	(35.6)			
113	75	29	8区	B3・C3	5層	弥生前期	鉢？	口縁端部は面を持ち、指で凹凸をつける、外面は摩滅著しい	淡赤橙色　2.5YR 7/4	にぶい橙色　10YR 6/3	85	15.5	10.6		7.7～8.0
114	75	29	8区	B1・B2	5層	弥生前期	甕	内面に薄く炭化物付着	黄橙色　7.5Y 7/8	灰白色　10YR 8/2	80				8.4
115	75	29	8区	B2・C2	5層	弥生前期	甕	内面は調整不明、	浅黄橙色　7.5Y 8/6	橙色　7.5Y 7/6	30				(8.6)
116	75	35-2	8区	B1	5層	縄文土器	深鉢	晩期？	淡黄色　2.5Y 8/4	灰白色　2.5Y 8/2					
117	75	35-2	8区	B1	5層	縄文土器	深鉢	晩期？	浅黄色　2.5Y 7/3	灰黄色　2.5Y 6/2					
118	75	35-2	8区	D1	5層	弥生前期	壺	段	灰黄色　2.5Y 7/2	にぶい黄橙色　10YR 7/3					
119	75	35-2	8区	C2	5層	弥生前期	壺	段、貝殻直線文2条、貝殻羽状文？	にぶい橙色　7.5Y 7/4	にぶい橙色　7.5Y 7/4					
120	75	35-2	8区	西溝	5層	弥生前期	壺	頸部にヘラ描沈線10条、円形刺突文	灰黄色　2.5Y 6/2	黄灰色　2.5Y 4/1	25				
121	75	35-2	8区	B1	5層	弥生前期	壺	縦と横に2条のヘラ描沈線文	にぶい黄橙色　10YR 7/3	にぶい黄橙色　10YR 6/4					
122a	75	35-2	8区	B1・C1	4・5層	弥生前期	壺	貝殻による3重の重弧文と2条の直線文	にぶい橙色　2.5Y 6/3	にぶい橙色　2.5Y 6/4					
122b	75	35-2	8区	B1・C1	4・5層	弥生前期	壺	摩滅により調整不明	にぶい橙色　2.5Y 6/3	にぶい橙色　2.5Y 6/4	15				(11.6)
123	75	29	8区	C2・C3	5層	弥生前期	甕	摩滅により調整不明	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	80				7.0
124	75	35-2	8区	B1	5層	弥生前期	甕		灰黄色　2.5Y 7/2	灰色　5Y 4/1					
125	75	35-2	8区	C2	5層	弥生前期	甕		淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3					
126	75	35-2	8区	B1	5層	弥生前期	甕	沈線1条	暗褐色　10YR 3/4	にぶい黄橙色　10YR 7/4					
127	75	35-2	8区	C3	5層	弥生前期	甕	口縁端部に刻み目、ヘラ描沈線2条	浅黄色　2.5Y 7/3	灰黄色　2.5Y 7/2					
128	75	35-2	8区	B1	5層	弥生前期	甕	2条の沈線の間に刺突文、調整不明	灰白色　2.5Y 8/2	灰黄色　2.5Y 6/2					
129	75	36-1	8区	西溝	5層	弥生前期	甕	口縁端部に刻み目、2条の沈線の間に刺突文	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2					
130	75	36-1	8区	B1	5層	弥生前期	甕	2条の沈線の間に列点文	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3					
131	75	36-1	8区	B1	5層	弥生前期	甕	3条の沈線の間に刺突文	黄灰色　2.5Y 5/1	黄灰色　2.5Y 5/1					
132	75	36-1	8区	C2	5層	弥生前期	鉢？	2条の沈線の間に3列の列点文	灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 7/2					
133	75	36-1	8区	西溝	5層	擬朝鮮系無文土器	甕	玉縁状の口縁、摩滅	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2					
134	75	36-1	8区	B1	5層	弥生前期	甕？	列点文、内面に炭化物	橙色　5YR 7/6	灰黄褐色　10YR 4/2					
135	75	36-1	8区	C2	5層	弥生前期	鉢？	口縁部下に小孔、丁寧な調整、土笛の可能性	淡黄色　2.5Y 8/4	オリーブ黒色　10Y 3/1	10	(7.4)			
136	76	36-2	8区	B1	5層	弥生前期末	壺	ヘラ描直線文と三角刺突文を一組とした文様を三組	浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	20			(31.9)	7.0
137	76	37-1	8区	西溝	5層	弥生中期	壺	櫛描直線文合計30条、波状文、外面摩滅	黄褐色　2.5Y 5/4	灰白色　5Y 8/2～灰オリーブ色　5Y 5/3	20			(29.2)	
138	76	36-1	8区	B1	5層	弥生中期	広口壺		灰黄色　2.5Y 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	25	(28.8)			
139	76	38-1	8区	B1	5層	弥生中期	広口壺	頸部に刻み目のある突帯、やや軟質	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄色　5Y 7/4	10	(20.4)			
140a	76	37-2	8区	B1	5層	弥生中期	広口壺	指による突帯2条	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	20	(26.2)			
140b	76	37-2	8区	B1	5層	弥生中期	広口壺		にぶい黄橙色 10YR 7/3	灰黄色　2.5Y 7/2	25				
141	76	38-1	8区	B1	5層	弥生中期	壺		灰白色　2.5Y 8/2	浅黄色　2.5Y 7/3	25				(7.2)
142	76	29	8区	B3	5層	弥生中期	壺		淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	80				5.6
143	76	36-1	8区	B3	5層	弥生中期	甕	口縁端部に「×」の刻み目、楕円形の刺突文	にぶい黄橙色 10YR 7/3	浅黄色　2.5Y 7/3					
144	77	38-1	8区	西溝	5層	弥生中期	壺	口縁端部と内面に刻み目、櫛描直線文？、軟質	口縁部：灰白色 2.5Y　8/2、胴部：黄灰色 2.5Y 4/1	灰白色　2.5Y 8/2	15	(13.6)			
145	77	29	8区	B1	5層	弥生中期	壺	外面一部赤変	にぶい黄橙色 10YR 7/4	浅黄橙色　10YR 8/3	底部完存				5.6
146	77	29	8区	B3・C3	5層	弥生中期	甕		黒褐色　7.5Y 2/2	灰黄褐色　10YR 4/2	60	23.4			
147	77	38-1	8区	B1	5層	弥生中期	甕		浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(29.6)			
148	77	38-1	8区	B1	5層	弥生中期	甕		灰白色2.5Y8/2	灰白色　2..5Y 7/1	10	(27.6)			
149	77	29	8区	B1・B3	5層	弥生中期	短頸壺	摩滅により調整不明	灰白色　5Y 8/2	灰白色　5Y 8/2	90	14.0			
150	77	38-1	8区	C2	5層	弥生中期	甕／鉢	外面変質部あり	灰黄褐色　10YR 6/2	にぶい黄橙色　10YR 7/3	25	(14.8)		(14.0)	
151	77	29	8区	B3・C3	5層	弥生中期	甕	摩滅により調整不明	明褐色　7.5YR 5/6	黒色　10YR 2/1					7.4
152	77	38-2	8区	B1	5層	土師器	甕	複合口縁、軟質、破片は多いが復元できず	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2					
153	77	38-1	8区	B1	5層	土師器	高坏	摩滅により調整不明	にぶい橙色　7.5Y 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/3	20	(19.8)			
154	78	39-1	9区	B2	12層	弥生前期	壺	削り出し突帯とヘラ描沈線2条	灰オリーブ色　5Y 6/2	浅黄色　5Y 7/3	10	(16.6)			
155	78	39-1	9区	A2	22・23層	弥生前期	壺	刻み目のある突帯が頸部と肩部に2条ずつ、貝殻直線文3条、貝殻羽状文	黄橙色　10YR 8/6	黄橙色　10YR 8/6	20				
156	78	39-1	9区	A2	7・8・10層	弥生前期	壺	ヘラ描沈線4条、内外摩滅	黒褐色　2.5Y 3/1	浅黄色　2.5Y 7/3	20			(31.1)	
157	78	39-2	9区	A1・A2	11層	弥生前期	壺		橙色　5YR 6/8	にぶい黄橙色 10YR 6/4	底部完存				7.7
158	78	39-2	9区	A2	8層	弥生前期	壺		暗灰黄色　2.5Y 5/2	黒褐色　10YR 3/2	90				8.4
159	78	39-2	9区	A2	22層	弥生前期	鉢	ヘラ描沈線2条、内外ヘラミガキ	橙色　7.5YR 6/8	明赤褐色　5YR 5/8	40	(17.2)	15.2		(7.0)
160	78	39-1	9区	B2	13層	土師器	甕	肩部に波状文、外面に炭化物	灰黄色　2.5Y 7/2	橙色　7.5YR 6/6	30	(13.0)			
161	78	39-1	9区	A2	7・8・10層	弥生前期	壺	沈線1条、ナデ	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	10				
162	78	39-1	9区	A1	12層	弥生前期	壺	貝殻沈線文2条、貝殻羽状文、貝殻斜格子文	にぶい黄橙色 10YR 6/4	灰黄褐色　10YR 4/2					
163	78	39-1	9区	A2	22層	弥生前期	甕	ヘラ描沈線1条	明黄褐色　10YR 7/6	浅黄橙色　10YR 8/4					
164	78	39-1	9区	A1	12層	弥生前期	甕	口縁部逆L字状	灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 7/2					
165	78	39-1	9区	A2	12層	弥生中期？	鉢		浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3					
166	78	39-1	9区		12層？	弥生後期	甕	凹線4条	橙色　5YR 7/6	橙色　5YR 7/6					
167	78	39-1	9区	B1	13層？	弥生後期	甕	口縁端部は摩滅により不明	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4					
168	78	39-1	9区	A1	11層	弥生後期	甕	胴部に列点文、外面に炭化物	灰黄色　2.5Y 6/2	暗灰黄色　2.5Y 5/2					

※土器の半径の()は、復元によるもの

表4　里方本郷遺跡　石器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	調査区	グリッド	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
169	79	40-1	打製石斧	6区	西溝	7層	流紋岩	18.5	9.3	3.5	720	
170	79	40-1	打製石斧	6区	南溝	7層	流紋岩	(16.3)	13.2	3.7	(945)	
171	79	40-1	太型蛤刃石斧	6区	C3	7層	塩基性片岩	(8.3)	6.3	3.6	(300)	
172	79	40-1	太型蛤刃石斧	8区	B1	5層	塩基性片岩	(13.0)	6.0	4.0	(545)	刃部が潰れている
173	79	40-1	砥石	8区	B3	5層	砂岩	18.5	7.0	3.8	746	四面とも使われている
174	79	40-1	石斧？	9区	A4	23層	塩基性片岩	(17.0)	(5.5)	(3.0)	(540)	
175	79	40-1	石皿？	8区	C1	5層	凝灰岩	14.5	10.4	3.4	(570)	
176	80	40-2	スクレイパー	6区	C4	7層	黒曜石	5.3	4.8	1.5	24.52	
177	80	40-2	磨石	8区	C1	5層	凝灰岩？	(5.3)	(6.0)	(5.0)	(162)	
178	80	40-2	磨製石斧	9区	A1	12層？	安山岩?	(3.3)	(6.5)	(2.0)	(70)	

※石材は肉眼観察による　　()は現存部の寸法、重さを示す

表5　里方本郷遺跡　木質遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	種別	調査区	グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他の寸法(cm)	木どり	樹種	樹種の分析機関	備　考
179	81	41	部材	棒状木製品	4区	C3	5層	31.7	2.2	1.3		板目			断面逆U字
180	81	41	漁労具?	銛状木製品	4区	C3	5層	16.7	1.5	1.0		板目			断面台形
181	81	41	施設材・器具材	板	6区	B4	7層？	16.7	5.5	2.3		板目			段あり
182	81	41	装飾具	扇の破片	15区	拡張区	14層	13.3	2.2	0.1	孔0.3	柾目			
183	81	41	容器？	底板？	15区		14層	20.3	5.1	4.0	最小厚0.15、孔0.3	柾目			孔4ヶ所、内未貫通孔2ヶ所
184	81	41	容器	桶	9区	B2	18・19層			1.9	高さ34.7	追い柾目	スギ	京都科学	側面に小孔、内面は遺存状態悪い
185	81	42	施設材・器具材	棒	3区		6層	99.6			直径4.8	芯持ち材			段あり、二方向から加工
186	81	42	施設材・器具材	棒	12区		不明	78.2	6.9	4.6		追い柾目			炭化している部分あり
187	82	42	土木材	杭4	4区	A3		89.0	8.6	7.0		分割材			炭化している部分あり
188	82	41	土木材	杭2	4区	B4		38.5	5.7			分割材	クリ	パリノ	遺存状態不良
189	82	41	土木材	杭4	8区	B2		22.7			直径4.6	芯持ち材			先端を正面と側面の二方向から加工
190	82	41	土木材	杭2	8区	B2		24.6	5.3			分割材			全面加工、先端は四角形
191	82	41	土木材	杭3	8区	B2		32.8			直径4.3	芯持ち材			三方向から加工樹皮残る
192	82	41	土木材	杭5	8区	B2		35.0			直径4.6	芯持ち材	アカガシ亜属	パリノ	二方向から加工
193	82	41	土木材	杭1	8区	B2		51.4			直径8.8	芯持ち材	モミ属	パリノ	全体を六角形に整形
194	83	43	施設材・器具材	板	9区	A2	12・13層	145.2	4.0	1.2		板目			扉材を転用した可能性
195	83	43	容器？	底板または蓋板？	9区	B2	17~19層	50.5	7.5	1.5		板目			
196	83	43	施設材・器具材	板	9区	B2	10層？	45.7	8.9	2.1		板目			孔段なし
197	83	43	施設材・器具材	板	9区	A1	12層？	36.4	5.3	1.5		柾目			孔段なし
198	83	43	施設材・器具材	板	9区	B2	10層？	47.4	13.5	1.5	孔0.4~0.7	追い柾目			孔あり
199	83	43	土木材	杭5	9区	B2		29.7			直径8.0	芯持ち材			
200	83	43	土木材	杭2	9区	A2		44.0			直径5.0	芯持ち材	ヒサカキ	パリノ	

※長さ、幅、厚さは現存の寸法である　　京都科学　㈱京都科学

パリノ　パリノ・サーヴェイ株式会社

表6-1　里方本郷遺跡　土器数量表

		調査区	トレンチ	1区	3区	7区	10区	11区	12区	13区	14区	15区	16区	17区	合計
時　期	器　種	部位													
弥生前期	甕	口縁	1	1											2
		胴部	1												1
	不明	胴部	10												10
弥生中期	壺	胴部			1										1
		底部			1										1
	甕	口縁				2						1			3
		胴部	1						1				1		3
		底部				1							1		2
	不明	口縁	1												1
		胴部	3												3
土師器	壺	胴部										1			1
	甕	口縁	2			2	2			1		3		2	12
		胴部	6					1			1	11			19
	高坏	胴部				1									1
	鼓形器台	胴部				1									1
	不明	胴部	4			1					1	6			12
赤彩土師器	椀	口縁	1										1		2
		胴部										1		1	2
須恵器	坏											1		1	2
合　計			30	1	2	8	2	1	1	1	2	24	3	4	79

※点数は注記の可能な大きさの土器片1つを「1点」として数えた。以下、山持遺跡5区、同7区も同様である。
※複数のグリッドから出土した土器が接合したときは、グリッドの数で割り、そのグリッドごとに振り分けた。

表6-2　里方本郷遺跡4区　土器数量表

		グリッド	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C2	C3	C4	グリッド無し	遺構内	排土中	合計
時　期	器種	部位															
弥生前期	壺	口縁						1									1
		胴部	1	1	2.3		2	1.5	2.3	4.3		3.5					18
		文様			1		1		1.5	1	0.5			1		1	7
		底部					1.5	1				0.5	1	1			5
	甕	口縁		2	2	2	1			7			1				15
		胴部		1	1	1	3	2	3	3	4	3		1	1		23
		底部		2													2
	不明	胴部	3	8	3	1	10	6	2	10	8	4		3	1	1	60
	計		4	14	9.3	4	18.5	11.5	8.8	25.3	12.5	11	2	6	2	2	131
弥生中期	壺	口縁			1					1	1						3
		胴部	1.5	4.5	6.7	14	3.2	2	2	2	5		1	3		2	47
		底部	1.5		1	3			2.5			1					9
	甕	口縁		1	1	1											3
		胴部	1	3	1	4	1		1	2	2	1					16
		底部				3.5			0.5								4
	高坏	口縁			1												1
	不明	胴部	1	4	3	1		1	1	4	6	2	1	1		1	26
	計		5	12.5	14.7	26.5	4.2	3	7	9	14	4	2	4		3	109
土師器	甕	胴部														1	1
	不明	胴部			1		1		1	1				1			5
	計				1		1		1	1				1		1	6
合　計			9	27	25	31	24	15	17	35	27	15	4	11	2	6	246

表6-3　里方本郷遺跡5区　土器数量表

		グリッド	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2	C3	C4	グリッド無し	排土中	合計
時　期	器種	部位														
弥生前期	壺	口縁				1										1
		胴部												1		1
	甕	口縁		1	1		1	1						1		5
		胴部					1		1	1						3
		文様			1									1		2
		底部		2	1		1	1								5
	鉢	口縁		1												1
	不明	口縁						1								1
		胴部	1	16	4	2		1	1		1	2	1	2		31
	計		1	20	7	3	3	4	2	1	1	2	1	5		50
弥生中期	壺	口縁	1				1.5				1	0.5				4
		胴部			2		3	4	1		3	22	8		11	54
		文様										2	1			3
		底部				1	4				2.5	1		2	1	11
	甕	口縁		1		2	2.5	1		1	5	6.5		1		20
		胴部		5	1	1	7		4	3	17	29	4	8		79
		文様						1								1
		底部			1		1.5				0.5	2		1		6
	高坏	口縁										1				1
		脚部						1								1
	鉢	口縁									1					1
	不明	胴部		8	2	3	19	25	2	3	19	68	45			194
	計		1	14	6	7	36.5	32	7	7	48	131.5	58	12	12	372
合　計			2	34	13	10	40	36	9	8	49	134	59	17	12	422

表6-5　里方本郷遺跡8区　土器数量表

		グリッド	B1	B2	B3	C1	C2	C3	D1	D3	グリッド無し	SK14	排土中	合計
時　期	器種	部位												
縄文土器	深鉢	胴部	2											2
弥生前期	壺	口縁		1				1			1	5		8
		胴部	57	6	5	14	21	10	2		5	17	1	138
		文様	5.5	4	1	0.5	4	2	1		2	2	1	23
		底部	12	2	1	1	5	0.5	0.5			1		23
	甕	口縁	19	4	1	6	7	4		1	5	4		51
		胴部	54	13	7	10	46	6	2		6	10	2	156
		文様	5	1		2	4				1			13
		底部	4.5	1	1		1.5	3						11
	鉢	口縁	1		0.5		2	0.5				2		6
	蓋				0.5			0.5				1		2
	無文土器	甕									1			1
	不明	口縁	3								1	1		5
		胴部	61	1	6	5	35	8	2		19	17		154
	計		222	33	23	38.5	125.5	35.5	7.5	1	41	60	4	591
弥生中期	壺	口縁	3.5		0.5						4			8
		胴部	8	7		2	2	2			7			28
		文様	1								1			2
		底部	2		1						2			5
	甕	口縁	6		1.5			0.5						8
		胴部	14	7	9	1	2	2			11			46
		底部	1		0.5		1	0.5						3
	高坏	胴部	1											1
	不明	胴部	24	1	4	2	2	1			10			44
	計		60.5	15	16.5	5	7	6			35			145
土師器	甕	口縁	1											1
		胴部	1											1
	高坏	口縁	2											2
		胴部	1				1							2
	不明	口縁	5			3	1				1			10
		胴部									1			1
	計		10			3	2				2			17
合　計			295	48	40	47	135	42	8	1	78	60	4	755

表6-4　里方本郷遺跡6区　土器数量表

		グリッド	A2	A3	A4	B3	B4	B5	C3	C4	C5	D1	D2	D3	D4	E2	E3	E4	グリッド無
		層位	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層	7層
時　期	器種	部位																	
弥生前期	壺	口縁					1			6	1				3				1
		胴部		1			6		13	17				20	21		1	4	5
		文様	1	1		1			2	9	1			1	6	1		2	3
		底部		1						2	1			3	2			1	1
	甕	口縁					1		3	3	2		1	19	5		3		
		胴部					4		11	25				19	20		2	2	1
		文様								2					3				
		底部			1									10	3				
	不明	口縁		1					3	3									
		胴部	1	5		2		1	36	47	2	1		60	54	2	7	7	4
	計		2	9	1	3	12	1	68	114	7	1	1	132	117	3	13	16	15
弥生中期	壺	口縁				1	1			1					1				
		胴部		1			2		2	2		1		1	3				
		文様									1						1		
		底部																	1
	甕	口縁					1			3					2			1	1
		胴部								3	1			1	3				
	高坏	脚部																	
	計			1			4		2	9	2	1		2	9				2
弥生後期	甕	口縁																	
土師器	甕	口縁																	2
		胴部																	
	鉢	口縁																	
	鉢または壺																		
	鼓形器台																		
	不明	口縁																	
		胴部															1		
	計																1		2
中世の土師器																			
製塩土器																			
合　計			2	10	1	3	16	1	70	123	9	2	1	134	126	3	14	16	19

		グリッド	A3	B1	B3	C1	C2	グリッド無	グリッド無	遺構内	排土中	合計
		層位	6層	7層相当	6層	7層相当	7層相当	6層	不明			
時　期	器種	部位										
弥生前期	壺	口縁						1	2			15
		胴部	2		1			5	6			102
		文様	1		2		1	4				36
		底部	1			1	1	1				15
	甕	口縁		2				2		2	1	44
		胴部	2				1	4	6	3		100
		文様										5
		底部	1							1		16
	不明	口縁										7
		胴部	5				8	21		15	1	279
	計		12	2	3	1	11	38	14	21	2	619
弥生中期	壺	口縁				1						5
		胴部	1						2			15
		文様										2
		底部							1			2
	甕	口縁										8
		胴部							1			9
	高坏	脚部				1						1
	計		1						4			42
弥生後期	甕	口縁							1	1		2
土師器	甕	口縁	1			1		4		1		9
		胴部				3						3
	鉢	口縁							1			1
	鉢または壺							1				1
	鼓形器台									1		1
	不明	口縁	1									1
		胴部										1
	計		2			4		5				17
中世の土師器								1				1
製塩土器								1				1
合　計			15	2	3	5	11	43	18	21	2	682

表6-6　里方本郷遺跡9区　土器数量表

		グリッド	A1	A1	A2	A2	A3	B1	B2	不明	合計
		層位	22層	その他	22層	その他	22層				
時　期	器種	部位									
弥生前期	壺	口縁			1				1		2
		胴部				4					4
		文様	1	1	1	3					6
		底部		0.5		0.5					1
	甕	口縁		1	2		1				4
		胴部	0.5	6	5.5	5	4				21
	鉢	口縁			1						1
	不明	胴部		1							1
	計		1.5	9.5	10.5	12.5	5		1		40
弥生中期	壺	胴部		1		1	1				3
	鉢	口縁				1					1
	計			1		2	1				4
弥生後期	甕	口縁						1	1	1	3
		胴部		2							2
	不明	胴部		1		3		1			5
	計			3		3		2	1	1	10
土師器	甕	口縁							1		1
合　計			1.5	13.5	10.5	17.5	6	2	3	1	55

表7　里方本郷遺跡　剥片一覧表

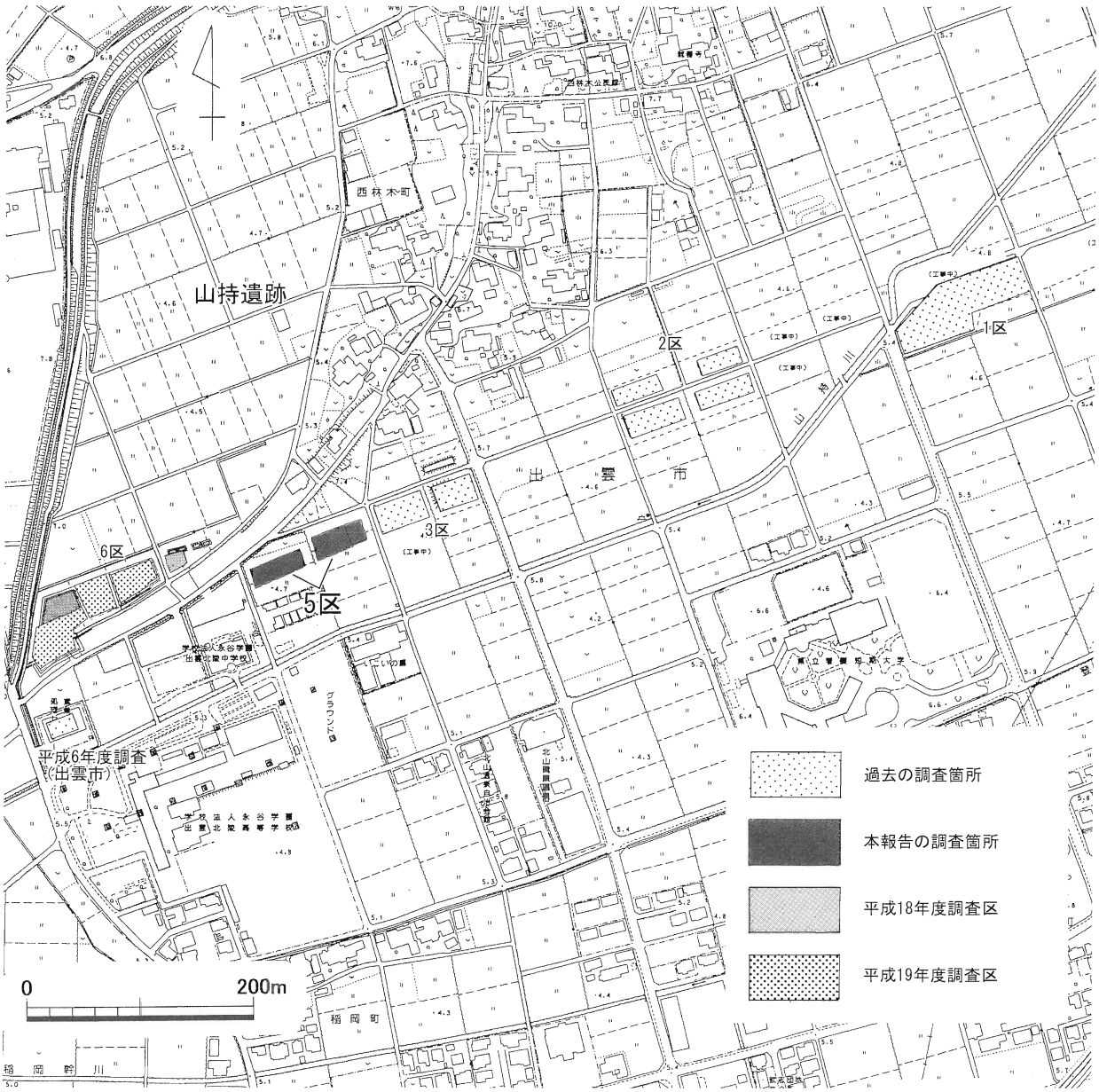
No.	調査区	グリッド／位置	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	4区	A1	7層	黒曜石	3.68	2.81	1.16	9.99
2	4区	北側	不明	黒曜石	3.63	2.93	1.35	17.21
3	6区	北西隅	7層	黒曜石	4.65	1.93	1.32	8.31
4	6区	北西隅	7層	黒曜石	2.41	2.11	0.65	3.01
5	6区	北西側	7層	黒曜石	3.50	2.25	1.22	8.87
6	6区	C4	7層	黒曜石	2.60	1.97	0.58	1.25
7	6区	B4	7層	黒曜石	3.68	1.55	0.88	3.51
8	6区	E2	7層	黒曜石	3.99	2.41	1.71	14.09
9	6区	C3	7層	黒曜石	3.92	1.77	0.94	5.53
10	6区	C4	7層	黒曜石	3.20	1.79	1.24	6.81
11	6区	D3	7層	瑪瑙	6.50	4.24	1.54	32.55
12	6区	D3	7層	黒曜石	3.41	3.39	0.58	4.48
13	6区	D4	7層	黒曜石	2.90	2.24	0.95	4.95
14	6区	D4	7層	黒曜石	2.88	2.21	1.02	6.46
15	6区	D4	7層	黒曜石	2.89	1.58	1.03	2.17
16	6区	E3	7層	黒曜石	3.37	2.06	1.07	6.62
17	6区	E4	7層	黒曜石	3.75	3.17	0.69	6.21
18	8区	B1	5層	黒曜石	2.59	2.16	0.58	3.12
19	8区	B1	5層	黒曜石	3.25	2.13	1.95	14.51
20	8区	B1	5層	黒曜石	2.50	2.10	0.67	2.66
21	8区	B1	5層	黒曜石	2.34	2.08	0.44	2.61
22	8区	B1	5層	黒曜石	2.45	1.50	0.49	1.60
23	8区	B1	5層	黒曜石	4.67	2.31	0.74	4.41
24	8区	B1	4層	黒曜石	2.84	1.50	0.51	1.57

第４章　山持遺跡５区

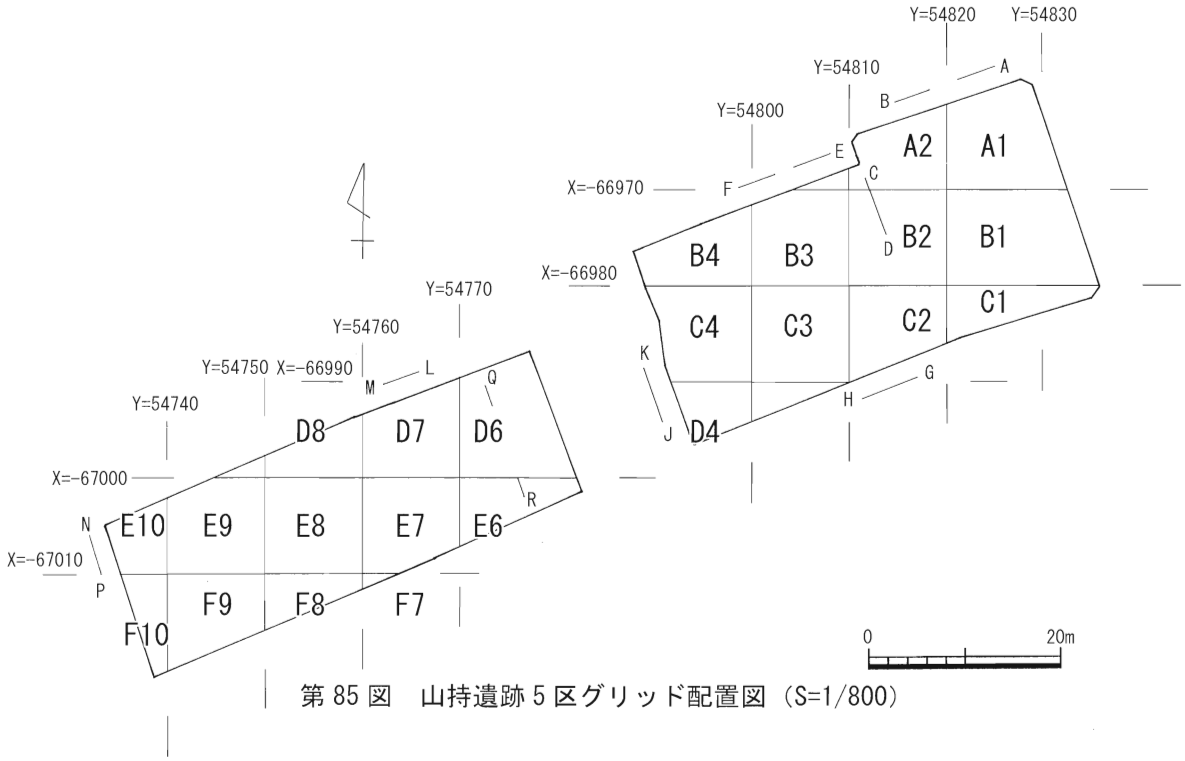
第１節　調査の方法と経過

山持遺跡５区は出雲市西林木町に所在する。遺跡が立地するところは以前水田だったところである。平成13年度のトレンチ調査に加えて、調査対象地点の東側に位置する山持遺跡３区では河道から弥生時代後期の土器や木製品が出土したほか、奈良時代の畠状遺構や道路状遺構を検出しており、調査対象地点が山持遺跡の範囲であることが明らかになったので、『山持遺跡５区』として調査を行った。

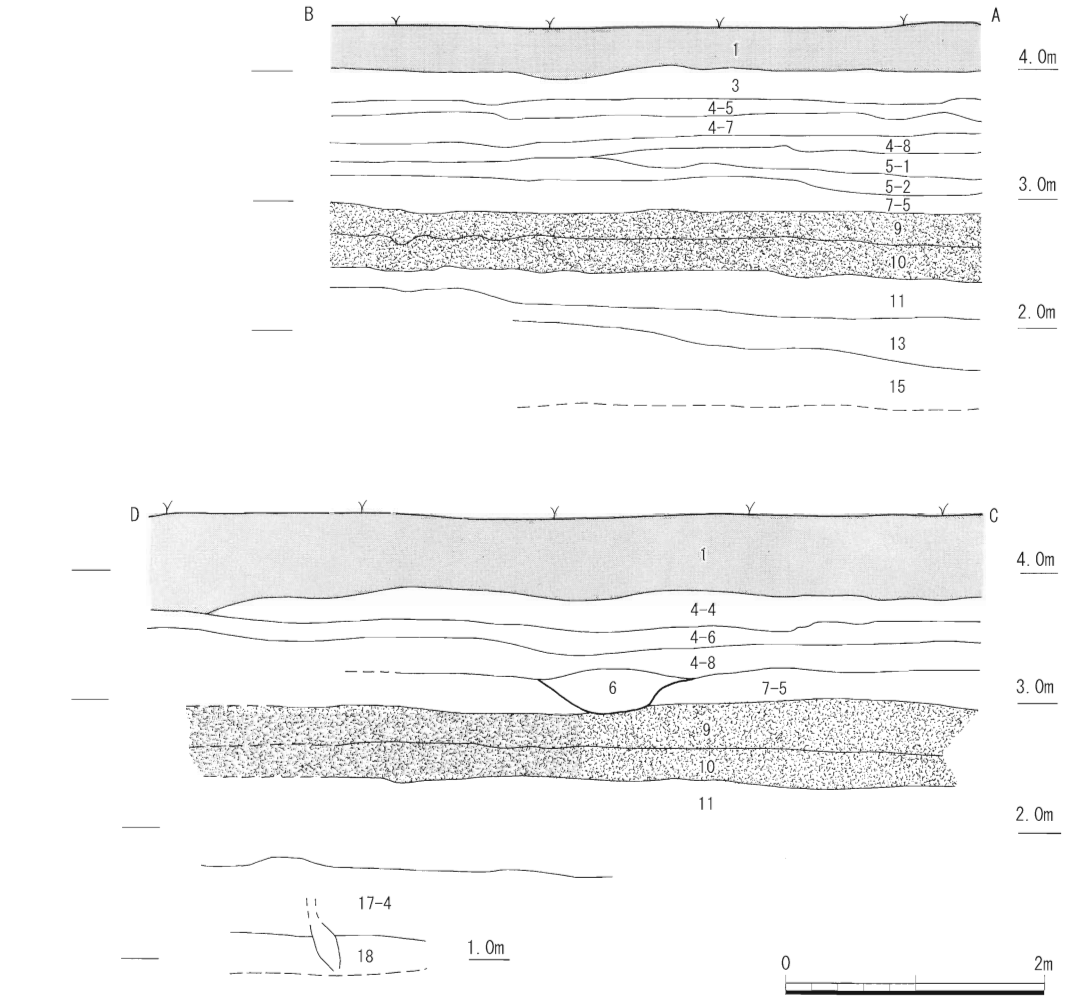
山持遺跡２区、3区の調査では湧水が著しいことが課題となった。５区の調査でも湧水が予想され、そのために下部にある弥生時代～古墳時代の遺物包含層を完掘する前に調査区の壁が崩壊する可能性も危惧されたので、全体の遺物量や遺構のバランスを考え、５区の調査では弥生時代～古墳時代の遺物包含層を完掘することを第一の目的として調査を行った。そのため、オモカス層より上位の部分は主に機械による掘削を行い、遺物を確認した時点で人力による調査を行うこととした。



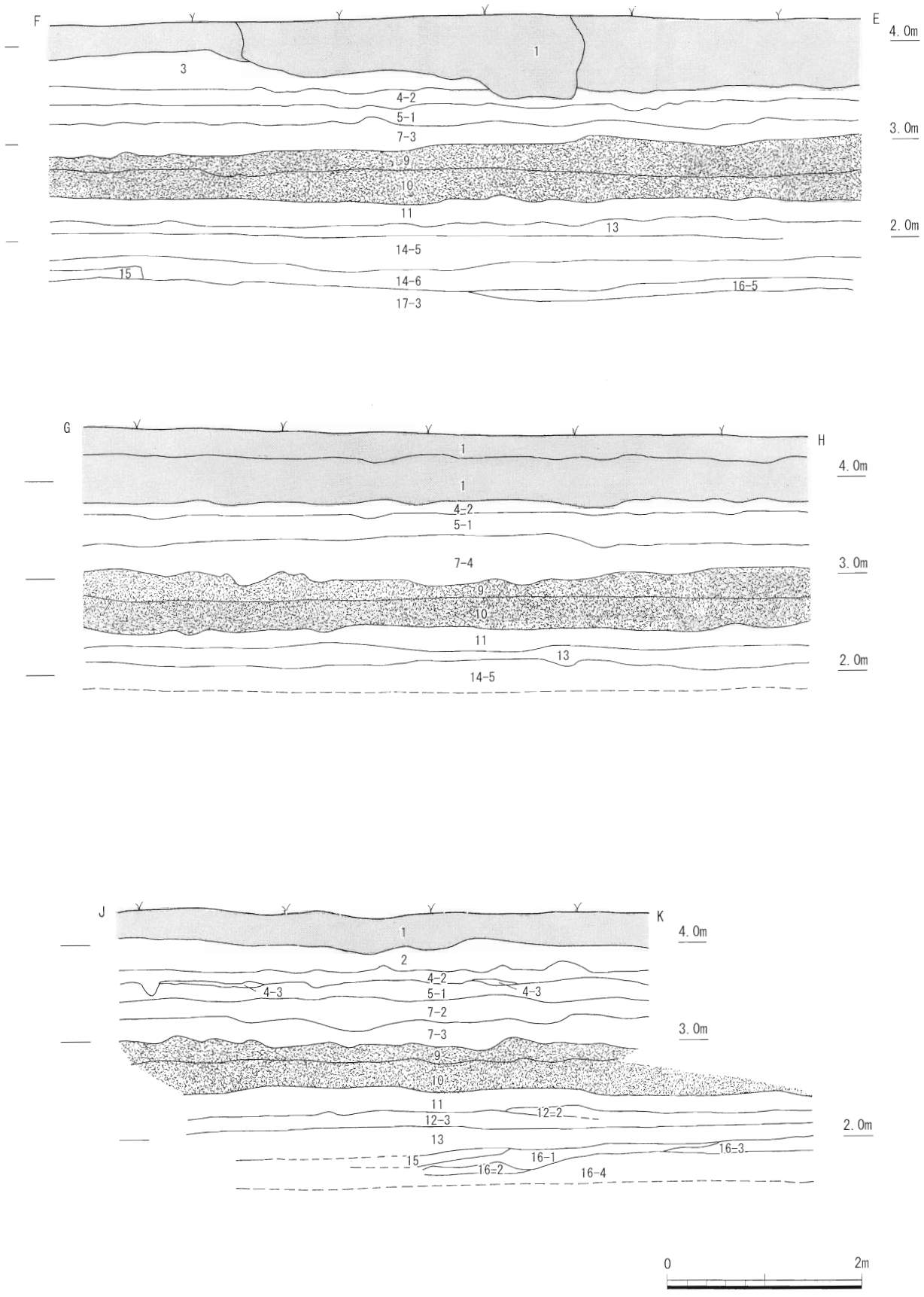
第84図　山持遺跡５区調査区位置図（S=1/6,000）



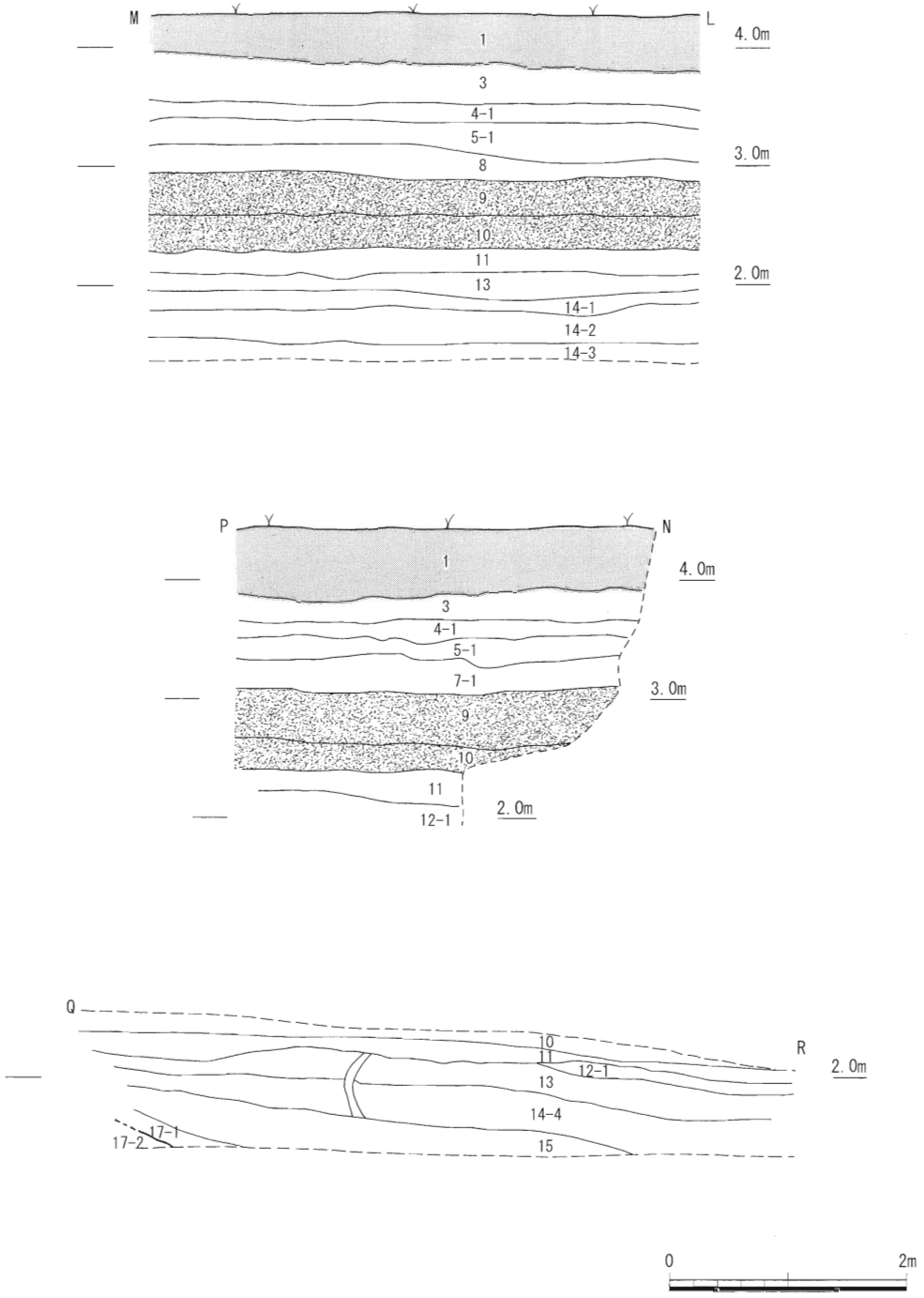
第 85 図　山持遺跡 5 区グリッド配置図（S=1/800）



第 86 図　5 区土層図（1）（S=1/60）



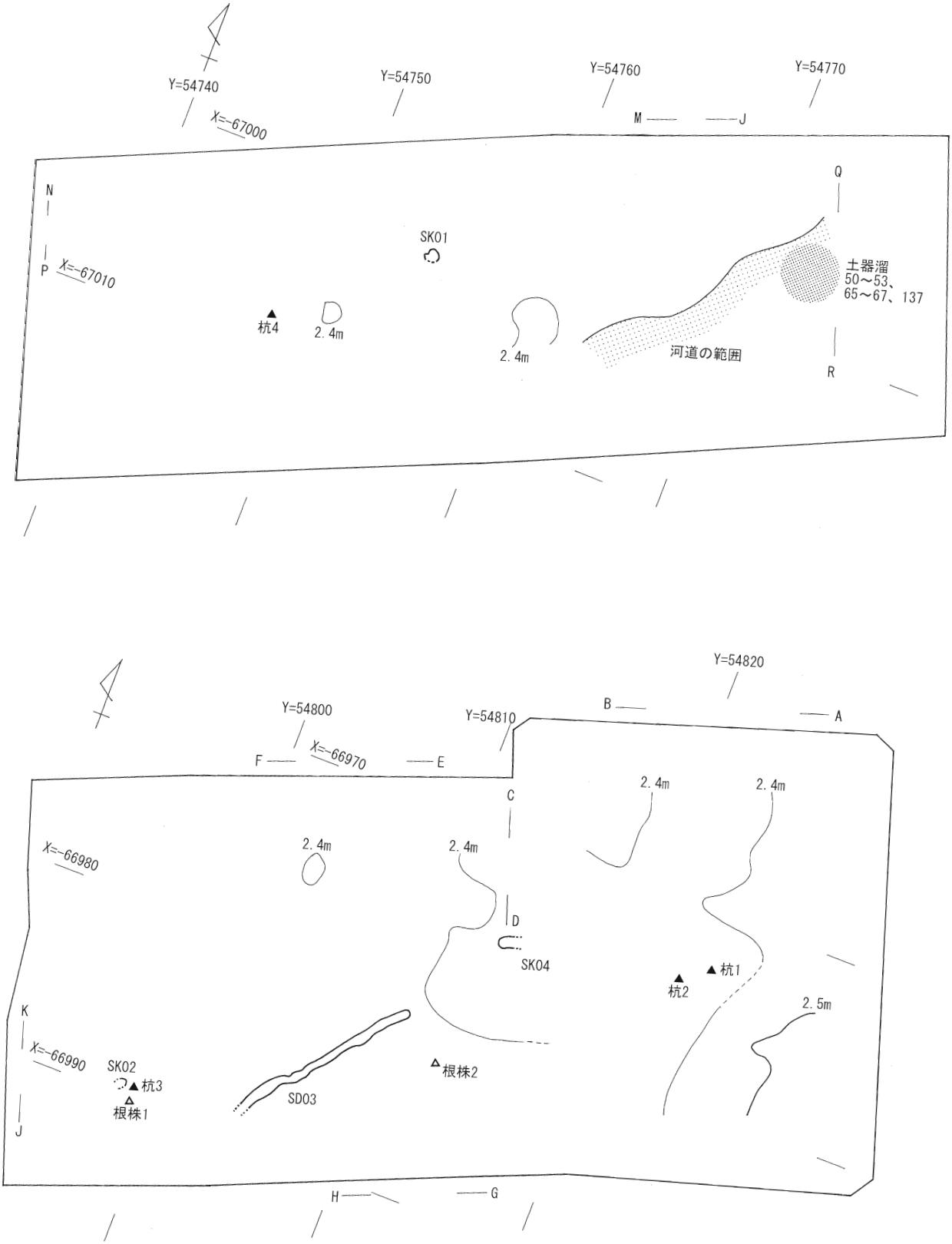
第87図　5区土層図 (2) (S=1/60)



第 88 図　5 区土層図 (3) (S=1/60)

山持遺跡5区土層一覧表

1	浅黄橙色～明黄褐色	10YR8/4～10YR6/8	（盛土）
2	明黄褐色土	10YR6/6	粘質
3	明黄緑色～緑色粘土	7.5GY7/1～10G6/1	
4-1	黄灰色土	2.5Y5/1～4/1	5-1層との境に細砂
4-2	褐灰色土	7.5YR5/1～4/1	
4-3	明褐灰色細砂	7.5YR7/2	
4-4	青灰色土	10BG6/1	
4-5	赤灰色土	2.5YR4/1	
4-6	暗赤灰色土	5R5/1	
4-7	青灰色土	10BG6/1	
4-8	青灰色土	5BG6/1～5B6/1	
5-1	緑灰色粘土	10G5/1～5G5/1	
5-2	緑灰色土	10G6/1～6/2	
6	黄橙色土	10YR8/6	
7-1	灰色土	10Y4/1	
7-2	灰色土	10Y5/1	粘質
7-3	灰色土	7.5Y4/1	
7-4	暗オリーブ灰色土	2.5GY4/1	
7-5	灰色～灰オリーブ色土	5Y6/1	
8	青灰色粘土	5BG5/1	
9	黄灰色～黒褐色有機質層	2.5Y4/1～3/1	オモカス
10	黄灰色～オリーブ黒色有機質層	2.5Y6/1～7.5Y3/1	オモカス下層
11	褐灰色土	10YR6/1～4/1	遺物包含層
12-1	黄灰色土	2.5Y5/1	
12-2	褐灰色細砂	10YR4/1	
12-3	灰黄褐色土	10YR4/2	
13	褐灰色粘土	10YR5/1	遺物包含層、11層より軟質
14-1	オリーブ黒色粘土	5Y3/2	
14-2	オリーブ灰色粘土	5Y4/1	
14-3	オリーブ灰色粘土	5Y5/1	14-1,2,3の順により軟質
14-4	黄灰色細砂	2.5Y6/1	
14-5	褐灰色粘土	10YR6/1	
14-6	青灰色粘土	5B5/1	軟質
15	褐灰色～灰色砂	10YR4/1～5Y6/1	遺物包含層
16-1	黄灰色土	2.5Y4/1	砂質
16-2	黄灰色細砂	2.5Y4/1	
16-3	灰色土	7.5Y6/1	
16-4	灰色砂	10Y6/1	
16-5	青灰色砂	5B6/1	
17-1	オリーブ灰色細砂	5GY6/1	
17-2	褐灰色粘土	10YR6/1	軟質
17-3	灰色砂礫	5Y6/1	
17-4	灰色細砂	7.5Y6/1	
18	暗褐色土と青灰色砂の互層	7.5YR3/4、5B6/1	



第 89 図　5 区遺構位置図 (S=1/300)

0　10m

平成17年度の調査は里方本郷遺跡の調査が終了した後、5区の東側を同年10月24日から開始した。湧水が著しく、調査区の東側の壁が崩壊する可能性があったので、山持遺跡3区との対比の検討が不十分ではあったが、12月2日に調査を終了した。平成18年度の調査は同年5月16日から調査を開始した。排土を置く場所が用地内でしか取れないので、5区の中央に位置する水路の西側から調査を行い、西側の調査の終了後、引き続き東側の調査を行い、9月25日に調査を終了した。調査終了後は山持遺跡6区の調査を行った。調査終了後は整理作業を行い、平成19年度も引き続き整理作業を行った。平成17年度には（財）石川県埋蔵文化財センター、平成18年度には守山市埋蔵文化財センターを訪問し、木質遺物の整理方法や出土木製品の比較検討を行った。

調査では10ｍ×10ｍのグリッドを設定し（第85図）、遺構に伴わない遺物は層位を確認してグリッド単位で取り上げた。調査では土坑SK01、SK02、SK04、溝SD03、土器溜、杭などを検出した。調査面積は合計1,788㎡である。出土した遺物はコンテナ約50箱である。山持遺跡5区では調査の日程の関係で現地説明会を行わなかったが、山持遺跡6区の現地説明会（平成18年8月5日、10月8日）に際して遺物や写真の展示を行った。

第2節　層序

調査前の標高は4.3～4.5ｍであった。盛土が最大で約80cm堆積している部分があった。8箇所で土層図を記録したので、相互の関係を把握し切れなかった部分があり、層の数だけが多くなった感がある。土層は調査時の観察を元に、オモカス層や遺物包含層を「鍵層」として、それ以外の層をまとめて記述した（95頁）。標高3.0ｍ付近にオモカス層が約60cmの厚さで堆積していた。盛土からオモカス層までは機械で掘削を行い、オモカス層の上面～中位から人力での掘削を行った。オモカス層は色調により、上下の二つに分けることができた（9層、10層）。オモカス層からは次で述べる11層に比べて土器の出土は少なかったが、奈良・平安時代の須恵器や土師器が出土した。

11層は10層と色調や土質が区別できることに加え、11層の上面が硬く締まっていることから、容易に判別することができた。11層上面では等高線を測量し、第89図に示した。11層上面の標高は2.4～2.5ｍである。11層の下では13層や15層から遺物が出土した。13層では土師器が出土したが、15層は弥生時代後期の土器のみが出土したので、11層や13層の堆積した時期は古墳時代前期を下限とするのに対して、15層は弥生時代後期と考えられる。16層から18層は砂層または砂質の層で、軟質で湧水が著しく、遺物が出土しなかった。

既往の調査の土層の対応では、山持遺跡3区で確認した「Ⅵ層」（12～15世紀の土石流層）が5区では明確に確認できなかったこと、「Ⅷ層」（奈良時代の土石流層）が確認できなかったことにより奈良時代の遺構を確認することができなかったことが挙げられる。

なお、11層上面を検出中に噴砂を確認した。これまでに出雲市による山持川川岸遺跡の調査で噴砂が確認されている（出雲市教育委員会編1996）。

第3節　遺構

SK01（第90図）　西側の調査区、E8グリッドに位置する。完形の甕が出土したので、周囲を精査したところ、土坑の存在を確認することができたが、周囲の精査の際に遺構の南側を破壊してしまった。平面形は不整形であり、現状で一辺約90cmである。土坑の底付近の埋土には炭が多く混じっ

ていた。この炭混じりの土を土嚢３袋分持ち帰り洗ったが、炭の破片や土器の細片があるのみであった。土坑の南側には弥生土器の小型の甕が口縁部を下にして置かれており、口縁部は土坑底面に接していた(第96図1)。甕は底部が破片になっており、接合してほぼ完形に復元することができたが、底部は欠損している。これは倒立して出土したことと関連していると考えられる。

SK01の時期は、出土した土器から弥生後期後葉（Ⅴ-3）と考えられる。

SK02（第91図） 東側の調査区の南西隅、C4グリッドに位置する。SK02も土器を検出した後に精査して遺構を確認することができたが、遺構の輪郭が不明瞭で、遺構の検出や埋土の調査が他の遺構に比べて難しかった。平面形や遺構の寸法は不明である。本来はより上位の層から遺構が掘り込まれていた可能性がある。遺構からは弥生土器の小型の甕が口縁部を北の方向に向けて、横倒しになって出土した（第96図2)。土器はつぶれたような形で、破片で出土した。接合してほぼ完形に復元することができたが、この土器も底部を欠損している。

SK02の時期は、出土した土器から弥生後期後葉（Ⅴ-3）と考えられる。

SD03（第92図） 東側の調査区の西側、B2からC3グリッドにかけて位置している。13層上面では検出できず、13層を掘削中に検出した。調査区の南側へ伸びているが、長さは現状で約10m、幅は上面で約40cm、深さは最大で6cmと浅いが、これは本来この溝は13層の上位で検出することが可能であったことによるのかもしれない。埋土は1層で、13層との区別は容易であった。遺物は出土しなかった。層位から弥生後期～古墳前期と考えられる。

SK04（第92図） 東側の調査区の東側、B2グリッドに位置する。14-6層中で検出した。東側は排水用の溝で切られており、現状で平面形は長方形、幅約60cmである。埋土は1層である。遺物は出土しなかったが、層位から弥生後期～古墳前期と考えられる。

土器溜（第89図） 西側の調査区の東端、D6グリッドに位置する。11層を検出した際に土器の破片が密集して出土した（写真図版48-2)。厚みはなく、土器の重なりはほとんどなかった。この土器溜からは土師器が出土したが、鼓形器台が中心で（第99図50～53)、その他に低脚坏や高坏が出土した（第99図65～67)。土器の他には磨石が出土した（第103図137)。次に述べる河道の上に位置している。鼓形器台とセットになる甕や鉢の出土がほとんどないこと、遺物の厚みがなく、焼土なども確認できなかったことから、祭祀行為が行われたことを積極的に証明することは難しい。土器溜の時期は出土した土器から古墳前期と考えられる。

河道（第89図） 土層図QR（第88図）では北側が高く南側が低い土層の傾斜を確認することができたが、15層とその下の17-1層で区別することができたので、この境を記録した。どちらが上流か、高さの差がなかったので現地では分からなかったが、山持遺跡3区の様相から、東から西へ向けて流れていたと考えられる。調査区の東側は遺物が多く出土したことに加えて、東側は特に湧水が著しかったこととあわせると、今回確認した河道から東側の部分は、3区から続く自然河道SR03に含まれると考えられる。遺物はあまり密集せずに出土したことに加え、湧水があり、遺物と層位の関係を把握しながら取り上げることが難しかったが、遺物の取り上げた日付を見ると、おおむね上層に土師器があり、下層には弥生土器があるという層位の上下による傾向は存在する。この河道の時期は、土層の対応から弥生後期後葉～古墳前期を中心としていたと考えられる。

遺構は他に杭1～4を検出した。遺存状態が悪かったので、杭3のみ実測することができた（第93図)。また、B1グリッドの標高約2.2ｍを掘削中に建築部材が出土した（第93図、写真図版

57)。長さ約3.4m、直径約24cmの掘立柱建物の柱で、頭部は輪薙込みに加工している。末端部分から約90cmのところまで細くなっており、特に末端から約50cmの範囲が半分程度の太さになっているので、この部分が地中に埋まっていたと考えられる。この柱材の樹種はケヤキである。この柱材は現地で実測した後、サンプルを採取した。

遺構ではないが、15層の検出中、標高2.0m付近において根株を2箇所で確認した（第93図）。根の部分のみ残っており、幹の部分は欠損していた。時期は弥生後期と考えられる。樹種はヤマグワである（第7章参照）。

第4節　遺物

5区から出土した遺物は、土器、石器、木質遺物がある。土器は9層や10層からはあまり土器が出土せず、11層から最も多く出土した。土器では土師器が最も多く出土し、弥生後期の土器がそれに次ぐ。土器はA1、E8、E9グリッドから多く出土し、なかでもE9グリッドが最も多かった。13層や15層は弥生後期の土器が多い。13層はB3、D4グリッド、15層はC3グリッドから主に出土した。

土器は遺構出土遺物、古墳時代～古代・中世の須恵器・土師器、古墳前期～中期の土師器、弥生土器の順で記述する（第96～102図）。

SK01（1）　やや小型の弥生後期の甕である。肩部の刺突文は密である。口縁部は上方に伸び、下端の稜はあまり突出しない。

SK02（2）　やや小型の弥生後期の甕である。肩部から上の摩滅が著しく、口縁部や肩部の文様は不鮮明である。1と器形や寸法が良く似ており、同時期と考えられる。

1、2の土器は口縁部の貝殻直線文から弥生後期後葉（Ⅴ-3）と考えられる[1]。

F9グリッド出土土器（3）　第91図で出土状況を図示した弥生後期の壺である。胴部の調整は粗いヘラミガキである。口縁部に9条の凹線文があることから、後期中葉（Ⅴ-2）と考えられる。

古墳時代末～古代・中世の土器（4～17）　9～10層から出土したものが多く、11層から出土したものも、本来は10層に属すると考えられる。4～9は須恵器である。7は外面に自然釉がかかっている。4は古墳時代末（7世紀前半）、7は飛鳥時代（7世紀後半）、8は奈良時代（8世紀前半）と考えられる。10～17は古代・中世の土師器である。10～12は破片が小さいが別個体である。13は内面に炭素を吸着している。15は高台部が伸びる坏である。16は赤彩の土師器である。13、14は平安時代（10～11世紀）、15は平安時代末（12世紀）と考えられるので、9～10層の時期は隣接する山持遺跡3-2区の様相とよく似た傾向である。

古墳前期～中期の土師器（第97～99図）　19は直接接合しないが、同一個体と判断し台付き壺と考えた。20は口縁部が直線的に伸び、口縁下端の稜は下方へ鋭く突出する。平底であるが自立しない。21は口縁部がわずかに屈曲し、口縁下端の稜は水平方向へ伸びて、あまり突出しない。21の外面に付く炭化物の位置は、半周分は体部上半に、残りの半周分は体部下半に付く。土中の埋没状況や埋没時の位置の関係の可能性がある。このような炭化物の状態を示す土器は27がある。22は口縁端部に面がある。口縁下端の稜は鋭く突出する。23は口縁端部に面があり、口縁下端の

[1] 口縁部の文様はこれまで「擬凹線文」と記述されることが多かったが、文様の原体の中には貝殻と考えられるものがあるので、原体がわかるものは「貝殻直線文」や「櫛描直線文」と記述した。

稜は水平方向へ突出する。24、25は大形の甕である。26は頸部を除いて外面に炭化物が付着する。口縁部は厚く、口縁端部は丸くおさめるところや口縁部下端の稜がつまみ出すように突出するところは古い様相を示すが、胴の張る器形であるので新しい要素も持っている。27は平底なので鉢に分類した。全体に薄手で、口縁部も薄く、稜も尖っておりシャープな印象を受ける。底部にも全面に炭化物が付着する。底部は中央部が突出する。28は注口土器である。肩部の列点文は密になっている。

29～31は壺である。29は口縁部が内側に伸びる。31は大きな破片であることから壺と判断した。32～43は甕である。34、36、39は口縁部の先が尖り気味で、口縁下端の稜は下方へ伸びている。40～42の口縁下端の稜はつまみ出したように下方を向く。38、43は口縁端部に面を持ち、口縁下端の稜は水平方向に伸びる。44は高坏である。なお、37、38は13層から出土した。45～49は古墳中期の土師器である。45は複合口縁を強いヨコナデで表現しており、痕跡的になっている。口縁内面に面を持つ。46は口縁部が太く短くなっており、新しい要素がある。47～49は内外面赤彩の高坏である。口縁部と体部の間にヨコナデなどによる稜がある。47、49は暗文風のヘラミガキを施す。48は摩滅しておりヘラミガキを確認できない。

50～59は鼓形器台である。土器溜からの出土が多い。50～53は土器溜から出土した。破片数は多いが接合できずに器形を示せない個体が多く、幾つかの破片を図上で復元した。50の台部にはヨコナデが強い部分があり、凹線文風になっている。51は受け部外面に波状文がある。50、51、54、59はしっかりと作っており稜がシャープだが、52、53、55、58は摩滅しており稜が丸くなっている。60～64、66、67、69は高坏である。60は口径が大きい。ミガキの単位や幅が狭く、古い特徴を示す。61、62は口縁内面にわずかな稜がある。62は図上で復元した。65～67は土器溜から出土した。63、66、67は脚部内面に細い棒状の工具による刺突の痕がある。65、70、72～74は低脚坏である。口縁部や体部の破片を確認できなかった。68は小型器台である。71は脚部だが器種は不明である。大形の脚部になる。75～77は高坏の脚端部と考えられる。75は外側に開き気味で脚端部に伸びる。小型の高坏か小型器台の脚部と考えられる。

これらの古墳時代の土師器は、20、28、34～36、39～42、60は古墳前期初頭（草田5期）、21～23、27、32、37、38、43、61、62、75は前期初頭（草田6期）、46は前期後葉（小谷4式）、45、47～49は中期と考えられる。その他の土器は前期初頭～前葉（草田5期～7期）と考えられる。

弥生土器（第100～102図）　78は弥生前期の甕である。胴部が張る器形である。前期後葉（Ⅰ-3）～前期末（Ⅰ-4）と考えられる。79は外面に火を受けた痕がある。胎土は弥生前期の土器に似る。80は弥生中期の高坏脚部である。摩滅が著しい。脚部に4条の凹線文があるので、中期後葉（Ⅳ）と考えられる。

81～135は弥生後期の土器である。全形の判る個体は少ない。81は壺である。口縁部と肩部には貝殻による文様がある。胴部に黒斑があり、横に置いて焼成したことがうかがえる。作りが厚い。82～88はいずれも貝殻による施文を行う。85、86は口縁部が長く、直線文の条数が多い。87の口縁端部側は直線文をナデ消している。90は短頸の壺の可能性がある。91、92、94、95は口縁部に凹線文がある甕である。96～98は口縁部に貝殻による直線文がある。93は口縁部の施文原体が不明である。91～98は口縁部をあまり拡張せず、器壁が厚い。

99～109、117、118は口縁部を厚く作り、上方に拡張する甕である。99は胴部下半を欠く。肩

部の連続刺突文は原体である貝殻がはっきり判る。105、106は口縁部の文様の原体が貝殻ではない可能性がある。110～114は口縁部の厚みは変わらないが、下方にも拡張して口縁部下端の段が明瞭になり、口縁端部をやや厚く作るものである。116は摩滅によって口縁端部の文様が不明瞭だが、薄く作っている。118の直線文は他の文様に比べて細く、貝殻以外の原体を用いた可能性がある。119は貝殻波状文の下に半截した竹管を互いに合わせて、「C」字と逆「C」字の形にしている。

121～126は口縁部に直線文以外の文様やナデ消し、ヨコナデのものである。121、122は大形の甕であり、厚手である。共に摩滅が著しい。123は炭化物が付着して調整は不明である。口縁部はヨコナデのようである。肩部の沈線はヘラ描きである。124は口縁部の中ほどをヨコナデしており、その部分の文様は不鮮明である。125は炭化物が厚く付着しているが、口縁部はヨコナデまたは文様をナデ消しのようである。126は口縁部に波状文を施し、その上下をナデ消す。127は器台の筒部である。沈線で筒部を上下に区画し、その中に「C」字と逆「C」字の半截竹管文を施す。128～131は鼓形器台である。128、129は受け部である。128は貝殻直線文の間にヘラミガキ調整を行い、直線文に装飾的な効果をつけている。129も直線文の間に間隔がある。130、131は台部である。共に台部の幅が短い。132、133は装飾のある鉢の胴部である。134は注口土器である。短い注口部がつく。134は小型の鉢である。短い複合口縁がある。

以上の弥生後期の土器は、91、92は後期前葉（Ⅴ-1）、93～98、127、130、131は後期中葉（Ⅴ-2）、その他の土器は後期後葉（Ⅴ-3）が中心であり、121や123～126はさらに新しい時期に下る要素を持つ。

なお、多くの土器は11層から出土したが、90、91、123～125、128、133、134は13層、95、120は15層から出土した。

石器、土製品（第103図）　136は敲石である。側面に敲打痕がある他は全面磨り面である。重量があるがよく使われている。137は土器溜から出土した磨石である。表と裏面はあまり使用された痕跡が無い。側面には敲打痕がある。139～141は砥石である。139は緑色凝灰岩製の砥石である。長方形の長側面4面共に使用されている。142は製塩土器である。143は15層から出土した石鏃である。凹基式であるが、風化が進み剥離は不明瞭である。

木質遺物（第104～110図）　出土した木質遺物は、農耕土木具・容器・運搬具・施設材または器具材・建築部材・その他の部材がある。木質遺物の多くが東側の調査区で出土し、特にA1やB1グリッドで多く出土した。土層では145、153、165が9層から出土し、それ以外は11層から出土したので、多くの木質遺物は弥生後期～古墳前期の幅に収まると考えられる。

144は農耕土木具の曲柄又鍬である。頭部と刃部を欠く。145は同じく組み合わせ平鋤である。身の半分を欠損するが、身の中程に長方形の柄孔があるのを断面で確認できる。146は容器の脚付きの皿である。身の一部を欠損し、炭化部分がある。脚は側面が逆台形の突起状である。全体に薄く丁寧に仕上げている。上面観は隅丸方形である。147は曲物の底板である。比較的大形の、平面形が楕円形になる曲物の底板になると考えられる。樹皮で綴じているので、奈良・平安時代の曲物であるが、層位は11層で他の木質遺物と共に出土した。上層からの混入の可能性が強い。148、149は刳物桶である。148はやや小型である。全体に薄く仕上げている。149は遺存状態が悪く、稜が甘くなっている。

150は全体に湾曲しているので容器の可能性がある。片面を赤で塗っており、側面には小孔があ

る。151は桶の底板である。側面の5ヶ所に木釘がある。木目が直線的で詰まっており、大径木を使用した可能性がある。152は破損部分に沿って3ヶ所に小孔があいている。小孔から破面へ向けて溝状に続いている。孔の数が多いが田下駄の可能性もある。153は板材である。154は破損している部分が多いが、長方形の板に取っ手が付いたような形をしている。板の部分には1列に小孔が開いており、取っ手に近い部分は直線ではなく弧を描くように屈曲している。取っ手の部分にも4つの小孔が開いている。薄いつくりなので、他の材と組み合わせて用いると考えられるが、形態や用途は不明である。155は円形の板から伸びる部分がある。156は147と同じ場所で出土したが、接合はしない。別の材の可能性もある。

157は破損部分が多いが、平面が涙滴状であり、わずかに柄孔の傾斜が残ることから、農耕土木具の組み合わせ平鋤の可能性がある。横断面は若干湾曲する。158は平面が長方形で一端は段状に一段狭くなる。形態から農耕土木具の組み合わせ平鋤未製品と考えられる。157、158は樹種がアカガシ亜属であることも農耕土木具であることの傍証となる。159は細長い板材の上下端を段状に作り出す。160は運搬具の櫂である。形態に加えて樹種がスギであることも櫂であることを示す。161は細長い板状の一端を段状に作り出す。162には短辺側に炭化部分がある。163は板材であるが、短辺側に凹む部分がある。年輪幅が密で、大径木から伐採していると考えられる。164は杭である。一面から加工しているので、第3章第3節で述べた「斜段状加工a」に相当すると考えられる。165は薄い板材である。折敷の可能性がある。片面には刃物の痕が残っている。

166はa～cの3点が1列になって出土した（写真図版54-3）。aとbは接点がある。図面の左側が平坦な面で、側面形は台形である。aとbの平坦な面の一部は黒色に変色している部分がある。全体に加工痕は確認できず、短辺側の劣化が著しいが、樹種がケヤキであることや片面を平坦にしていることから考えて、皿などの容器の未製品の可能性がある。167は年輪に沿って分割した材である。材の外側から樹径を復元すると25～35cmになる。

168は西側の調査区の北西隅から出土した部材である。図面の左側の下の方に劣化している部分がある。板材ではなく未製品の可能性があるが、未製品の器種は不明である。169は西側の調査区の西端に矢板状に立っていたが、調査時の不注意で図面をとることができなかった。図面の上の部分の劣化が著しいことも矢板状であったことを示す。長側面側の二方向から加工し、先端は尖る。170は板材である。図面の上の方を中心に、全体に劣化が進んでいる。側面には工具痕がある。171は建築部材の梯子である。幅が23.5cmであり、比較的幅のある梯子である。表面の一部は炭化している。

172、173は接合し、梯子を分割して転用した材であることがわかった。172は図面の上の方を斜めに加工し、その下には方形の欠き込みがある。173を分割した痕はそのままで、加工は行われていない。173は梯子の足を掛ける部分が残っている。これも一端を斜めに加工している。172、173共に表面には加工痕があり、図面の下の方は加工していない。174は施設材の木樋である。両端には小孔があり、7ヶ所確認できる。山持遺跡ではこれまでに2点の木樋が出土している。175～177は杭である。175は断面台形に分割して形を整えた後、向かい合う二方向から加工を行って先端を尖らせる。176は断面三角形に分割した後、三方向から加工を行って先端を尖らせる。共に「斜段状加工b」に相当すると考えられる。175と176は遺存状態が良く似ており、元々は同じ木から分割された可能性がある。177は分割材の全面を加工しており、杭としての加工を行っている痕は

無いようである。

178～182は施設材または器具材の板材や棒材である。178は細長い板材で一側面は弧を描く部分がある。方形の孔が1ヶ所、欠き込みが1ヶ所ある。179は接合しないが同一の板材と判断した。小さいほうの材には円孔がある。180は断面長方形に分割している。181は分割材で、二面に加工痕がある。杭状に先端を尖らせているが、他の材と一緒に出土した。一端は出ほぞ状に出ているので、建築部材を分割した可能性がある。節の多い材を使っている。182は一端を側面から加工して尖らせている。

第5節　小結

山持遺跡5区の調査では、奈良時代以降の遺構を確認することはできなかったが、調査区の西側では弥生時代や古墳時代の土坑や土器溜を確認できたことに加え、5区の東側では3区から続く自然河道の中を調査したことにより、主に弥生時代～古墳時代の遺物が多く出土した。11層の上面は硬く締まっており、人の活動によるものと考えられるので、調査箇所は居住域に近接していたと考えられる。

石器の中には緑色凝灰岩製の砥石がある。四面ともよく使用されているが、砥石にはあまり用いない石材である。山持遺跡4区では緑色凝灰岩製の砥石または鍬形石が出土していることとあわせて、小規模な原石の搬入が行われていたことがうかがわれる。また、古墳前期の土器溜から磨石が出土した。鼓形器台や高坏などと一緒に出土しているが、土器溜の遺存状態が悪く、詳細は不明な部分が多い。

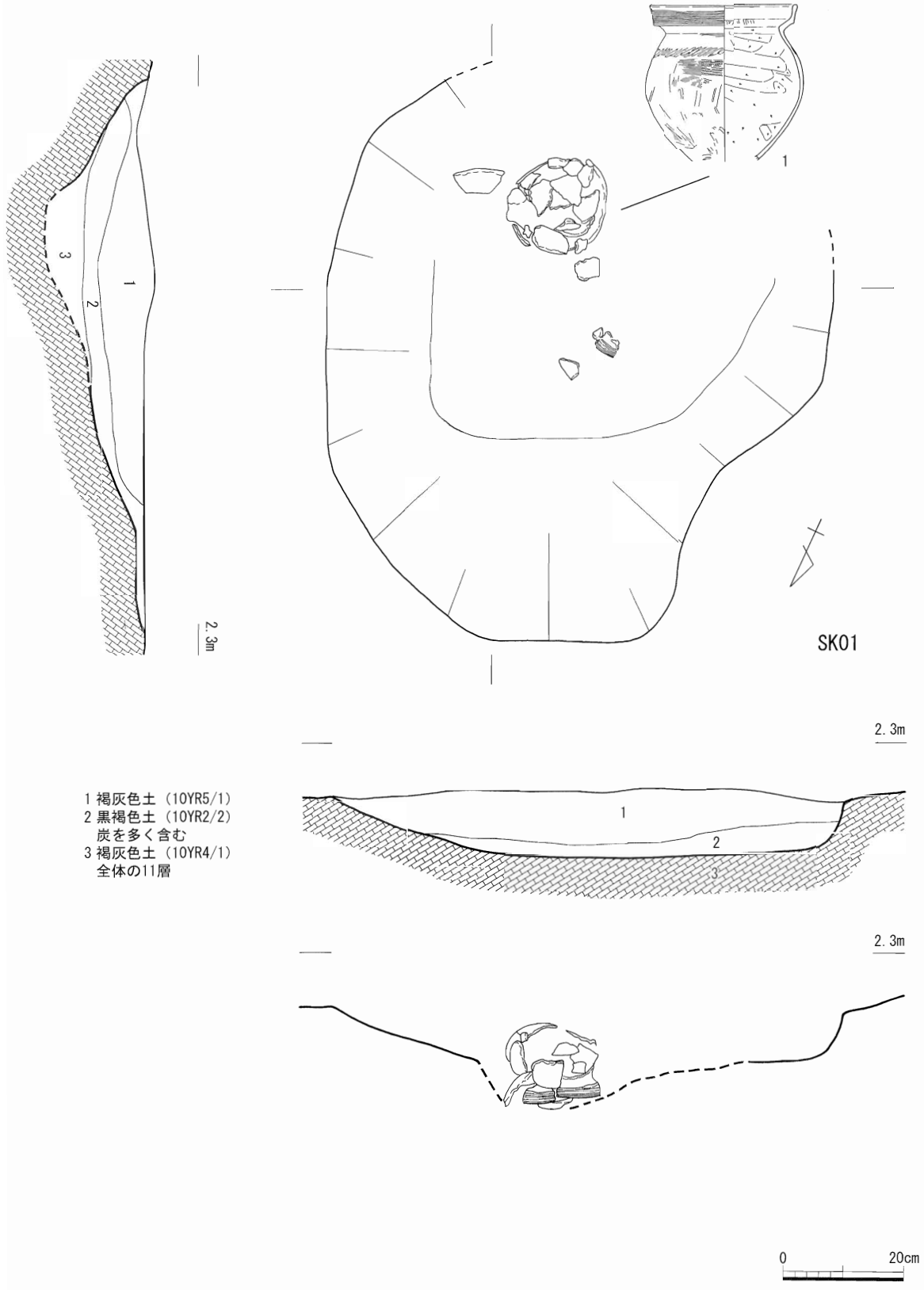
木質遺物の中の157、158は、農耕土木具の鋤の可能性があるが、類例のない形をしている。146の脚付皿は、邑南町順庵原1号墓で出土した四脚の土器に似ている（島根県古代文化センター編2007　図12-5)。今回出土した脚付皿146は、一部炭化している部分があるが、全体に薄く丁寧に作っているので、精製品の可能性が強い。順庵原1号墓の土器はこのような精製品を模倣して製作した土器の可能性がある。用途不明品154は、これまで県内では出雲市大社町五反配遺跡（島根県教育委員会編2004　370～376)、出雲市矢野遺跡で出土しているほか、京都府京丹後市古殿遺跡（(財）京都府埋蔵文化財調査センター編1988　図版75-43～48)、滋賀県守山市下長遺跡（守山市教育委員会編2001　47-373）で出土している。これらはいずれもスギを用いており、他の材と組み合わせて用いるものであると考えられるが、今回出土した154は遺存状態が悪いこともあるが、厚さが1.3cmと薄く、強度の点で疑問がある。また、154は幅広の「身」と細い「柄」の部分があるが、他の例に比べて「柄」の幅が広く、孔が4箇所開いているので、これらの4例が同一の器種ではない可能性もあるが、今後の課題として指摘したい。

木質遺物の樹種について表11に掲載している。出土した木質遺物から選択して樹種を同定したが、農耕土木具の鋤や鍬はアカガシ亜属である。容器にはスギやヒノキの他、ケヤキなどがある。その他、建築部材、施設材・器具材、土木材はスギである。これらの樹種は（島根県古代文化センターほか編2006）で検討した器種と樹種の傾向と一致している。

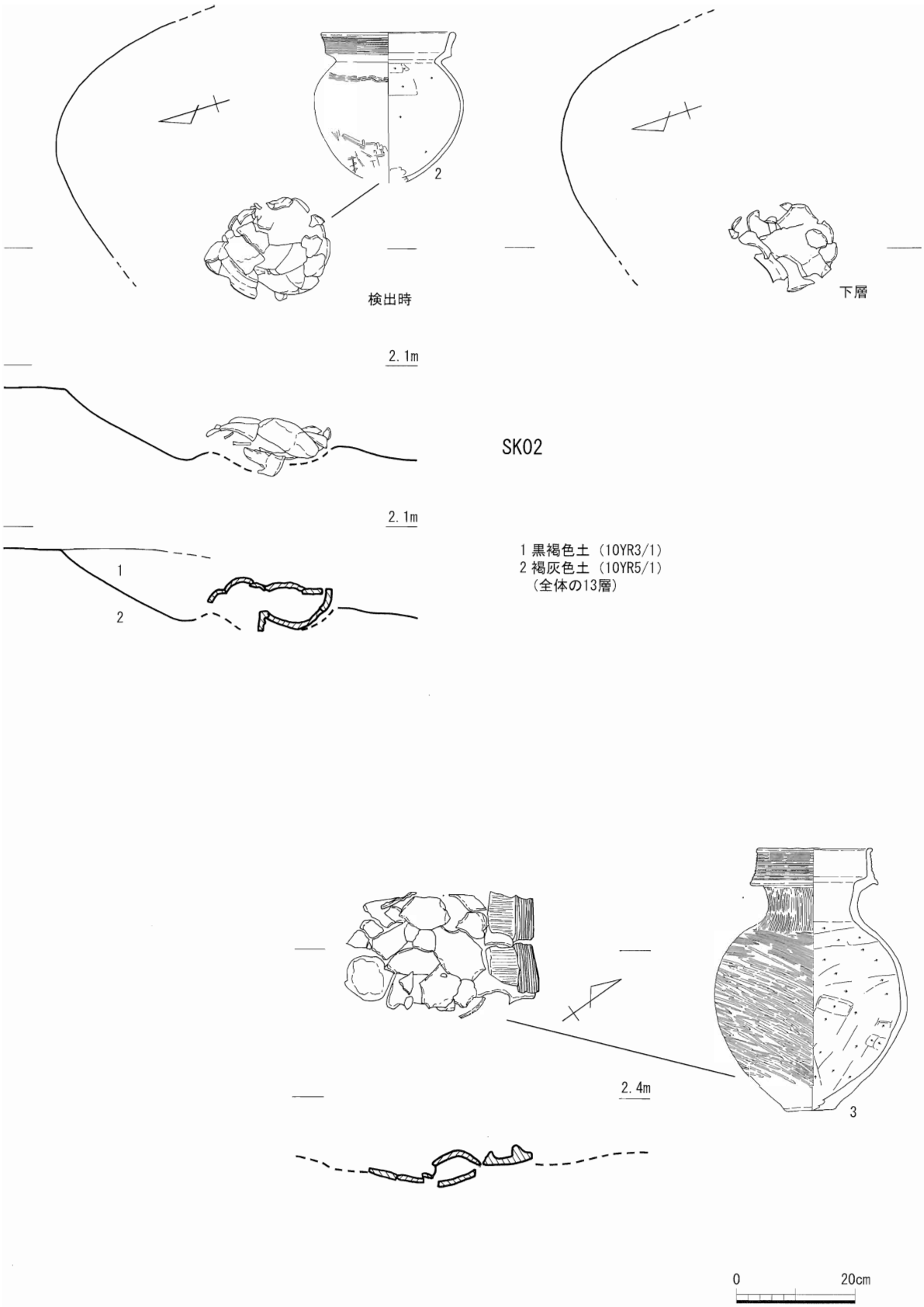
【文献】

(財）京都府埋蔵文化財調査センター編『古殿遺跡』　1988

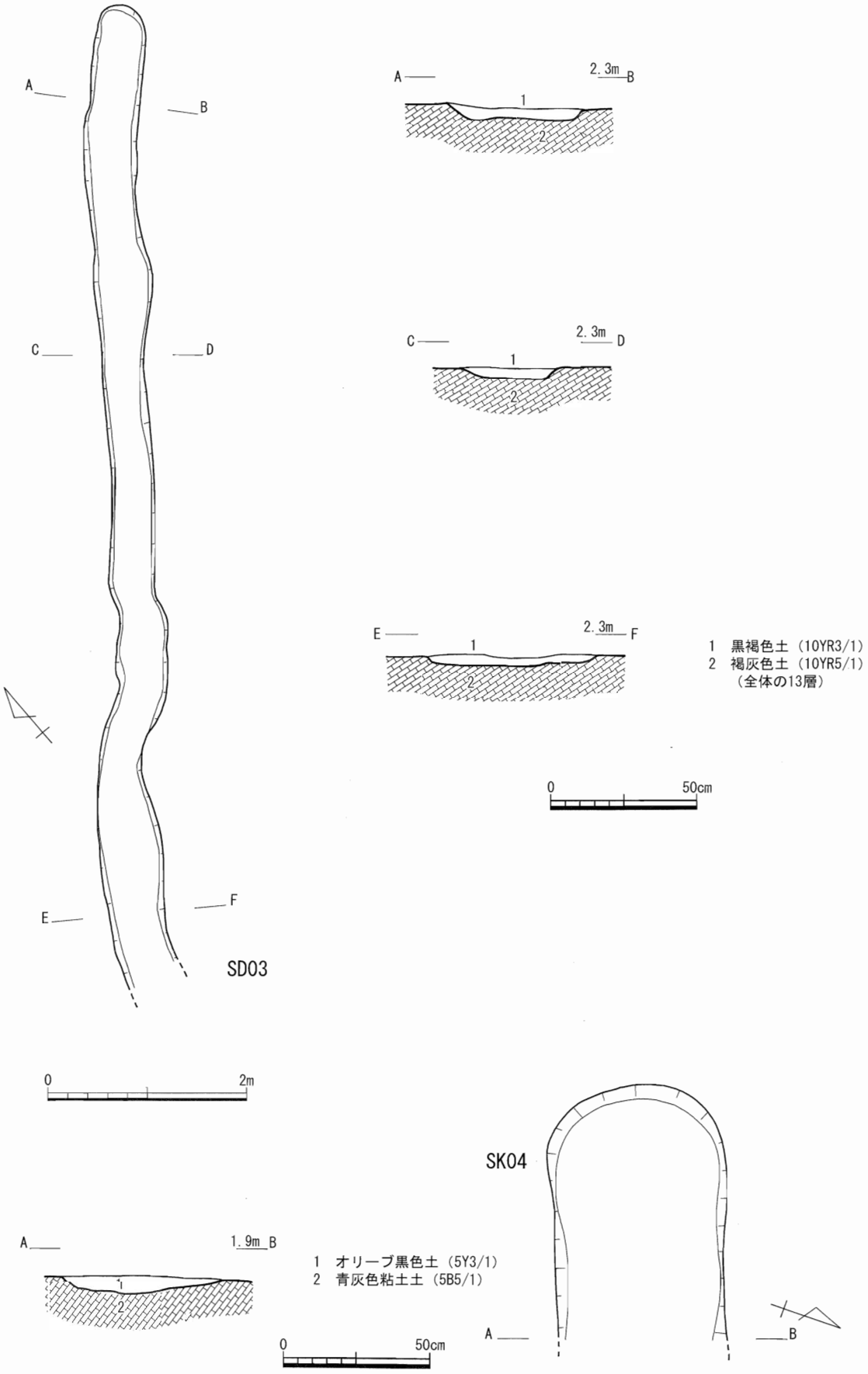
出雲市教育委員会編『山持川川岸遺跡』 1996
守山市教育委員会編『下長遺跡発掘調査報告書Ⅷ』 2001
島根県教育委員会編『五反配遺跡』 2004
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター編『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』島根県古代文化センター調査研究報告書 33　2006
島根県古代文化センター編『順庵原 1 号墓の調査』島根県古代文化センター調査研究報告書 37　2007



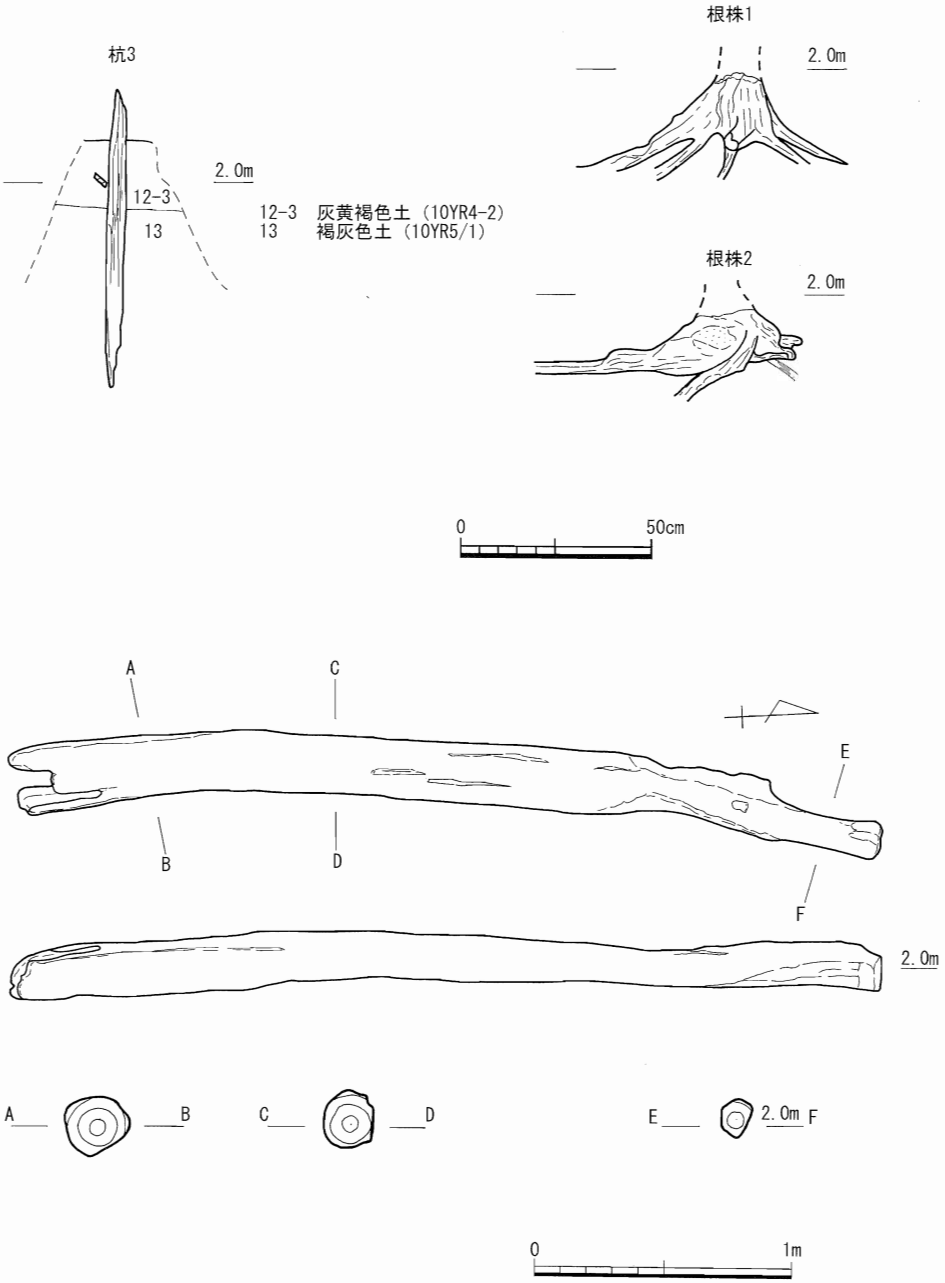
第 90 図　５区土坑実測図 (1) (S=1/10)



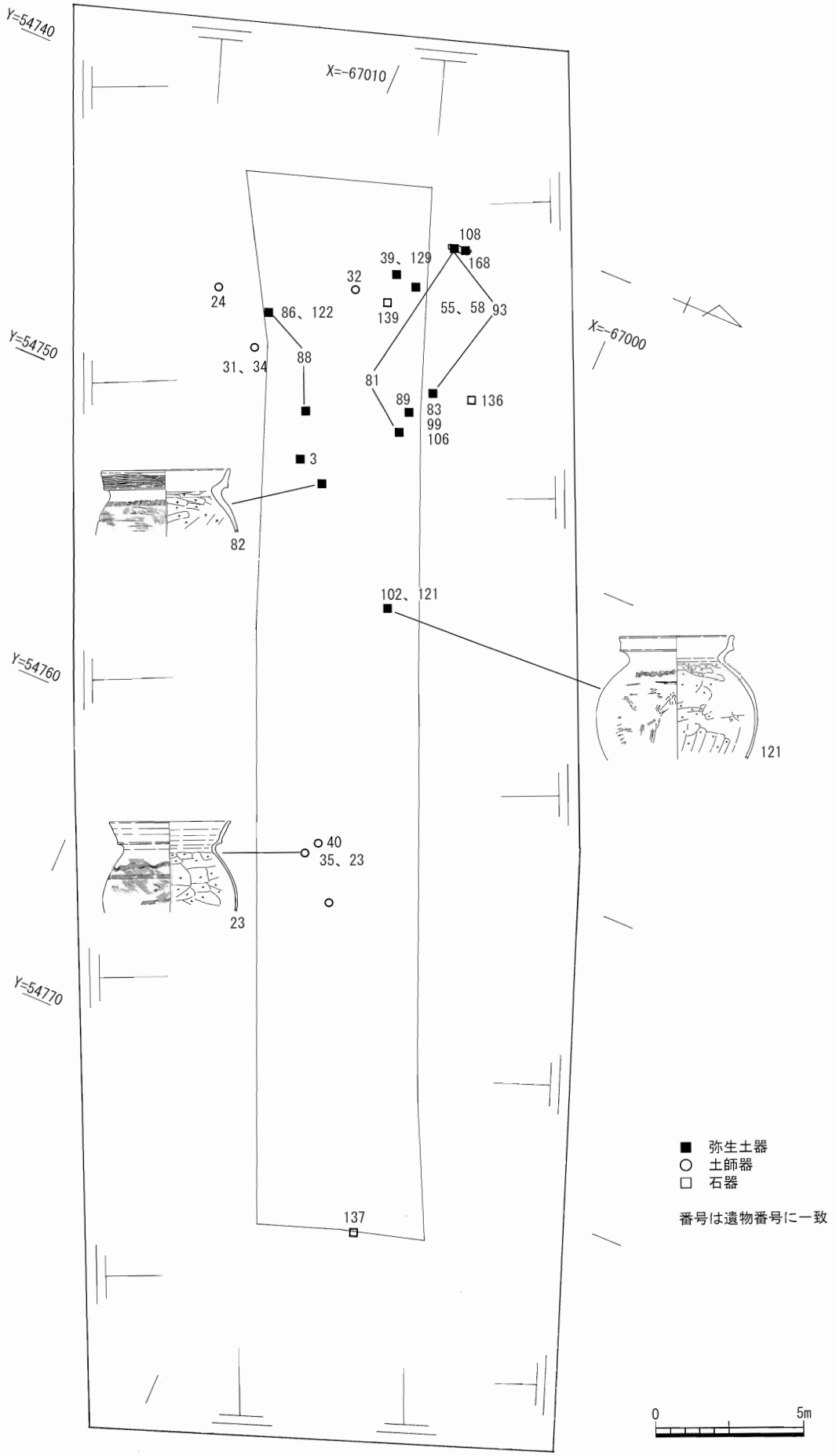
第 91 図　5 区土器出土状況図 (S=1/10)



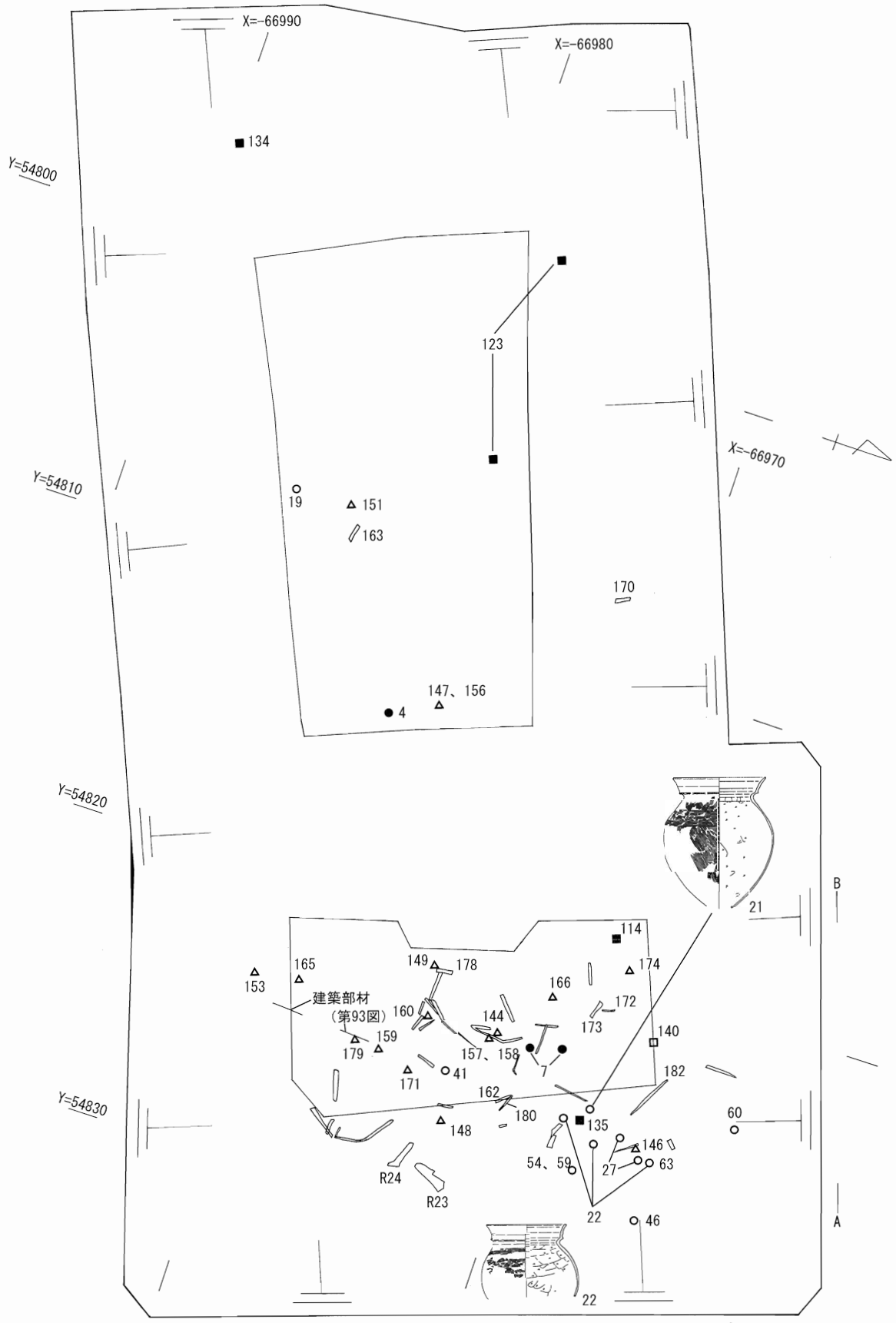
第92図　5区溝実測図（S=1/60・1/20）、土坑実測図（2）（S=1/20）



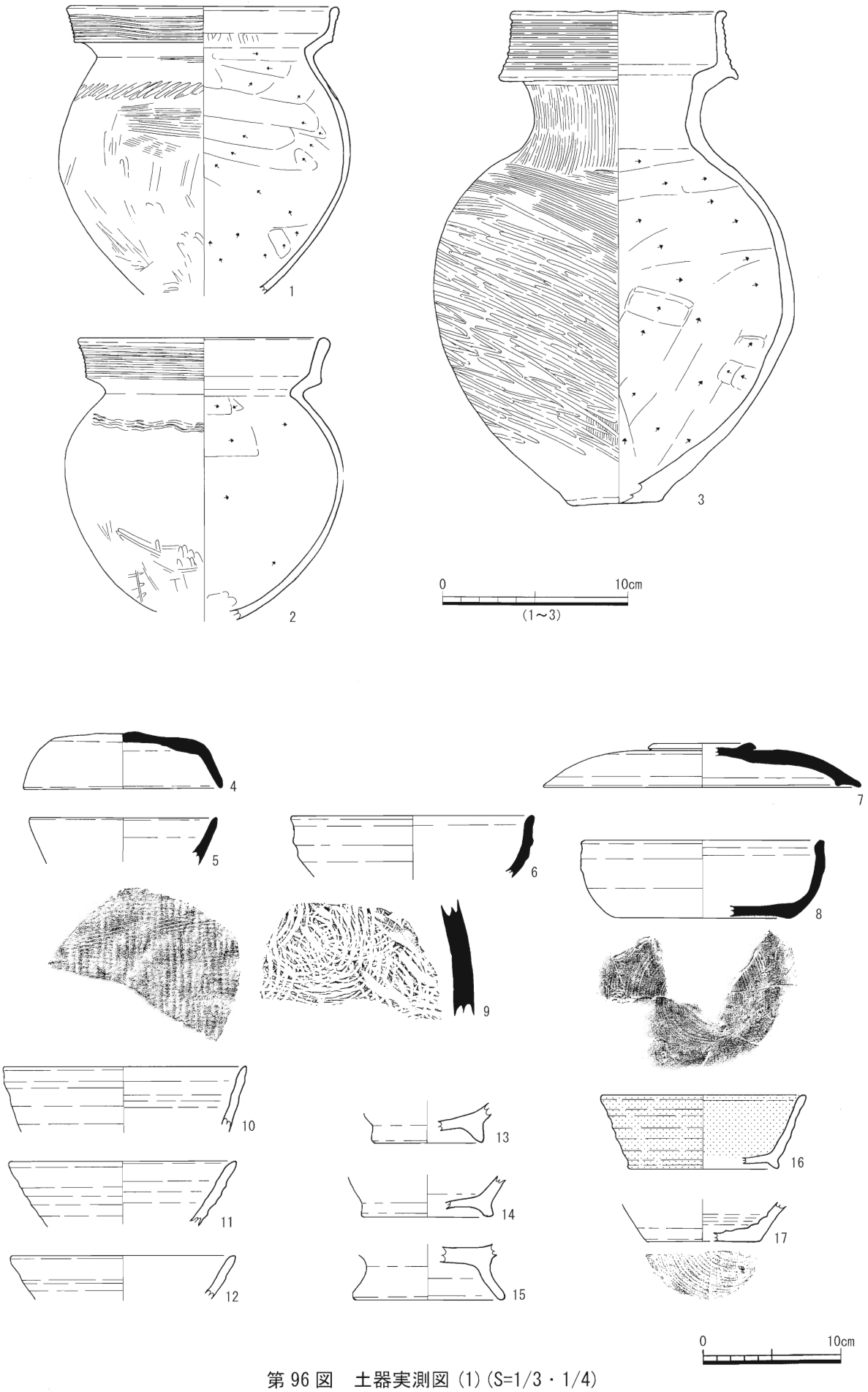
第 93 図　5 区杭・根株実測図（S ＝ 1/20）、建築部材実測図（S=1/30）



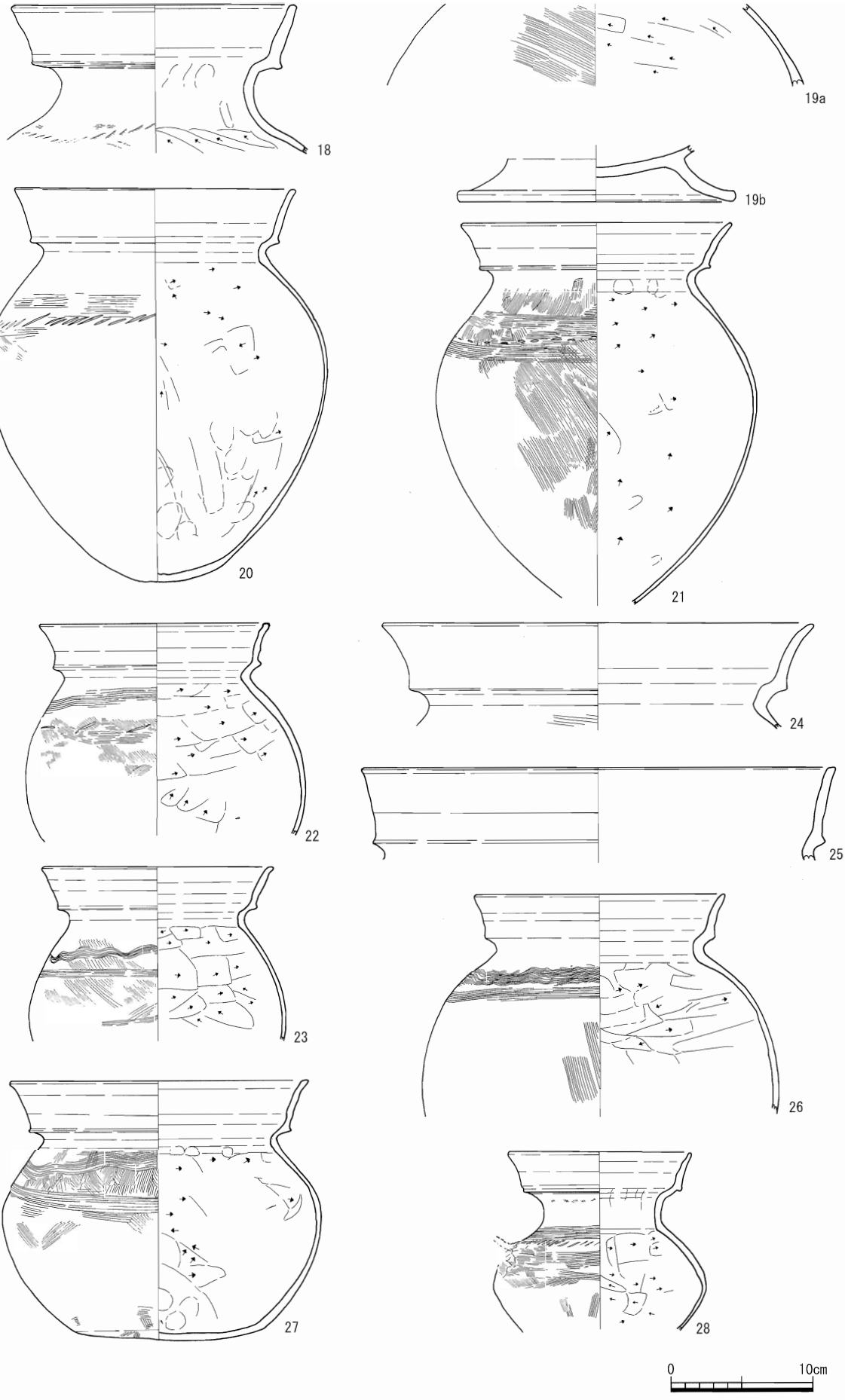
第 94 図　5 区遺物出土状況図 (1) (S=1/200)



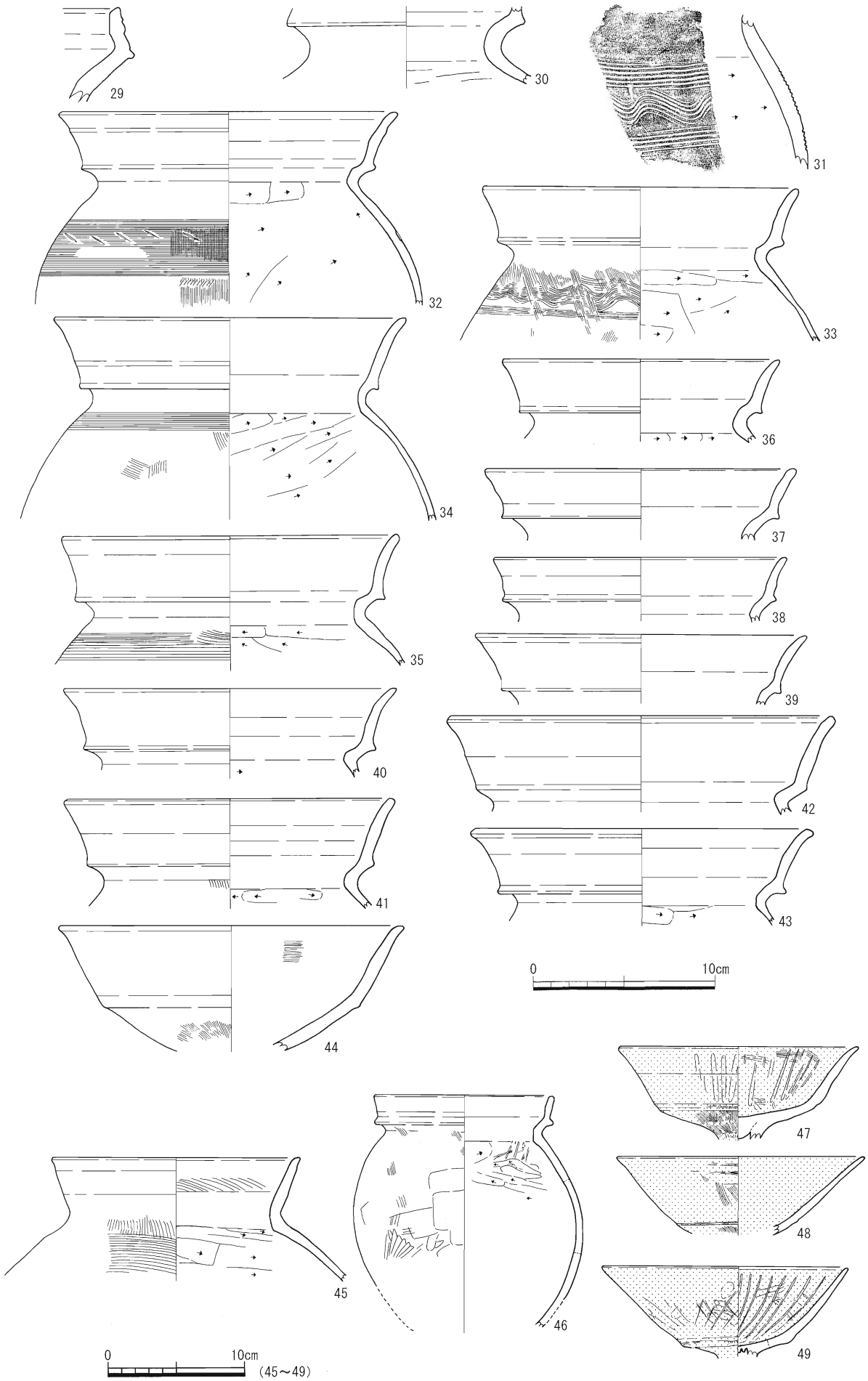
第 95 図　5 区遺物出土状況図 (2) (S=1/200)



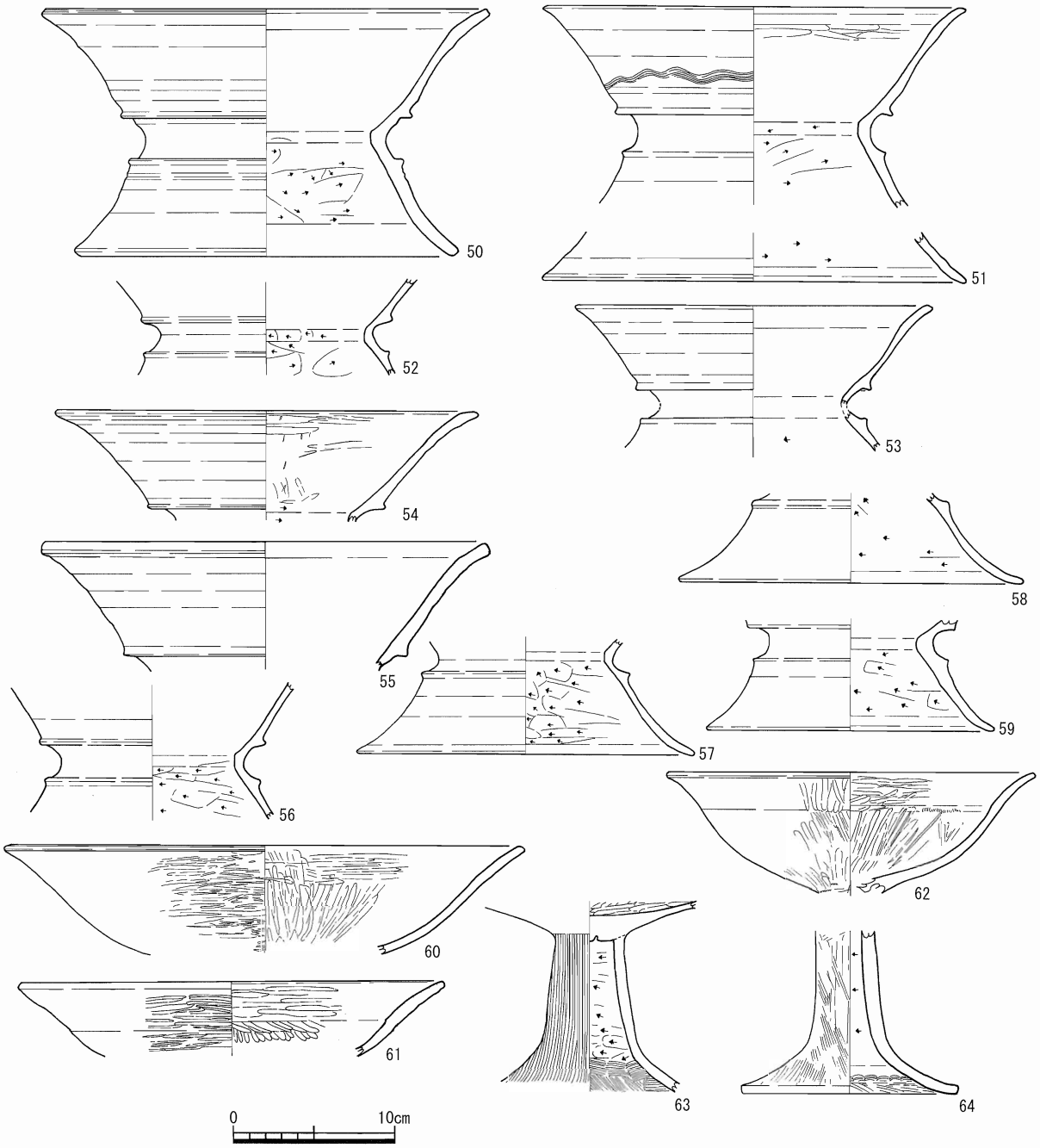
第 96 図　土器実測図 (1) (S=1/3・1/4)

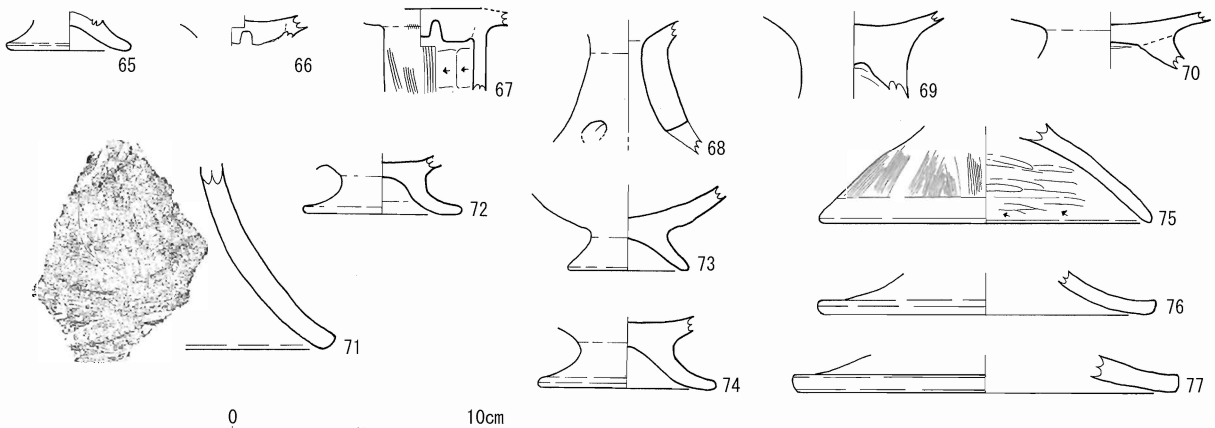


第 97 図　土器実測図 (2) (S=1/4)

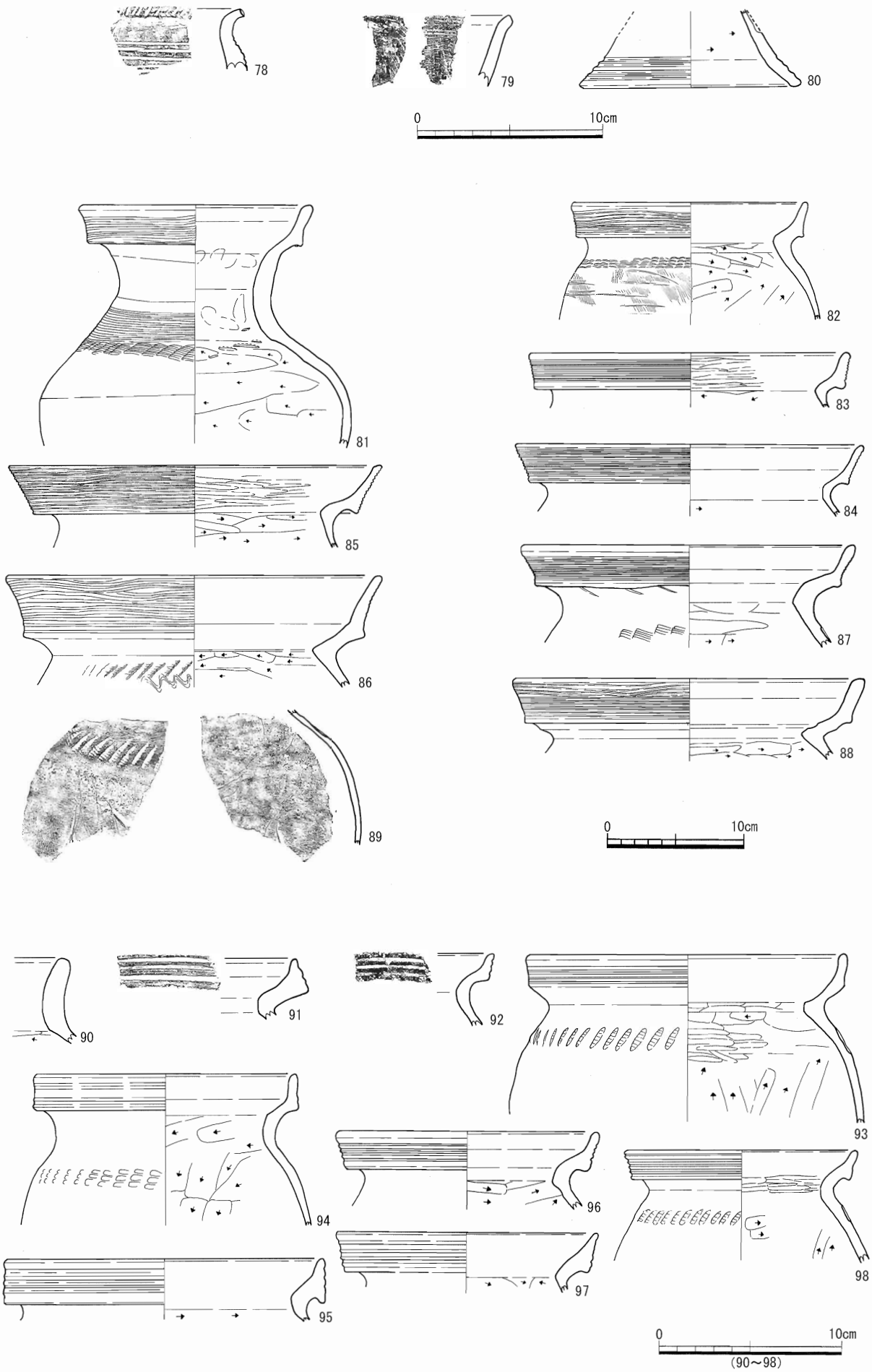


第 98 図　土器実測図 (3) (S=1/3・1/4)

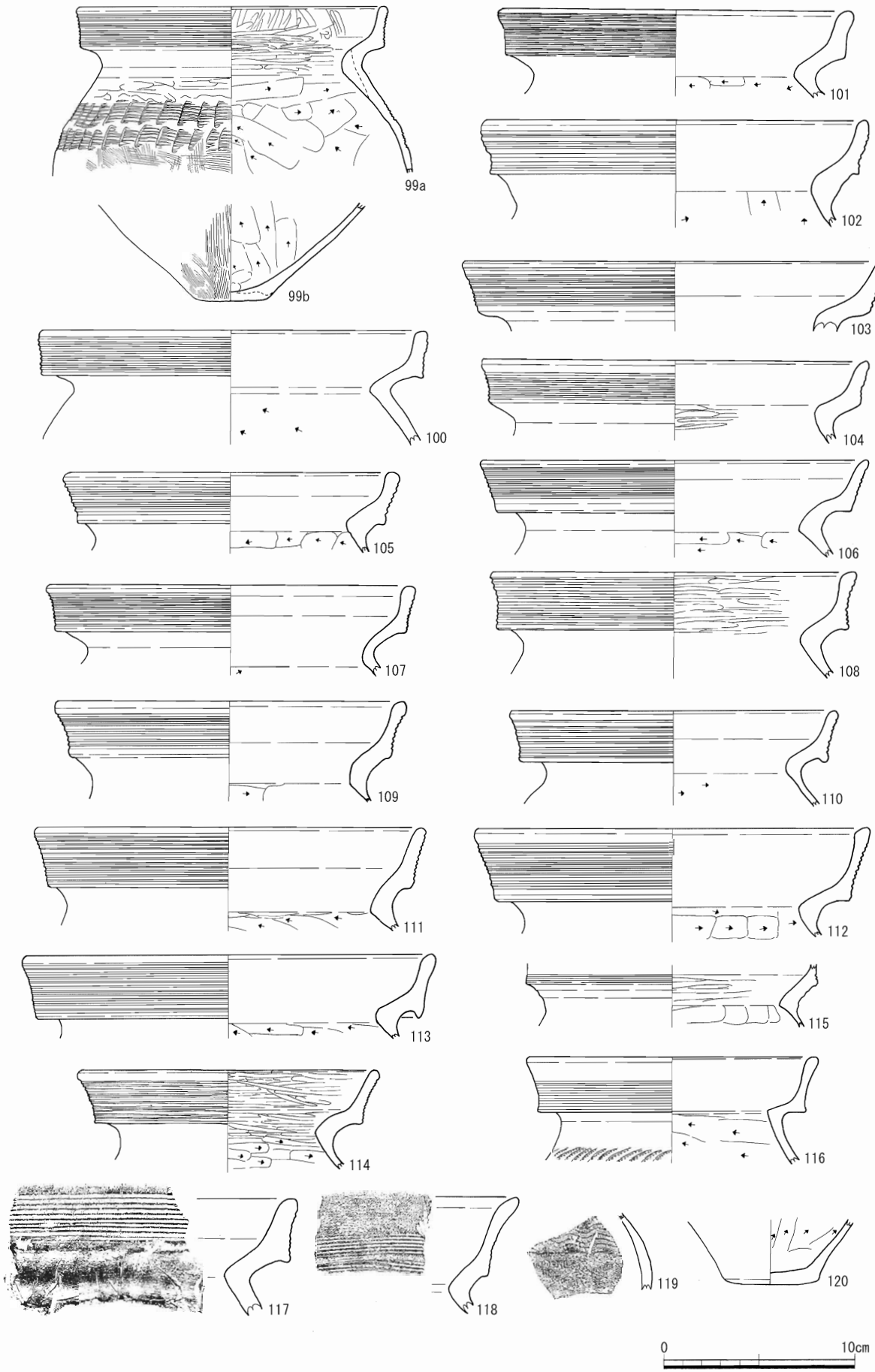




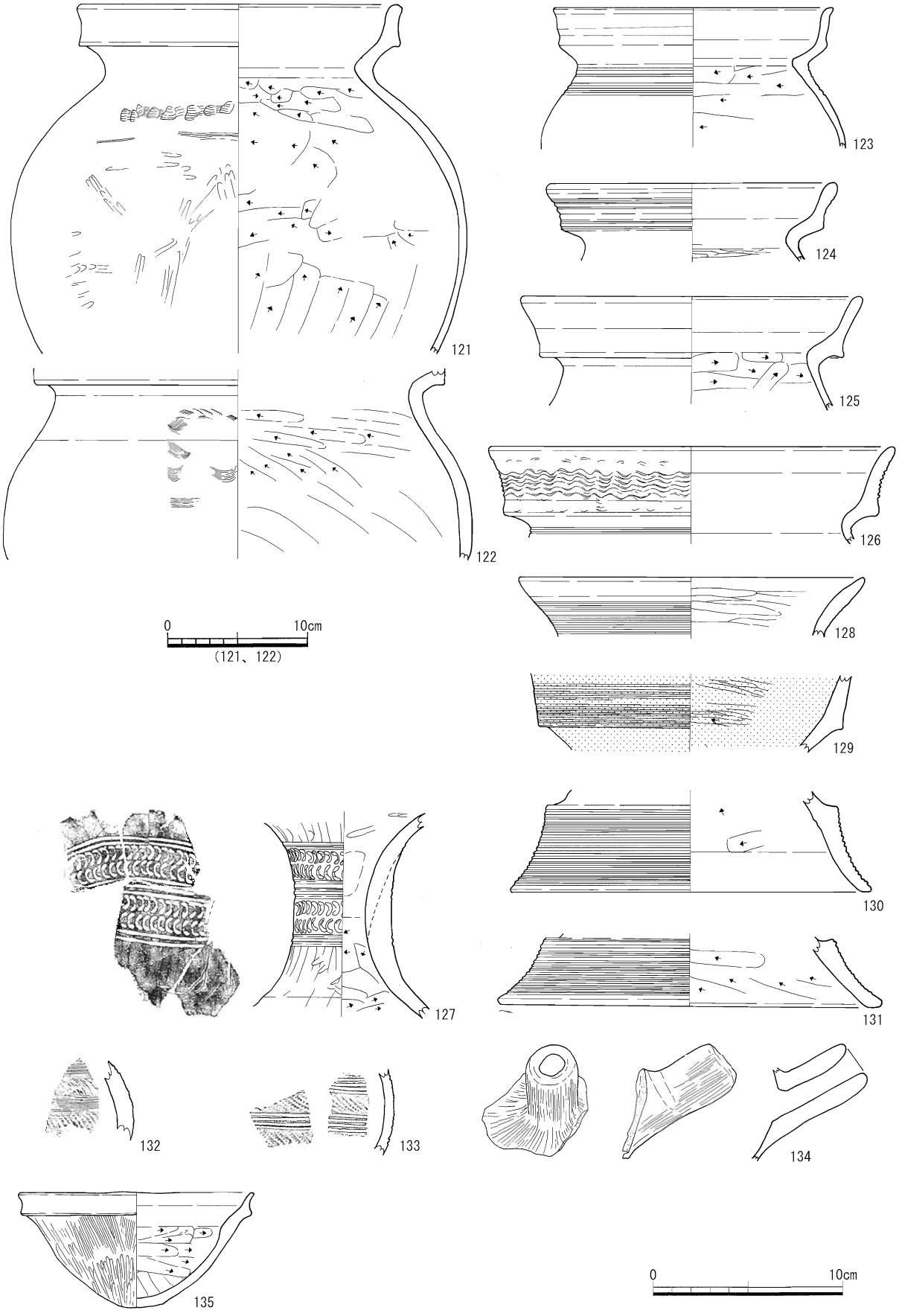
第 99 図　土器実測図 (4) (S=1/3・1/4)



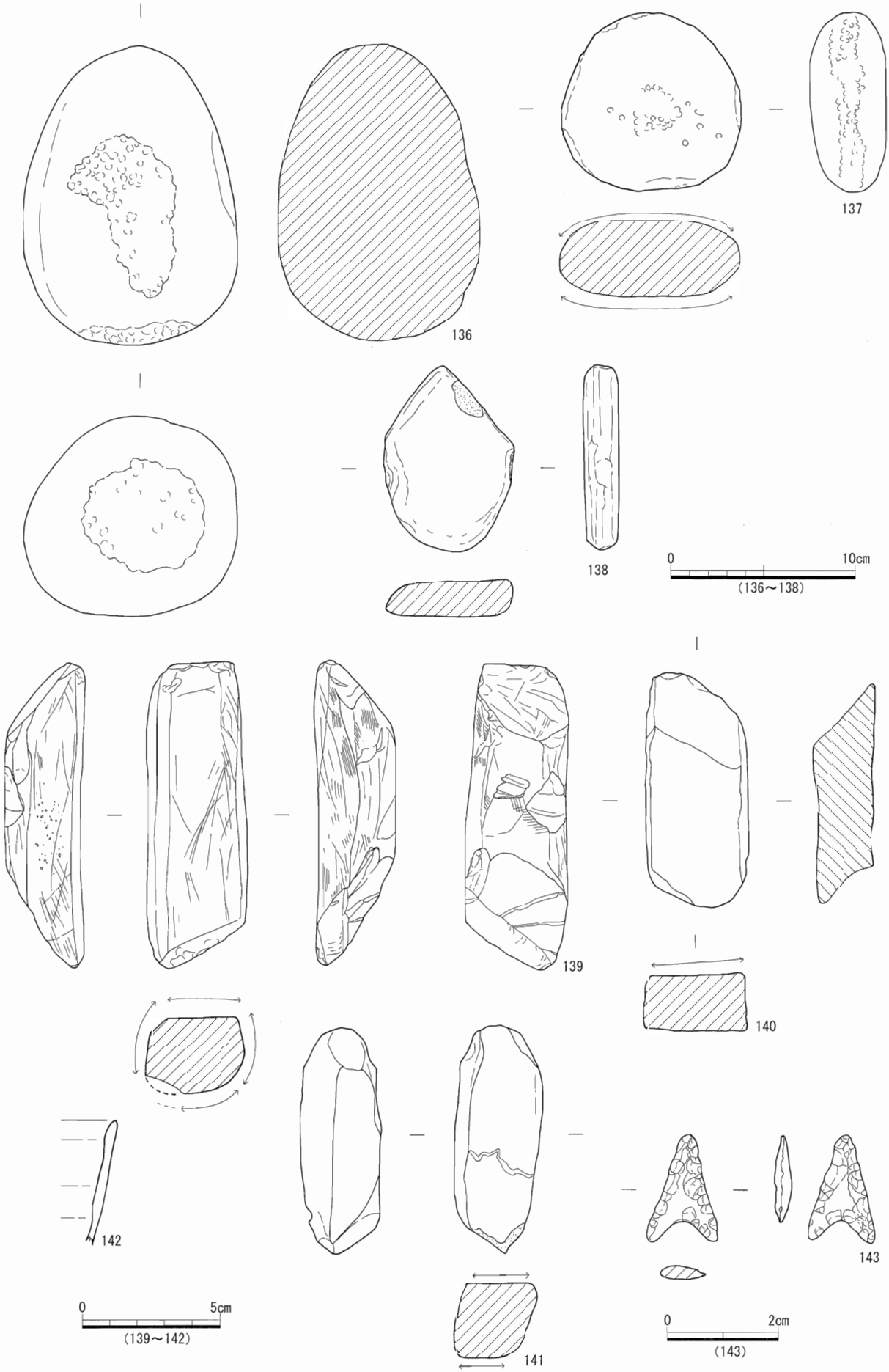
第 100 図　土器実測図 (5) (S=1/3・1/4)



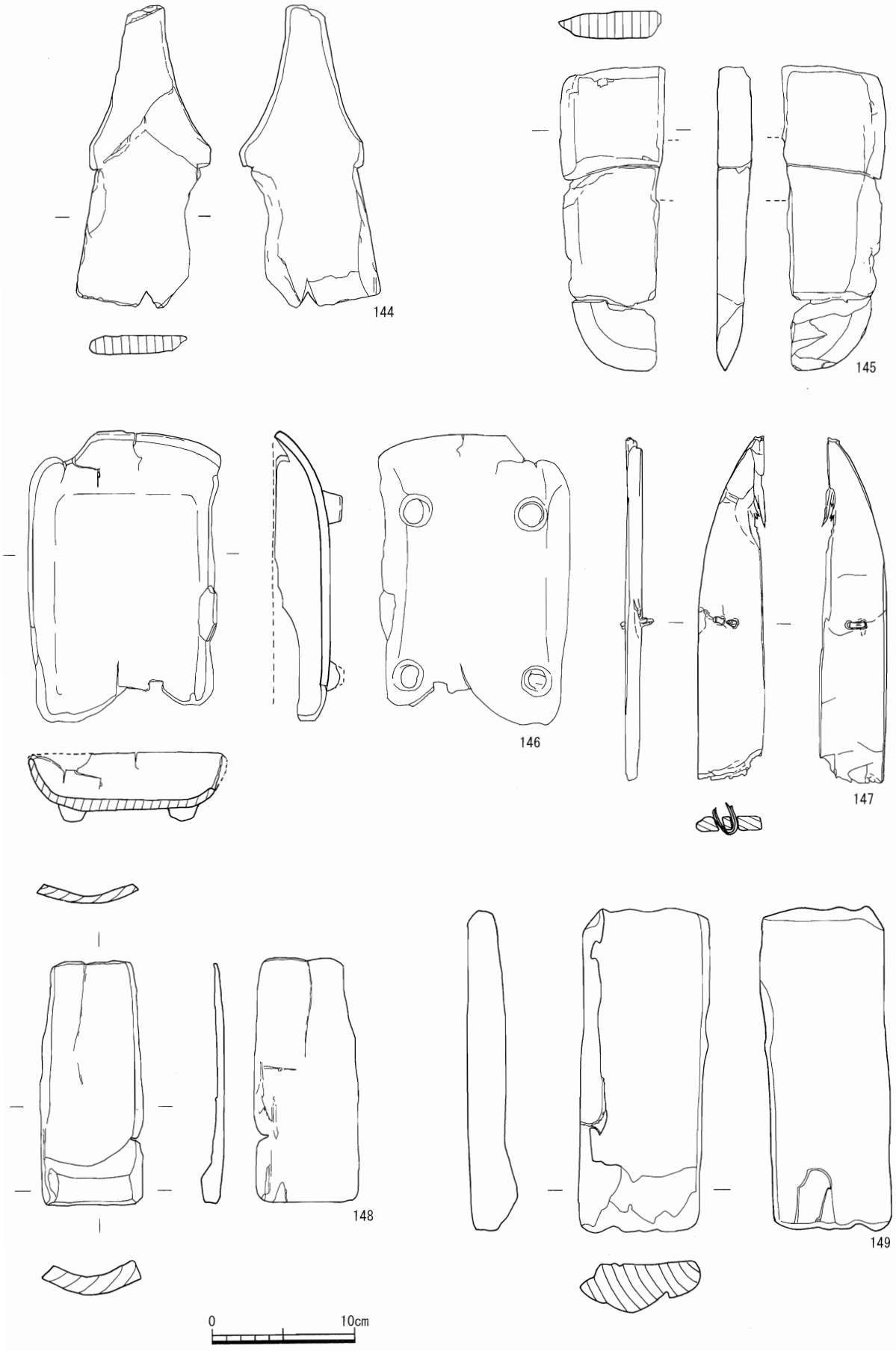
第 101 図　土器実測図 (6) (S=1/3)



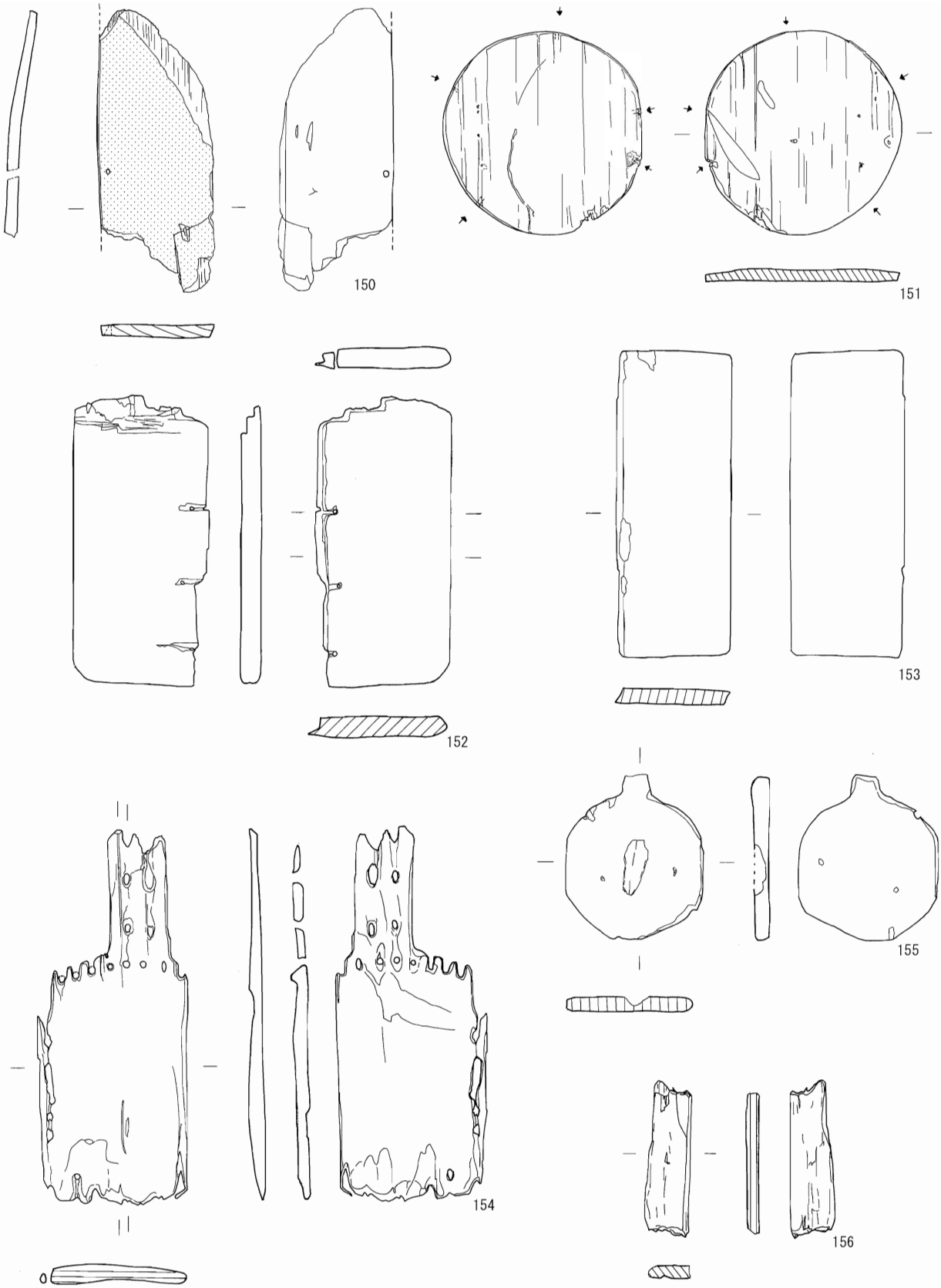
第 102 図　土器実測図 (7) (S=1/3・1/4)



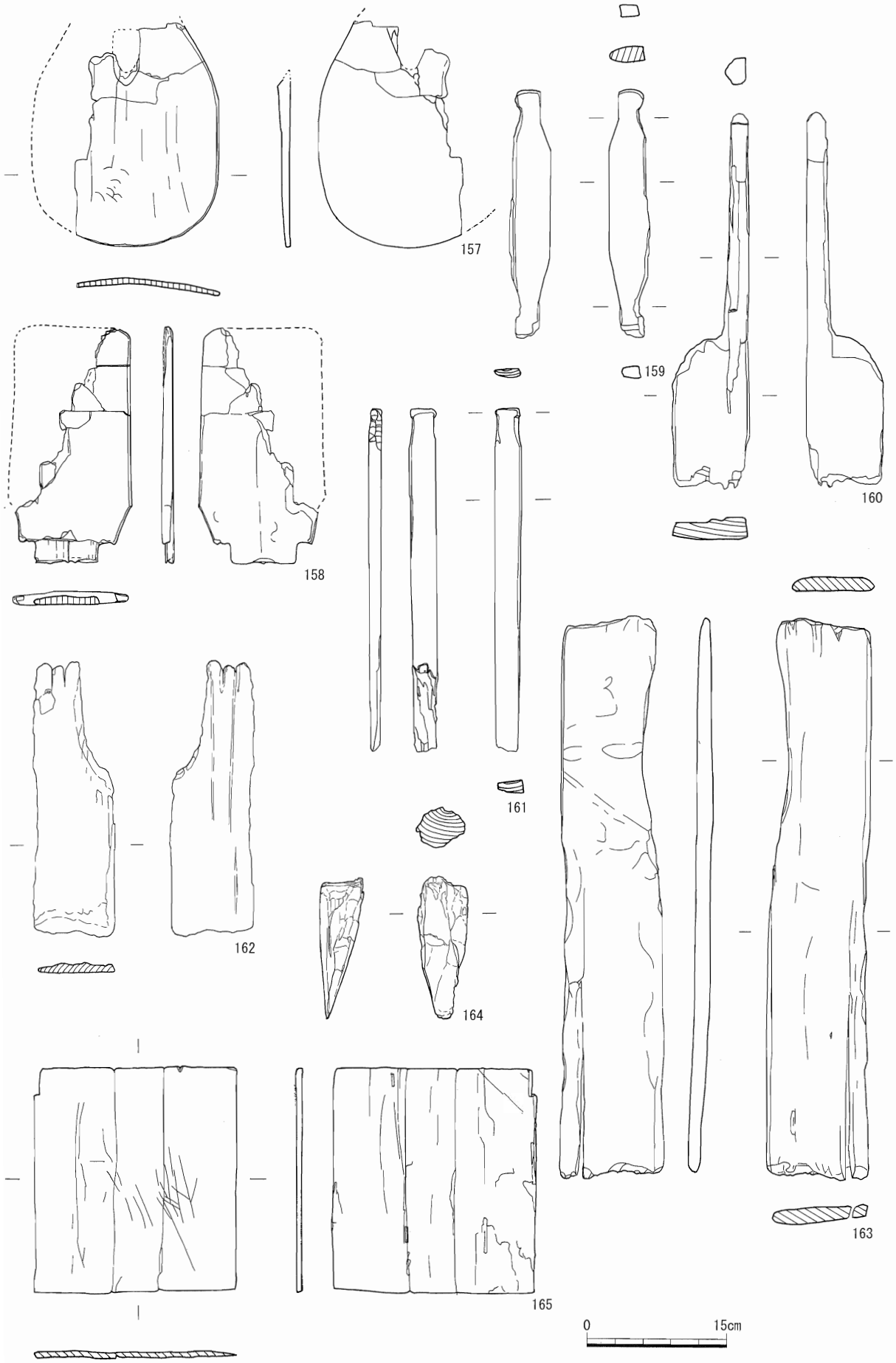
第 103 図　石器・土製品実測図 (S=1/1・1/2・1/3)



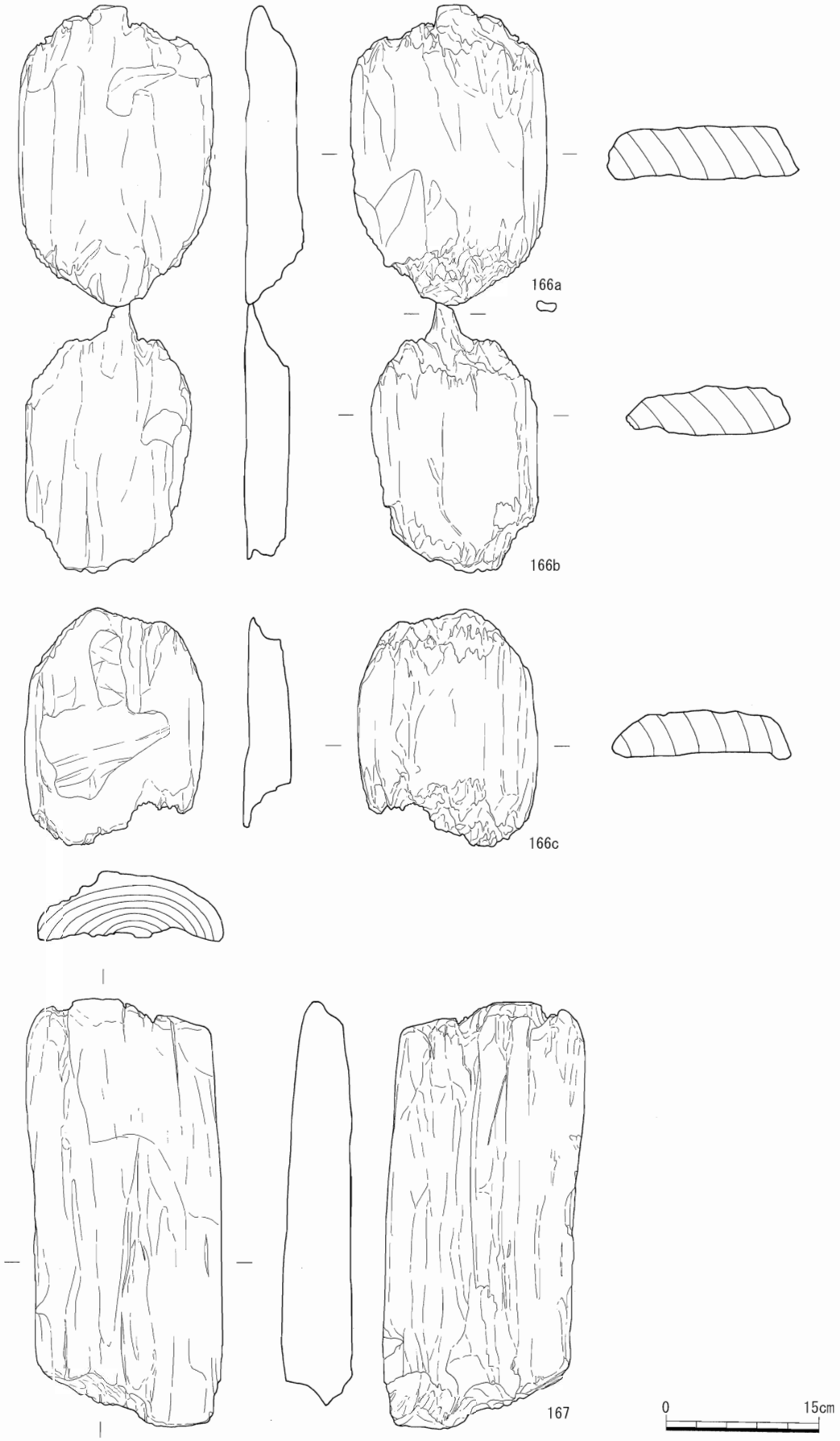
第 104 図　木質遺物実測図 (1) (S=1/4)



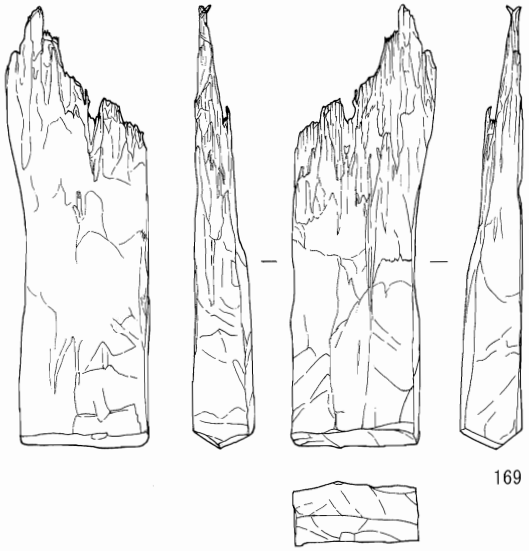
第 105 図　木質遺物実測図 (2) (S=1/4)

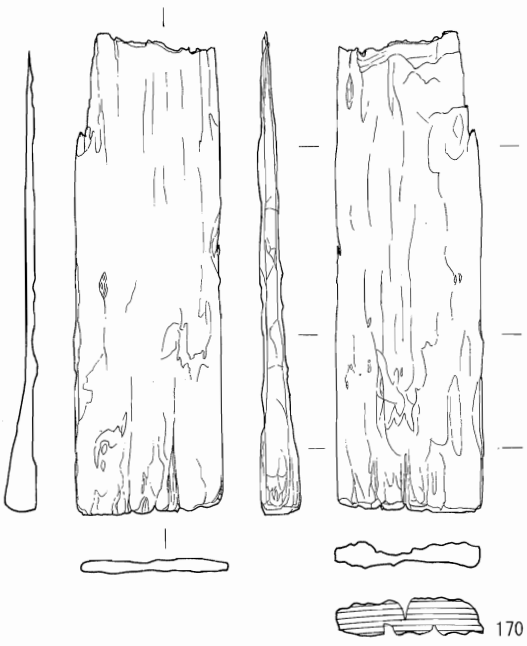


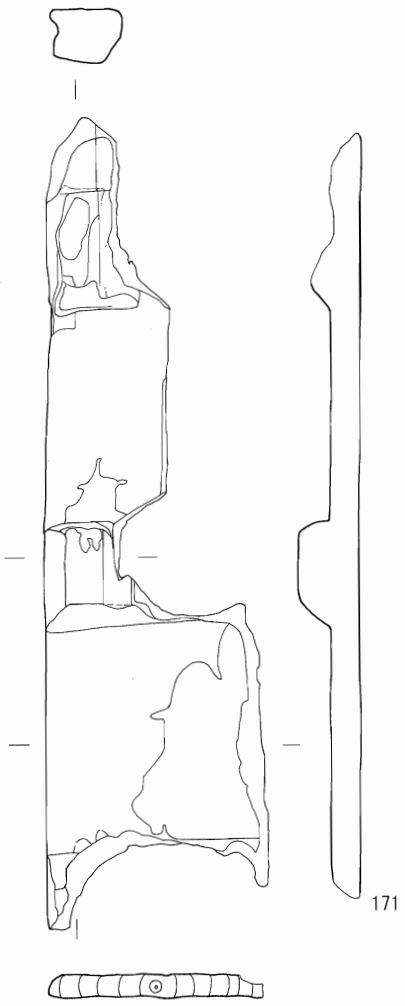
第 106 図　木質遺物実測図 (3) (S=1/6)

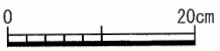


第 107 図　木質遺物実測図 (4) (S=1/6)

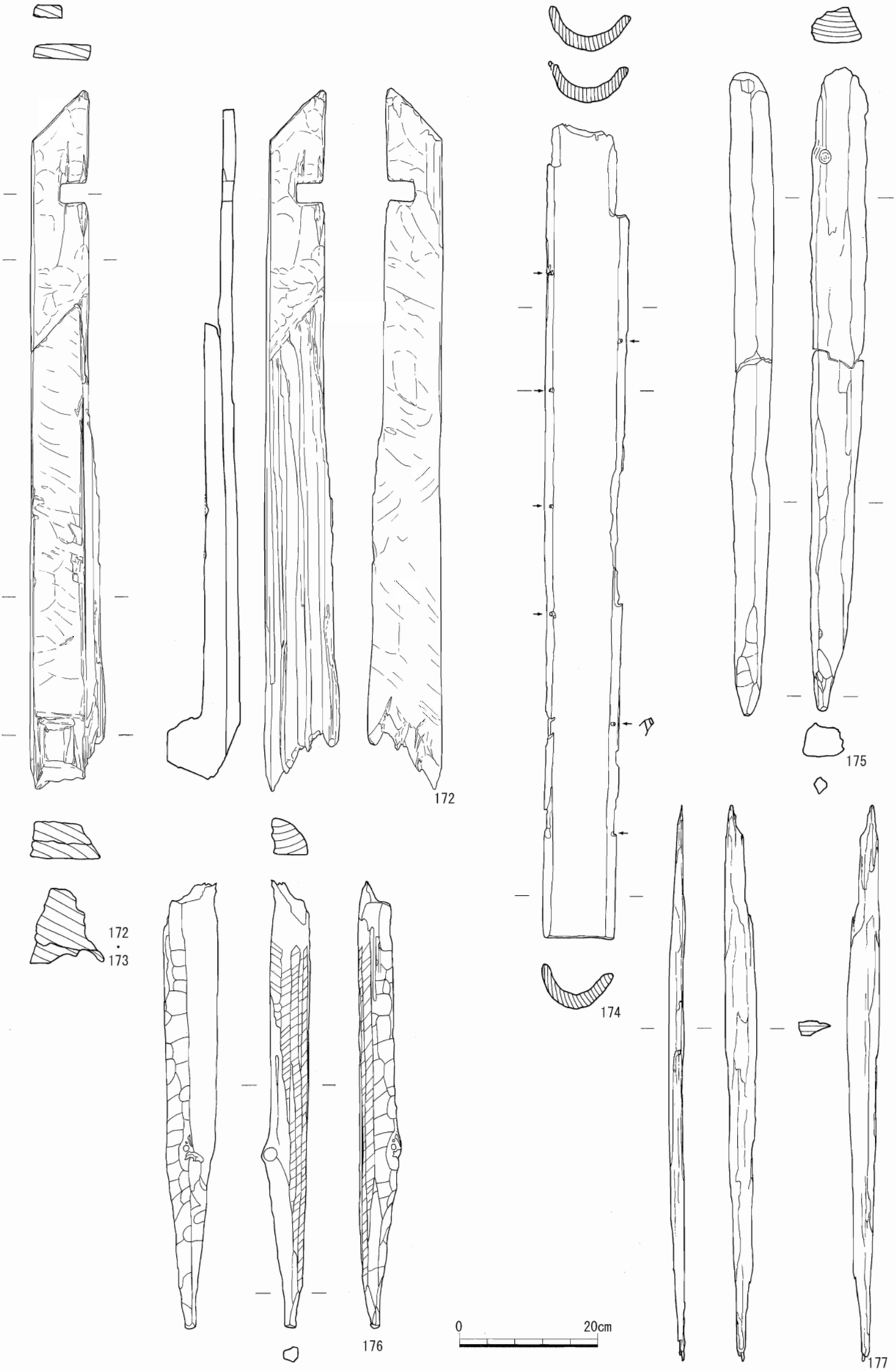




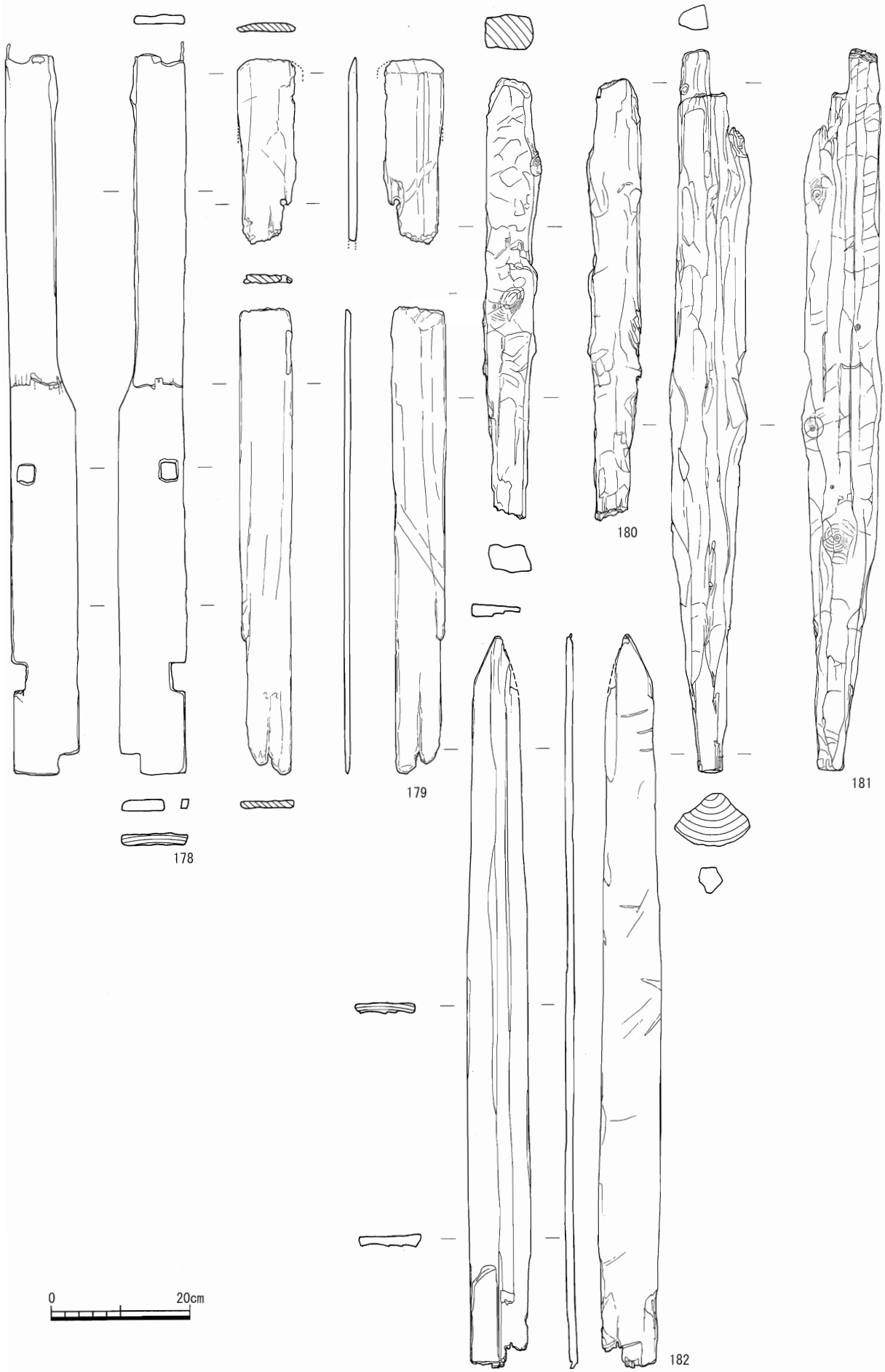




第 108 図　木質遺物実測図 (5) (S=1/8)



第 109 図　木質遺物実測図 (6) (S=1/8)



第 110 図　木質遺物実測図 (7) (S=1/8)

表8　山持遺跡5区遺構一覧表

遺構名	挿図	位置（グリッド）	形態		規模(cm)				床面の標高	備　考
			上面	下面	上面		下面			
					長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
SK01	90	E8	不整形	不整形	91	86	54	(34)	2.10	小型の甕出土
SK02	91	C4	不明	不明	31	31				小型の甕出土
SD03	92	B2.C3	蛇行	蛇行	(994)	41	(998)	37	2.14	
SK04	92	B2	長方形	長方形	(86)	57	(81)	52	0.59	

()は現状での寸法

表9　山持遺跡5区　土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	遺構／グリッド	層位	種別	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
1	96	60	SK01		弥生後期	甕	外面炭化物付着、貝殻直線文7条、刺突文	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	90	14.7		15.8	
2	96	60	SK02		弥生後期	甕	外面炭化物付着、貝殻直線文8条、貝殻波状文	灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 7/2	80	(13.6)		15.0	
3	96	60	F9	11層	弥生後期	壺	凹線文9条	浅黄色　2.5Y 7/3	灰黄色　2.5Y 6/2	胴の一部欠損	11.2～11.6	26.8	19.5	4.8～5.5
4	96	60	B2・C3	10層・11層	須恵器	蓋	回転ヘラケズリ後ナデ	灰色　5Y 5/1	灰色　5Y 5/1	70	10.6	3.0		
5	96	63-1	B1	11層	須恵器	坏	10層の土器か?	青灰色　5B 6/1	青灰色　5B 6/1	10	(10.0)			
6	96	63-1	A1	11層	古代の須恵器	坏	10層の土器か?	暗青灰色　10BG 4/1	オリーブ灰色　5GY 6/1	25	(13.0)			
7	96	60	B1	11層	古代の須恵器	蓋	自然釉、10層の土器か?	明緑灰色　7.5GY 8/1	明緑灰色　7.5GY 8/1	90	14.8	2.4		
8	96	63-1	A1	11層	古代の須恵器	坏	底部回転糸切り、10層の土器か?	オリーブ灰色 2.5GY 6/1	オリーブ灰色 2.5GY 6/1	60	(13.1)	4.2		(9.4)
9	96	63-1	東側	10層	古代の須恵器	大甕		オリーブ灰色 2.5GY 6/1	オリーブ灰色 2.5GY 6/1					
10	96	63-1	B1	10層	古代の土師器	坏		浅黄色　2.5Y 7/3	浅黄色　2.5Y 7/3	10	(13.0)			
11	96	63-1	A1	10層	古代の土師器	坏		浅黄橙色　7.5YR 8/6	浅黄橙色　7.5YR 8/6	10	(12.0)			
12	96	63-1	A2	9層	古代の土師器	坏		浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(12.0)			
13	96	63-1	B3	9層	古代の土師器	高台付坏	内面に炭素吸着、高台貼り付け	にぶい黄橙色 10YR 7/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	25				(9.8)
14	96	63-1	C4	10層	古代の土師器	高台付坏	外面に炭化物付着	浅黄橙色　10YR 8/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	15				(7.0)
15	96	63-1	C3	10層	古代の土師器	高台付坏		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	40				(8.0)
16	96	63-1	B3	10層	赤彩土師器	高台付坏	内外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	15	(10.8)	4.0		(8.0)
17	96	63-1	C3	10層	古代の土師器	坏	回転糸切り	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	45				(6.0)
18	97	60	D4	11層	土師器	壺	列点文、内外摩滅	浅黄橙色　10YR 8/3	灰白色　2.5Y 8/2	80	20.1			
19a	97	60	B3・C3・D4	11層	土師器	台付き壺		淡黄色　2.5Y 8/3	灰黄色　2.5Y 8/2	25				
19b	97	60	B3・C3・D4	11層	土師器	台付き壺	横ナデ、ヘラケズリ?	淡黄色　2.5Y 8/3	灰黄色　2.5Y 8/2	25				(19.0)
20	97	61	A1	11層	土師器	甕	外面全体に炭化物付着、列点文	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 6/2	55	(19.7)	27.7	24.0	3.3
21	97	60	A1	11層	土師器	甕	外面炭化物付着、木口列点文	灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 7/2	30	(18.8)			
22	97	61	A1	11層	土師器	甕	外面に一部炭化物付着、直線文、列点文	灰白色　2.5Y 8/4	灰白色　2.5Y 8/4	70	16.1		19.3	
23	97	61	E7	11層	土師器	甕	波状文、直線文	灰白色　10YR 8/2	にぶい黄橙色 10YR 7/3	60	16.3			
24	97	63-2	F9	11層	土師器	大型の甕	軟質、摩滅	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	20	(30.0)			
25	97	63-2	西側	11層	土師器	大型の甕		浅黄色　5Y 7/4	浅黄色　5Y 7/4	10	(33.0)			
26	97	61	B1	11層	土師器	甕	外面炭化物付着、波状文、直線文	浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	30	(17.4)		(25.0)	
27	97	61	A1	11層	土師器	鉢	全体の1/2周に炭化物が付着、波状文、直線文	淡橙色　5YR 8/4	淡橙色　5YR 8/4	70	20.8	18.3	22.3	13.4
28	97	61	A1・B1	11層	土師器	注口土器	列点文、外面摩滅	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	80	12.7		15.0	
29	98	63-2	B3	11層	土師器	壺	口縁部に凹線風の凹み	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3					
30	98	63-2	E9	11層	土師器	壺	摩滅	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	15				
31	98	63-2	F9	11層	土師器	壺	直線文、波状文	にぶい黄橙色 10YR 7/4	浅黄橙色　10YR 8/4					
32	98	63-2	E9	11層	土師器	甕	刺突文	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	25	(18.0)			
33	98	63-2	西側	11層	土師器	甕	波状文	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	20	(17.0)			
34	98	61	E9・F9	11層	土師器	甕	直線文、軟質、口縁端部に炭化物	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	45	(19.0)			
35	98	63-2	E7	11層	土師器	甕	直線文	黄色　2.5Y 8/6	黄色　2.5Y 8/6	25	(18.0)			
36	98	63-2	E9	11層	土師器	甕		浅黄橙色　10YR 8/4	灰白色　5Y 8/2	15	(15.0)			
37	98	63-2	C4	13層	土師器	甕		灰白色　5Y 7/2	灰白色　5Y 7/2	15	(16.6)			
38	98	63-2	B3	13層	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	にぶい黄色　2.5Y 6/4	20	(15.8)			
39	98	64-1	E9	11層	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	10	(17.9)			
40	98	63-2	E7	11層	土師器	甕	軟質	黄橙色　7.5YR 8/8	黄橙色　7.5YR 8/8	35	(18.0)			
41	98	61	B1	11層	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	90	17.4			
42	98	64-1	A1	11層	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	10	(20.8)			
43	98	64-1	北側	不明	土師器	甕		にぶい黄橙色 10YR 7/4	灰黄褐色　10YR 6/2	20	(18.0)			
44	98	64-1	B2	11層	土師器	高坏	やや軟質	橙色　7.5YR 7/6	にぶい黄橙色 10YR 7/4	15	(18.4)			
45	98	61	A2・B2	11層	土師器	甕	外面に炭化物付着	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 6/2	45	(18.0)			
46	98	62	A1	11層	土師器	甕	外面に炭化物付着、炭化物や被熱により調整不明	灰白色　10Y 7/1	灰白色　10Y 7/1	85	12.7		16.7	
47	98	62	E7	10層・11層	土師器	高坏	内外面赤彩、暗文風のヘラミガキ	灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 7/2	70	17.5			
48	98	64-1	C3・C4	11層	土師器	高坏	内外面赤彩、内外摩滅	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 6/2	30	(18.2)			
49	98	62	C3	11層	土師器	高坏	内外面赤彩、暗文風のヘラミガキ	橙色　2.5YR 6/6	橙色　2.5YR 6/6	30	(18.0)			
50	99	64-2	土器溜	11層	土師器	鼓形器台	台部のヨコナデ強い	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 7/2	25	(27.6)	15.2		(15.2)
51	99	64-1	土器溜	11層	土師器	鼓形器台	受け部外面に波状文	灰白色　2.5Y 8/2	灰黄色　2.5Y 7/2	25	(26.0)			(26.0)
52	99	64-2	土器溜	11層	土師器	鼓形器台	摩滅	灰白色　2.5Y 8/2	灰黄色　2.5Y 7/2	25				
53	99	64-2	土器溜	11層	土師器	鼓形器台	摩滅著しい	浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	25	(22.0)			
54	99	65-1	A1	11層	土師器	鼓形器台		灰白色　2.5Y 8/2	にぶい黄橙色 10YR 7/2	15	(25.6)			
55	99	65-1	E9	11層	土師器	鼓形器台	摩滅	浅黄色　5Y 7/4	浅黄色　5Y 7/4	15	(27.0)			
56	99	65-1	A1	11層	土師器	鼓形器台		浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	45				
57	99	65-1	A1	11層	土師器	鼓形器台		灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	20				(20.4)
58	99	65-1	E9	11層	土師器	鼓形器台	軟質	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	30				(20.6)

遺物番号	挿図番号	写真図版	遺構／グリッド	層位	種別	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
59	99	65-1	A1	11層	土師器	鼓形器台		浅黄橙色　10YR 8/3	黄橙色　10YR 8/6	30				(10.1)
60	99	65-2	A1	11層	土師器	高坏	ミガキの幅が狭い	灰黄色　2.5Y 7/2	灰色　5Y 6/1	20	(31.2)			
61	99	65-1	B1	11層	土師器	高坏	口縁内面に稜	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	10	(26.0)			
62	99	65-2	D4	11層	土師器	高坏	口縁内面に稜	灰白色　5Y 7/1	灰白色　5Y 7/1	60	(22.6)			
63	99	62	A1	11層	土師器	高坏	脚部の内面に刺突痕	灰白色　5Y 8/2	灰白色　5Y 8/2	現存部完存				
64	99	62	E10	11層	土師器	高坏		淡黄色　5Y 8/4	淡黄色　5Y 8/4	50				
65	99	65-1	土器溜	11層	土師器	低脚坏		灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	90				4.4
66	99	65-1	土器溜	11層	土師器	高坏	円盤充填、脚部の内面に刺突痕	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	現存部完存				
67	99	65-1	土器溜	11層	土師器	高坏	円盤充填、脚部の内面に刺突痕、全体に摩滅	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	現存部完存				13.0
68	99	65-1	E9	11層	土師器	小形器台	円形三方透かし、摩滅	浅黄橙色　10YR8/4	浅黄橙色　7.5YR8/6	現存部完存				
69	99	65-2	E10	11層	土師器	高坏	内面炭化物付着、下から粘土を押し込む	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	現存部完存				
70	99	65-2	E9	11層	土師器	低脚坏？		浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	現存部完存				
71	99	65-2	B3	13層	土師器	脚部	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4					
72	99	65-2	B1	11層	土師器	低脚坏		灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	50				5.8
73	99	65-2	E9	11層	土師器	低脚坏		灰白色　5Y 7/1	灰色　5Y 6/1	30				(4.4)
74	99	65-2	E9	11層	土師器	低脚坏		淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	40				(6.4)
75	99	65-2	北側溝	不明	土師器	高坏または小型器台		浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	25				(13.0)
76	99	65-2	南側	11層	土師器	脚部		浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	15				(13.0)
77	99	65-2	西溝	不明	土師器	脚部		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	15				(15.0)
78	100	66-1	E9	12～14層	弥生前期	甕	刻目、沈線5条	明黄褐色　10YR 7/6	明黄褐色　10YR 7/6					
79	100	66-1	C3	15層	弥生前期？	甕？		橙色　7.5YR 6/8	にぶい黄橙色 10YR 6/4					
80	100	66-1	A1	11層	弥生中期	高坏	脚部に凹線文4条、摩滅	灰色　7.5Y 6/1	オリーブ灰色 2.5GY 5/1	20				(11.2)
81	100	62	E9	11層	弥生後期	壺	口縁部と胴部に貝殻直線文、貝殻連続刺突文	浅黄色　2.5Y 7/3	褐灰色　10YR 4/1	頸部完存	17.0		22.6	
82	100	66-1	E8	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文6条、貝殻連続刺突文、ハケは2種類の調整	橙色　7.5YR 7/6	にぶい黄橙色 10YR 4/3	15	(17.0)			
83	100	66-1	E9	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、貝殻直線文8条	黒褐色　2.5Y 3/2	黒褐色　2.5Y 3/2	10	(22.6)			
84	100	66-1	B2・B4	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、貝殻（?）直線文10条	浅黄橙色　10YR 8/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4	15	(25.0)			
85	100	66-1	B1	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文15条	にぶい黄橙色 10YR 7/4	灰黄褐色　10YR 6/2	15	(27.0)			
86	100	66-1	F9	11層	弥生後期	甕	頸部内面に黒色物付着、貝殻直線文24条（4単位で施文）、貝殻刺突文と波状文	にぶい黄橙色 10YR 7/3	淡黄色　2.5Y 8/4	15	(27.0)			
87	100	66-1	A1	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、直線文7条、貝殻波状文	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	15	(25.0)			
88	100	66-1	F9	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着。貝殻直線文12条	黄褐色　2.5Y 5/4	黄褐色　2.5Y 5/4	40	(25.0)			
89	100	66-2	E9	11層	弥生後期	甕	内外面炭化物付着、貝殻による刺突文	浅黄色　2.5Y 7/4	暗灰黄色　2.5Y 4/2					
90	100	66-2	D4	13層	弥生後期	壺	外面炭化物付着	にぶい黄色　2.5Y 6/4	にぶい黄色　2.5Y 6/4					
91	100	66-2	B3	13層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、凹線文3条	黄灰色　2.5Y 6/1	黄灰色　2.5Y 6/1					
92	100	66-2	E9	11層	弥生後期	甕	凹線文3条	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4					
93	100	66-2	E9	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、直線文4条、貝殻による刺突文	にぶい黄橙色 10YR 7/4	淡黄色　2.5Y 8/4	40	(17.0)			
94	100	66-2	E7	11層	弥生後期	甕	凹線文3条、刺突文	黄橙色　10YR 8/6	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(14.0)			
95	100	66-2	C3	15層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、凹線文3条	黒褐色　10YR 3/1	にぶい黄橙色 10YR 7/4	10	(17.0)			
96	100	66-2	西側	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文4条	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	25	(13.8)			
97	100	66-2	E8	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文	にぶい黄橙色 10YR 7/3	にぶい黄橙色 10YR 7/3	15	(14.0)			
98	100	66-2	E8	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文5条、貝殻刺突文	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	30	(12.2)			
99a	101	62	E9西溝・北溝・北側	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文10条、貝殻連続刺突文2段	淡黄色　2.5Y 7/3	淡黄色　2.5Y 7/3	45	(21.7)			
99b	101	62	E9西溝・北溝・北側	11層	弥生後期	甕	底に薄く炭化物が付着	淡黄色　2.5Y 7/3	淡黄色　2.5Y 7/3	60				5.0
100	101	67-1	E8	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、凹線文（?）8条、外面摩滅	淡黄色　2.5Y 8/3	浅黄橙色　7.5YR 8/6	15	(19.6)			
101	101	67-1	E8	11層	弥生後期	甕	口縁外面炭化物付着、貝殻直線文12条	浅黄色　2.5Y 7/4	灰白色　2.5Y 8/2	25	(18.0)			
102	101	67-1	E8	11層	弥生後期	甕	直線文7条	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	25	(19.6)			
103	101	67-1	北溝	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文9条	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(21.7)			
104	101	67-1	D6	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、貝殻直線文7条	灰黄褐色　10YR 5/2	灰黄褐色　10YR 5/2	10	(20.0)			
105	101	67-1	E6・E8	11層	弥生後期	甕	直線文8条	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	25	(16.6)			
106	101	67-1	E9	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、直線文8条	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	35	(20.0)			
107	101	67-1	E8	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、貝殻直線文9条	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	10	(18.6)			
108	101	67-1	E9	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文9条	にぶい黄橙色 10YR 6/4	にぶい黄橙色 10YR 6/4	15	(18.8)			
109	101	67-2	D4	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文8条	浅黄色　2.5Y 7/4	明黄褐色　10YR 6/8	10	(17.8)			
110	101	67-2	E8	11層	弥生後期	甕	外面炭化物付着、直線文9条	黒褐色　2.5Y 3/2	黒褐色　2.5Y 3/2	15	(16.8)			
111	101	67-2	D6	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文12条	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4	20	(20.0)			
112	101	67-2	E9	11層	弥生後期	甕	直線文は一部ナデ消し	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	15	(20.2)			
113	101	67-2	西側	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文11条	淡黄色　5Y 8/4	淡黄色　5Y 8/4	20	(20.0)			
114	101	62	A2	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文14条	灰黄褐色　10YR 6/2	黒褐色　10YR 3/1	口縁完存	15.4			
115	101	67-2	E9	11層	弥生後期	甕	摩滅、赤変、直線文2条	浅黄橙色　7.5YR 8/4	浅黄橙色　7.5YR 8/4	25				
116	101	67-2	E8	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文12条、貝殻刺突文	灰白色　10YR 8/2	灰白色　10YR 8/2	25	(14.8)			
117	101	67-2	F9	11層	弥生後期	甕	貝殻直線文10条	浅黄橙色　7.5YR 8/6	にぶい橙色　7.5YR 7/4					
118	101	67-2	B2・溝	11層	弥生後期	甕	直線文10条、一部ナデ消し	浅黄色　2.5Y 7/3	浅黄色　2.5Y 7/3					
119	101	67-2	E8	11層	弥生後期	甕	貝殻波状文、半截竹管文（C字を2つ合わせている）	灰黄褐色　10YR 4/2	灰黄褐色　10YR 4/2					
120	101	67-2	D4	15層	弥生後期	甕	外面に炭化物付着	黄褐色　2.5Y 5/3	浅黄色　2.5Y 7/4	50				5.0
121	102	68-1	E8	11層	弥生後期	甕	摩滅著しい、胴部に薄く炭化物付着、連続刺突文	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	20	(23.0)		(32.2)	
122	102	68-2	F9	11層	弥生後期	甕	摩滅著しい、波状文	浅黄色　5Y 7/4	暗灰黄色　2.5Y 4/2	10			(33.2)	

遺物番号	挿図番号	写真図版	遺構／グリッド	層位	種別	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
123	102	62	B3・B4	13層	弥生後期	甕	外面に炭化物が厚く付着しており、調整や施文は不明、肩部に沈線5条	黒褐色　2.5Y 3/1	オリーブ褐色 2.5Y 4/3	50	14.4			
124	102	68-2	D4	13層	弥生後期	甕	凹線文?	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	20	(14.8)			
125	102	68-2	D4	13層	弥生後期	甕	口縁部に炭化物が厚く付着しており、調整や施文は不明	にぶい黄橙色 10YR 6/4	にぶい黄橙色 10YR 6/4	15	(17.6)			
126	102	68-2	A2	11層	弥生後期	甕	外面に炭化物付着、波状文6条	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(21.0)			
127	102	68-2	B1・B2・C3・C4	11層・13層	弥生後期	器台	沈線の間に逆C字とC字の刺突文	灰黄色　2.5Y 6/2	灰黄色　2.5Y 7/2	30				
128	102	68-2	D4	13層	弥生後期	鼓形器台	内外面赤彩、5条と7条の貝殻直線文	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(18.0)			
129	102	68-2	E9	11層	弥生後期	鼓形器台	内外面赤彩、直線文10条	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	10				
130	102	68-2	E9	不明	弥生後期	鼓形器台	貝殻直線文17条	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	15	(18.8)			
131	102	68-2	D6	11層	弥生後期	鼓形器台	貝殻直線文13条	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4	25				(19.6)
132	102	68-2	B3	11層	弥生後期	鉢	沈線4条、貝殻刺突文	にぶい黄橙色 10YR 7/4	浅黄橙色　7.5YR 8/4					
133	102	68-2	C4・D4	13層	弥生後期	鉢	外面に炭化物付着、沈線4条、貝殻刺突文	にぶい黄橙色　10YR 7/4	にぶい黄橙色　10YR 7/4					
134	102	68-2	D4	13層	弥生後期	注口土器	外面に炭化物付着	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4					
135	102	62	A1	11層	弥生後期	鉢	外面に炭化物付着	灰白色　2.5GY 8/2	灰白色　2.5GY 8/2	完存	12.2	6.1		2.2

表10　山持遺跡5区　石器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	グリッド	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
136	103	69-1	敲石	E9	11層	流紋岩	16.2	11.5	10.8	2840	全面磨り面
137	103	69-1	磨石	土器溜	11層	堆積岩	9.6	9.6	4.1	565	2面に磨り部
138	103	69-1	不明石器(磨石?)	B1	11層	不明	10.0	7.0	1.9	203	
139	103	69-1	砥石	E9	11層	緑色凝灰岩	11.0	3.7	2.8	(147)	4面共使用面
140	103	69-1	砥石	A1	9層	凝灰岩	(8.5)	(4.7)	2.2	(98)	使用面1面
141	103	69-1	砥石?	A1	9層	不明	(8.2)	(3.2)	2.8	(86)	使用面2面
142	103	69-2	製塩土器	C3	11層						被熱、変形、色調：浅黄橙色　7.5YR 8/4
143	103	69-2	石鏃	地区不明	15層	チャート	1.88	1.35	0.29	0.47	凹基式、全体に風化

※石材は肉眼観察による　　()は現存部の寸法、重さを示す

表11　山持遺跡5区　木質遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	細分器種	グリッド	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他の寸法(cm)	木どり	樹種	樹種の分析機関	備考	保存処理
144	104	70	農耕土木具	曲柄又鍬	A1	11層	(21.5)	(9.6)	1.3		柾目	アカガシ亜属	京都科学	二又鍬	○
145	104	70	農耕土木具	組合式鋤	B1	9層	(21.5)	(7.4)	2.4		柾目	アカガシ亜属	元興寺	長方形の柄孔	○
146	104	70	容器	脚付皿	A1	11層	(20.7)	(13.7)	0.7	高さ4.9	柾目	フジキ?	京都科学	縦木どり、一部炭化	○
147	104	71	容器	曲物底板	B2	11層	(24.5)	(4.7)	1.0		追い柾目	ヒノキ	元興寺	皮で綴じる、上層からの混入?	○
148	104	71	容器	桶	B1	11層		(12.3)	1.5	高さ17.2	追い柾目	スギ	京都科学		○
149	104	71	容器	桶	B1	11層		(14.2)	3.5	高さ23.0	追い柾目			遺存状態不良	
150	105	71	容器?	容器?	B1	11層	(19.6)	(8.0)	0.9		追い柾目	ヒノキ	京都科学	赤彩、側面に小孔	○
151	105	71	容器	桶底板	C2	11層			0.9	最大径14.0、直径13.4	柾目	ヒノキ	元興寺	側面の5ヶ所に木釘	○
152	105	72	施設材・器具材	板	B1	11層	(20.0)	(9.4)	1.4	孔0.3	追い柾目			田下駄?	
153	105	72	施設材・器具材	板	B2	9層	21.5	7.8	1.0		柾目				
154	105	72	用途不明品	用途不明	A1	11層	25.9	9.7	1.3	孔0.4	板目	スギ	京都科学	孔18ヶ所以上	○
155	105	74	用途不明品	用途不明	B1	11層	(11.5)	9.4	1.2	円形部：直径9.4～10.0の不整円	柾目	サカキ	元興寺		○
156	105	72	用途不明	用途不明	B2	11層	10.8	3.1	0.8		追い柾目	アスナロ属	元興寺		○
157	106	74	農耕土木具?	鋤?	B1	11層	(24.5)	(15.5)	0.6～1.8		柾目	アカガシ亜属	京都科学	組み合わせ平鋤?	○
158	106	74	農耕土木具?	鋤未製品?	B1	11層	25.7	12.8	1.3		柾目	アカガシ亜属	京都科学	組み合わせ平鋤未製品?	○
159	106	73	施設材・器具材	板	B1	11層	26.9	4.4	1.2～1.6		板目			両端を段状に作り出す	
160	106	73	運搬具	櫂	B1	11層	(40.6)	(8.3)	1.5	柄24.7×2.2 厚2.9	板目	スギ	京都科学		○
161	106	73	施設材・器具材	板	B1	11層	(37.4)	2.8	1.4		板目			端を段状に作り出す	
162	106	73	施設材・器具材	板	B1	11層	(30.0)	8.8～4.8	1.2		追い柾目			炭化部分あり	
163	106	73	施設材・器具材	板	C3	11層	60.9	10.7	1.6		追い柾目				
164	106	74	土木材	杭4	E9		(15.5)	5.4	4.4		分割材			一面から加工	
165	106	74	施設材・器具材	板	B1	9層	24.3	22.0	0.6		追い柾目			折敷の可能性	
166a	107	75	容器?	皿の未製品?	A1	11層	30.1	19.2	5.6		追い柾目	ケヤキ	京都科学	a～cはかたまって出土、黒変部あり	○
166b	107	75	容器?	皿の未製品?	A1	11層	26.7	16.5	4.5		追い柾目	ケヤキ	京都科学	黒変部あり	○
166c	107	75	容器?	皿の未製品?	A1	11層	23.7	17.8	4.8		追い柾目	ケヤキ	京都科学		○
167	107	73	その他の部材	分割材	B1		42.4	19.5	7.0		板目	アスナロ属	元興寺	復元樹径25～35cm	○
168	108	75	その他の部材	加工材	E9	11層	80.0	19.5	0.7～3.4		板目	スギ	元興寺	未製品?	○
169	108	76	施設材	矢板	F10		(46.9)	15.4	6.6		板目	スギ	パリノ		
170	108	76	施設材・器具材	板	B3	11層	51.0	15.5	4.1		板目	スギ	元興寺	側面に工具痕、劣化	○
171	108	76	建築部材	梯子	B1	11層	(86.4)	23.5	3.0～6.4		芯持ち材	スギ	元興寺	一部炭化	○
172	109	76	建築部材	梯子	A1	11層	(101.3)	10.6	2.0		追い柾目	スギ	元興寺	一端は斜め、方形の欠きこみあり、転用	○
173	109	76	建築部材	梯子	A1	11層	(70.3)	9.2	8.6		追い柾目	スギ	元興寺	一端は斜め、172と接合、転用	○
174	109	78	施設材	木樋	A1	11層	116.5	10.5	1.1～2.0	孔0.3～0.6	追い柾目	スギ	京都科学	端に孔7ヶ所	○
175	109	77	土木材	杭2	B1		93.2	7.9	6.4		分割材	スギ	パリノ		
176	109	77	土木材	杭1	B1		64.5	7.9	6.4		分割材	スギ	パリノ		
177	109	77	土木材	杭3	C4		79.5	4.5	2.2		分割材			全面を加工	
178	110	78	施設材・器具材	板	B1	11層	(106.5)	9.5	1.7	孔：2.4×2.4、4.1×2.1以上	板目			孔や段あり	
179	110	78	施設材・器具材	板	B1	11層	31.1	8.5	1.4	孔の直径0.9	追い柾目			円孔あり	
179	110	78	施設材・器具材	板	B1	11層	68.1	7.5	0.9		追い柾目				
180	110	78	施設材・器具材	棒	B1	11層	(64.4)	7.9	5.0		分割材	スギ	パリノ	端部が一部炭化	
181	110	78	施設材・器具材	棒	B1	11層	105.5	10.6	7.4		分割材			出ほぞあり	
182	110	78	施設材・器具材	板	A1	11層	107.4	9	1.3		板目			一端が三角形に突出	

※長さ、幅、厚さの()は現存の寸法を示す

※保存処理の「○」は処理を行ったものを示す

※分析機関　京都科学　㈱京都科学
パリノ　パリノ・サーヴェイ株式会社
元興寺　(財)元興寺文化財研究所

表12-1　山持遺跡5区　土器数量表(1)

		グリッド	A1	A2	B1	B2	B3	B3	C2	C3	C3	C4	D4	グリッド無し	計
		層位	10層	9層	9層	10層	9層	10層	10層	9層	10層	10層	10層		
時　期	器種	部位													
弥生後期	甕	口縁												3	3
		胴部												9	9
	不明	底部												1	1
土師器	壺	口縁												2	2
		胴部												6	6
	甕	口縁						1						10	11
		胴部	1	1		1	1		2		1			31	38
	高坏	体部												4	4
	鼓形器台	口縁												6	6
		体部												1	1
	不明	口縁							1						1
		胴部						1	1	1				26	29
古代・中世の土師器	坏	口縁	1	1	1	1							1		5
		胴部							1			1		1	3
		底部					1		1	2		1	1		6
赤彩土師器	坏	口縁					1					1			2
		胴部									1.5	0.5			2
	高坏	口縁												1	1
須恵器	坏	口縁				0.5		1		0.5					2
	甕	胴部												1	1
合　計			2	2	1	3	3	3	6	4	3	4	2	101	132

表12-2　山持遺跡5区　土器数量表(2)

		グリッド	A1	A2	B1	B2	B3	B4	C2	C3	C4	D4	D6	D7	E6	E7	E8	E9	E10	F7	F9
		層位	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層	11層
時　期	器　種	部位																			
弥生前期	甕	口縁																1			
弥生中期	甕	口縁																			
	高坏	脚部	1																		
弥生後期	壺	口縁																1			
		胴部	1											1			5				2
		底部															1	2			
	甕	口縁	1	2	4	1.5		1.5				1	5		0.5	1	17.5	26	2		2
		胴部	3		3			4		1	1	1	12	1		4	31	39	3		5
		底部			2							3	2			1	2	3			
	高坏	口縁																			
		体部	1																		
	鼓形器台	口縁	1										1			1		2			2
		体部			0.25	0.25				0.25	0.25							3			
	鉢	口縁	1																		
		胴部					1														
		底部																			
	注口土器																				
	不明	口縁											1			1	2	4			
		胴部	1		1													2	1		
		底部															2				
	計		10	2	10.3	1.75	1	5.5		1.25	1.25	5	21	2	0.5	8	60.5	83	6		11
土師器	壺	口縁	3	1			2.3	1		0.3		1.3					2	3			
		胴部	3	2	3		2	1				1				1	9	21			1
	甕	口縁	11	1.5	9	0.5	2	2		1	1	1	1			2	13	30.5			6.5
		胴部	74	7	23		4.5	6.5	1.5	4		20	5	1		6	42	239	16	1	22
		底部	1																		
	高坏	口縁	1		3	1				1.5	0.5	1	2					4	2		
		体部	3		1								3			1		16	2		
	鼓形器台	口縁	1		2								2					11			
		体部	4		1								3			2		6			1
	低脚坏	体部			1													2			
	小型器台																	1			
	鉢		1																		
	注口土器		0.5		0.5																
	不明	口縁						1								1	1	23			5
		胴部			10		4	5	1	4		5	2			7	30	105	9		4
	計		103	11.5	53.5	1.5	14.8	16.5	2.5	10.8	1.5	29.3	18	1		20	97	461.5	29	1	39.5
須恵器	坏	口縁	2		2																
古代・中世の土師器	坏	胴部															1	1			
合計			115	14	66	3	16	22	3	12	3	34	39	3	1	28	159	546	35	1	51

		グリッド	B2	B3	B4	C2	C3	C4	D4	B2	B3	C3	D4	グリッド無し	排土中	遺構内	合計
		層位	13層	13層	13層	13層	13層	13層	13層	15層	15層	15層	15層				
時　期	器　種	部位															
弥生前期	甕	口縁					1										2
弥生中期	甕	口縁		1													1
	高坏	脚部															1
弥生後期	壺	口縁							1								2
		胴部		3		1	1				1			3			18
		底部												4			7
	甕	口縁		4.5	0.5		1		2			1		21		2	97
		胴部	3	17	12		5	9	10	1	9	14	2	41			231
		底部					1						1	2			17
	高坏	口縁					1										1
		体部			1		1										3
	鼓形器台	口縁			1		1							2			11
		体部					1		1								6
	鉢	口縁															1
		胴部						1.5	0.5								3
		底部							1								1
	注口土器								1								1
	不明	口縁									1			2			11
		胴部	1		5		2			1	3	13	2	7			39
		底部															2
	計		4	25.5	19.5	1	15	10.5	16.5	2	14	28	5	82		2	455
土師器	壺	口縁												2			16
		胴部												18	1		63
	甕	口縁	1	2			2		2					3		2	94
		胴部	4.5				4	7	13					86	2	10	599
		底部												1			2
	高坏	口縁												3		2	21
		体部												12		3	41
	鼓形器台	口縁			1									8	1	17	43
		体部												13	1	32	63
	低脚坏	体部														1	4
	小型器台																1
	鉢																1
	注口土器																1
	不明	口縁												8			39
		胴部		1					1					169	2	28	387
	計		5.5	3	1		6	7	16					323	7	95	1375
須恵器	坏	口縁															4
古代・中世の土師器	坏	胴部															2
合計			10	29	21	1	21	18	33	2	14	28	5	405	7	97	1836

表13　山持遺跡5区　剥片一覧表

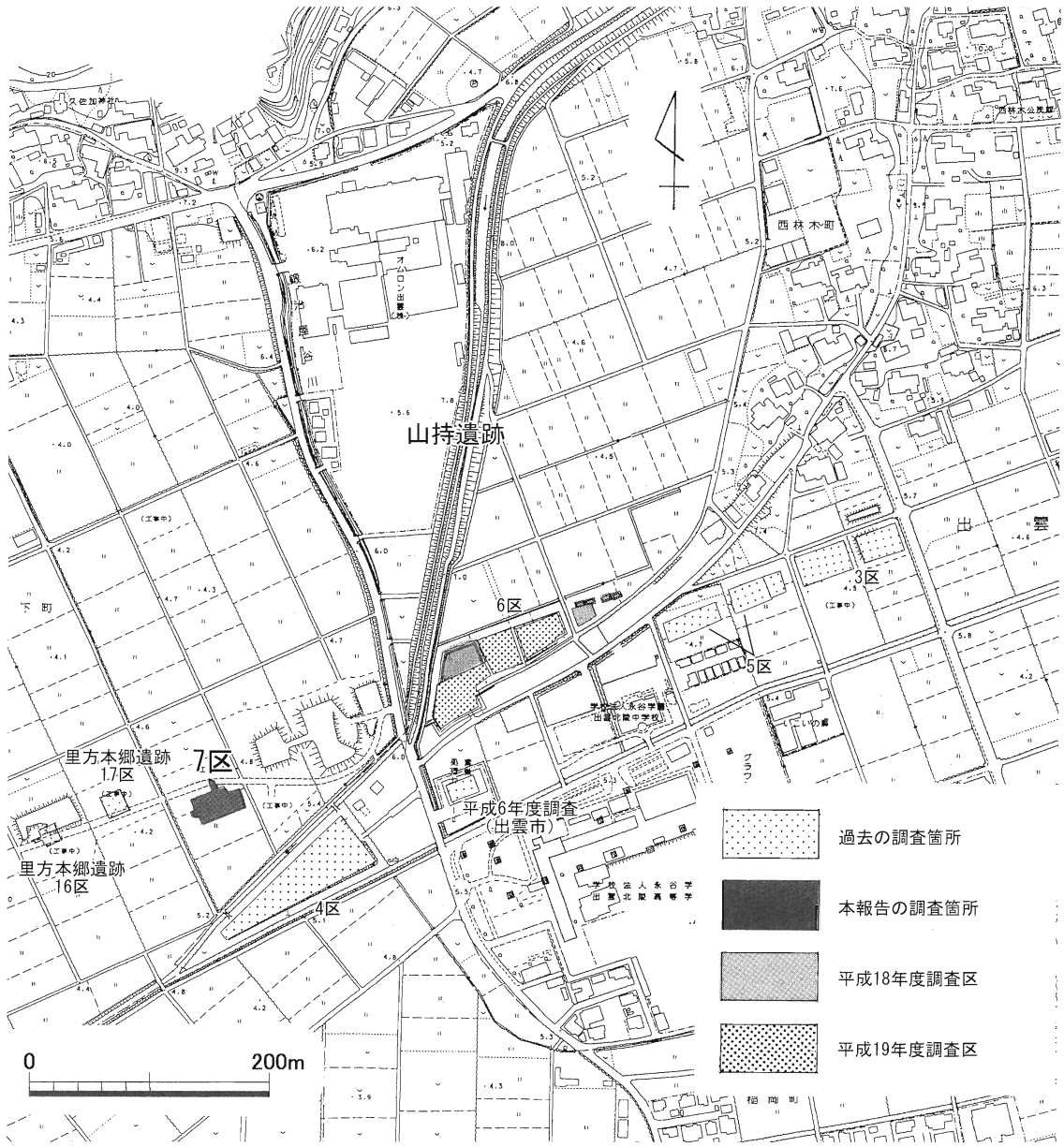
No.	グリッド	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
2	E8	11層	玉髄	4.14	1.91	0.98	6.71
1	C3	18層	チャート？	5.38	2.60	1.44	10.78

第５章　山持遺跡７区

第１節　調査の方法と経過

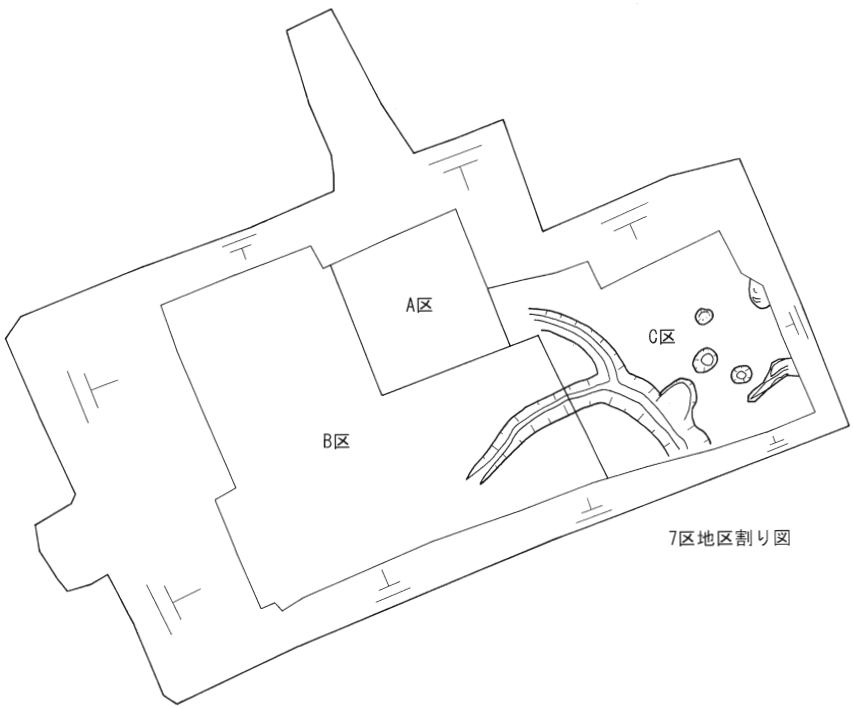
山持遺跡７区は出雲市日下町に所在する。遺跡が立地するところは水田で、標高は約４ｍである。里方本郷遺跡17区の東側に位置するが、遺跡の範囲や調査区の様相から、山持遺跡に含めた。山持遺跡４区の川を挟んだ北側に位置する。

第３章で述べた里方本郷遺跡同様、平成15年度にトレンチ調査を行い、T51～T53を設定した。このうちT51とT53からは、オモカス層の下位から遺物が出土した。山持遺跡７区は里方本郷遺跡に比べて標高がわずかに高く、特に里方本郷遺跡の西側の調査区と比べると全体に約１ｍ高くなっており、約1‰のきわめてゆるやかな傾斜で山持遺跡７区が高くなっている。平成16年度の調査は、里方本郷遺跡の調査を終了した後、遺構・遺物が多いと判断した道路用地の南側半分を対象として同年６月24日から調査を開始した。調査は10ｍ×10ｍの範囲を先行して調査を行ったところ、遺物が多く出土したことから、調査範囲を拡張した。調査に際してはグリッドの代わりに便宜的に



第111図　山持遺跡７区調査区位置図（S=1/6,000）

第 112 図　7 区平面図 (S=1/300)



7区地区割り図

「A」「B」「C」の範囲を設定して、遺構に伴わずに出土した遺物は範囲ごとに取り上げた。調査の結果、溝SD01、SD02、井戸SE03、土坑SK04～SK08を検出した。遺構は調査区の東側に多く検出した。一方遺物は調査区の全体から出土し、SD01から多くの遺物が出土した。遺構・遺物の精査を終了した後、8月12日に調査を終了した。調査面積は818㎡である。調査終了後は遺物整理を行い、平成19年度も引き続き遺物整理を行った。出土した遺物はコンテナ約20箱である。

第2節　層序

調査前の標高は約4mであり、盛土が約40cmの厚さで堆積していた。標高2.9m付近にはオモカス層が約30cmの厚さで堆積していた。オモカス層の標高は里方本郷遺跡より高い位置にある。第9層を掘削中に遺物が出土するようになった。溝や土坑などの遺構が掘り込まれるのは第11層上面からである。緑灰色を基調とする第11層、第12層を完掘し、遺物が出土しなくなったので、調査を終了した。

調査後の標高は、全体に西が低く、東側が高い。最大で約90cmの高低差があった。遺構は標高2.5m以上の部分で検出した。遺構の検出面の高さと遺構が主に調査区の東側で検出したこととは対応関係にあると考えられる（第112図）。

第3節　遺構

SD01（第114、115図）　調査区の南東側で検出した。弧を描いており、西側は徐々に浅くなる。弧を描いている部分があったことや須恵器が出土したことから、当初は円墳の可能性もあると考えていたが、完形になる土師器など土器の出土量が多いことから、円墳ではなく弧を描く溝と判断した。長さは現存で約15m、幅は1.4mから最大で2.4m、深さは40cm、断面は浅いU字形である。中程でSD02が分かれるが、切りあいは不明である。後述するSK06を切り、SK06より新しい。埋土は第113図によると4つに分けることができる。SD01の上面から埋土にかけて多くの土器が出土し、中には完形に復元できるものがあった。SD01の埋土中よりもSD01上面から上位で出土した土器が多く、SD01の中程から東側で多く出土し（第116図）、西側では少なかった（第120図）。出土土器には土師器と須恵器があったが、出土状況に傾向を認めることはできなかった。出土した土器には奈良・平安時代の須恵器や土師器がわずかに含まれるが、土師器や須恵器の年代から、古墳時代中期～後期と考えられる。

SD02（第114図）　調査区の中央で検出した。SD02もSD01同様にゆるいカーブを描いており、長さは現存で約5m、幅は1.2m、深さは約20cmである。西側は徐々に浅くなるが、A区の部分を深く掘りすぎていたために、遺構の端を把握することができなかった。遺物は土器が出土したが、SD01ほど多くはなかった（第124図）。出土した土器から、古墳中期～後期と考えられる。

SE03（第117図）　調査区の東側中央で検出した。楕円形の土坑である。埋土は5つに分けることができた。第2層は炭を多く含む。底部付近には湧水があり、土坑の側壁が一部崩れかけた部分もあった。土坑の底付近の第5層からはほぼ完形の土師器の鉢（第125図3）が出土したほか、甕なども出土した。出土した土器に奈良・平安時代の須恵器をわずかに含むが、第125図3から古墳中期と考えられる。湧水があることや完形の鉢が出土したことから、この土坑は素掘りの井戸の可能性がある。

SK04（第 118 図）　調査区の東側、SE03 の北側で検出した。円形の土坑である。埋土は 1 層である。遺物は出土しなかったので、時期は不明であるが、周囲の遺構の時期から古墳中期の可能性がある。

SK05（第 118 図）　調査区の東端で検出した。長細い不整形の土坑である。二段になっている部分があり、調査区の東側へ続く。埋土は 1 層である。遺物は土師器が出土したが、細片が多く図化できるものはなかった。古墳中期と考えられる。

SK06（第 119 図）　調査区の東側で検出した。南側を SD01 に切られており、SD01 に先行する。現状では不整楕円形である。埋土は 2 層である。土師器の高坏（第 125 図 2）が出土した。SD01 に先行することから古墳中期と考えられる。

SK07（第 118 図）　調査区の東端で検出した。調査区の端に位置しているので、西半分が残っている。楕円形と考えられる土坑である。南西側は二段に掘り込まれている。埋土は 1 層である。土師器の破片や土製品（第 125 図 4）が出土した。古墳中期と考えられる。

SK08（第 118 図）　調査区の東側で検出した。円形の土坑である。埋土は 3 つに分けることができた。土師器の甕（第 125 図 5）が出土した。古墳中期と考えられる。

SK06 を SD01 が切っていたが、混入と判断した須恵器を除けば、土坑からは須恵器が出土していない。一方 SD01 や SD02 からは須恵器が出土しているので、山持遺跡 7 区の遺構が形成された時期には、古墳時代中期と古墳時代中期～後期の二つの時期があると考えられる。

第 4 節　遺物

遺物はほとんどが土器である。遺物の出土点数ではＡ区が最も少ないが、出土場所では、調査区の北西側が最も疎である。全体に高い密度で遺物が出土したということができる（第 120 ～ 124 図）。土器はほとんどが 9 層から出土した。土器の種類や器種による出土位置の傾向は明確に指摘することができなかった。遺構から出土した土器は形を保っている個体が多いが、それ以外の土器はほとんどが破片で出土した。土器は土師器が最も多く出土し、中でも甕が最も多かった。遺構や調査区では、SD01 と B 区から多く出土した。

(1) 遺構出土土器（第 125、126 図）

SE03（1、3）　1 は全体に厚く作っている。3 は SE03 の底部付近から完形で出土した。作りは厚く、口縁部は体部から短く伸びる。

SK06（2）　脚部に稜を持ち、屈曲する。脚部径は小さい。

SK07（4）　土製品である。移動式竈の突帯の破片の可能性がある。

SK08（5）　厚手の口縁部である。甕と考えたが、移動式竈の口縁の可能性もある。

SD01（6 ～ 34、36、38 ～ 40）　土師器と須恵器が同一の層位から出土した。6 は古墳前期の土師器である。複合口縁で、口縁端部に面がある。7 区からは古墳前期の土師器の出土はほとんどない。

7 ～ 9 はわずかに複合口縁の痕跡を残す。7 は肩部にハケ原体による大ぶりの羽状文がある。文様があることから壺と考えた。8 は口縁部の一部を欠く。肩部には強いヨコナデの後 2 条の沈線と刺突文があるが、刺突文は 1/6 周程度の間隔をあけて施される。胴部外面の一部と底部内面に炭化物が付着するのみで、使用の痕跡はあまり見られない。胴部下半に穿孔がある。10 ～ 13 は口縁部がゆるやかに外反する。11 は外面に凹凸が目立ち、製作時の痕を残している。炭化物がわずかに

付着し、使用の痕はあまり見られない。9～11が肩の張る器形に対し、13は胴の張る器形である。SD01とC区から出土し、接合した（第124図）。

14～16は鉢である。14は厚手である。SD01とSK06から出土して接合した。15は胴部を欠く。16は小型の鉢に復元した。17、19は赤彩の椀である。体部外面にケズリ調整を行うことで高坏坏部と区別した。17はやや深い。19は内面に暗文風のヘラミガキがある。18､20～24は高坏である。18は20に比べて脚部が短く太い。21～23は体部から屈曲して大きく開き口縁部に至る。21や23は坏部内面にヘラミガキがあるが、赤彩はしていない。24の脚部の上部は坏部と剥離している。

25～34、38～40は須恵器である。26は明るい灰色で、硬質な焼成である。口縁部は体部から内側に屈曲して伸び、内面に段がある。27も口縁部内面に段がある。口縁部は直線的である。回転ヘラケズリの範囲は26よりも狭い。29～32は短脚無蓋高坏である。29は体部からわずかに屈曲して口縁部に至る。突帯は低い。30は脚端部で屈曲する。29、30は焼成が悪く、軟質で灰白色である。31は図上で復元した。口縁端部に段があり､突帯が高いなど､29に比べて古い要素がある。32は脚端部が段を持って屈曲する。33はSD01とC区など広い範囲から破片で出土した。横瓶の可能性がある。34は甕である。SD01や調査区の広い範囲から破片で出土した。口縁部は玉縁状に肥厚する。38は瑞である。SD01の他にB区から出土した。頸部や胴部、口縁部に波状文がある。39、40は甕の体部片である。40は軟質で、外面にカキメ、内面はナデである。36は奈良・平安時代の土師器である。

SD01の時期は、18～20のように古墳中期までさかのぼる可能性のある土器があるが、26、27、29～32、38のような出雲1～2期の須恵器やそれに伴うと考えられる21～24の土師器から、下限は古墳中期末～後期初頭と考えられる。

SD02（35、37）　SD02は出土土器数が少なく、2点を図示した。35は内外を丁寧なナデで調整している。内面に接合痕があり、横瓶と考えた。37は赤彩の椀である。内面に放射状のヘラミガキを行う。

SD02の時期は、古墳中期～後期と考えられる。

(2) 7区出土遺物（第127、128図）

41～48は土師器の甕である。41は口縁部が外側に屈曲して端部に至る。肩部はタテハケが中心で、胴部最大径付近にヨコハケがある。炭化物の付着など使用痕は見られない。42、43は短い複合口縁がある。45は口縁部が中ほどで屈曲する。46は口縁部に厚い部分があり、わずかに複合口縁の痕がある。47～49は口縁部が内側に屈曲して端部へ至る。48は移動式竈の可能性がある。50～53は高坏脚部である。52は円形の透かしが三方にあり、脚柱部が長いので、古い時期の特徴がある。54は赤彩の土師器であるが、体部外面が摩滅しておりヘラケズリの痕が確認できないので、椀または高坏坏部と考えられる。55は脚柱部が短い。56は比較的大形の椀である。57～61は古墳時代の須恵器である。57は回転ヘラケズリの範囲が広く、肩部の稜も突出しているので、古い要素を持っている。58も同様に古い時期の要素がある。59は焼成不良で軟質である。口縁部は直線的である。60は甕である。61は短脚無蓋高坏の脚端部と考えられる。長方形透かしがある。これらの土器はSD01同様、古墳中期末～後期初頭が中心である。

62～64は奈良･平安時代の須恵器である。62は高台付坏である。底部は糸切り後ナデで調整する。63は坏である。体部は回転ナデで調整する。64は底部に墨書がある。円を描いているように見え、

判読できない。65は平安時代の土師器である。

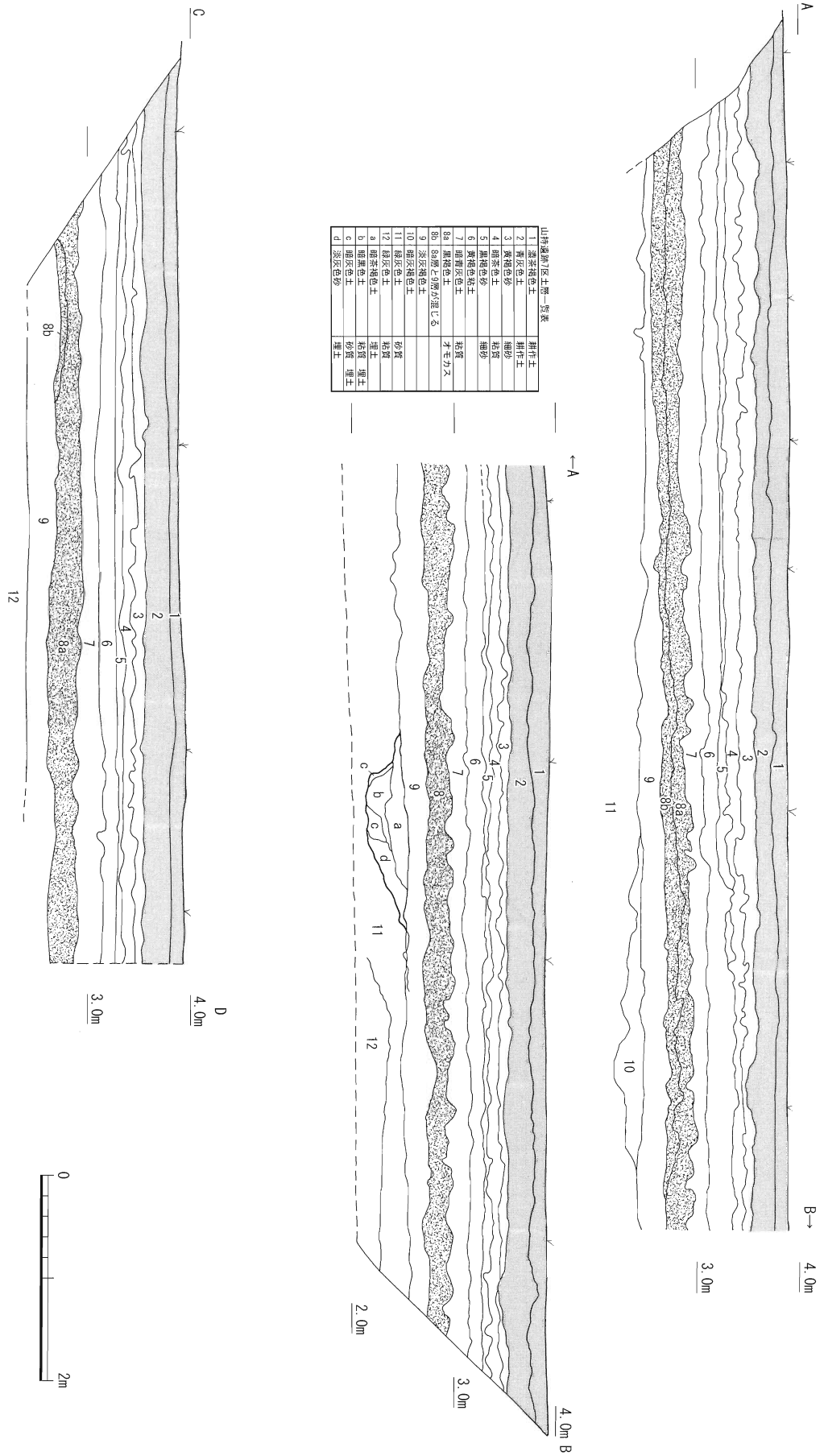
66は移動式竈と考えられる。SD01やSD02から出土した破片がB区の破片と接合した。奈良時代のものに比べて器壁が薄い。67は敲石である。一端に敲打痕がある。C区から出土した(第120図)68は調査区から唯一出土した弥生中期前葉（Ⅱ様式）の甕である。口縁部に粘土を貼り、断面三角形にしている。69は内外に丁寧なナデで調整している。無頸壺の可能性がある。72は内外面をナデ調整する。72は鉢または小形の甕の器形であるが、内外面を赤彩する。73は壺の口縁部である。38とは接合しない。74、75は移動式竈の突帯である。74はヘラで接合面に凹凸をつけている。

第5節　小結

山持遺跡7区では弥生時代後期の遺構や遺物は無く、古墳時代中期～後期の遺構や遺物を確認したことから、この時期が中心的な時期であったことがうかがえる。この様相は1～3、5区の様相と異なり、川を挟んで位置する4区の様相と共通する部分がある。この一因として、古墳前期～中期の湿地化により、山持遺跡1～3区から4区周辺へ居住域が移動している可能性が指摘されている（島根県教育委員会編2007　185頁)。7区の遺構は調査区の東側の、比較的標高が高い部分に位置することから考えると、調査区の西側の標高の低い部分は隣接する里方本郷遺跡16区や17区のように湿地であり、積極的な土地の利用が行われなかったと考えられる。山持遺跡4区でも東側が高く、ゆるやかに西へ向けて低くなっていることから、7区の様相が山持遺跡の西端を示していると考えられる。そのなかで古墳中期や後期の土器が出土したこと、4区で見られたガラス玉や碧玉製品が7区で出土しなかったことは、古墳時代においても居住域の移動を示す可能性がある。

【参考文献】

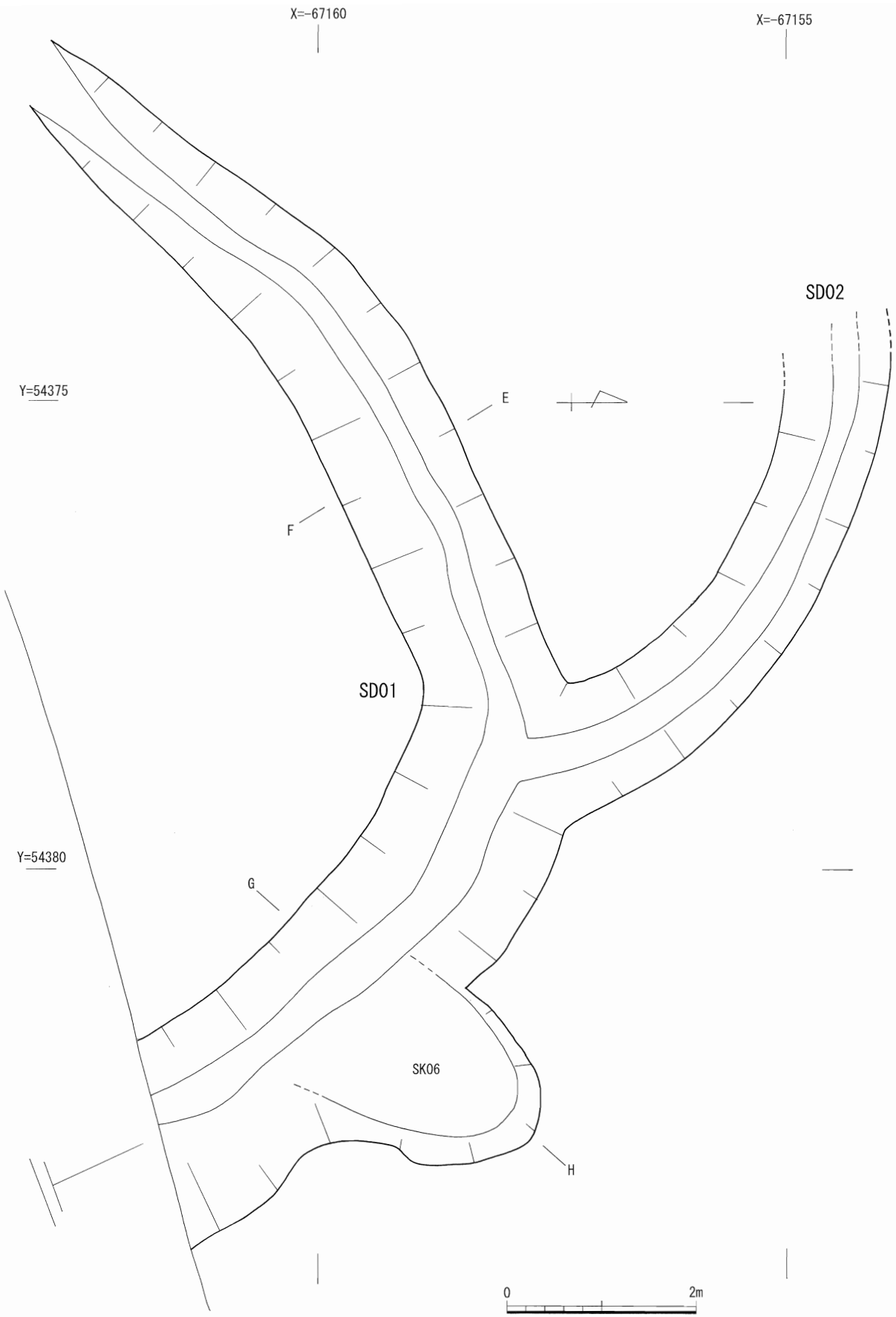
島根県教育委員会編　『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区　Vol.2』　国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　2007



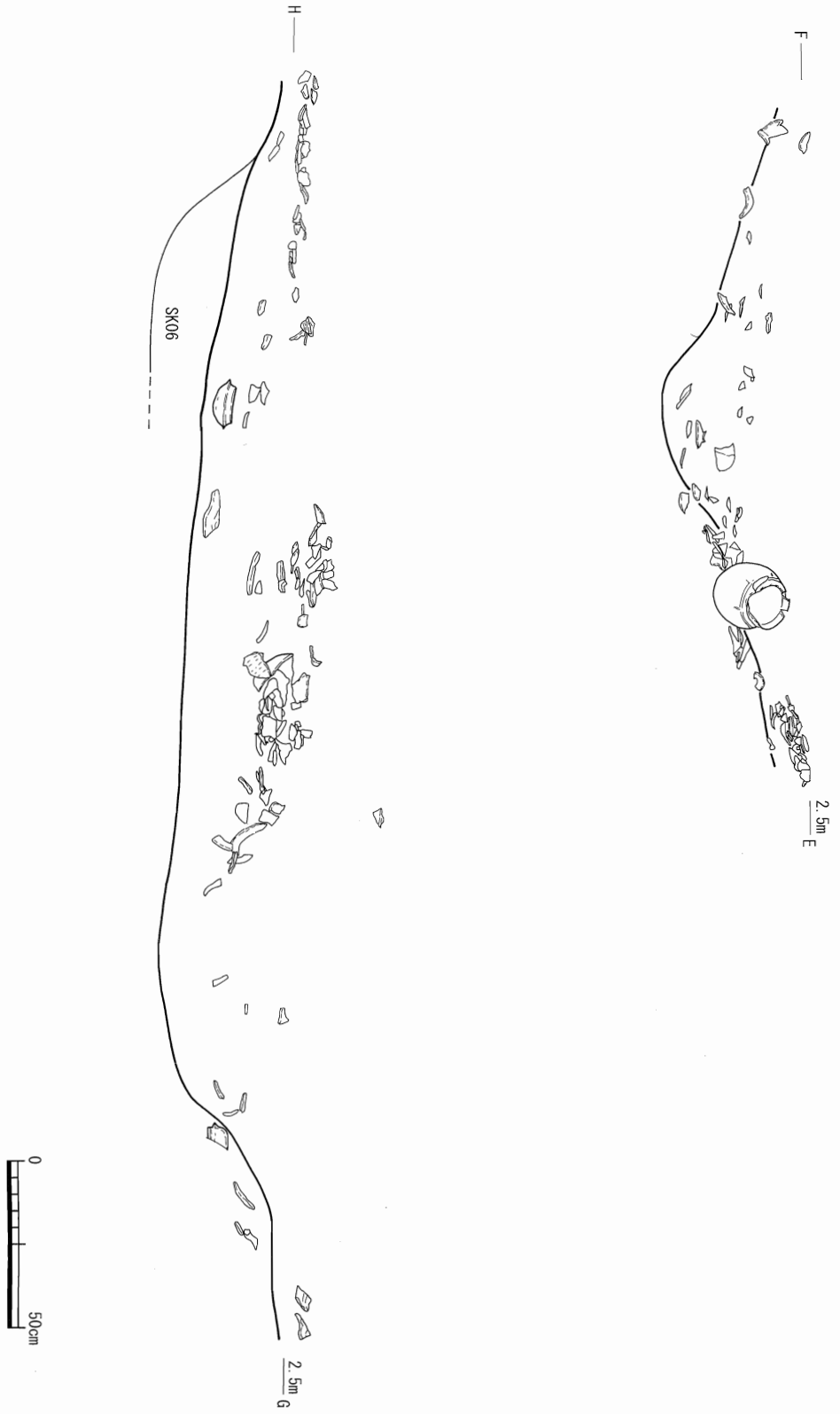
山持遺跡7区土層一覧表

1	濃茶褐色土	耕作土
2	青灰色土	耕作土
3	黄褐色砂	細砂
4	暗茶色土	粘質
5	黒褐色砂	細砂
6	黄褐色粘土	
7	暗青灰色土	粘質
8a	黒褐色土	オモカス
8b	8aの炭と砂が混じる	
9	淡灰褐色土	
10	暗灰褐色土	
11	緑灰色土	砂質
12	緑灰色土	粘質
a	暗茶褐色土	埋土
b	暗黒色土	粘質 埋土
c	暗灰色土	砂質 埋土
d	淡灰色砂	埋土

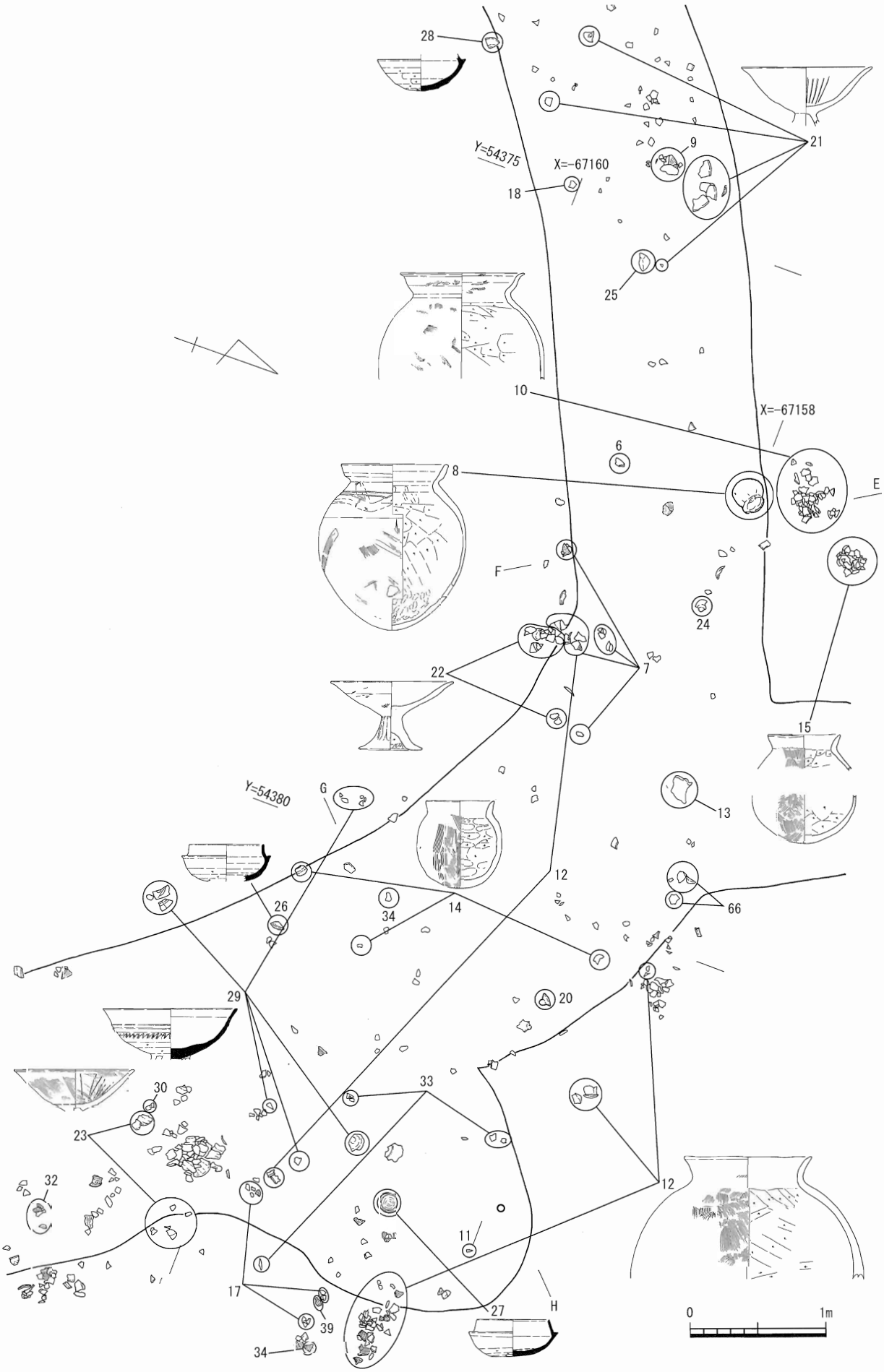
第 113 図　7 区土層図 (S=1/60)



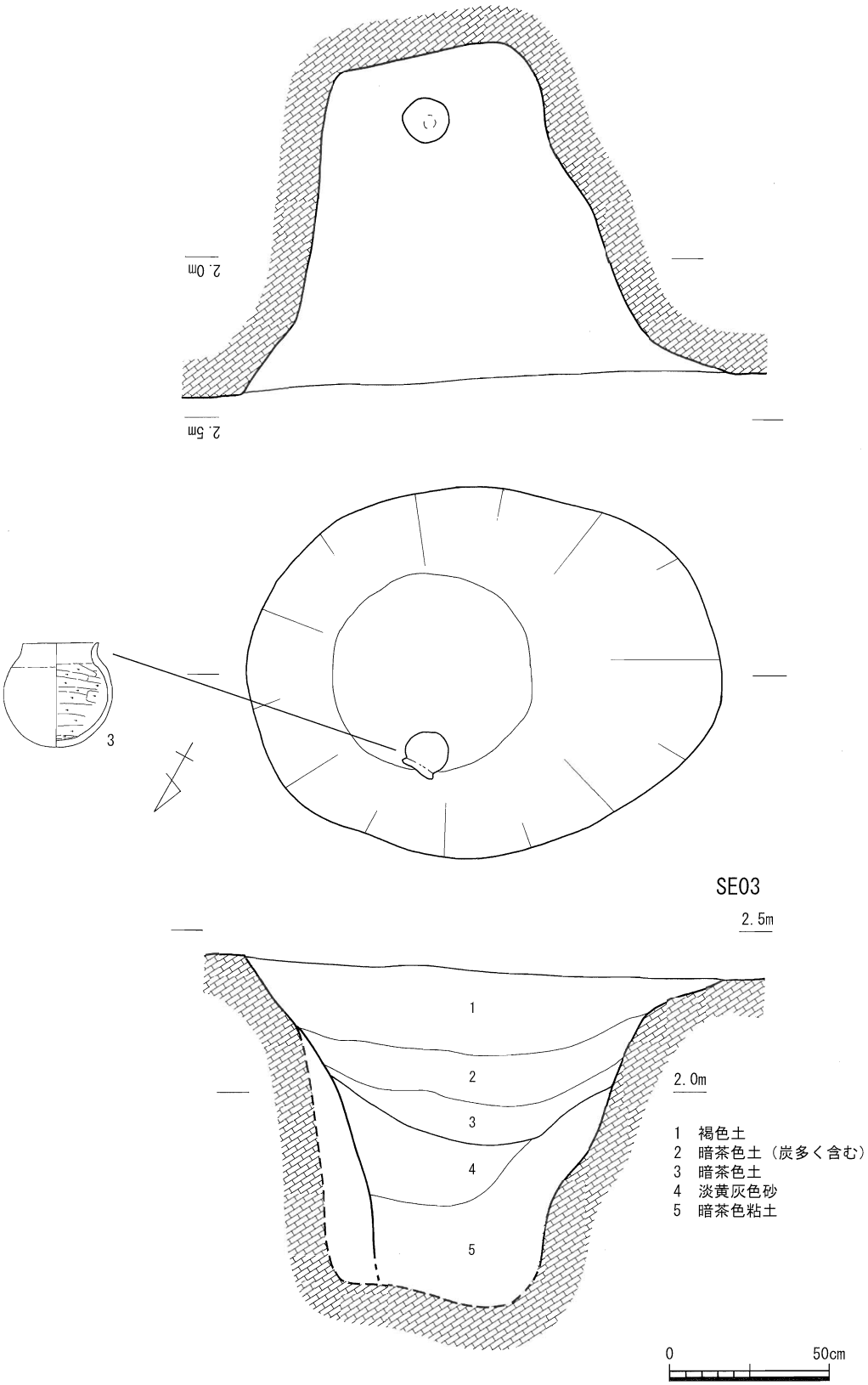
第 114 図　7 区 SD01、SD02 平面図 (S=1/60)



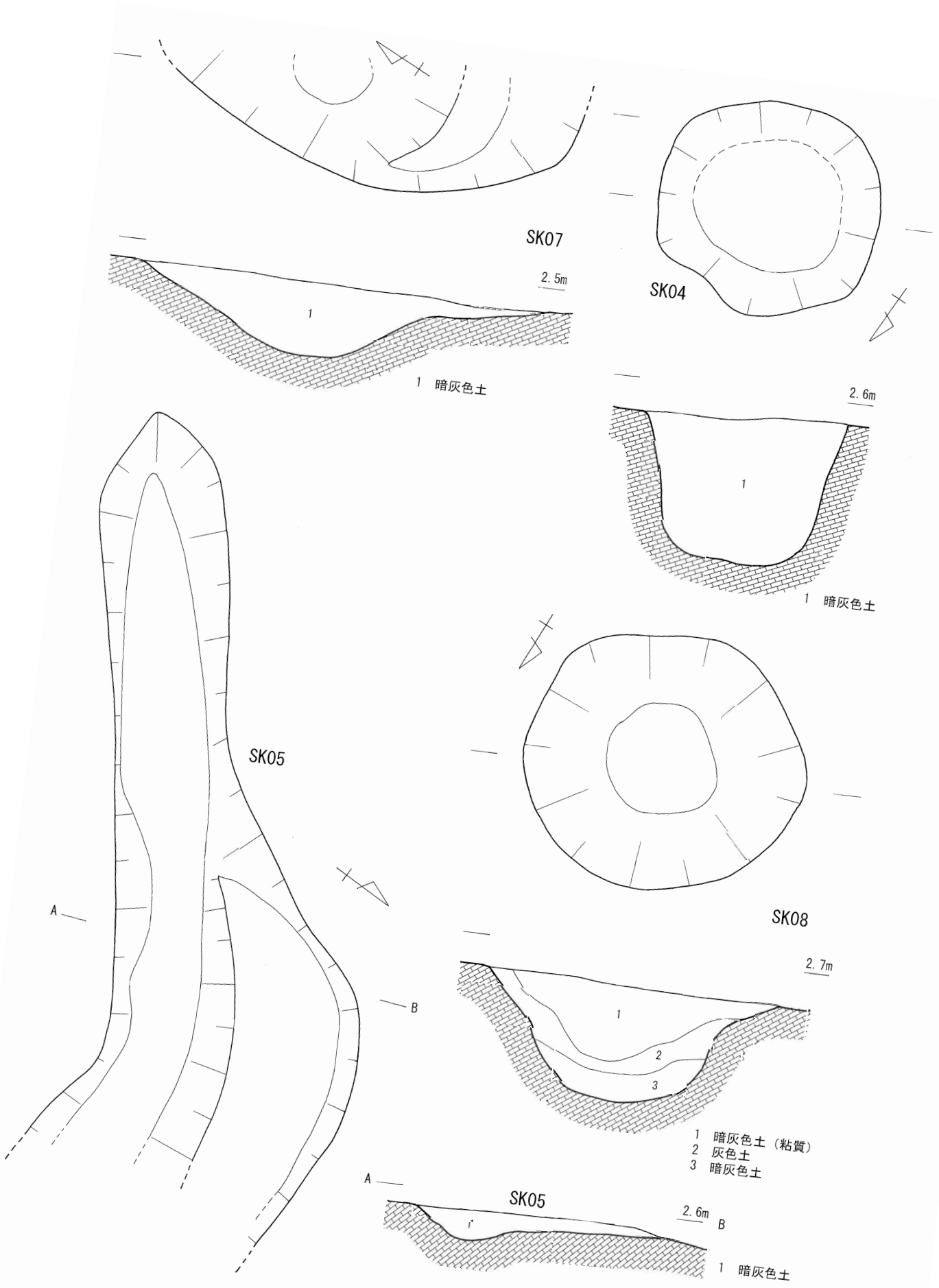
第115図　7区SD01立面図 (S=1/20)



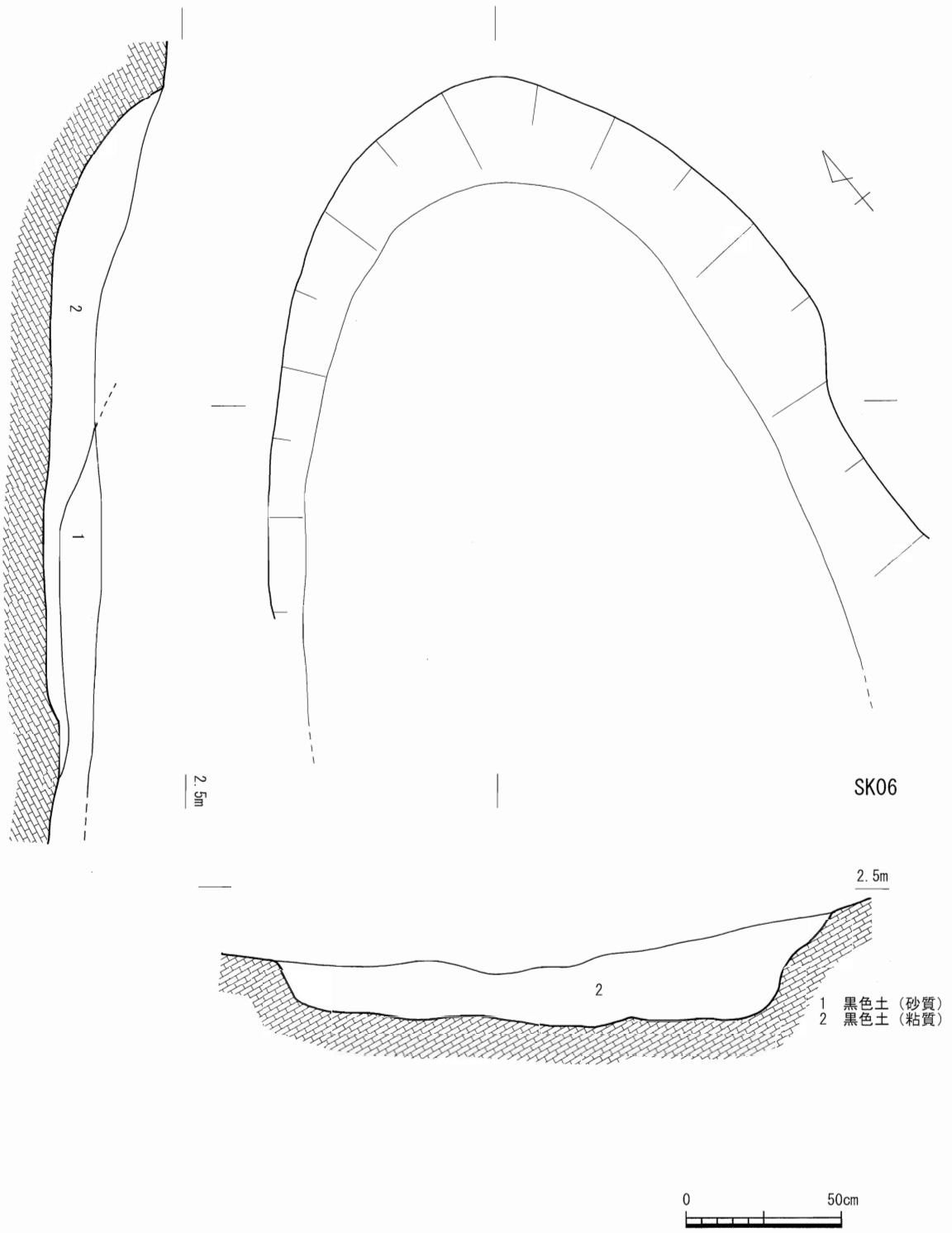
第 116 図　7 区 SD01 遺物出土状況図 (S=1/40)



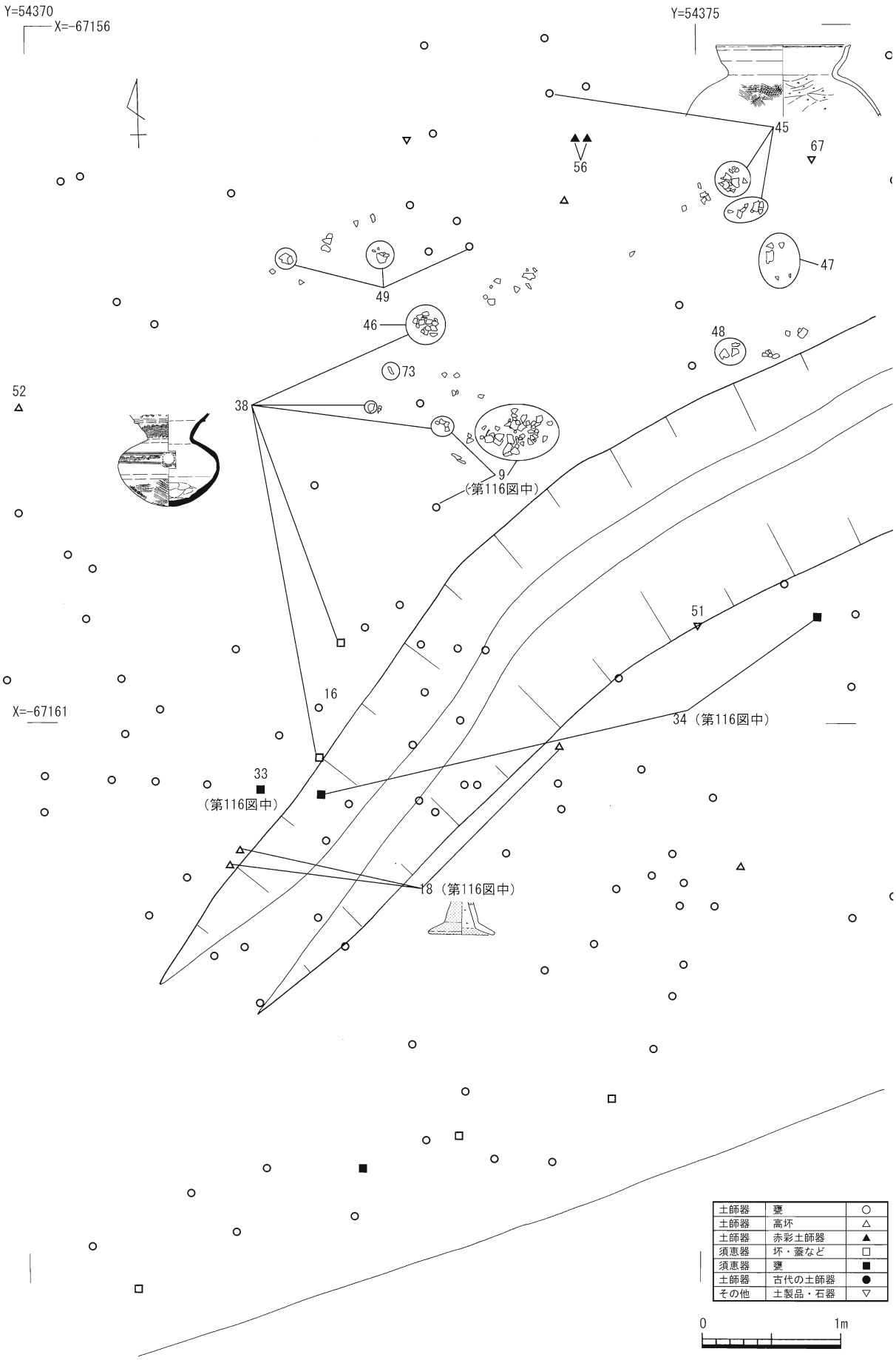
第 117 図　7 区遺構図 (1) (S=1/20)



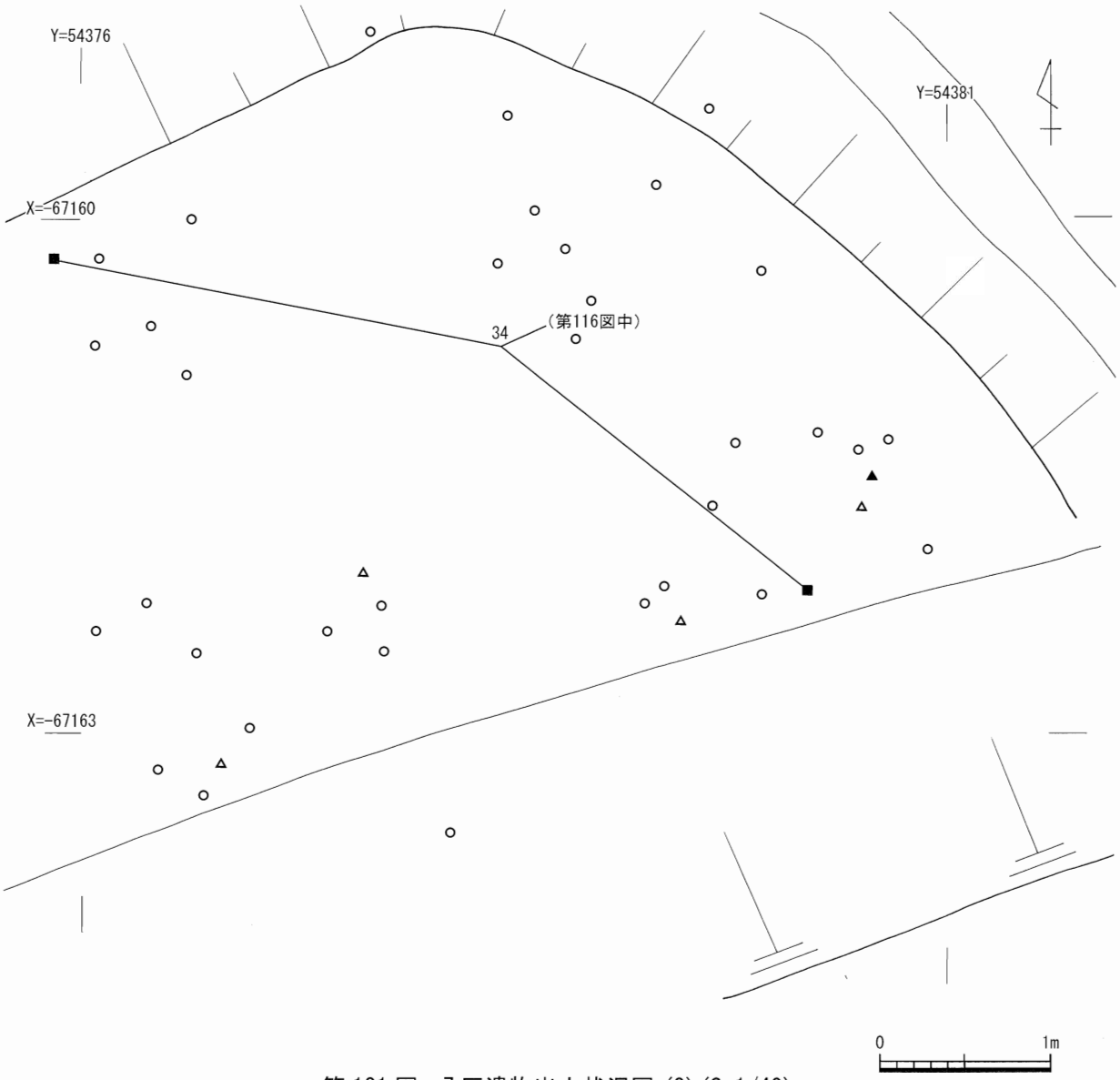
第118図　7区遺構図 (2) (S=1/20)



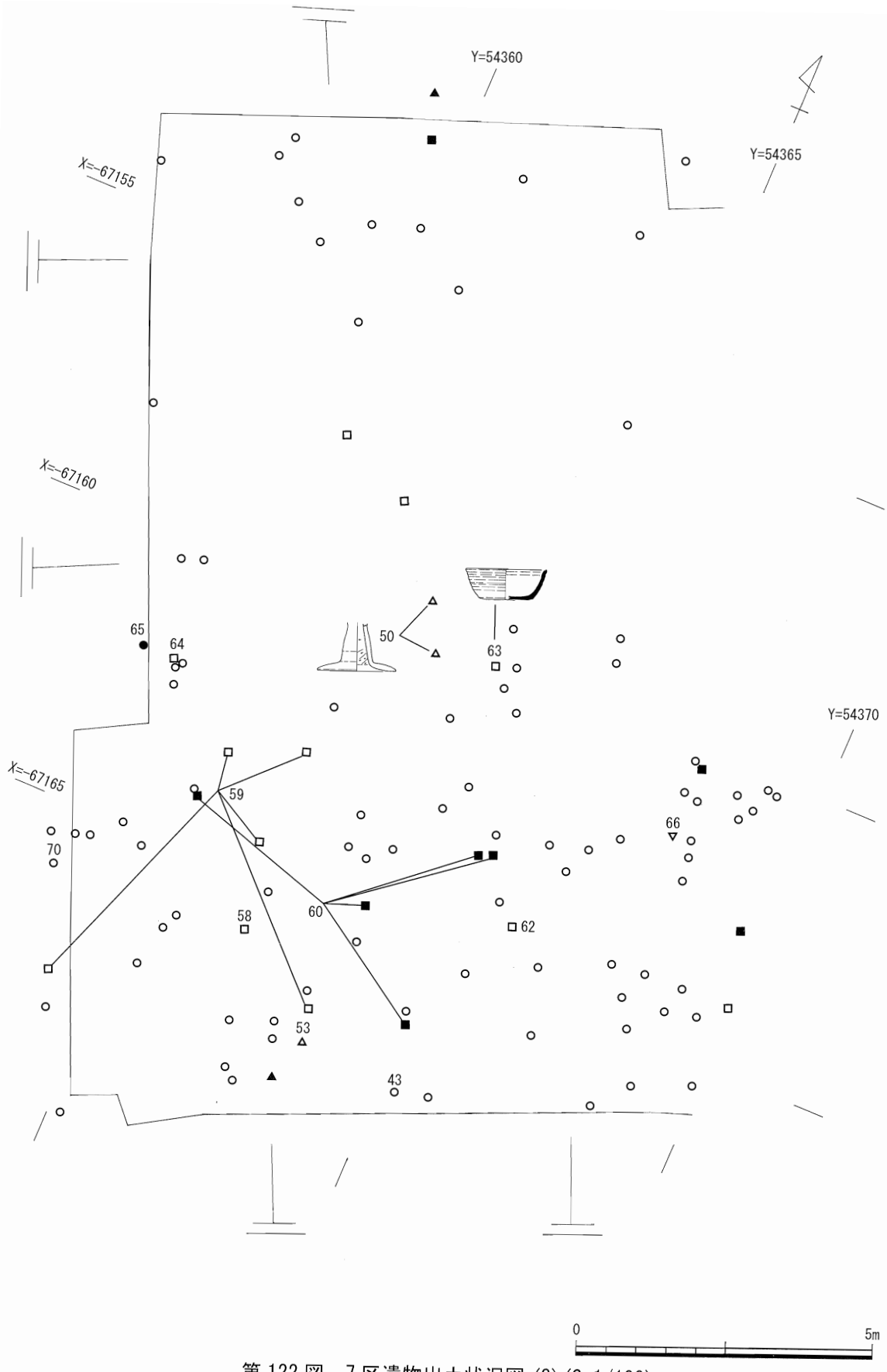
第 119 図　７区遺構図 (3) (S=1/20)



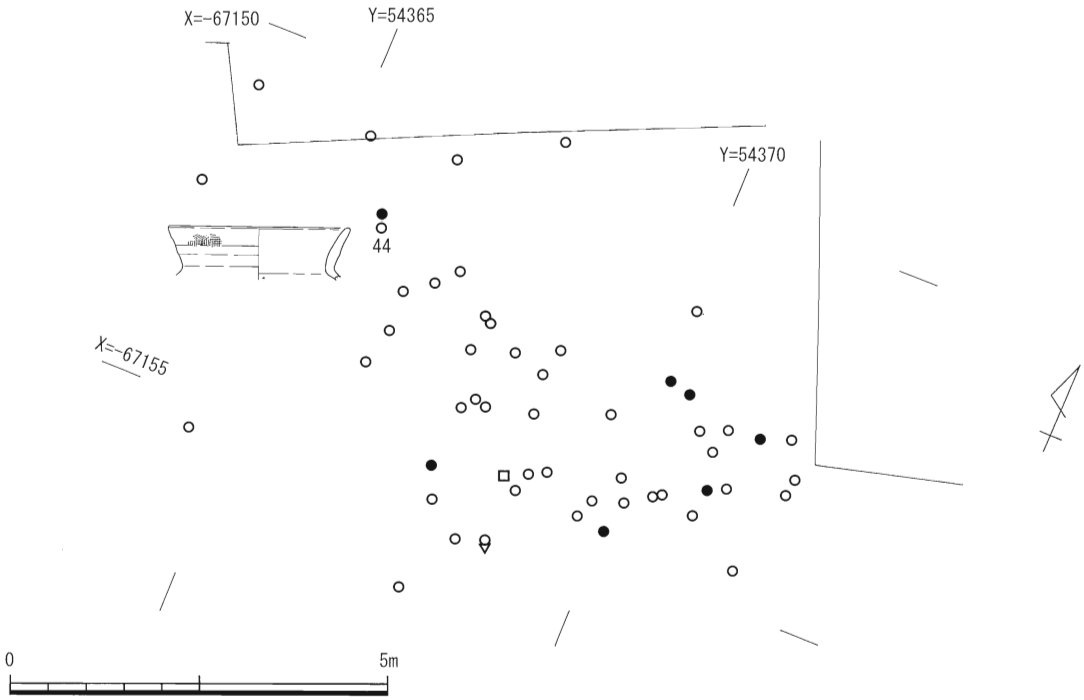
第 120 図　7 区遺物出土状況図 (1) (S=1/40)



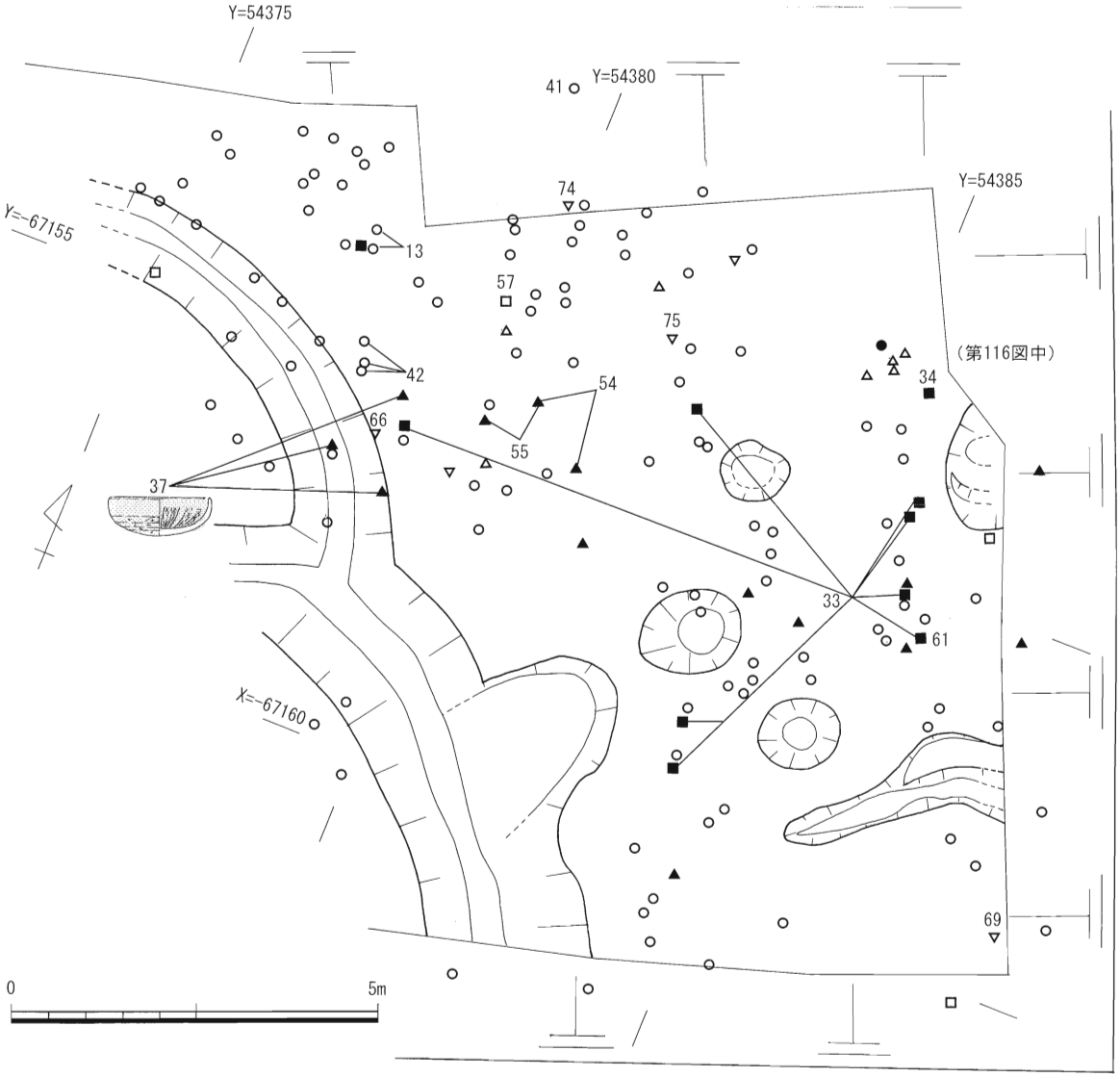
第121図　7区遺物出土状況図 (2) (S=1/40)



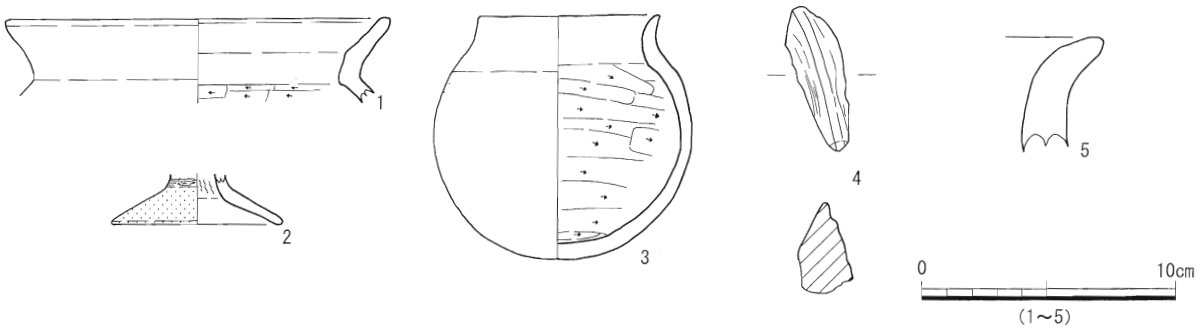
第 122 図　7 区遺物出土状況図 (3) (S=1/100)

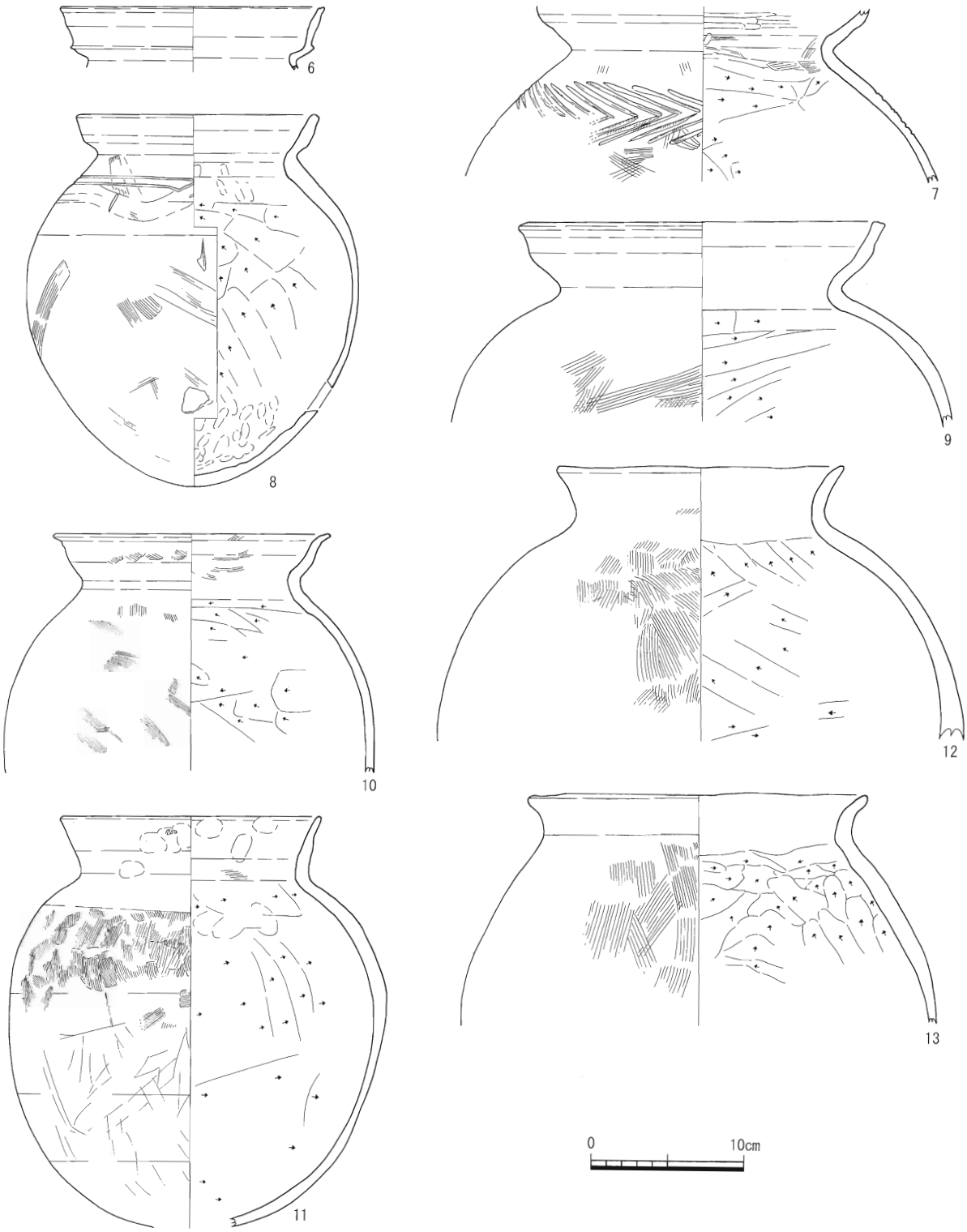


第123図　7区遺物出土状況図 (4) (S=1/100)

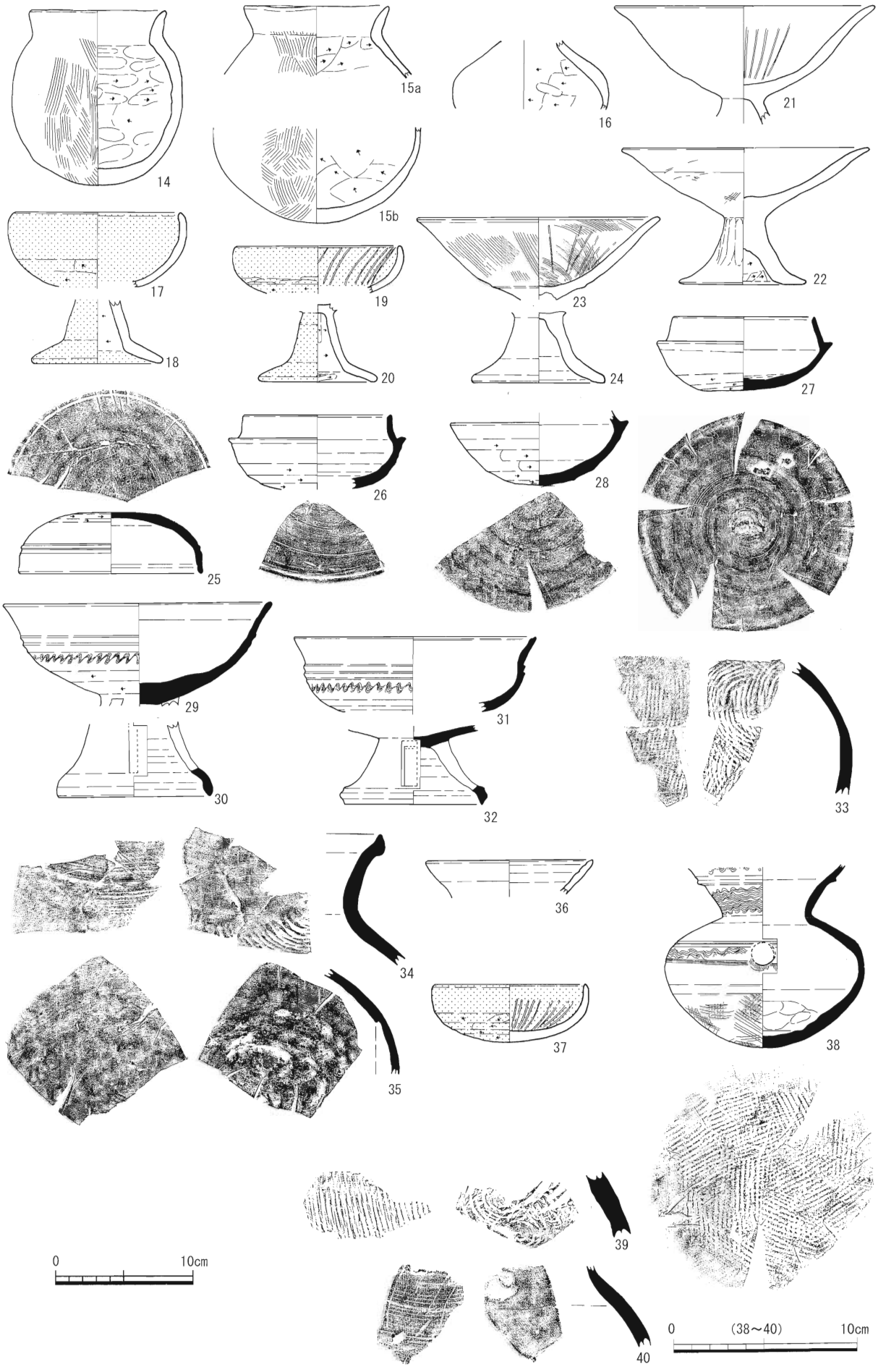


第124図　7区遺物出土状況図 (5) (S=1/100)

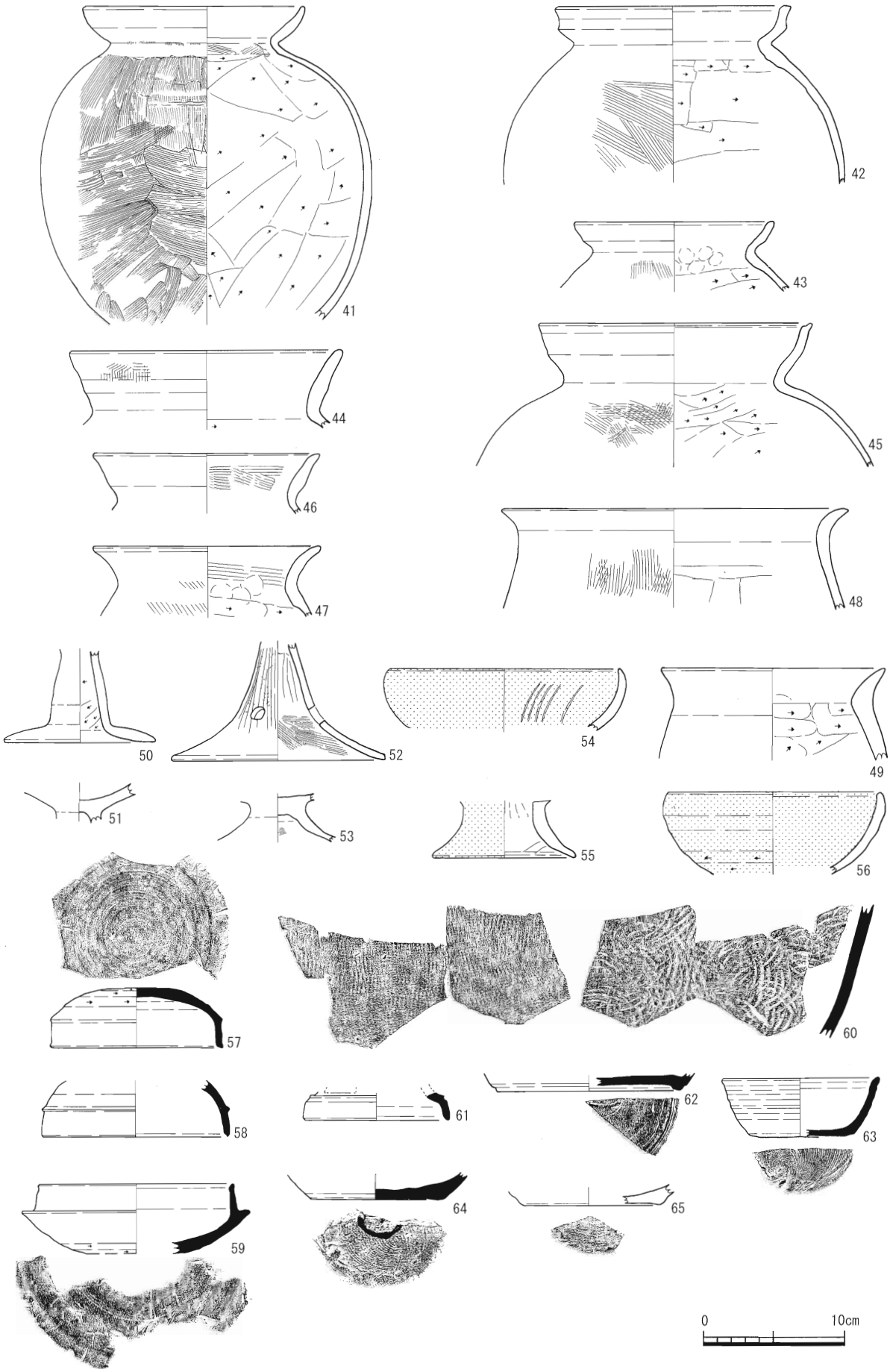




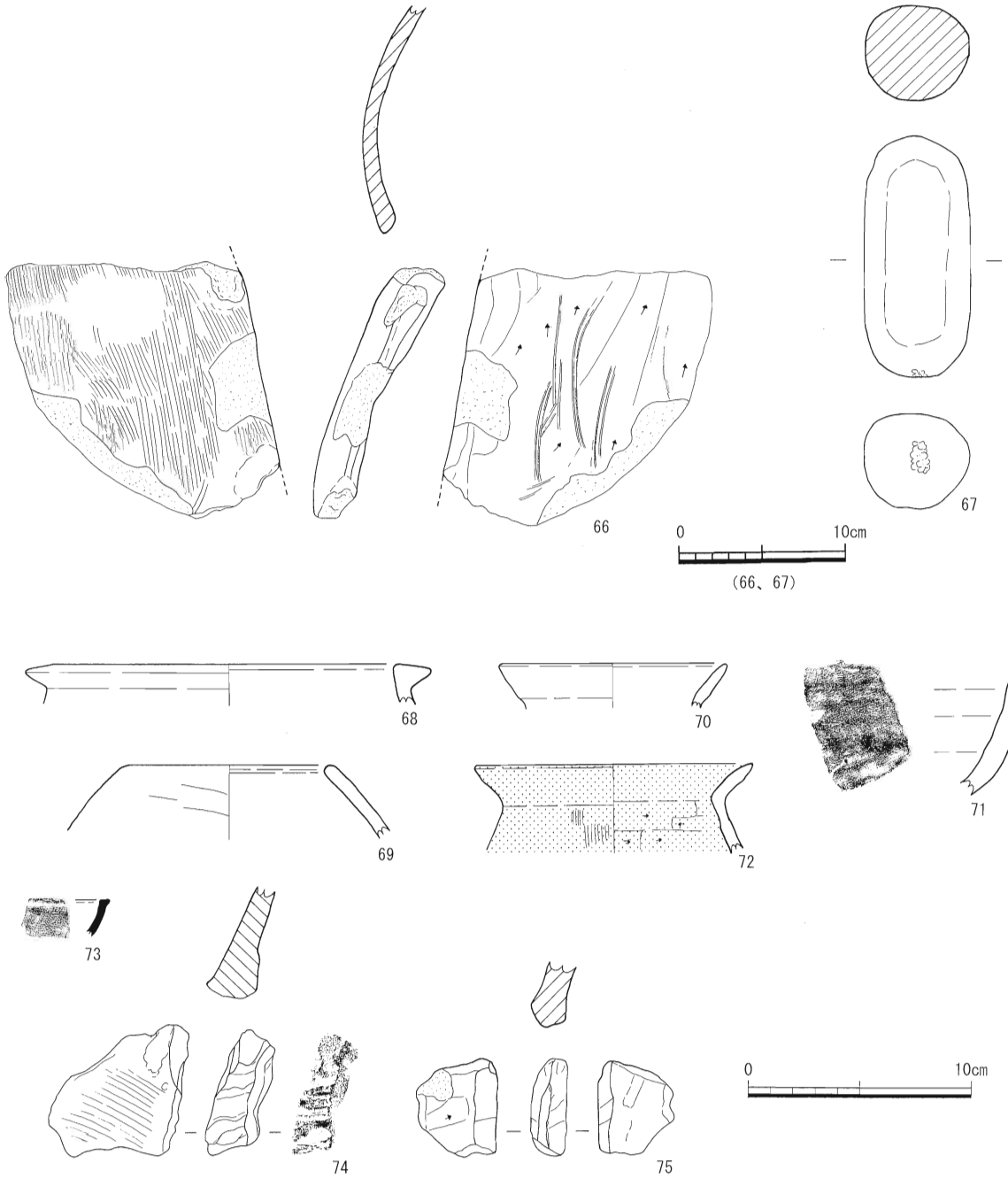
第 125 図　土器実測図 (1) (S=1/3・1/4)



第 126 図　土器実測図 (2) (S=1/3・1/4)



第 127 図　土器実測図 (3) (S=1/4)



第128図　土器・石器・土製品実測図 (S=1/3・1/4)

表14　山持遺跡7区遺構一覧表

遺構名	挿図	位置	形態		規模(cm)				床面の標高	備考
			上面	下面	上面		下面			
					長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
SD01	114	B.C	弧を描く	弧を描く	(1580)	228	(1408)	52	2.03	土器多く出土
SD02	114	C	曲線的	曲線的	(656)	136	(628)	44	2.05	土器出土
SE03	117	C	楕円形	円形	144	114	64	61	1.34	土器出土
SK04	118	C	不整形	不明	92	84	56	(17)	1.88	
SK05	118	C	不整形	不整形	(312)	100	(256)	34	2.53	
SK06	118	C	不整楕円形	楕円形	216	(196)	176	(162)	2.05	SD01に切られる
SK07	118	C	不明	不明	(172)	(57)	(30)	(10)	2.09	
SK08	118	C	円形	円形	110	97	45	44	2.10	

()は現状での寸法

表15　山持遺跡7区土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	遺構／出土位置	種別	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
1	125	85-1	SE03	土師器	甕	厚手	橙色　5YR 6/8	黄橙色　10YR 7/8	10	(19.6)			
2	125	85-1	SK06	土師器	高杯	外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	25				(8.5)
3	125	83	SE03	土師器	鉢	厚手	明黄褐色　10YR 7/6	黒褐色　10YR 3/1	完形	9.4	12.9	13.5	
4	125	85-1	SK07	土製品	竈	突帯の部分	にぶい黄橙色 10YR 7/4	にぶい黄橙色 10YR 7/4					
5	125	85-1	SK08	土師器	甕または竈		褐灰色　10YR 5/1	灰黄褐色　10YR 6/2					
6	125	85-1	SD01	土師器	甕	複合口縁	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	10	(19.0)			
7	125	85-1	SD01	土師器	壺?	肩部に羽状文	黄灰色　2.5Y 4/1	浅黄色　2.5Y 7/3	20				
8	125	83	SD01	土師器	甕	焼成後穿孔、肩部に沈線と列点文	灰白色　10YR 8/2	浅黄橙色　10YR 8/3	ほぼ完形	15.7	24.4	21.5	
9	125	83	SD01	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	70	22.6			
10	125	85-2	SD01	土師器	甕		灰黄色　2.5Y 7/2	灰黄色　2.5Y 7/2	15	(18.0)			
11	125	83	SD01	土師器	甕	胴部ヘラナデ	にぶい橙色　7.5YR 6/4	にぶい橙色　7.5YR 6/4	80	17.0		23.8	
12	125	86-1	SD01	土師器	甕		明黄褐色　10YR 6/8	黄橙色　10YR 7/8	35	(18.4)			
13	125	86-1	SD01・C区	土師器	甕	外面に炭化物付着	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	20	(21.8)			
14	126	86-2	SD01・SK06	土師器	鉢	外面に炭化物付着、底部付近は被熱	明褐色　7.5YR 5/8	明褐色　7.5YR 5/8	40	(9.6)	12.8	(12.2)	
15a	126	83	SD01	土師器	鉢		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	現存部完存	10.4			
15b	126	83	SD01	土師器	鉢	丸底	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	現存部完存				
16	126	86-2	SD01	土師器	鉢?	摩滅により調整不明	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	20			(10.2)	
17	126	86-2	SD01	土師器	椀	内外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	30	(10.0)			
18	126	83	SD01	土師器	高坏	内外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	75				9.2
19	126	86-2	SD01	土師器	椀	内外面赤彩、内面ヘラミガキ	灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	25	(10.0)			
20	126	86-2	SD01	土師器	高坏	外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/3	黄色　2.5Y 8/6	40				(8.2)
21	126	83	SD01	土師器	高坏	内面ヘラミガキ	橙色　7.5YR 7/6	橙色　7.5YR 7/6	60	18.6			
22	126	83	SD01	土師器	高坏		黄橙色　10YR 8/6	浅黄橙色　10YR 8/4	脚部完存	17.7	10.1		8.5
23	126	83	SD01	土師器	高坏	内面ヘラミガキ	橙色　7.5YR 6/8	橙色　7.5YR 6/8	70	17.4			
24	126	86-2	SD01	土師器	高坏		黄橙色　10YR 8/6	黄橙色　10YR 8/6	35				(9.4)
25	126	84	SD01	須恵器	坏蓋	沈線で稜を作る	青灰色　10BG 6/1	青灰色　10BG 6/1	25	(13.0)	4.5		
26	126	87-1	SD01	須恵器	坏身	口縁部内面に段、硬質	青灰色　5B 6/1	明オリーブ灰色 5GY 7/1	25	(10.6)			
27	126	84	SD01	須恵器	坏身	口縁部内面に段	青灰色　5B 6/1	明青灰色　5B 7/1	完形	10.4	5.4		
28	126	87-1	SD01	須恵器	坏身		灰色　7.5Y 6/1	灰白色　10Y 8/1	25			(13.0)	
29	126	84	SD01	須恵器	高坏	焼成不良、波状文、突帯2条、長方形三方透かし	灰白色　7.5Y 8/2	灰白色　7.5Y 8/2	60	19.2			
30	126	87-1	SD01	須恵器	高坏	焼成不良　長方形四方透かし	灰白色　5Y8/2	灰白色　5Y8/2	20				(11.0)
31	126	87-1	B・SD01	須恵器	高坏	波状文、高い突帯2条、内面に重ね焼きの痕有り	青灰色　5B 5/1	緑灰色　10G 6/1	10	(17.6)			
32	126	87-1	SD01	須恵器	高坏	長方形四方透かし	青灰色　5B 5/1	青灰色　5B 5/1	25				(10.0)
33	126	87-1	C・SD01	須恵器	横瓶?	自然釉	灰白色　10Y 7/1	青灰色　5B 6/1					
34	126	87-1	B・C・SD01・SK03	須恵器	甕	自然釉	灰白色　2.5Y 7/1	灰色　7.5Y 5/1					
35	126	87-1	SD02	須恵器	横瓶?	内外丁寧なナデ	明青灰色　5B 7/1	明青灰色　5B 7/1					
36	126	86-2	C・SD01	古代の土師器	坏		浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(11.8)			
37	126	86-2	SD02・C	土師器	椀	内外面赤彩、内面ヘラミガキ	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	40	(10.6)	4.3		
38	126	84	SD01・B	須恵器	鉢	波状文、沈線、胴部にタタキ	灰色　N 6/	灰色　N 6/	80			10.8	
39	126	87-1	SD01	須恵器	甕		暗青灰色　5B 4/1	暗青灰色　5B 4/1					
40	126	87-1	B・SD01	須恵器	甕	焼成不良、カキメ	灰色　5Y 4/1	灰オリーブ色　5Y 6/2					
41	127	84	C	土師器	甕		灰白色　2.5Y 8/2	灰白色　2.5Y 8/2	75	(15.8)		23.5	
42	127	87-2	C	土師器	甕	複合口縁	浅黄黄色　7.5YR 8/6	にぶい黄橙色　10YR 6/4	10	(16.2)			
43	127	87-2	B	土師器	甕	口縁部炭化物付着、複合口縁	浅黄色　2.5Y 7/3	浅黄色　2.5Y 7/4	15	(13.8)			
44	127	87-2	B	土師器	甕		淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	20	(19.0)			
45	127	84	C	土師器	甕	外面炭化物付着	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	65	19.0			
46	127	87-2	B	土師器	甕	わずかな複合口縁	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	20	(16.0)			
47	127	87-2	B	土師器	甕		にぶい黄橙色 10YR 6/4	にぶい黄橙色 10YR 6/4	15	(16.0)			
48	127	87-2	B	土師器	甕	移動式竈の可能性	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	10	(23.6)			
49	127	87-2	B	土師器	甕		浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	15	(15.8)			
50	127	84	B	土師器	高坏		淡黄色　2.5Y 8/3	淡黄色　2.5Y 8/3	60				10.2
51	127	88-1	B	土師器	高坏	摩滅著しい	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	現存部完存				
52	127	84	B	土師器	高坏	円形三方透かし	黄橙色　10YR 8/6	浅黄橙色　7.5YR 8/6	脚柱部完存				(15.0)
53	127	84	B	土師器	高坏		浅黄橙色　10YR 8/3	浅黄橙色　10YR 8/3	現存部完存				

遺物番号	挿図番号	写真図版	遺構／出土位置	種　別	器種	形態・文様の特徴	色調(外面)	色調(内面)	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	胴径(cm)	底径(cm)
54	127	88-1	C	土師器	椀または高坏	内外面赤彩、内面ヘラミガキ、外面摩滅	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	20	(16.0)			
55	127	84	C	土師器	高坏	外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	45				(10.0)
56	127	88-1	B	土師器	椀	内外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	15	(14.8)			
57	127	84	C・SK06	須恵器	坏蓋		青灰色　10BG 5/1	暗青灰色　5PB 4/1	20	(12.0)	4.2		
58	127	88-1	B	須恵器	坏蓋	自然釉	オリーブ灰色　5GY 6/1	青灰色　5BP 6/1	10	(13.0)			
59	127	84	B	須恵器	坏身	焼成不良	灰白色　7.5Y 8/2	灰白色　7.5Y 8/2	35	(13.6)			
60	127	88-1	B	須恵器	甕	自然釉	灰色　7.5Y 6/1	灰白色　10Y 7/1					
61	127	88-1	C	須恵器	高坏	長方形透かし	青黒色　5B 2/1	青灰色　10BG 6/1	10				(10.0)
62	127	88-1	B	古代の須恵器	高台付坏		青灰色　5PB 6/1	青灰色　5PB 6/1	10				(11.0)
63	127	84	B	古代の須恵器	坏	回転糸切り	青灰色　10BG 6/1	青灰色　10BG 6/1	30	(10.8)	4.2		(5.6)
64	127	84	B	古代の須恵器	坏	墨書、回転糸切り、焼成不良	灰オリーブ色　5Y 6/2	灰オリーブ色　5Y 6/2	25				(10.0)
65	127	88-1	B	土師器	坏	回転糸切り	灰色　5Y 6/1	灰色　5Y 6/1	15				(10.0)
66	128	88-2	B・SD01・SD02	土製品	竈	わずかに炭化物が付着	黄色　2.5Y 7/8	黄色　2.5Y 7/8					
68	128	88-2	B	弥生中期	甕	逆L字口縁	浅黄橙色　10YR 8/4	浅黄橙色　10YR 8/4	10	(14.8)			
69	128	88-2	C	土師器	壺？	丁寧なナデ	灰白色　2.5Y 8/2	浅黄色　2.5Y 7/3	10	(9.0)			
70	128	88-2	B	土師器	鉢		灰白色　10YR 8/2	灰白色　10YR 8/2	15	(10.0)			
71	128	88-2	B・C	土師器	鉢？	ナデ	浅黄色　2.5Y 7/4	浅黄色　2.5Y 7/4					
72	128	88-2	A	土師器	鉢？	内外面赤彩	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4	15	(12.2)			
73	128	88-2	B	須恵器	甑？	波状文、38とは接合しない	青灰色　5B 6/1	青灰色　5B 6/1					
74	128	88-2	C	土製品	竈	ヘラで接合面に凹凸を付ける	淡黄色　2.5Y 8/4	淡黄色　2.5Y 8/4					
75	128	88-2	C	土製品	竈		にぶい橙色　7.5YR 7/4	にぶい橙色　7.5YR 7/4					

表16　山持遺跡7区石器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	器種	層位	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
67	128	88-2	敲石	11層	流紋岩	14.5	6.2	5.8	834	一端に敲打痕

表17　山持遺跡7区土器数量表

時　期	器種	遺構名／地区名　部位	A	B	C	B・C※	SD01	SD02	SE03	SK05	SK06	SK07	SK08	地区割り無し	合計
弥生中期	甕	口縁		1											1
弥生後期	甕	口縁		1											1
土師器	壺			1	1										2
	甕	複合口縁	2	4	2	2	10								20
		単純口縁	2	26	17	5	28		1	1			2		82
		胴部	46	309	167	88	376	14	13	7	8	6			1034
	高坏	口縁			2	1	4						7		14
		体部		3	2	3	1				1				10
	鉢	口縁		1			4		1						6
		胴部		3	1										4
	不明	口縁	7	6	1	1	6		2		1				24
		胴部		15		7	23	2	1	2		3	1		54
	計		57	370	193	107	452	16	18	10	10	9	10		1252
赤彩土師器	椀	口縁	1	1	3		4	1							10
		胴部	1	1	4		1								7
	壺			2											2
	高坏	口縁					5								5
		体部			2		9								11
	坏	胴部		2	16										18
	甕	口縁												1	1
	不明	口縁		1	1		3								5
		胴部	1	3		1	15			1					21
	計		3	10	26	1	37	1		1				1	80
古墳時代の須恵器	坏蓋	口縁		2	2		2								6
		体部	1	2											3
	坏身	口縁		1			3								4
	高坏	口縁					2								2
		脚部			1		2								3
	壺				0.5		0.5								1
	甑			1			1								2
	横瓶						1	1							2
	甕	口縁					1								1
		胴部		1			2								3
	不明	胴部		2			1								3
古代の須恵器	坏	口縁		3			1		1						5
		底部							1						1
	甕	胴部							1						1
	計		1	12	3.5		16.5	1	3						37
古代・中世の土師器	坏	口縁	2	1	1		1								5
		胴部	7	5		2									14
		底部		1											1
製塩土器			1												1
土製品	竈			6	7		8					1			22
	計		10	13	8	2	9					1			43
合　計			71	405	231	110	515	18	21	11	10	10	10	1	1412

※当初SD01の南側は別の地区名をつけて取り上げていたので、本表ではB区とC区のものとして計量した。

第6章　里方本郷遺跡の自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は、「里方本郷遺跡」周辺の植生変遷および耕作史を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施したAMS年代測定、花粉分析、プラント・オパール分析の報告書をまとめ直したものである。

里方本郷遺跡は島根県東部出雲市日下町・矢尾町地内に位置し、出雲平野北部、北山山地の埋没扇状地上に立地する（第129図）。

分析（測定）試料および分析（測定）方法について

(1) 試料について

第130図に里方本郷遺跡内での調査区（トレンチを含む）の配置を示す。これらのうち、1区、3区、9区、15区、T45（渡辺，2007を再録）で分析試料を採取した。1区、3区の模式柱状図および試料採取位置（^{14}C年代）を第131図に、9区、15区、T45の模式柱状図および試料採取位置を第132図～第134図の各ダイアグラム中に示す。模式柱状図中に示した層番号、時代区分は第3章に従った。

(2) AMS年代測定方法

試料に酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨（グラファイト）に調整し、加速器質量分析計（AMS）を用いて測定を行った。

(3) 花粉分析

処理は渡辺(1995)に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

(4) プラント・オパール分析

分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いた。同定、計数は、イネ及びイネ科主要分類群（機動細胞由来プラントオパール）について行い、同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで行った。

分析結果

(1) 微化石概査結果

花粉分析用プレパラート、および花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、表18のとおりである（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、プラント・オパールは、花粉分析処理の残渣を観察した）。

(2) AMS 年代測定結果

表 19 に ^{14}C 年代、δ^{13}C、補正 ^{14}C、暦年較正用年代、暦年較正年代を示した。^{14}C 年代は、最も古くから用いられている年代である。補正 ^{14}C は、リビーの半減期（5568 年）を用いるとともに、δ^{13}C＝-25‰となるように補正・算出した暦年較正用年代を、5 年単位で丸めた値である。これら 3 つの年代は、西暦 1950 年からさかのぼった年代値である（誤差を 1 σ：68.2%領域で示す）。暦年較正年代は、暦年校正用年代を暦年代較正データ（INTCAL04）を用いて、Oxcal Ver3.1 により較正したものである。

前述のように、第 131 図に 1 区、3 区の模式柱状図と ^{14}C 年代（試料採取位置に示す）を示す。

(3) 花粉分析結果

分析結果を第 132 図、第 133 図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群毎に累積百分率として示した。

(4) プラント・オパール分析結果

分析結果を第 134 図のプラント・オパールダイアグラムに示す。

プラント・オパールダイアグラムでは、1g あたりの含有数に換算した数を、検出した分類群毎にスペクトルで示した。

花粉分帯

花粉分析の結果を基に局地花粉帯を設定した。また局地花粉帯設定にあたり、隣接する山持遺跡での花粉分析結果（渡辺，2007）との比較検討を行い、これに従った。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料 No.も下位から上位に向かって記した。

また、15 区の T.P. ± 0m 付近で 2710 ± 30yrBP、T.P. ± 1.0m 付近で 2585 ± 30yrBP が得られているほか、9 区試料No. 73 直上で 2485 ± 20yrBP が得られている。山持遺跡では弥生時代以降の花粉化石群集が得られており、今回の結果はこの地域の古い時期の資料を補完する。

(1) Ⅴ帯（9 区試料No. 73、15 区試料No. 22 ～ 10）：縄文時代晩期

スギ属が卓越傾向にあり、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。また低率ではあるがトチノキ属が連続して出現する。山持遺跡のⅣ帯 b 亜帯に比べアカガシ亜属の出現率が高く、マツ属（複維管束亜属）の出現率が低いことから、山持遺跡のⅣ帯とは別の花粉帯と考え、Ⅳ帯に先立つⅤ帯とした。また、主要な花粉に増減傾向が認められるが、今回は細分を見送った。今後、同地域あるいは周辺地域のデータ蓄積を待って、細分を行いたい。

(2) Ⅳ帯（9 区試料No. 70 ～ 2、H7 ～ 1、15 区試料No. 9 ～ 1）：縄文時代晩期～古代

スギ属が卓越傾向にあり、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴うなど、山持遺跡でのⅣ帯の花粉組成と同様の傾向を示す。また、主要な花粉の増減傾向と山持遺跡の局地花粉帯との対応から b 、a 亜帯に細分した。

b 亜帯（9 区試料No. 70 ～ 2）：縄文時代晩期

スギ属の卓越とマツ属（複維管束属）の増加傾向が特徴である。山持遺跡のⅣ帯 b 亜帯に対応する。

a亜帯（9区試料No.H7～1、15区試料No.9～1）：弥生時代前期～古代

マツ属（複維管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属の卓越が特徴である。山持遺跡のⅣ帯a亜帯に対応する。

9区試料No.H7～1の堆積時期は弥生時代前期から中期である。一方、15区、山持遺跡でa亜帯とした層準の堆積時期は弥生時代後期以降であり、9区がやや先行する。また、この時期は山持遺跡ではb亜帯期に相当する。さらに、9区とその他の地域では木本花粉化石群集は類似するものの、草本花粉化石群集は検出量も組成も異なる傾向にある。これらのことから、9区試料No.H7～1をa'亜帯として区別した。a'亜帯は、b亜帯とa亜帯の移行期、あるいはb亜帯の局地的な植生を示すと考えられる。今後、山持遺跡においてb亜帯に設定した層準を含め、a亜帯とb亜帯との移行帯を設定する必要がある。

古環境変遷

第129図に示したように、里方本郷遺跡は出雲平野北東部に位置し、斐伊川西流時には斐伊川の河道内あるいは後背湿地に立地していたと考えられる。

ここでは、前述の山持遺跡での花粉分析結果も参考に、花粉帯毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) Ⅴ帯期：縄文時代晩期

前述の様に、山持遺跡では対応する花粉帯が検出されなかった。

1) 北山山地あるいは中国山地の古植生を中心とした古環境

地理的な条件を考えると、検出された花粉化石の多くは北山山地に由来すると考えられる。一方で斐伊川の後背湿地という遺跡の立地を考えると、中国山地の植生の影響も受けている可能性が高い。

北山山地や、中国山地縁辺の丘陵は、カシ類を主要素とする照葉樹林に広く覆われていたと考えられる。一方で、現在でも北山山地には大雨時に地滑り、土砂崩れが起こる砂防地域に指定されている地域が多い。これら点在する崩壊地にマツ類やナラ類、あるいはヤシャブシ類（ハンノキ属）からなる遷移林（二次林）が分布していたと考えられる。卓越傾向にあるスギは、山地部では谷斜面で照葉樹林に混淆していたり、扇状地や平野内の河川跡などの地下水位が高く伏流水の豊富な場所に生育していたと考えられる。

2) 近辺の植生

① 下部～中部：草本花粉でイネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科が高率を示すことから、調査地近辺には、アシなどのイネ科草本や、ホタルイ、スゲ、カヤツリグサなどカヤツリグサ科草本の繁茂する沼沢湿地が広がっていたと考えられる。また、コウホネ属花粉やヒシ属花粉も認めら得ることからやや水深のある沼の存在が示唆される。

② 上部：沼沢湿地が広がり、アシなどのイネ科草本や、ホタルイ、スゲ、カヤツリグサなどカヤツリグサ科草本が繁茂したと考えられる。

(2) Ⅳ帯期：縄文時代晩期～古代

1) 北山山地あるいは中国山地の植生

Ⅴ帯期からの大きな変化は、マツ属（複維管束亜属）花粉が増加傾向を示すことである。マツ属（複維管束亜属）花粉の多くはアカマツに由来すると考えられ、前述のようにⅢ帯期までは山地内の崩

壌地を中心に遷移林（二次林）を成していたと考えられる。Ⅱ帯期で認められるマツ属（複維管束亜属）の増加傾向は、アカガシ亜属が減少することと合わせて、周辺丘陵地域の開発に伴う照葉樹林の縮小、アカマツ二次林の拡大を示唆すると考えられる。

ｂ～ａ亜帯では、スギ属花粉が減少し、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属、コナラ亜属などおもな種類が増加する。スギが有用材として伐採されたり、平地に分布したスギが開発のために伐採され、相対的に他の種類が増加した可能性がある。また、前述の遺跡による花粉化石群集変遷時期の違いは、北山山地側の小河川流域あるいは９区近辺でのアカマツ分布の違いによると考えられる。

2）近辺の植生

①　ｂ亜帯期：弥生時代前期：Ⅴ帯期同様に沼沢湿地が広がり、アシなどのイネ科草本や、ホタルイ、スゲ、カヤツリグサなどカヤツリグサ科草本が繁茂したと考えられる。

②　ａ’亜帯期（ｂ亜帯、ａ亜帯移行期）:弥生時代前期～中期:草本花粉が増加傾向を示す。特に、上部でイネ科（40ミクロン以上）の出現率が高率になり、オモダカ属やイボクサ属など水田雑草を含む水草も増加する。おそらく調査地周辺で水田開発が進んだ結果であると考えられる。ただし前述の水田雑草に加え、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科、ヨモギ属なども高率を占めることから、調査地点が湿地で近辺に水田が存在した可能性もある。また、逆に調査地点が水田で、近辺に湿地が存在した可能性もある。

③　ａ亜帯期：弥生時代後期～古代：イネ科（40ミクロン以上）の出現率が安定して高率を示す。同層準であると考えられるT45の9-2～7層ではイネのプラント・オパールが検出され、試料により5000粒/gを超える。これらのことから、遺跡近辺に水田が広がっていたと考えられる。一方で、カヤツリグサ科やイネ科（40ミクロン未満）花粉の出現率も高く、調査地点が沼沢湿地であった可能性も指摘できる。

(3) Ⅳ帯期以降

T45においてプラント・オパール分析のみを行っている。6層が本地域に広く分布する「オモカス」であり（渡辺・池淵, 2007）、イネは検出できなかった。それまで広がっていた水田が突然放棄され、湿地へと変化する。5層上部では再びイネが比較的高濃度で検出されるようになり、再び近辺が開墾され、稲作が行われるようになったことが分かる。

まとめ

里方本郷遺跡における花粉分析等自然科学分析結果を基に、縄文時代晩期から古代頃の遺跡近辺の古環境変遷を推定した。特筆すべき点は以下の事柄である。

①　隣接する山持遺跡で設定した局地花粉帯Ⅳ帯を確認した。またⅣ帯の下位に、Ⅴ帯を設定した。山持遺跡で設定していたⅣ帯ｂ亜帯を漸移帯と考えａ’亜帯とした。さらに下位にｂ亜帯を再設定した。

②　遺跡近辺では、縄文時代晩期にはスギ林が分布していたと考えられる。谷斜面で照葉樹林に混淆していたり、扇状地や平野内の河川跡など、地下水位が高く伏流水の豊富な場所に生育していたと考えられる。

③　調査地点近辺では、Ⅳ帯ａ’亜帯期後半（弥生時中期頃）に水田耕作が始まったと考えられる。

④　水田耕土が放棄され沼沢湿地に変化し、「オモカス」が堆積した。

引用文献

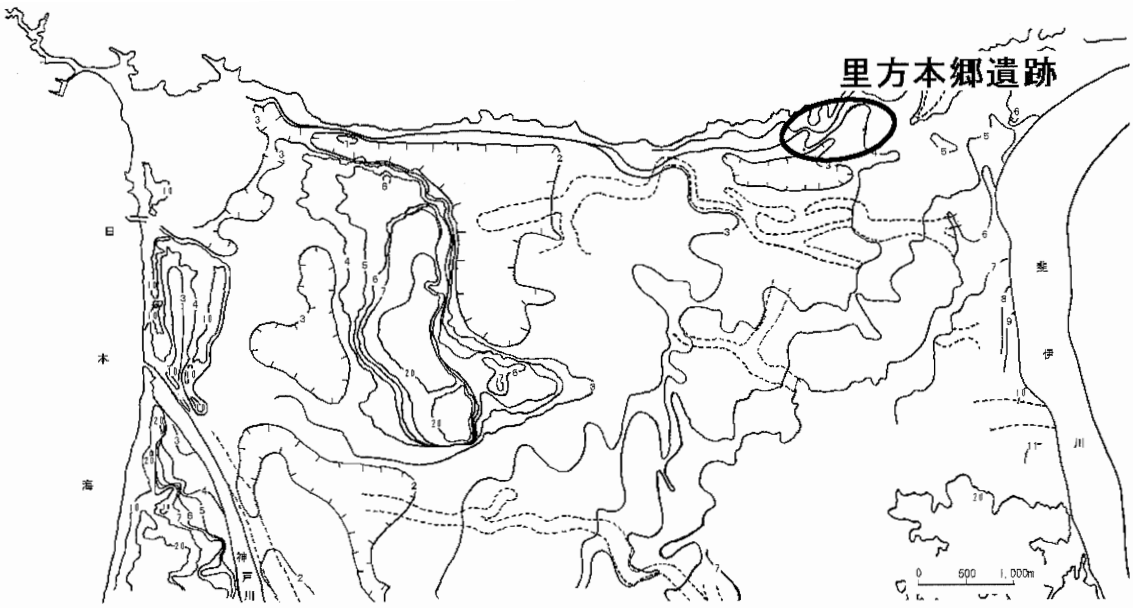
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29．図表一覧

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13,187-197

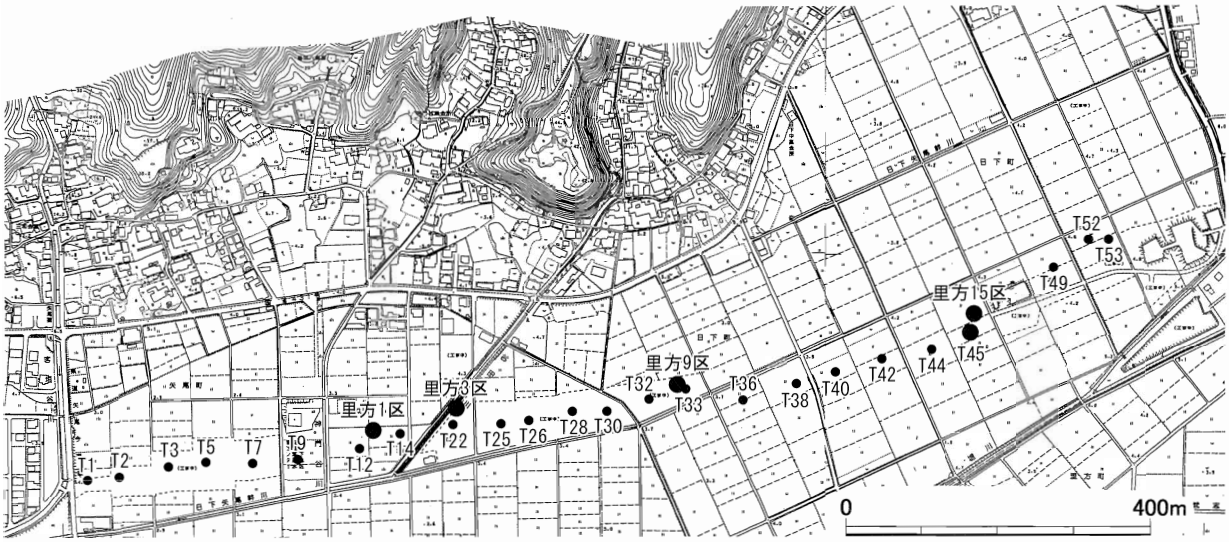
渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84，85．ニュー・サイエンス社

渡辺正巳（2007）山持遺跡T45、Ⅱ-3区、Ⅱ-4区及び3-2区における自然科学分析．国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－山持遺跡Ⅱ・3区Vol.2-，4，283-303．島根県教育委員会

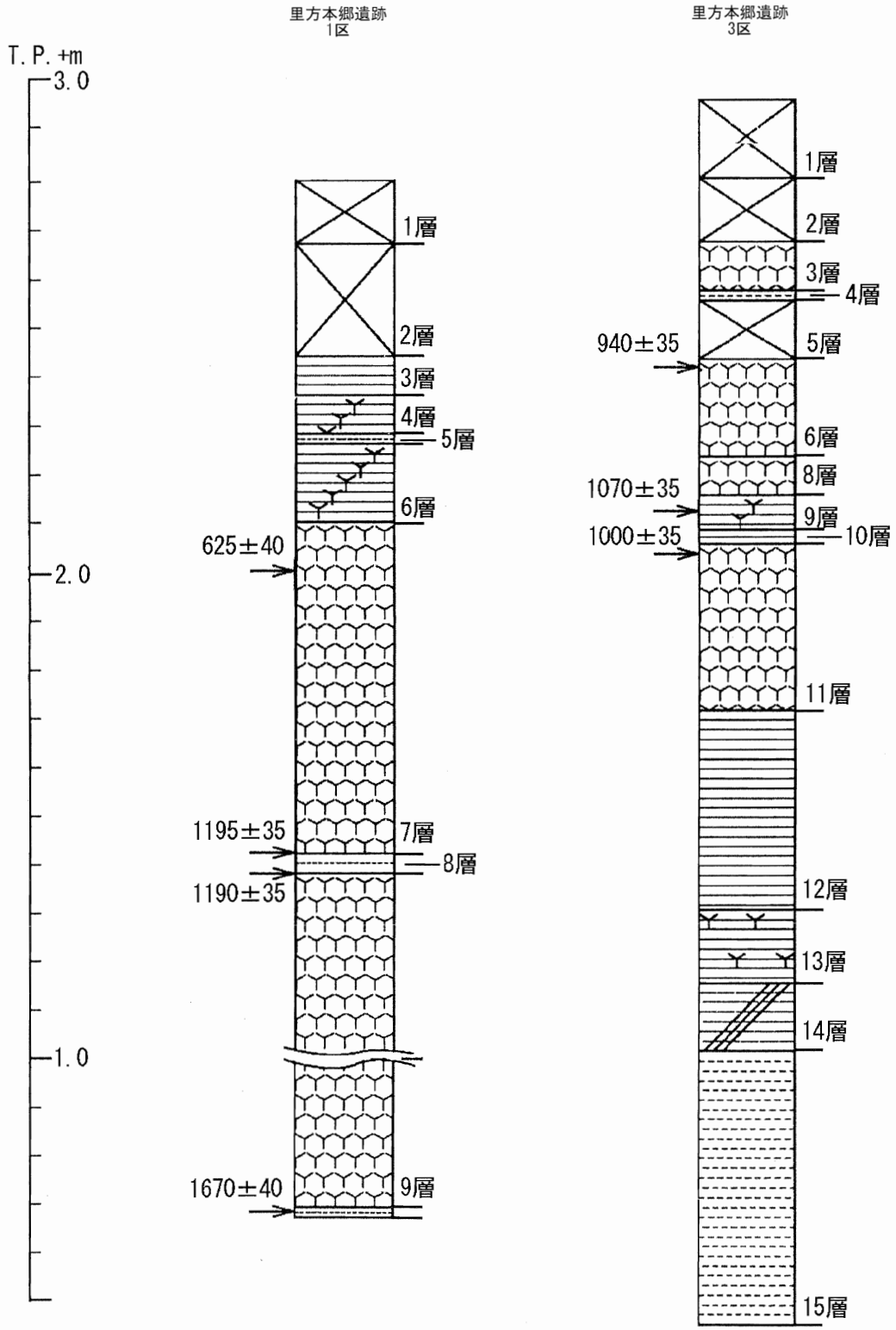
渡辺正巳・池淵俊一（2007）里方本郷遺跡から山持遺跡にかけて分布する「オモカス」層について．国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－山持遺跡Ⅱ・3区Vol.2-，4，214-217．島根県教育委員会



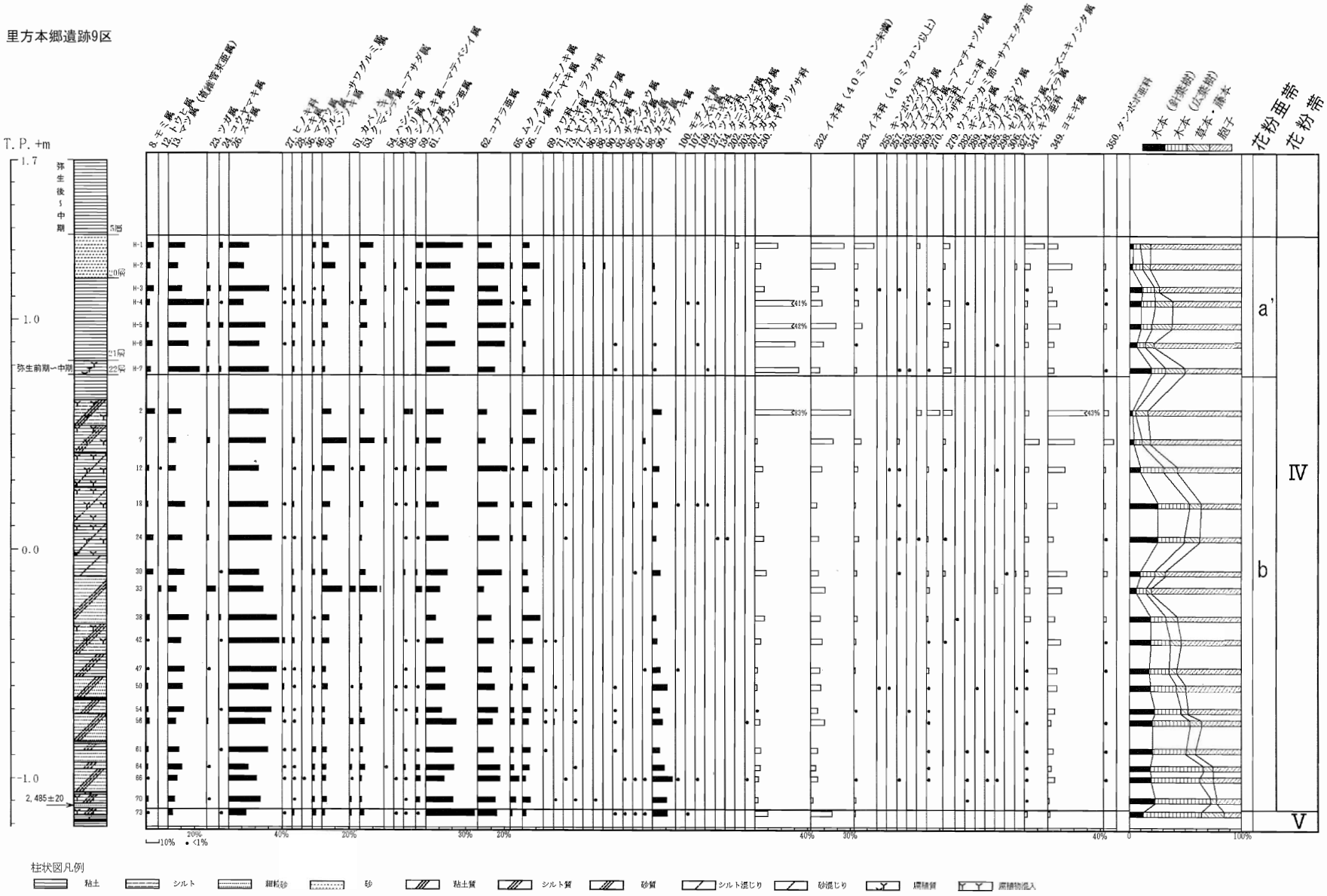
第 129 図　里方本郷遺跡の位置（S=1/80,000）



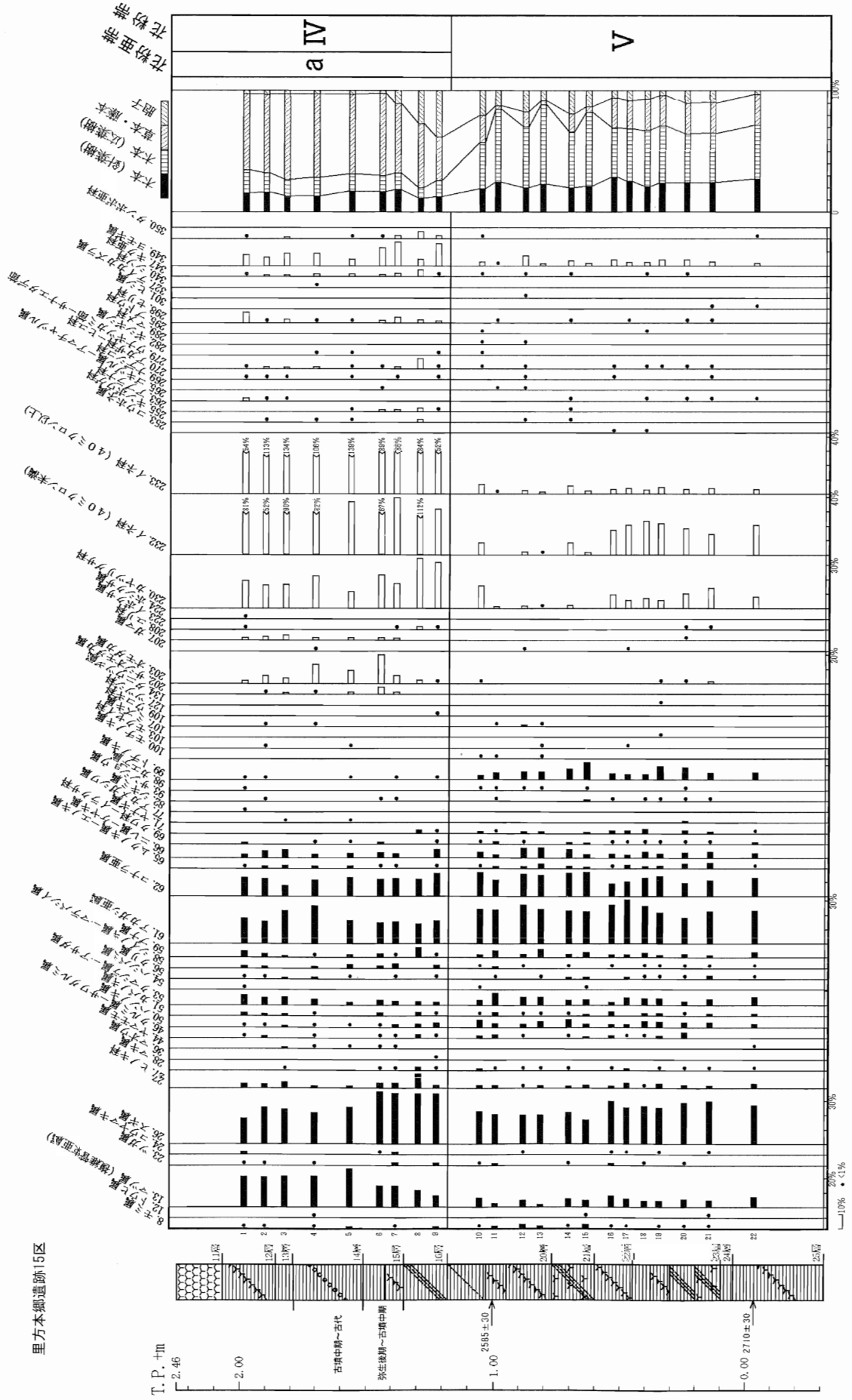
第 130 図　試料採取地点（調査区、トレンチ）の配置（S=1/10,000）



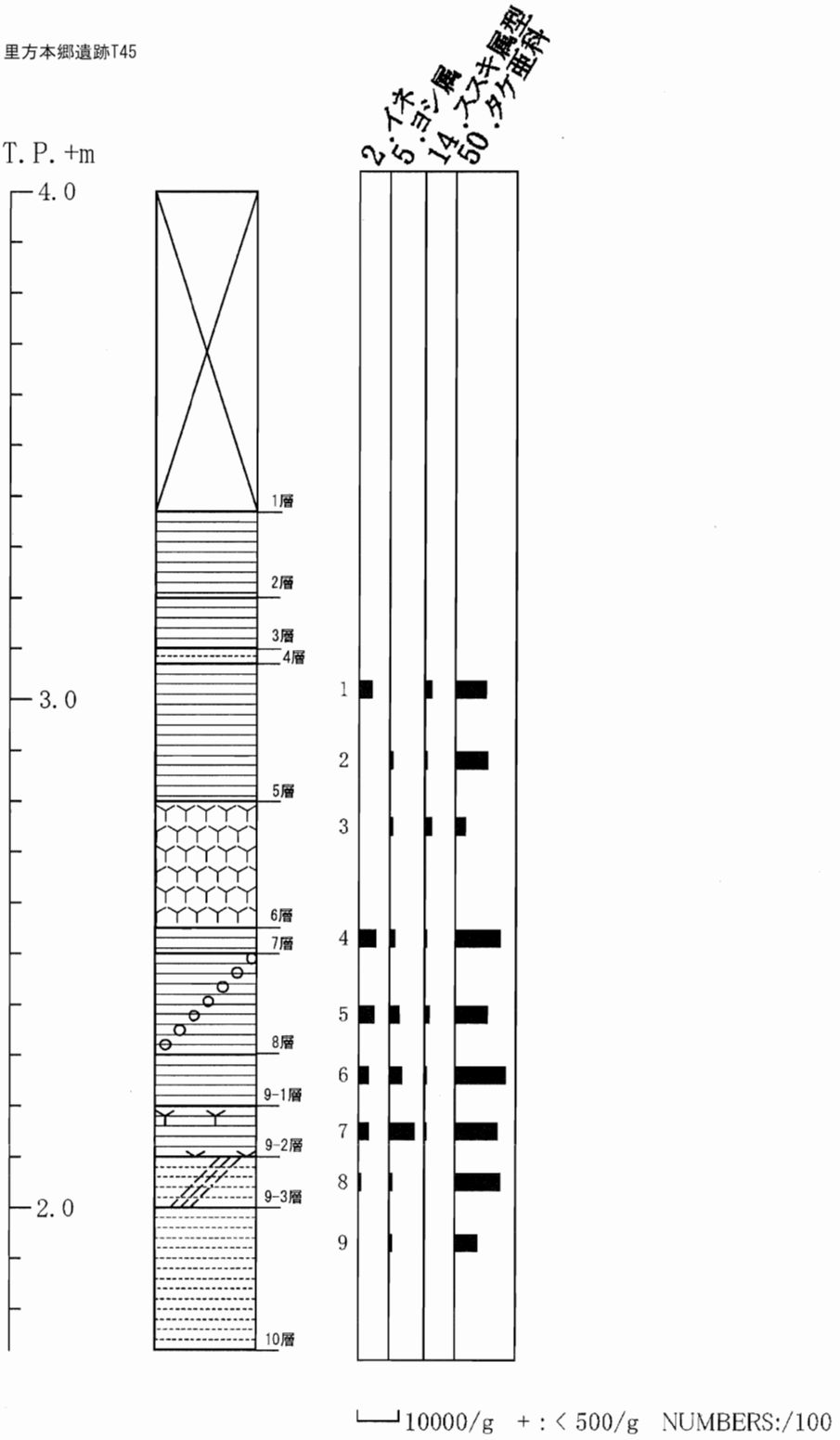
第 131 図　1 区、3 区の模式柱状図と年代測定試料採取層準



第 132 図　9 区の花粉ダイアグラム



第 133 図　15 区の花粉ダイアグラム



柱状図凡例

表土　粘土　細粒砂　腐植土

シルト質　礫混り　腐植物混入

第 134 図　T45 のプラント・オパール分析ダイアグラム

表18　微化石概査結果

地点名	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラントオパール
里方本郷9区	H-1	△	◎	△	－	－	－
	H-2	△	○	△	－	－	－
	H-3	○	○	△	－	－	－
	H-4	○	△	△	－	－	－
	H-5	○	△	△	－	－	－
	H-6	○	△	△	－	－	－
	H-7	○	◎	○	－	－	－
	2	△	△	○	○	○	○
	7	△	○	△	○	△	△
	12	○	○	○	○	△	△
	18	◎	△	△	○	△	△
	24	◎	△	△	○	○	○
	30	○	○	△	○	△	△
	33	△	○	○	△	○	△×
	38	○	△	△	△	△	△×
	42	○	△	△	○	○	△×
	47	○	○	△	○	△	△×
	50	○	△	△	△	△	△×
	54	○	△	△	◎	○	△×
	56	◎	△	△	○	△	△×
	61	○	○	△	◎	○	△
	64	◎	△	○	○	△	△
	66	○	△	○	○	△	△
	70	◎	△	◎	△	△	△×
	73	◎	△	◎	○	△	△×
里方本郷15区	1	◎	△	○	◎	○	◎
	2	◎	△	◎	◎	○	◎
	3	◎	△	◎	◎	○	◎
	4	◎	△	○	◎	○	◎
	5	◎	△	○	◎	△	◎
	6	◎	△	○	◎	△	◎
	7	◎	○	○	◎	○	◎
	8	△	△×	△×	○	○	○
	9	◎	△	△	△	△	△
	10	◎	△	△	△	△×	○
	11	◎	△	△	○	△×	○
	12	◎	△	○	○	△×	△
	13	◎	△	○	○	△	△
	14	◎	△	◎	◎	△	○
	15	◎	△	◎	◎	△	○
	16	◎	△	○	◎	○	◎
	17	◎	△	○	◎	○	◎
	18	◎	△	○	◎	◎	○
	19	◎	△	○	◎	◎	○
	20	◎	△	○	◎	○	○
	21	◎	△	○	◎	○	○
	22	◎	△	◎	◎	○	○

凡例　◎　十分な数量が検出できる
○　少ないが検出できる
△　非常に少ない
△×　極めてまれに検出できる
×　検出できない

表19　AMS年代測定結果

試料			^{14}C年代	σ^{13}C	補正^{14}C	暦年較正用年代	暦年較正年代		測定番号
No.	遺構名	状態	(yrBP)	(‰)	(yrBP)	(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	(PLD-)
1-1 (IS1-1)	1区西壁 7層	腐植土 乾燥	715±40	-30.5	625±40	624±42	AD1295-1325(26.0%) AD1340-1395(42.2%)	AD1280-1410(95.4%)	2968
1-2 (IS1-2)	1区西壁 7層	腐植土 乾燥	1240±35	-27.6	1195±35	1197±37	AD770-880(68.2%)	AD690-750(10.1%) AD760-900(81.1%) AD910-950(4.2%)	2969
1-3 (IS1-3)	1区西壁 9層	腐植土 乾燥	1210±35	-26.3	1190±35	1191±37	AD770-890(68.2%)	AD700-750(6.4%) AD760-900(81.2%) AD910-970(7.7%)	2970
1-4 (IS1-4)	1区北壁 9層	腐植土 乾燥	1695±40	-26.4	1670±40	1670±39	AD260-280(2.6%) AD330-430(65.6%)	AD250-440(91.4%) AD480-530(4.0%)	2971
3-1 (IS3-1)	3区東壁 6層	腐植土 乾燥	975±35	-27.2	940±35	939±37	AD1030-1060(14.5%) AD1070-1160(53.7%)	AD1020-1180(95.4%)	2972
3-2 (IS3-2)	3区東壁 9層	腐植土 乾燥	1140±35	-29.6	1070±35	1071±37	AD890-920(15.9%) AD960-1020(52.3%)	AD890-1030(95.4%)	2973
3-3 (IS3-3)	3区東壁 11層	腐植土 乾燥	1040±35	-27.2	1000±35	1001±35	AD980-1050(58.6%) AD1100-1120(8.5%) AD1140-1150(1.1%)	AD970-1060(65.3%) AD1070-1160(30.1%)	2974
206.0-208.0 (IS18-1)	9区 ジオスライサー 206.0-208.0	腐植土 乾燥	2515±25	-26.95 ±0.14	2485±20	2484±22	BC760-730(11.8%) BC700-680(2.8%) BC670-540(53.5%)	BC770-510(95.4%)	5240
7-1 (IS7-1)	15区東壁 20層	腐植土 乾燥	2605±30	-26.2	2585±30	2586±29	BC805-770(68.2%)	BC820-750(86.3%) BC690-660(7.1%) BC640-590(1.9%)	3450
7-2 (IS7-2)	15区東壁 25層	腐植土 乾燥	2740±30	-26.7	2710±30	2712±28	BC895-825(68.2%)	BC910-805(95.4%)	3451

第７章　里方本郷遺跡・山持遺跡から出土した木材の樹種

高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

山持遺跡は高浜川に山持川が合流する部分の両河川に挟まれた沖積地、里方本郷遺跡は山持遺跡から西側に500m離れた高浜川右岸の沖積地にそれぞれ位置する。山持遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の自然河道、土坑、古墳時代前期～中期の集落跡等が検出されている。一方、里方本郷遺跡では、弥生時代前期および古墳時代前期の溝、土坑等が検出されている。

今回の分析調査では、山持遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の木製品・自然木、里方本郷遺跡の弥生時代前期および弥生時代後期の可能性のある木製品・自然木について樹種同定を実施し、各時期の古植生および木材利用に関する情報を得る。

１　里方本郷遺跡出土材の樹種

１－１　試料

試料は、弥生時代前期の可能性がある立木・根株５点（試料番号16,17,22,23,24）、弥生時代後期の可能性のある加工材１点（試料番号19）、杭３点（試料番号14,15,18）、流木２点（試料番号20,21）、弥生時代中期～古墳時代前期の杭３点（試料番号11～13）、弥生時代中期～古墳時代中期の杭１点（試料番号10）である。

１－２　分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、特徴を現生標本と比較して種類を同定する。試料が広葉樹の場合には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して同定を実施する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

１－３　結果

樹種同定結果を表20に示す。全試料を通じて、針葉樹４種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・カヤ）と広葉樹８種類（オニグルミ・ヤナギ属・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ヤマグワ・ツバキ属・ヒサカキ・カエデ属）が同定された。このうち、カエデ属は、木材組織の特徴が異なる２タイプが認められた。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管と柔細胞が認

められる。また、他の放射組織より一回り大きいが、破損し空壁となっている放射組織が所々に認

表20　里方本郷遺跡の樹種同定結果

試料番号	調査区	遺物名	挿図番号	器種分類	器　種	時　　期	樹種	
							和名	学名
10	4区	杭2	188	土木材	杭	弥生中期～古墳中期	クリ	Castanea crenata
11	8区	杭1	193	土木材	杭	弥生中期～古墳前期	モミ属	Abies
12	8区	杭5	192	土木材	杭	弥生中期～古墳前期	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis
13	8区	杭6		土木材	杭	弥生中期～古墳前期	スギ	Cryptomeria japonica
14	9区	杭1		土木材	杭	弥生後期の可能性	ヒサカキ	Eurya japonica
15	9区	杭2	200	土木材	杭	弥生後期の可能性	ヒサカキ	Eurya japonica
16	9区	根株4		その他	立木・根株	弥生前期の可能性	ヤナギ属	Salix
17	9区	根株5		その他	立木・根株	弥生前期の可能性	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon
18	9区	杭6		土木材	杭	弥生後期の可能性	カヤ	Torreya nucifera
19	9区	加工木		その他	加工材	弥生後期の可能性	オニグルミ	Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana
20	9区	R23		その他	流木	弥生後期の可能性	ツバキ属	Camellia
21	9区	R35		その他	流木	弥生後期の可能性	カエデ属	Acer
22	9区	根株1		その他	立木・根株	弥生前期の可能性	ヤマグワ	Morus australis
23	9区	根株2		その他	立木・根株	弥生前期の可能性	ヤマグワ	Morus australis
24	9区	根株3		その他	立木・根株	弥生前期の可能性	カエデ属	Acer

められるが、これは水平樹脂道を含む放射組織が壊れたものと考えられる。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

軸方向組織は仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 20 細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・カヤ（*Torreya nucifera*）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には 2 本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）　クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2 ～ 3 個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1 ～ 3 細胞幅、1 ～ 40 細胞高。

・ヤナギ属（*Salix*）　ヤナギ科

試料には年輪界が確認できなかった。散孔材で、道管は単独または 2 ～ 3 個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1 ～ 15 細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高のものと複合放射組織

とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では最初単独、後2～4個が塊状または接線状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～5細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・ツバキ属（*Camellia*）　ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。放射組織には結晶細胞が顕著に認められる。

・ヒサカキ（*Eurya japonica* Thunberg）　ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高で、単列のものが多い。

・カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性で、1～5細胞幅、1～40細胞高となる試料（試料番号24）と、10細胞幅以上、60細胞高以上の大きな組織を有する試料（試料番号21）とがある。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

1－4　考察

樹種同定を実施した資料は、弥生中期～古墳中期の杭（試料番号10）、弥生中期～古墳前期の杭（試料番号11～13）、弥生時代後期の可能性がある杭（試料番号14,15,18）、加工材（試料番号19）、流木（試料番号20,21）、弥生前期の可能性がある立木・根株（試料番号16,17,22～24）がある。

弥生時代前期の可能性がある立木・根株は、落葉広葉樹のヤマグワ、カエデ属、ヤナギ属と針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。これらの樹種のうち、落葉広葉樹の種類は河畔林の構成要素でもあり、また、マツ属複維管束亜属も河川氾濫や地表撹乱などの影響が及ぶ場所において先駆的植生を構成する要素でもある。河川の周辺植生は、その土壌条件や、繰り返される氾濫という攪乱のために、河川からの距離によって植生の遷移系列がみられたり、独特の様々な群落が維持されたりすることが確認されている（坂本,1987など）。これらのことから、弥生時代前期の頃に、調査区が位置する低地に遷移初期段階の林分が存在した可能性が考えられる。この点については、調査区が位置する沖積低地の地形発達過程に基づいて再検討することにより、当時の植生更新ないし再生システムの様相を明らかにすることが可能である。また立木の年輪数から調査区内に林分が成立し

てから、どの程度の時間が経過しているかを明らかにすることも可能である。

一方、弥生時代後期の可能性がある杭は、常緑広葉樹のヒサカキと針葉樹のカヤであった。ヒサカキは重硬で強度が高い材質を有し、カヤは針葉樹としては重硬・緻密で強度が高く、耐水性が高い材質を有する。いずれも暖地の常緑広葉樹林の構成要素である。本時期の出雲平野の古植生については、本遺跡の南南西2.6kmの氾濫原に位置する小山遺跡の花粉分析結果が存在する（渡辺・遠藤,1998）。それによると弥生時代以降の周辺植生は、山地縁辺にコナラ類、アカマツを要素とする二次林、山地縁辺の谷沿いにはスギを主とする渓谷林、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたことが推定されている。今回の杭材の樹種構成は、花粉分析から推定される植生と同調的であり、杭材に利用された木材が調査区近辺から入手されたことが古植生との対応関係からも推定される。なお、流木ではツバキ属とカエデ属が確認されたが、これらも集水域の植生構成要素として分布していたことになる。

一方、加工材は、直径約40ｃｍの大型の部材であり、孔があることから他の部材と組み合わせて利用されていたことが推定される。この加工材にはオニグルミの木材が利用されていた。オニグルミは、冷温帯域において河畔の適湿地等に生育する落葉高木である。その木材は重硬で強度が高いことから、今回の棒も強度を有する部位に利用された可能性がある。なお、島根県内で同時期のオニグルミの利用例は、上小紋遺跡（松江市）のしがらみ状遺構の部材（矢板）に認められた例が報告されているのみである（島根県教育委員会,1987）。

弥生中期～古墳前期の杭（8区）は針葉樹のモミ属、スギ、常緑広葉樹のアカガシ亜属が利用されている。また、弥生中期～古墳中期とされる杭（4区）は落葉広葉樹のクリが利用されていた。モミ属とスギは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易であるが、スギが比較的耐水性があるのに対し、モミ属は保存性が低いとされる。一方、広葉樹のアカガシ亜属とクリは、比較的重硬で強度が高く、クリでは水湿にも強い材質を有する。これらの点から、杭材には異なる材質の木材が混在していることが認識される。また、杭の形状写真をみると、芯持丸木と分割材が混在し、杭材の加工状況も複数あることが窺える。これらのことから、弥生後期～古墳前期および弥生後期～古墳中期の杭材には特定の樹種や材質を持つ木材を選択利用していたのではなく、遺跡周辺で入手可能な木材を利用していたことが推定される。

杭材に利用されていた樹種の生態性についてみると、アカガシ亜属は暖地の常緑広葉樹林の構成要素である。また、針葉樹のモミ属には、現存種としてシラベなどの亜寒帯性種も含まれるが、暖温帯要素を伴うことから、冷温帯下部から暖温帯にかけて分布する温帯性針葉樹のモミの可能性が高い。また、スギも適湿地に生育する温帯性針葉樹である。クリは冷温帯下部から暖温帯にかけて広く分布する落葉高木である。これらの種類は、小山遺跡の花粉分析結果（渡辺・遠藤,1998）と比較しても矛盾せず、調査区近辺から入手されたことが推定される。

２　山持遺跡出土材の樹種

２－１　試料

試料は、弥生時代後期～古墳時代中期の杭・杭？・棒・柱・流木、弥生時代後期の可能性がある立木・根株の合計９点（試料番号１～９）である。試料の詳細は結果と併せて表21に示す。

２－２　分析方法

各試料について、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、特徴を現生標本と比較して分類群（種類）を同定する。試料が広葉樹の場合には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して同定を実施する。

表21　山持遺跡5区の樹種同定結果

試料番号	遺物名	挿図番号	器種分類	器　種	時　　期	樹種	
						和名	学名
1	杭1	176	土木材	杭	弥生後期～古墳中期	スギ	Cryptomeria japonica
2	杭2	175	土木材	杭	弥生後期～古墳中期	スギ	Cryptomeria japonica
3	W6	180	施設材・器具材	棒(孔段なし)	弥生後期～古墳中期	スギ	Cryptomeria japonica
4	柱材		建築部材	柱	弥生後期～古墳中期	ケヤキ	Zelkova serrata
5	F10溝出土	169	土木材	杭？	弥生後期～古墳中期	スギ	Cryptomeria japonica
6	R23		その他	流木	弥生後期～古墳中期	スダジイ	Castanopsis cuspidata var. sieboldii
7	R24		その他	流木	弥生後期～古墳中期	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis
8	根株1		その他	立木・根株	弥生後期の可能性	ヤマグワ	Morus australis
9	根株2		その他	立木・根株	弥生後期の可能性	ヤマグワ	Morus australis

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

２－３　結果

樹種同定結果を表21に示す。全試料を通じて、針葉樹１種類（スギ）と広葉樹４種類（コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ケヤキ・ヤマグワ）が同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*（Makino）Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～６細胞幅、１～50

細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret） クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では最初単独、後２～４個が塊状または接線状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～５細胞幅、１～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

２－４ 考察

弥生時代後期～古墳時代中期の木製品には、樹種同定の結果、杭および杭？の３点と棒に針葉樹で割裂性が高く加工が容易なスギ、柱材に落葉広葉樹で強度・耐朽性に優れたケヤキが利用されていることが確認された。

本遺跡が周辺では、南に約３ｋｍ離れた姫原西遺跡や同じく南に約５ｋｍ離れた海上遺跡等でも出土した木製品の樹種同定が行われている（島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター，2006）。杭材の樹種同定は行われていないが、板状の木製品などを中心にスギ材が多く利用されている傾向が確認されている。一方、柱材については、島根県内では出雲国府跡から出土した古代の柱材にケヤキが確認された例があるが（渡辺・古野，2004）、同時期の柱材にケヤキが確認された例は知られていない。今回の結果から、弥生時代後期～古墳時代中期の段階でもケヤキが柱材として利用されていたことが推定される。

姫原西遺跡に近い小山遺跡で実施された花粉分析結果によれば、弥生時代以降の本地域周辺は山地縁辺にコナラ類、アカマツを要素とする二次林、山地縁辺の谷沿いにはスギを主とする渓谷林、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたとされている（渡辺・遠藤，1998）。杭、柱、棒に認められたスギやケヤキ、流木に認められたスダジイやアカガシ亜属は、花粉分析結果とも矛盾していないことから、周囲にこれらの樹木が生育していたことが推定される。

弥生時代後期の可能性のある立木・根株は２点とも落葉広葉樹のヤマグワであった。ヤマグワは、河畔等の適湿地に生育する種類であり、調査区の立地環境とも同調的である。当時の平地林の構成要素として、分布していたことになる。

【引用文献】

林 昭三，1991，日本産木材 顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東 隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181

伊東 隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176

伊東 隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201

伊東 隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216

Richter　H.G.，Grosser　D.，Heinz　I.　and　Gasson　P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter　H.G.，Grosser　D.，Heinz　I.　and　Gasson　P.E.(2004)IAWA List of *Microscopic Features for Softwood Identification*］

坂本　圭児，1987，滋賀県愛知川川辺におけるニレ科樹林の構造．緑化研究，第9号，50-60

島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p

島根県教育委員会，1987，北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定内埋蔵文化財発掘調査報告書（本文編）．345p

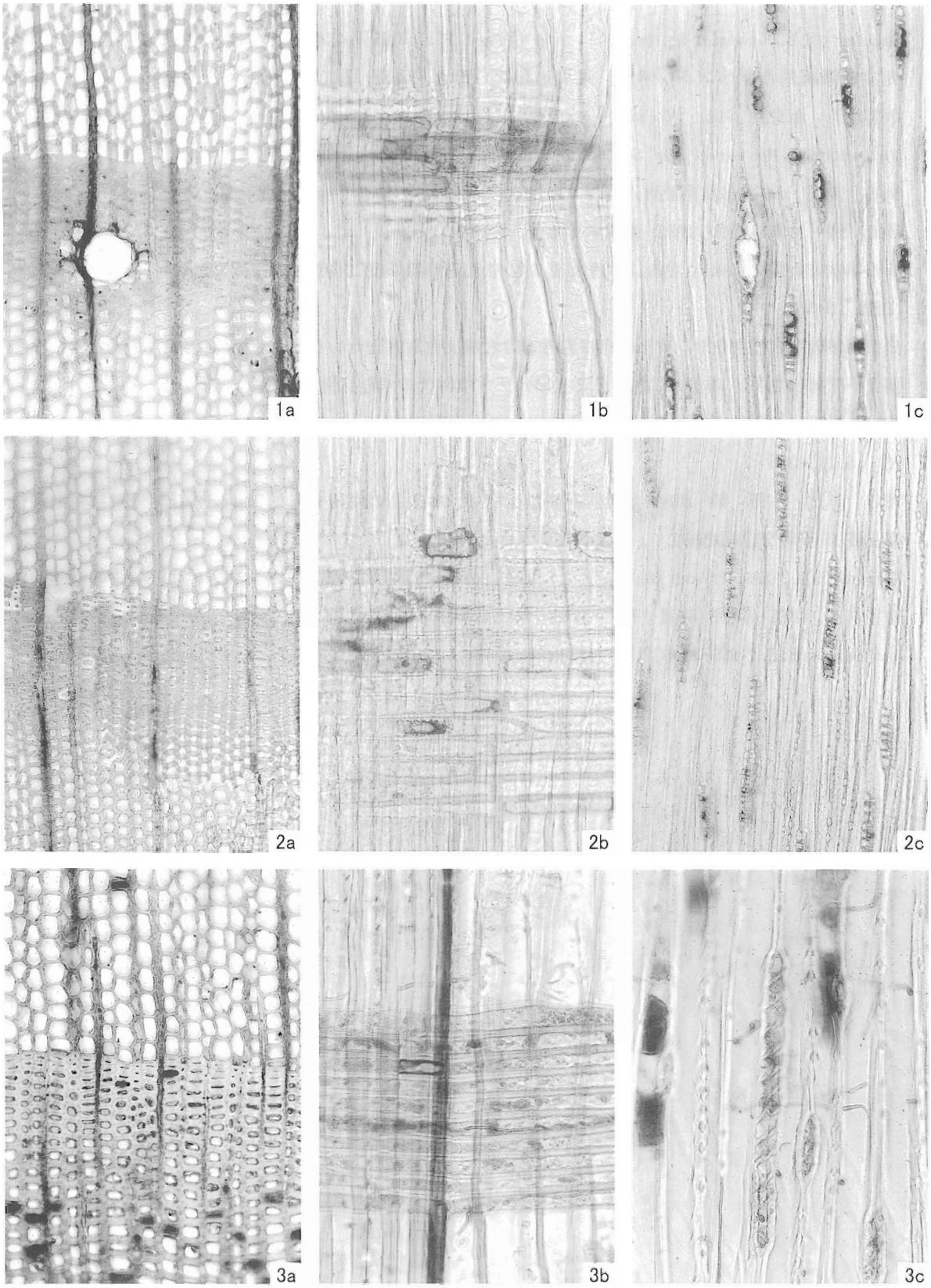
島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター，2006，島根県古代文化センター調査研究報告書33　島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成．96p

渡辺　正巳・遠藤　正樹，1998，出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境．LAGUNA（汽水域研究），5，215-223

渡辺　正巳・古野　毅，2004，出雲国府跡出土柱根、木製品の樹種（2）．「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15 史跡出雲国府跡2」，島根県教育委員会，118-122

Wheeler E.A.，Bass P.　and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.，Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］

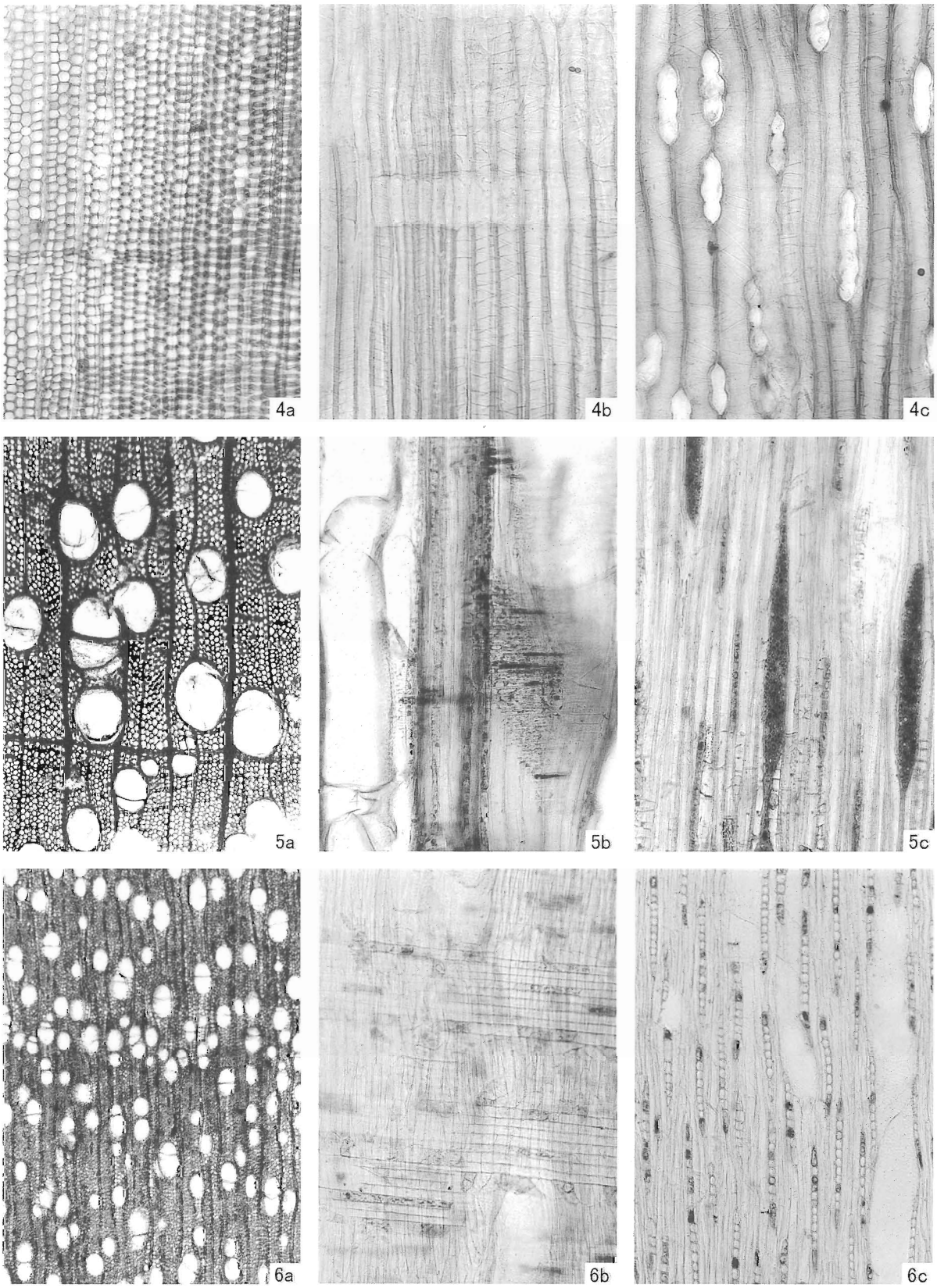
図版1　里方本郷遺跡の木材(1)



1. マツ属複維管束亜属(試料番号17)
2. モミ属(試料番号11)
3. スギ(試料番号13)
   a:木口, b:柾目, c:板目

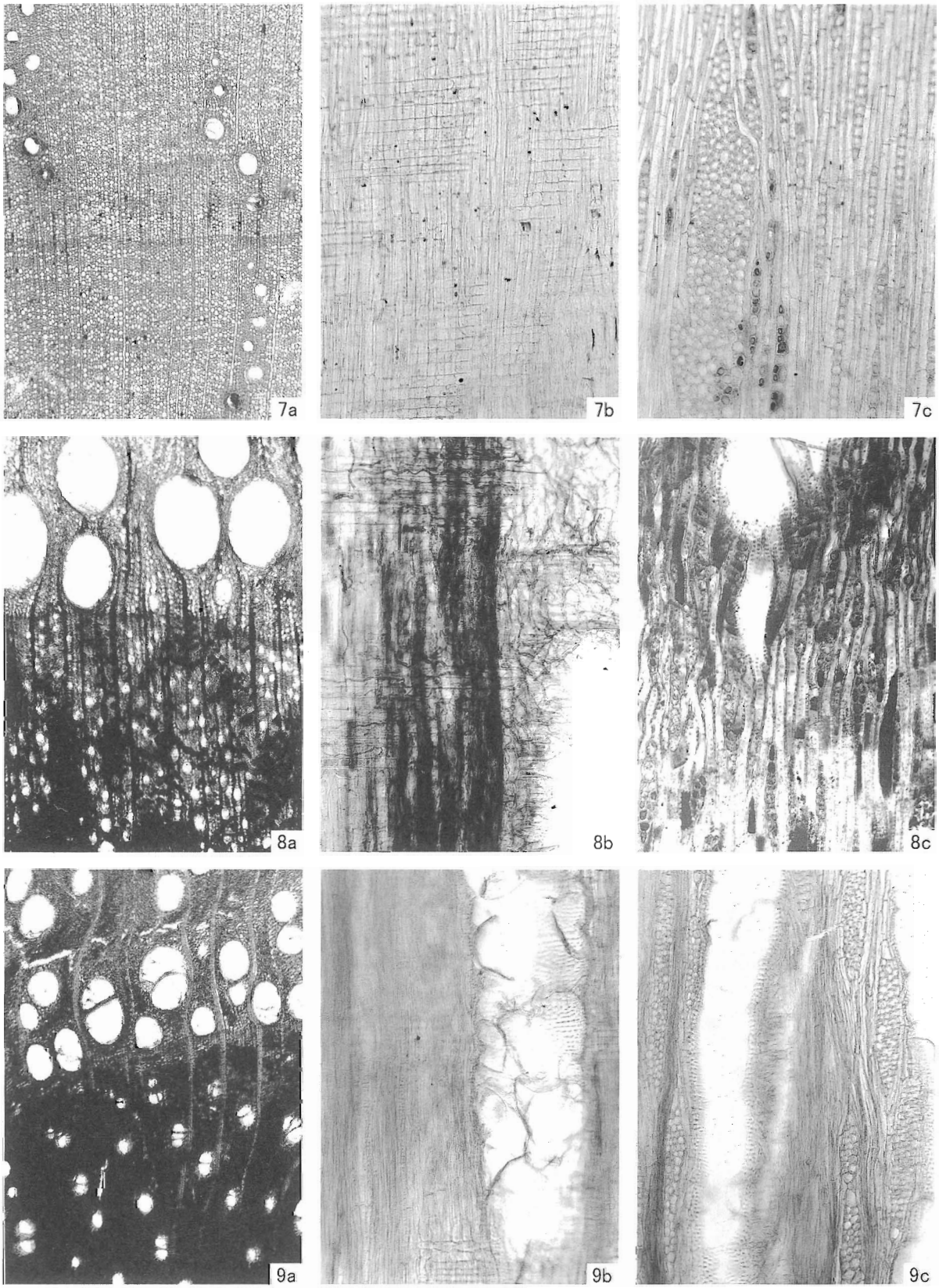
300 μm:2-3a
200 μm:1a,2-3b,c
100 μm:1b,c

図版2　里方本郷遺跡の木材(2)



4. カヤ(試料番号18)
5. オニグルミ(試料番号19)
6. ヤナギ属(試料番号16)
a:木口, b:柾目, c:板目

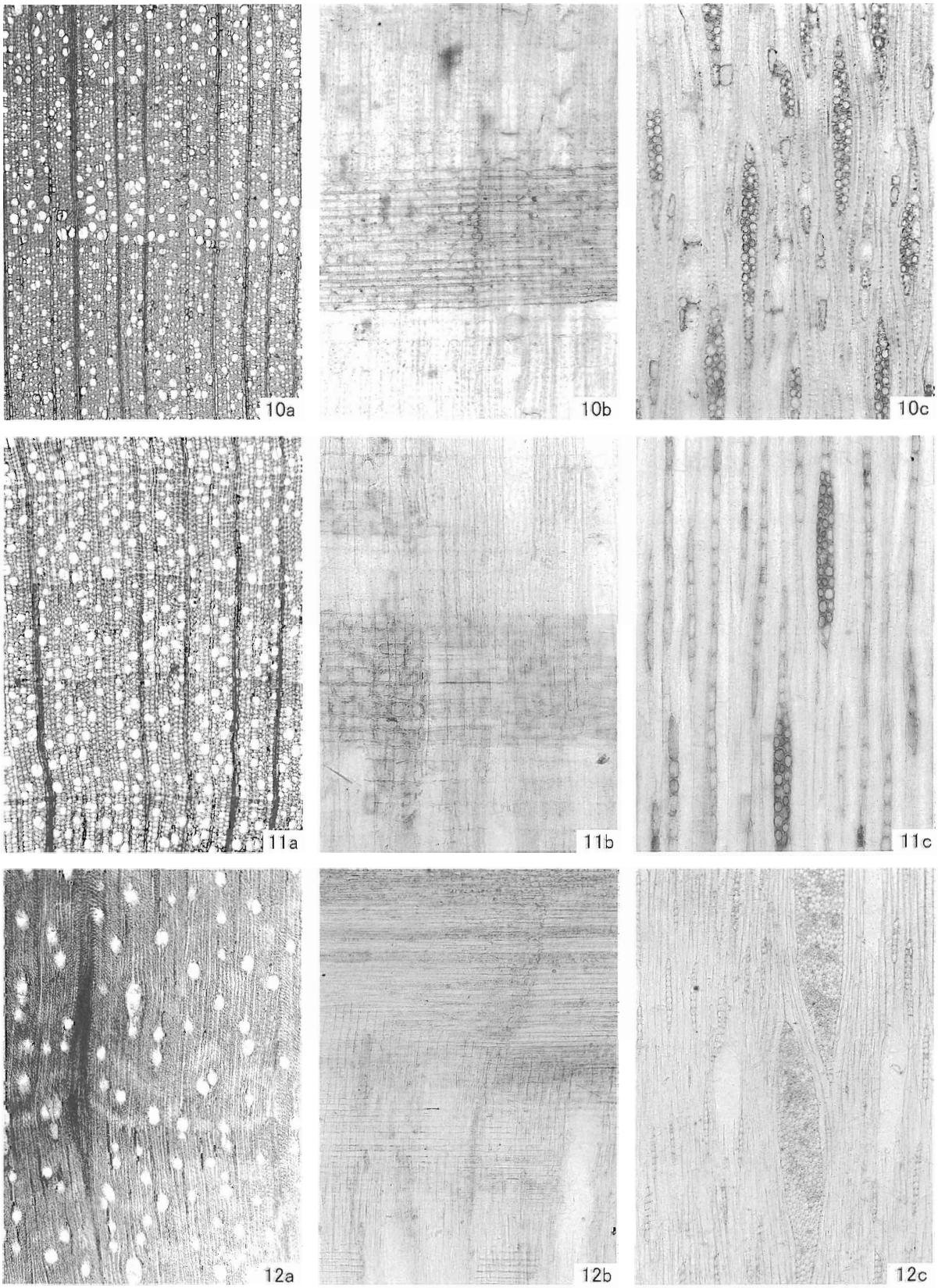
図版3　里方本郷遺跡の木材(3)



7. コナラ属アカガシ亜属(試料番号12)
8. クリ(試料番号10)
9. ヤマグワ(試料番号22)
　a:木口, b:柾目, c:板目

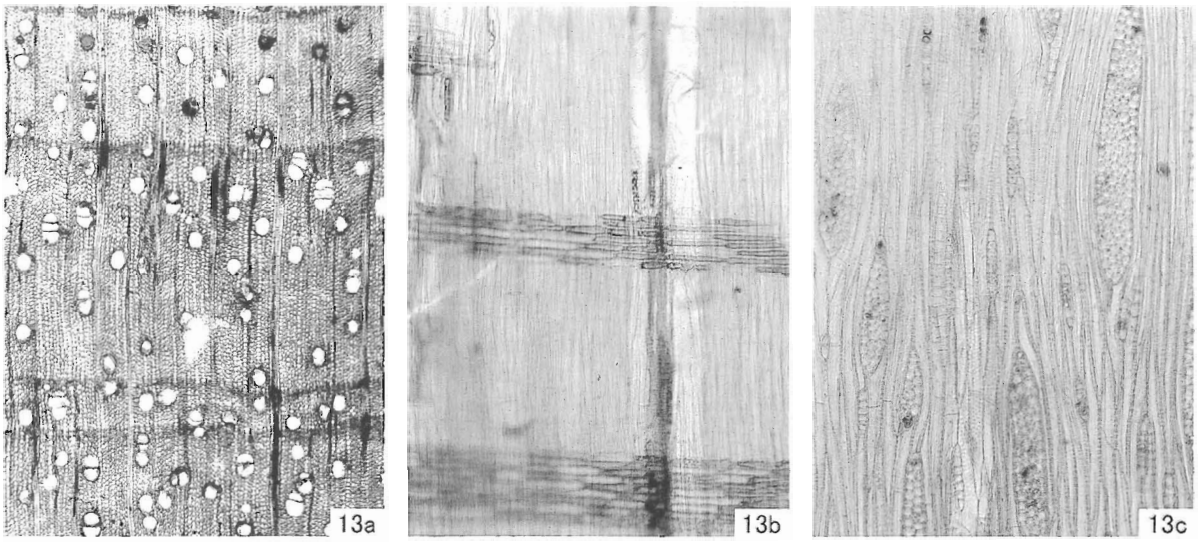
300 μ m:a
200 μ m:b,c

図版4　里方本郷遺跡の木材(4)



10. ツバキ属(試料番号20)
11. ヒサカキ(試料番号14)
12. カエデ属(試料番号21)
a:木口, b:柾目, c:板目

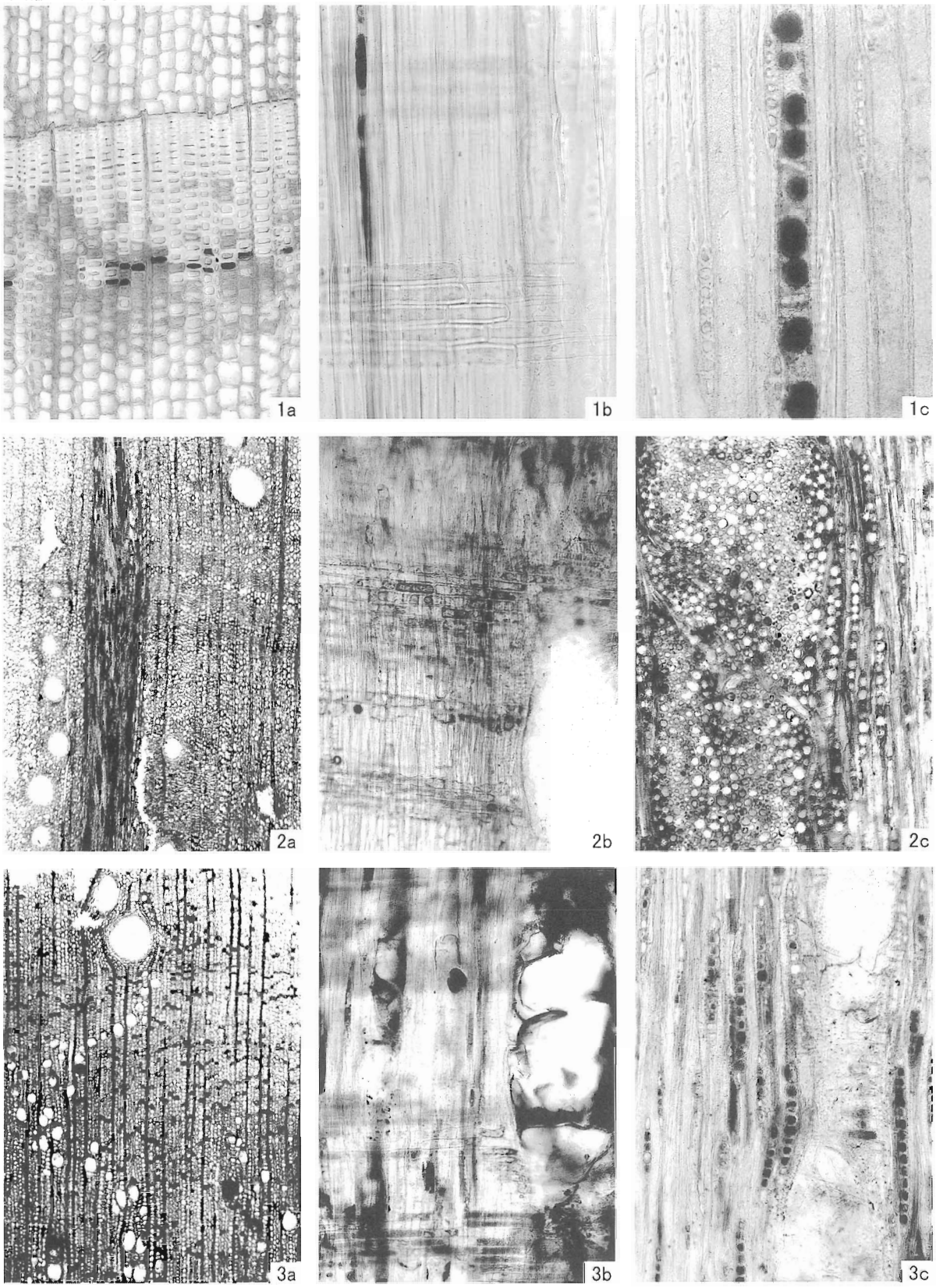
図版5　里方本郷遺跡の木材(5)



13. カエデ属(試料番号24)
a:木口, b:柾目, c:板目

300 μm:a
200 μm:b,c

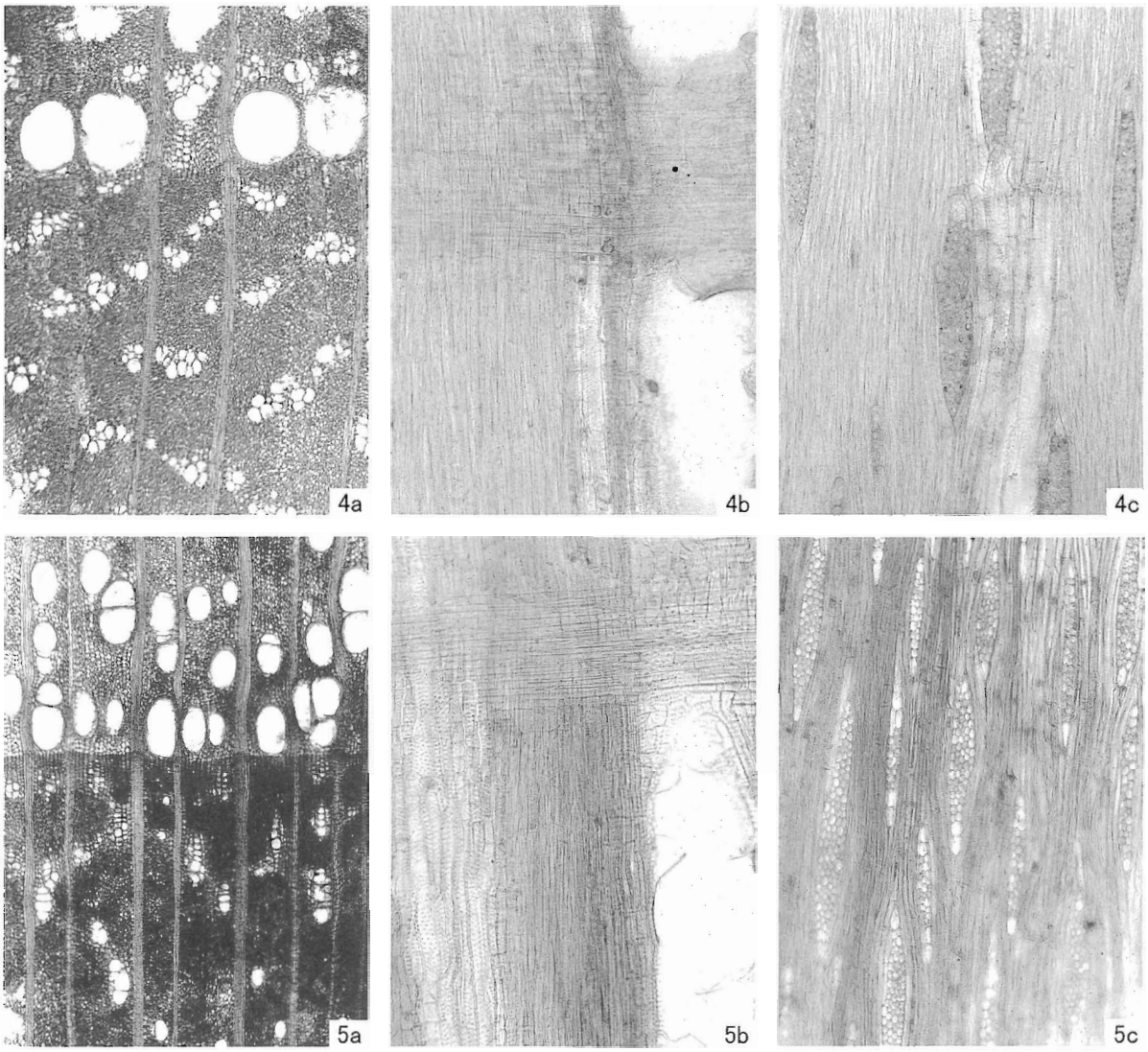
図版6　山持遺跡の木材(1)



1. スギ(試料番号1)
2. コナラ属アカガシ亜属(試料番号7)
3. スダジイ(試料番号6)
   a:木口, b:柾目, c:板目

300 μm:2-3a
200 μm:1a,2-3b,c
100 μm:1b,c

図版7　山持遺跡の木材(2)



4. ケヤキ(試料番号4)
5. ヤマグワ(試料番号8)
　a:木口, b:柾目, c:板目

第８章　総括

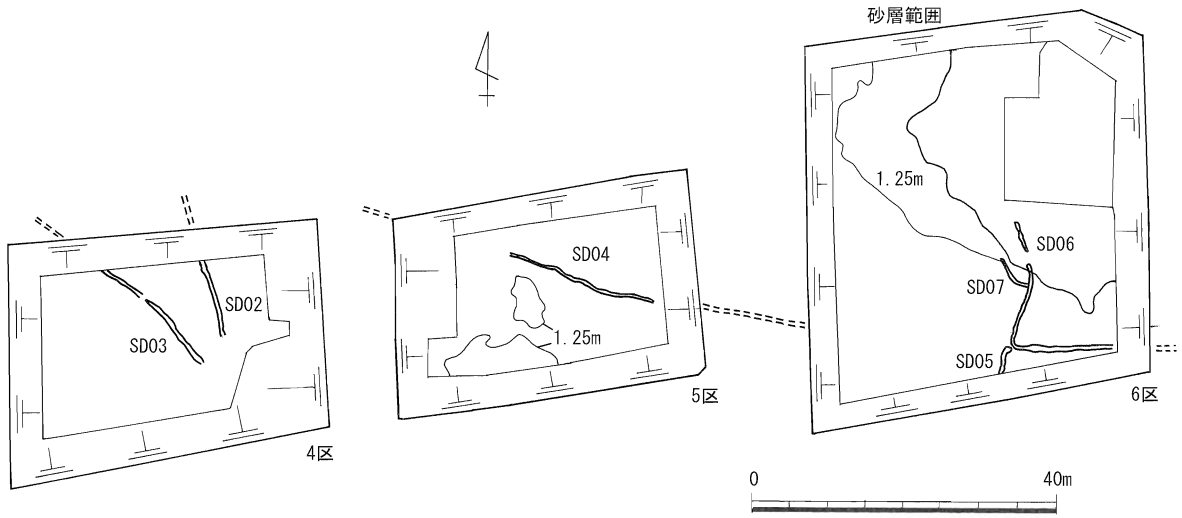
(1) 里方本郷遺跡

遺構　溝や土坑を検出した。特に４～７区では砂層を確認できたことで遺構の検出が容易であった。これは里方本郷遺跡の北側には谷田谷川が流れる谷が位置しており、谷田谷川の堆積作用によりこの部分に砂層が堆積したことが考えられる（島根県教育委員会編 2007a　214 頁）。砂層の堆積時期は弥生時代中期から弥生時代後期の間と考えられる。

また、４～６区で確認した溝のうち、５区 SD04 と６区 SD06 は直接接していないが、SD04 の東への延長線上に SD06 がＬ字に屈曲して東西方向へ軸を向ける部分が位置するので、同一の溝であった可能性がある。また、４区 SD02、SD03 は、５区や６区の溝とは軸が一致していないが、砂層上面で検出したことから、一連の溝であると考えられる（第 135 図）。その他は遺構を検出することはできず、15 区で溝や土坑を確認したにとどまった。これは里方本郷７区と山持７区の間は軟弱な地盤であり、遺構を築くには不安定な状態であったことが想定される。遺物も少ないので、調査区は当時の居住地とは離れた場所であったことがうかがえる。

６区では弥生時代後期の、２区では近世・近代の粘土採掘坑を確認した。

遺物　弥生土器が多く出土したが、その中で４～６区、８、９区では弥生前期の土器が出土した。東林木バイパスの調査で弥生前期の土器がまとまって出土したのははじめてである[1]。出雲平野北部ではこれまで出雲市大社町原山遺跡や出雲大社境内遺跡が知られていたが、これまで出雲平野北部や矢野遺跡などの位置する出雲平野中部では、突帯文系土器の比率が三田谷Ⅰ遺跡などが位置する出雲平野南部と比べて低く、蔵小路西遺跡の突帯文土器単純の構成から、原山遺跡や矢野遺跡では弥生土器単純の組成に極めて早く移行するようで、ほとんど突帯文系土器を含まない組成となる（中川 2003）。里方本郷遺跡では、縄文土器は２点しか出土しておらず、ほとんどが弥生土器であり、出雲平野北部の傾向と同じである。SK14 が最も古く前期中葉（Ⅰ -2 様式）であり、前期後葉や前



第 135 図　里方本郷遺跡４区～６区溝平面図（S=1/1,000）

[1] 青木遺跡では包含層中から弥生前期の土器が出土しているが、小片である。
島根県教育委員会編『青木遺跡Ⅱ』2006　Y115 ～ Y119　Y121　Y168、Y171、Y175、Y176、Y202 など

期末の土器も出土している。土器の中には貝殻施文の土器があり、綾羅木系土器との関係をうかがうことのできるものがある。また、4区からは打製石斧が出土したが、比較的大形のものである。弥生前期の土器に伴って大形の打製石斧が出土することはこれまでに指摘されており（中川 2003 稲田 2005 など）、特徴的な遺物である。さらに、擬朝鮮系無文土器が8区から出土している。（第75図　133）出雲市内ではこれまで原山遺跡と矢野遺跡で出土しているが、いずれも出雲平野北部～中部であることは上述した弥生土器の組成の傾向とも同じであることは興味深い。弥生中期の土器は中期前葉から中期後葉まで継続して出土しているが、量は少ない。弥生前期や中期の土器は摩滅しているものが多く、特に4～6区の出土土器にその傾向が強いが、土器が出土した砂層が谷田谷川の堆積によるものと考えると、弥生前期や中期の土器は、調査区の北側に位置する谷田谷川の谷筋近くに存在したと考えられる、未確認の遺跡から流されてきた可能性がある。今後の検討が期待される。弥生後期以降の土器は少なく、調査区によって差がある。オモカス層の堆積により、部分的には耕作地として利用されていたものの全体として土地の利用が進まなかったことを示している可能性がある。

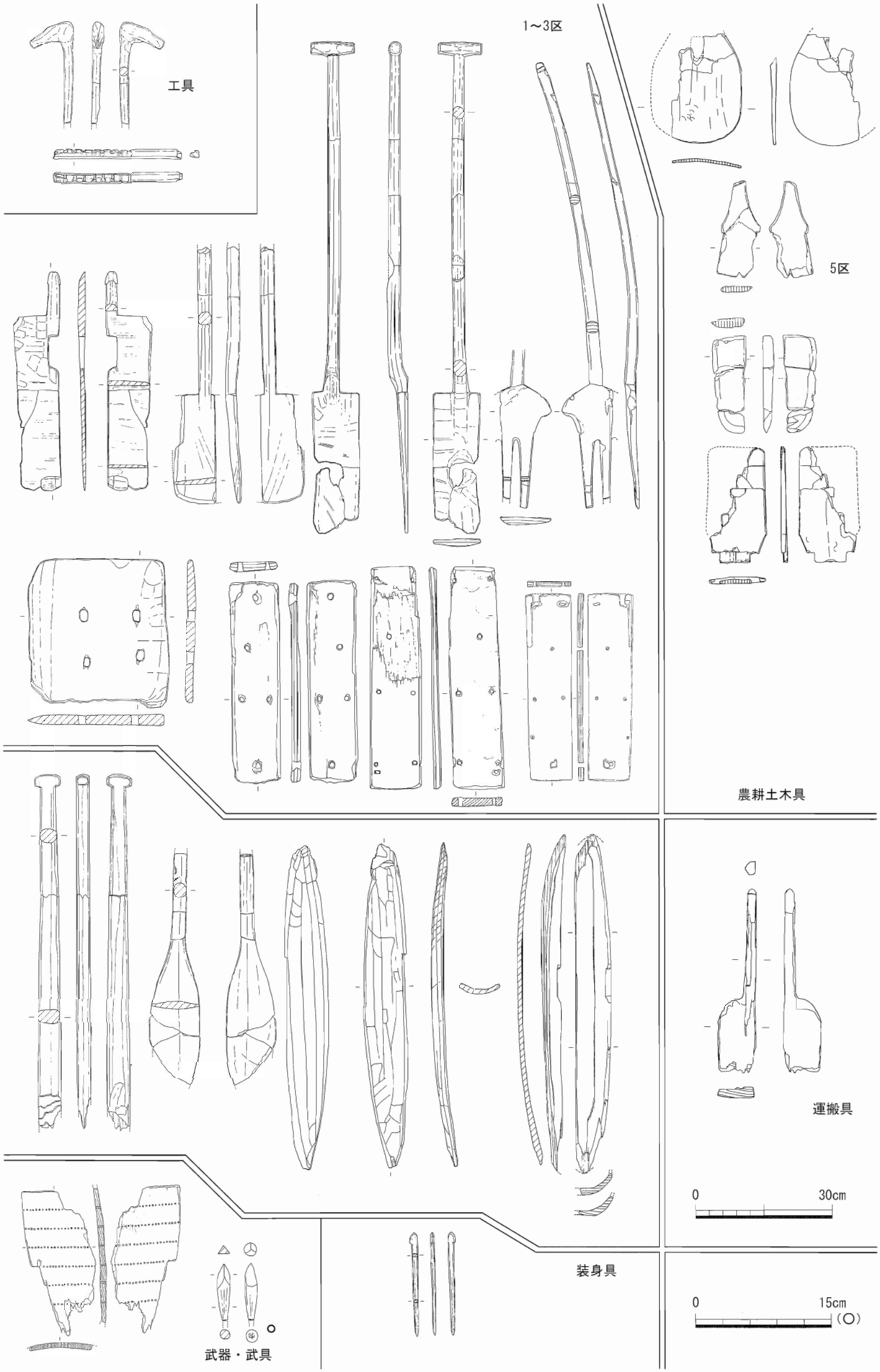
(2) 山持遺跡5区

遺構　遺構の密度は低く、溝や土坑を検出したにとどまった。SK01 や SK02 からは小型の甕が倒立または横倒しになって、焼土と一緒に出土した。焼土が出土していることから、里方本郷遺跡6区で確認したような粘土採掘坑ではなく、廃棄土坑の可能性がある。隣接する山持遺跡3区では、自然河道の他は小規模な土坑（3-1区 SK01）や浅い溝（3-2区 SD17、SD18）が検出されているので、調査区の南東側に山持遺跡の中心的な箇所が存在したと考えられる。なお、山持遺跡6区の調査では、砂礫層から縄文後期～弥生後期中葉の土器が出土している。調査地の南東側とは別に、未確認の遺跡があり、そこから斐伊川や伊努谷川など河川の堆積作用によって流されてきたことが想定されることから、山持遺跡の居住域は複数考えられる。古墳後期～古代・中世については、遺構を確認できなかったので、2区や3区と比較することはできなかった。

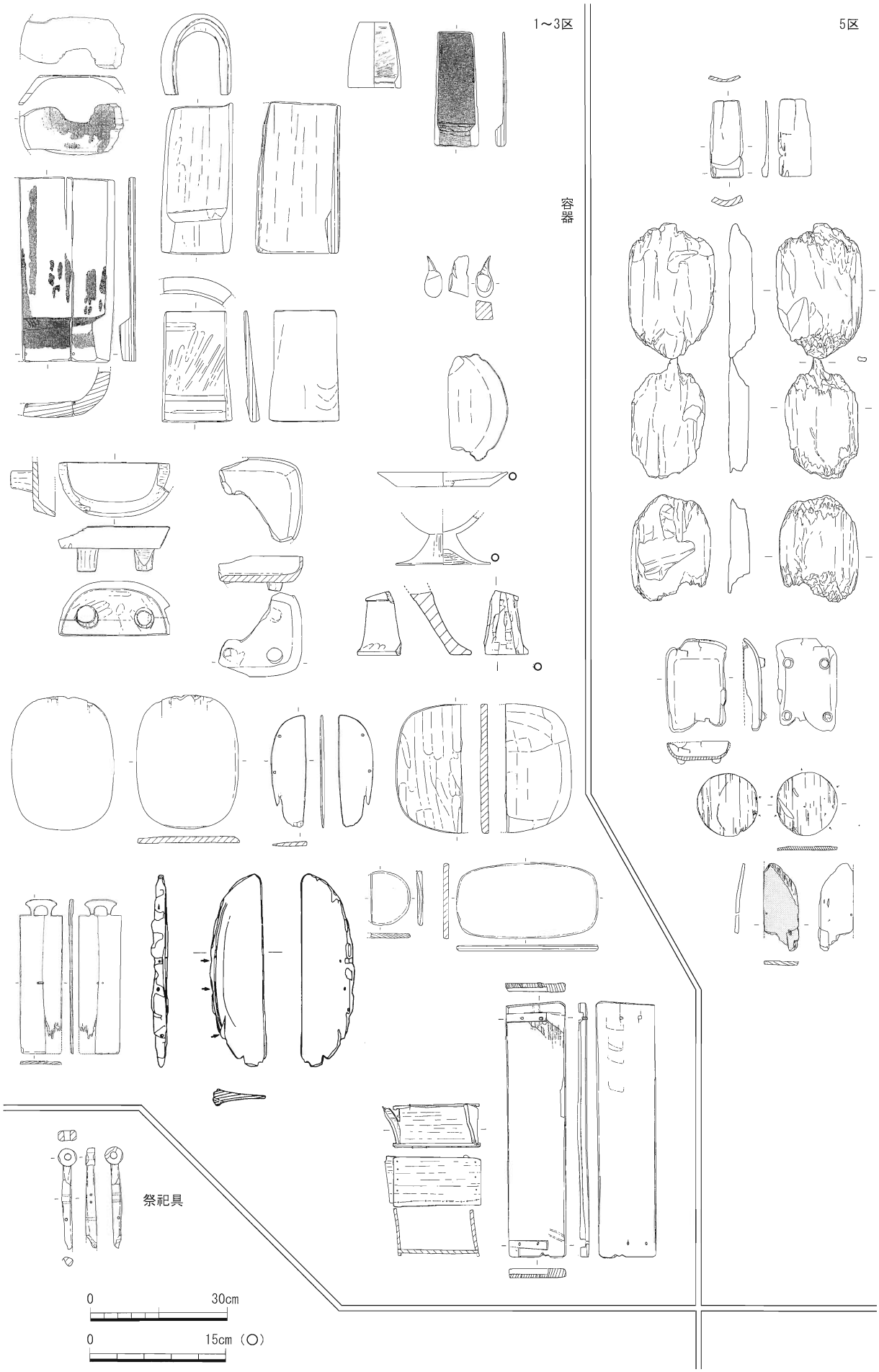
遺物　弥生後期～古墳前期の土器が多く出土した。これは山持遺跡1～3区の傾向と同様である。5区から出土した土器には半截竹管文が体部にある器台（第102図127）の系譜について類例の検討が必要であるが、それ以外はほとんどが在地のものであり、1区や3区のような北部九州系土器や西部瀬戸内系土器、朝鮮半島系土器の出土は出土しなかった。なお、山持遺跡から出土した外来系土器には、古志本郷遺跡で出土したような「く」字口縁甕（中川 2006）が少なく、前述の北部九州系土器や西部瀬戸内系土器が目立つ。器種は壺が多く、内容物の運搬が中心であったことがうかがえる。

土器の出土状態は、上層に土師器を多く含む傾向があるが、湧水が多く層位を判断できるような出土状態ではなかったことや土器のほとんどが破片で出土していることから、山持3区 SR03 のような分析を行うことはできなかった。

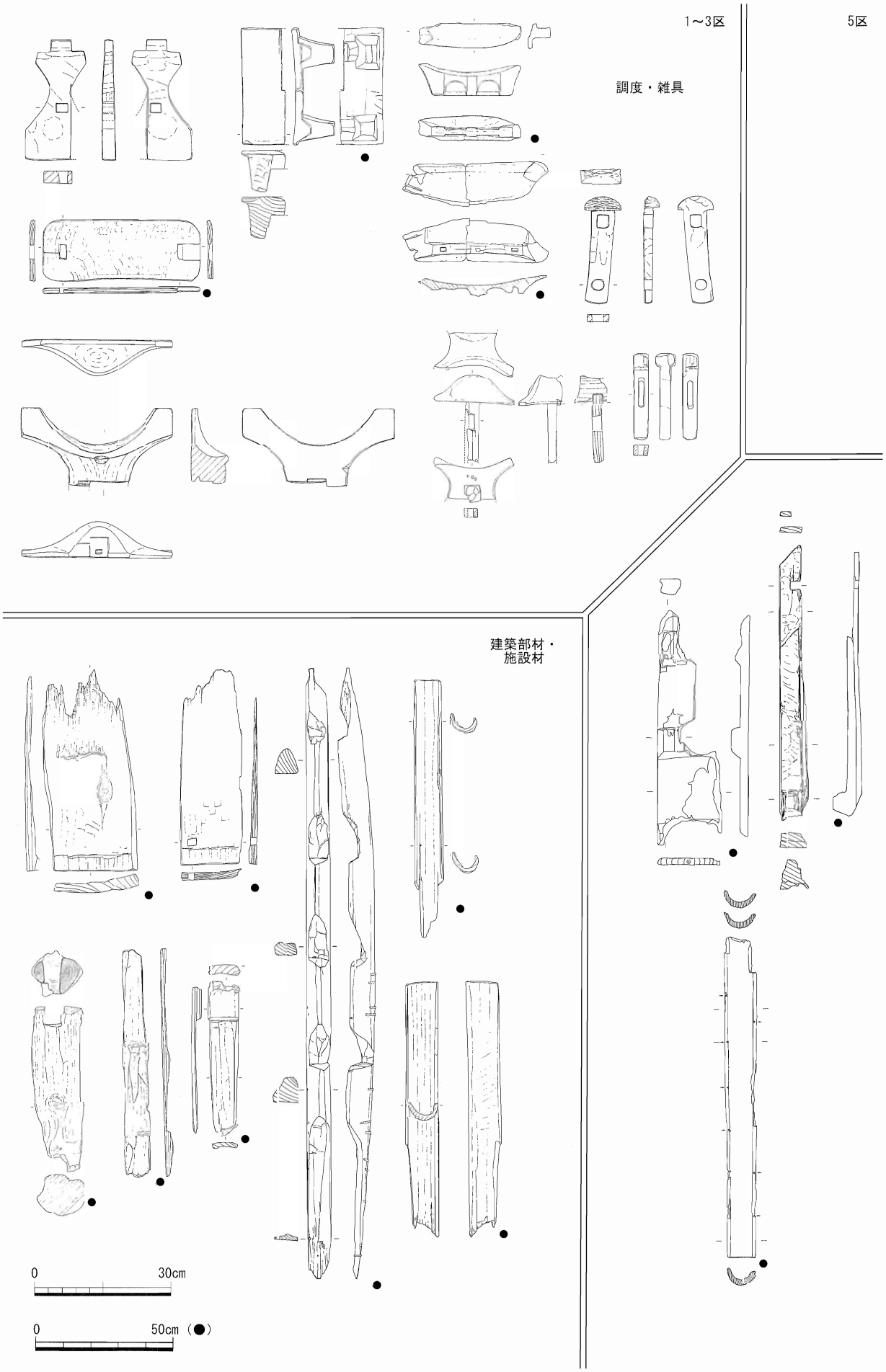
木質遺物では、1～3区から出土した木質遺物とあわせて第136～138図で示した。これまで山持遺跡からは工具、農耕土木具、運搬具、武器・武具、装身具、容器、祭祀具、調度・雑具、建築部材・施設材が出土している。農耕土木具ではこれまで鋤が多く出土している。鋤は直身の一木平鋤、一木多又鋤、組合せ平鋤の三種類の鋤が出土している一方、1～3区ではこれまで鍬が出土してい



第136図　山持遺跡木質遺物一覧 (1) (S=1/12・○印は1/6)

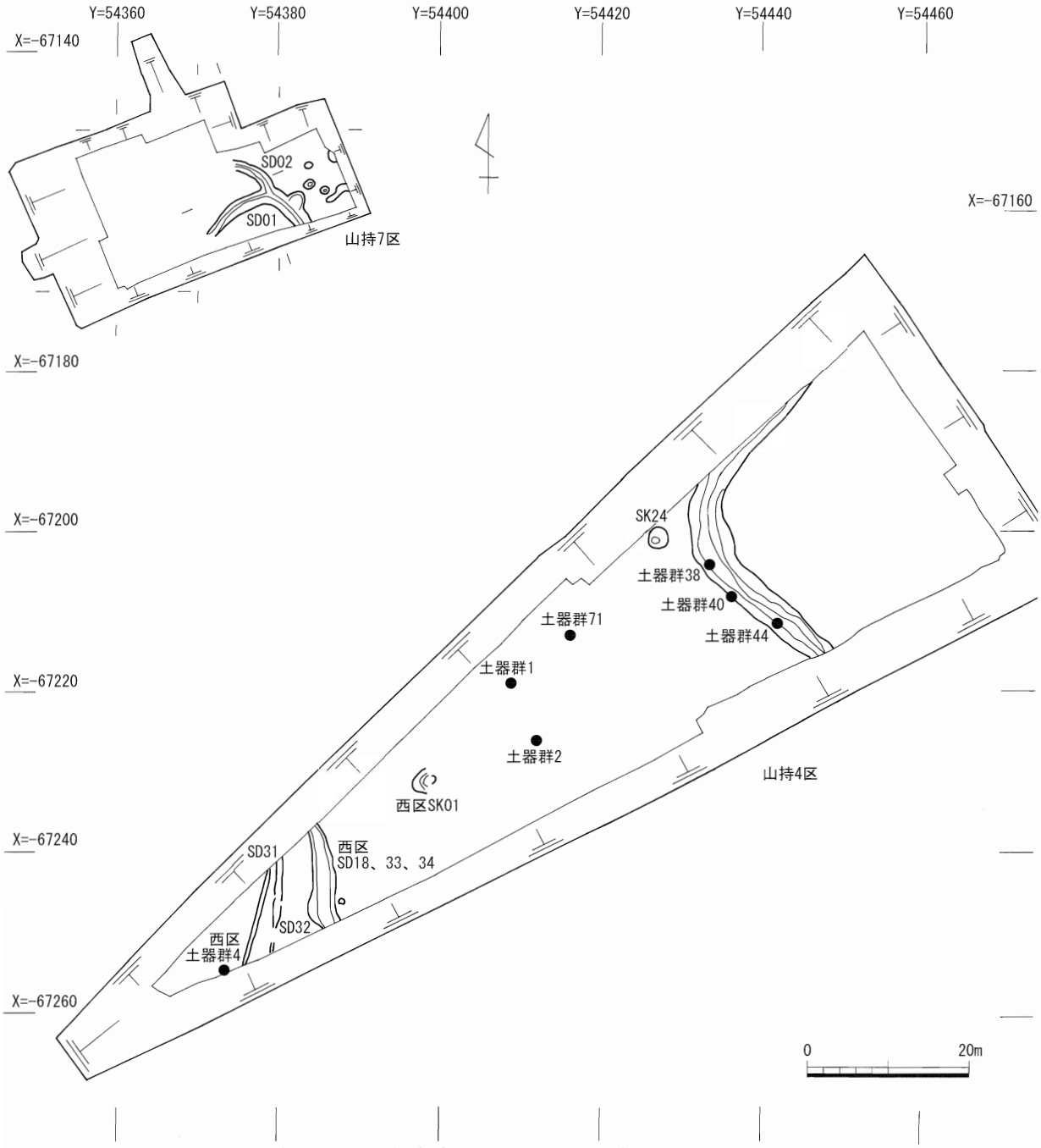


第 137 図　山持遺跡木質遺物一覧 (2) (S=1/12・○印は 1/6)



第 138 図　山持遺跡木質遺物一覧 (3) (S=1/12・●印は 1/20)

ない。運搬具では、櫂や田舟が出土していることから、低湿地における移動の形態がわかる。工具、武器・武具、装身具は出土しているが点数は少ない。容器は多く出土しており、刳物、組物、曲物が出土している。種類では桶、盤、皿、鉢、高杯、底板／蓋板などがあり、多様である。また、容器の未製品と考えられるものが5区から出土しており、容器の生産も遺跡内で行っていたことが想定される。なお、1区出土の桶には炭化したものが多く、使用後に廃棄したことがうかがえる。高杯には花弁状の装飾部分や脚部に透かしのある赤彩のものなどの精製品がある。このように容器が多いにもかかわらず、これまで匙や杓子のような食事具･調理加工具の出土がほとんど見られない点は注目される。調度・雑具には腰掛（一木、組合せ）や木栓がある。木栓には花弁状の装飾を持つものがあり、掘立柱建物の装飾であったと考えられる。建築部材には梯子や柱がある。施設材には井戸枠や木樋があり、特に木樋は1区、3区、5区でそれぞれ1点ずつ出土している。なお、容



第139図　古墳時代中期～後期の遺構（S=1/800）

器や一部の加工材を除けば未製品の出土は少ない。樹種同定を行った点数が少ないが、容器や建築部材、施設材を中心にスギが多く用いられている。また、木取りから樹径を復元すると、大径木も一定量あることがわかるので、想像をたくましくすれば、北山沿いに生育していたスギの大径木を用いて容器などのさまざまな木製品を使用していたことがうかがえる。

木質遺物から遺跡の性格を考えると、①1～3区では鋤が多く鍬が少ないことから、耕作に伴う作業よりも溝の掘削や維持管理のような土木作業が積極的に行われていた可能性がある。このことと1～3区や5区では弥生後期以降の土器が多いこととあわせると、5区周辺は積極的に土木作業を行って居住域や耕作地を作った、弥生後期になって新しく成立した遺跡の可能性がある。さらに6区の砂礫層から出土した土器には弥生前期や中期のものが含まれていることから、山持遺跡には弥生時代を通して継続していた集団（遺跡の中央から西側？）と、後期になって新しく成立した集団（遺跡の東側）の、複数の集団を想定することができる。5区周辺の遺跡は、前者から移動して成立した後者の集団のひとつの可能性がある。②精製の高杯や儀仗の先端の可能性のある祭祀具、建物の装飾用の部材の存在から、5区周辺の遺跡には精製高杯や祭祀具を用いて、装飾のある建物に生活した階層的に上位の人（達）の存在を想定することができる。

(3) 山持遺跡7区

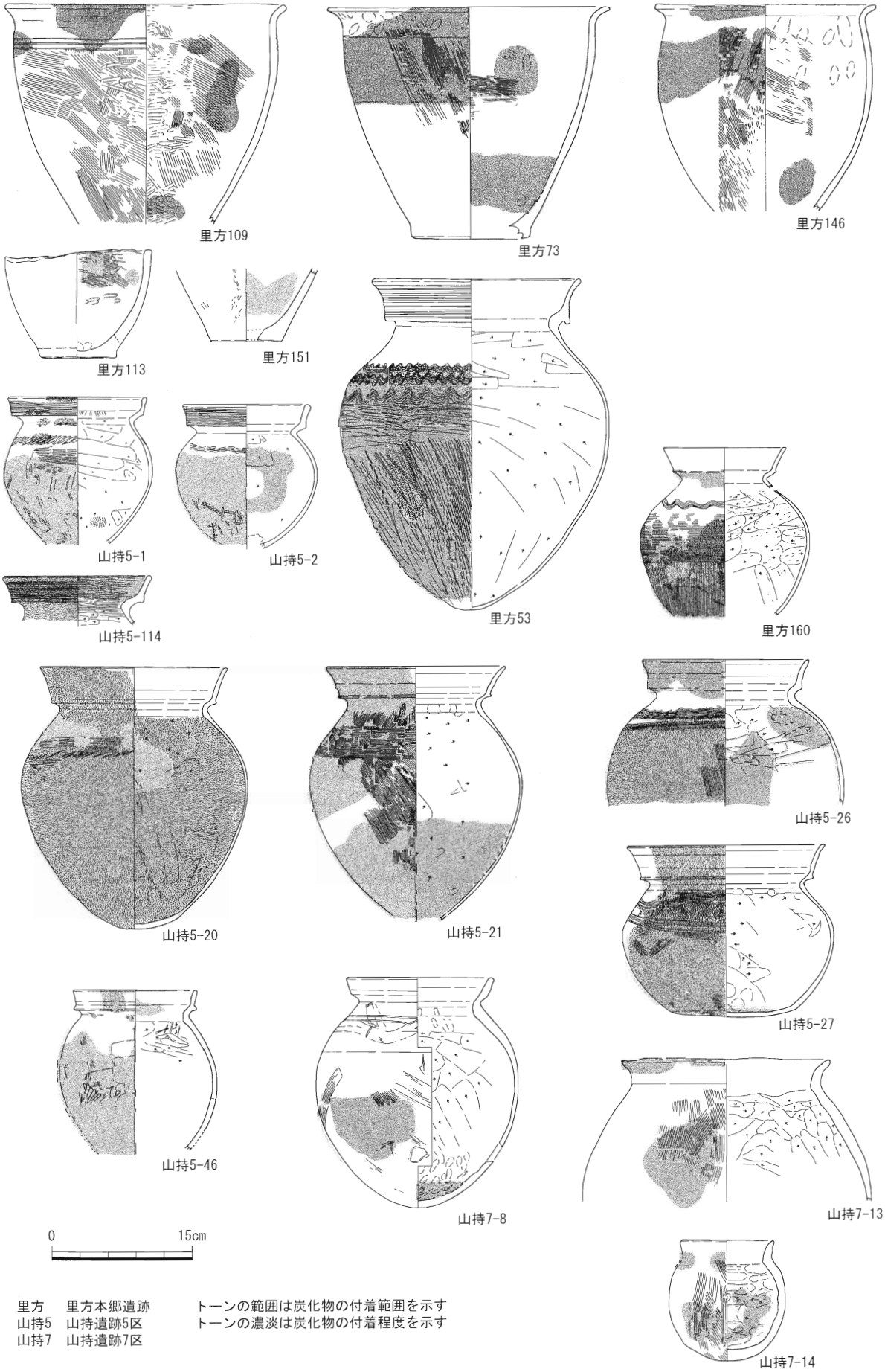
遺構　溝や土坑を検出した。中でもSD01からは古墳後期を中心とする多くの土器が出土した。土器には完形で出土したものがある。出雲市内では中野清水遺跡7区4号溝（島根県教育委員会編2007）や古志本郷遺跡HⅡ区SX14（島根県教育委員会編2001）で古墳後期の方形周溝状の遺構を確認している。SD01が示す形とは異なるが、同時期の遺構であることが注目される。土坑では、SE03では湧水があること、完形の鉢が出土したことから、素掘りの井戸の可能性を指摘した。素掘りでは湧水のため遺構の側壁が崩壊する可能性があるが、井戸枠は確認できず、井戸枠の抜き取りを示唆するような土層の状態ではなかった。

第139図は山持4区と7区の古墳中期～後期の遺構を示した。4区では溝や土坑、土器群が確認されている。古墳前期には掘立柱建物や土器群が調査区の中央部分で多く確認されていたが、古墳中期～後期には土坑や土器群が散見されるので、古墳中期～後期には4区や7区の位置する山持遺跡の西側から西端にかけての位置に、遺跡の中心があると考えられる。

遺物　古墳中期～後期の土器が出土した。中でもSD01や包含層から出雲1～2期の須恵器と共に土師器が共伴して出土したが、山持遺跡4区土器群1や土器群71では出雲1～2期の須恵器と土師器が出土しており、同時期の遺構である。組成も須恵器の蓋、坏身と土師器の甕、高坏、椀、鉢であり、SD01や包含層の土器の組成と同様である。また、出土した土製品に移動式竈の破片があるが、これは出雲市内では三田谷Ⅰ遺跡SI06（島根県教育委員会編1999）や井原遺跡Ⅱ区SD01（出雲市教育委員会編2002）と同時期の、出現・普及期の移動式竈であり、器壁が薄いことも古い要素を示していると考えられる。

(4) 遺物付着炭化物

本報告では土器や木質遺物に付着した炭化物を、特に器形と炭化物の付着範囲が明瞭に判るものについて、第140図に土器を、第141図に木質遺物を図示した。



里方　里方本郷遺跡
山持5　山持遺跡5区
山持7　山持遺跡7区

トーンの範囲は炭化物の付着範囲を示す
トーンの濃淡は炭化物の付着程度を示す

第 140 図　土器に付着した炭化物（S=1/6）

弥生前期の甕には外面上半と内面下半に炭化物が付着しているもの（里方本郷73）があり、外面下半は強く火を受けているものがある（同151）。小型の鉢にも、外面が火を受け、口縁付近の内面に炭化物が薄く付着しているものがある（同113）。甕と異なる用途に用いた可能性がある。

弥生後期の甕は、外面全体に炭化物が付着しているものがある。里方本郷－53や山持5区－1、2の甕は、胴部に炭化物が付着しているが、口縁部や頸部、内面にはあまり付着していない。頸部への炭化物の付着の有無と使用頻度を対比させて考える意見もある（小林・柳瀬2002　26、27頁）。また、山持5区-114は、口縁部内面に炭化物が付着し、頸部内面には付着していない。蓋の存在が示唆される。

古墳前期の甕は、山持5区－20、21、26のように内外面に顕著に炭化物が付着しているものがある。内面も20、21は胴部の上位まで炭化物が付着している。山持5区－27は平底の鉢であるが、底部内面の平坦部分に炭化物が付着している。

山持7区の古墳中期～後期の甕には、完形に復元できるものがあるにもかかわらず、炭化物が付着していたものが少なかった。山持7区－8、13では外面に炭化物が薄く付着しており、山持5区の古墳前期の甕との差は大きい。山持7区－8は内面の底部周辺にも炭化物が付着している。山持7区－14は小型の鉢であるが、内外面には部分的に炭化物が付着している。

なお、吹きこぼれの痕を確認することはできなかった。

木質遺物では、容器（146）や梯子（171）が火を受けて炭化している部分があり、廃棄されたものと考えられる。山持1区に比べて、炭化した木質遺物は少ないようである。里方本郷4区には上部に炭化部分がある杭が出土している（杭4：187）。

【文献】

小林正史・柳瀬昭彦「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』第13号　日本考古学協会　2002　19-48

中川　寧「出雲地域における縄文・弥生移行期の遺跡の特徴について」『立命館大学考古学論集Ⅲ-1』2003　207-230

稲田陽介「山陰地方における打製石斧の基礎的研究」『第16回中四国縄文研究会　縄文時代晩期の山陰地方』2005　65-86

中川　寧「山陰地域―出雲―」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　2006　243-256

島根県教育委員会編『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.1』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　1999

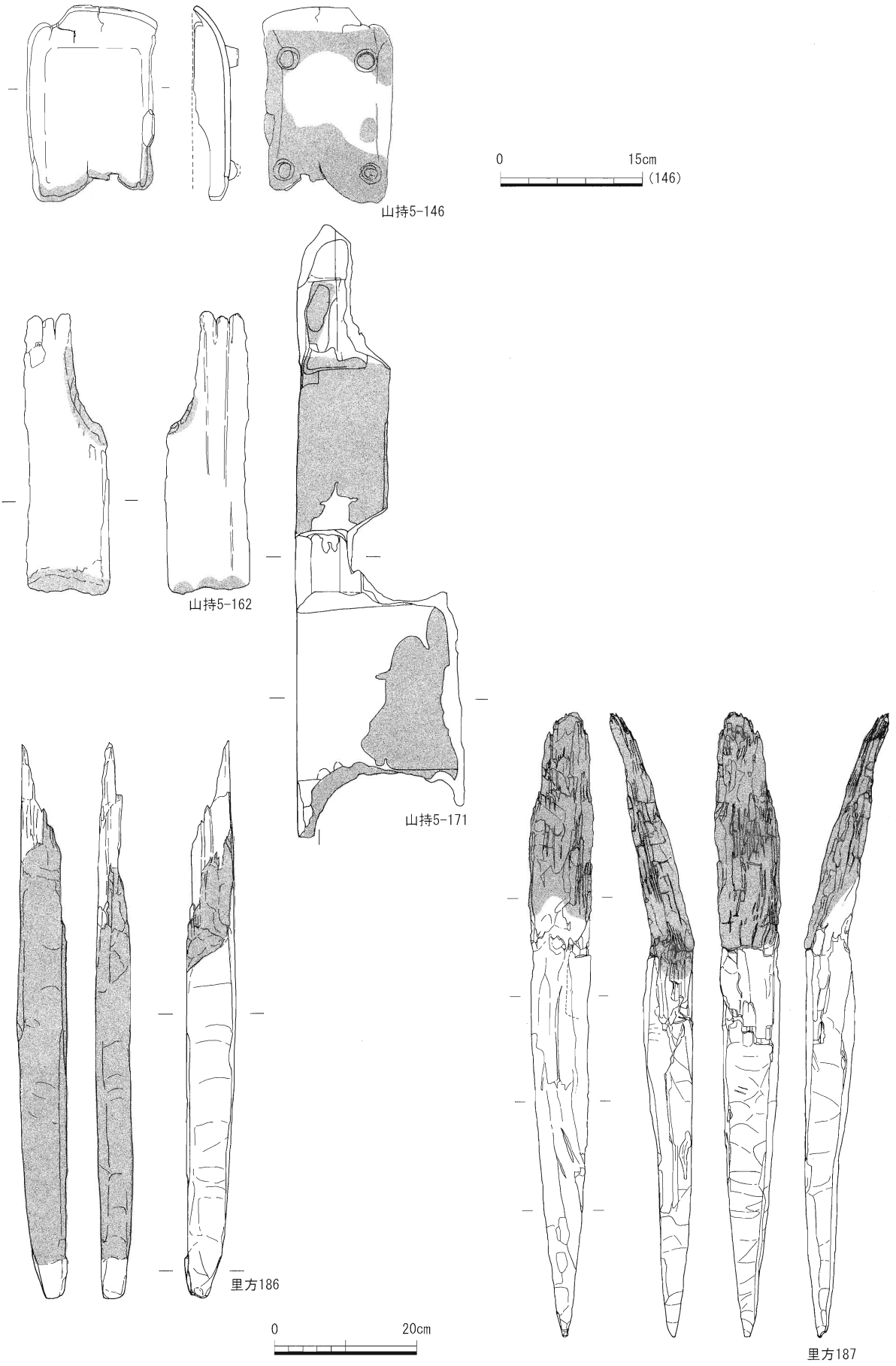
島根県教育委員会編『古志本郷遺跡Ⅱ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ　2001

出雲市教育委員会編『井原遺跡発掘調査報告書』新内藤川広域基幹河川改修事業地内　2002

島根県教育委員会編『中野清水遺跡（3）　白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7　2006

島根県教育委員会編『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区　Vol.2』国道431号道路改良事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　2007a

島根県教育委員会編『山持遺跡　Vol.3（Ⅳ区）』国道431号道路改良事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　2007b



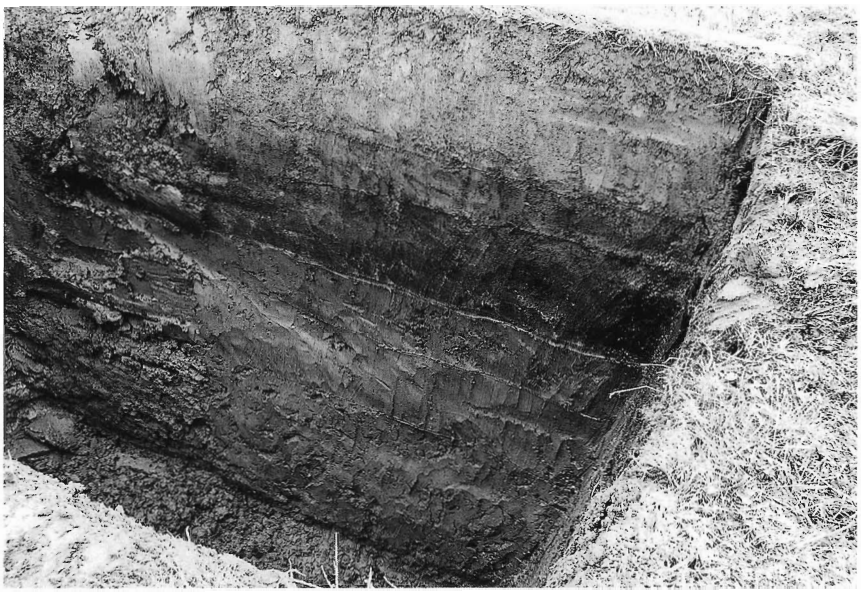
第 141 図　木質遺物の炭化範囲（S=1/6・1/8）

写　真　図　版

1. T25

2. T26

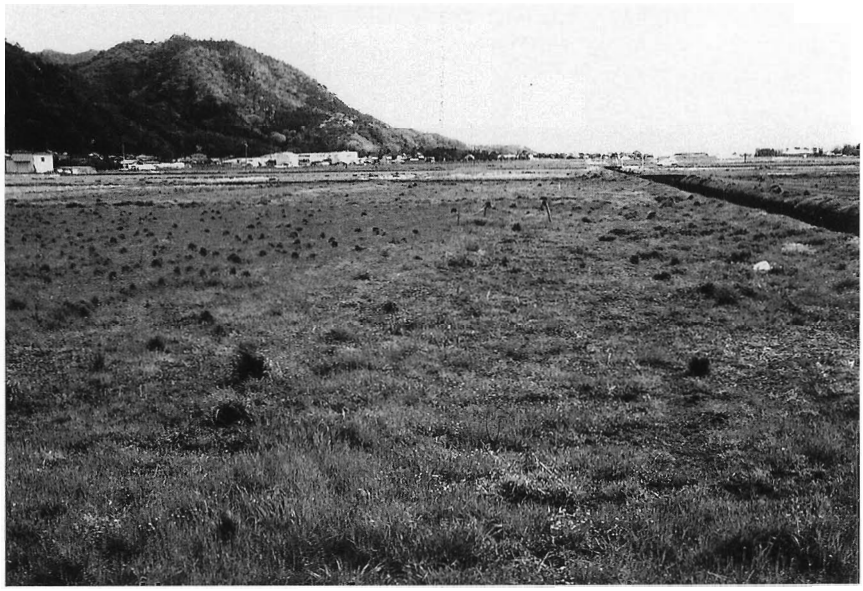
3. T28



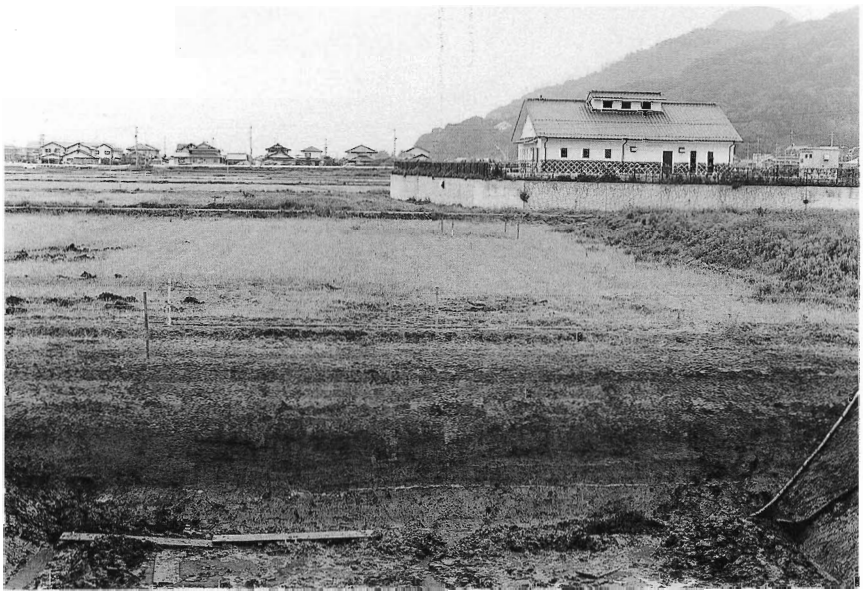
1. T32

2. T33

3. T53



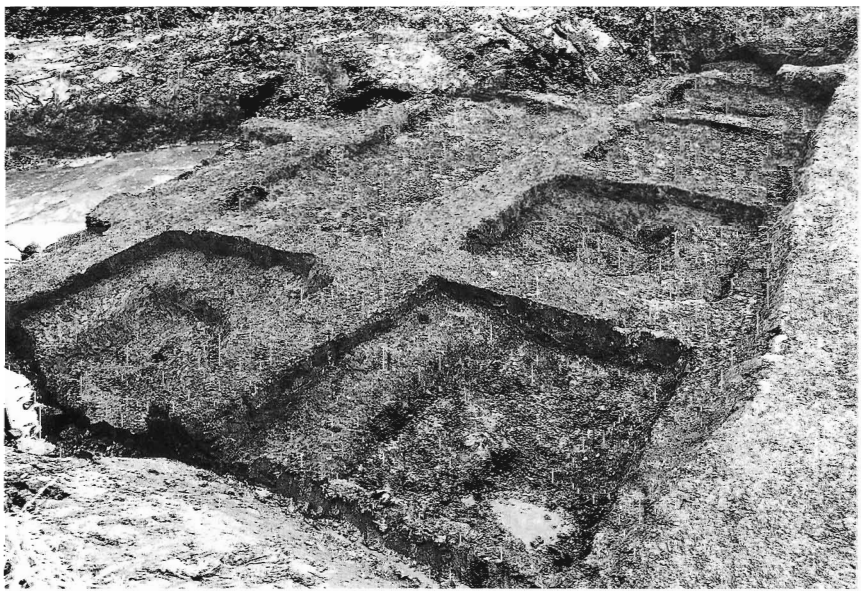
1. 調査前



2. 1 区 AB ライン土層

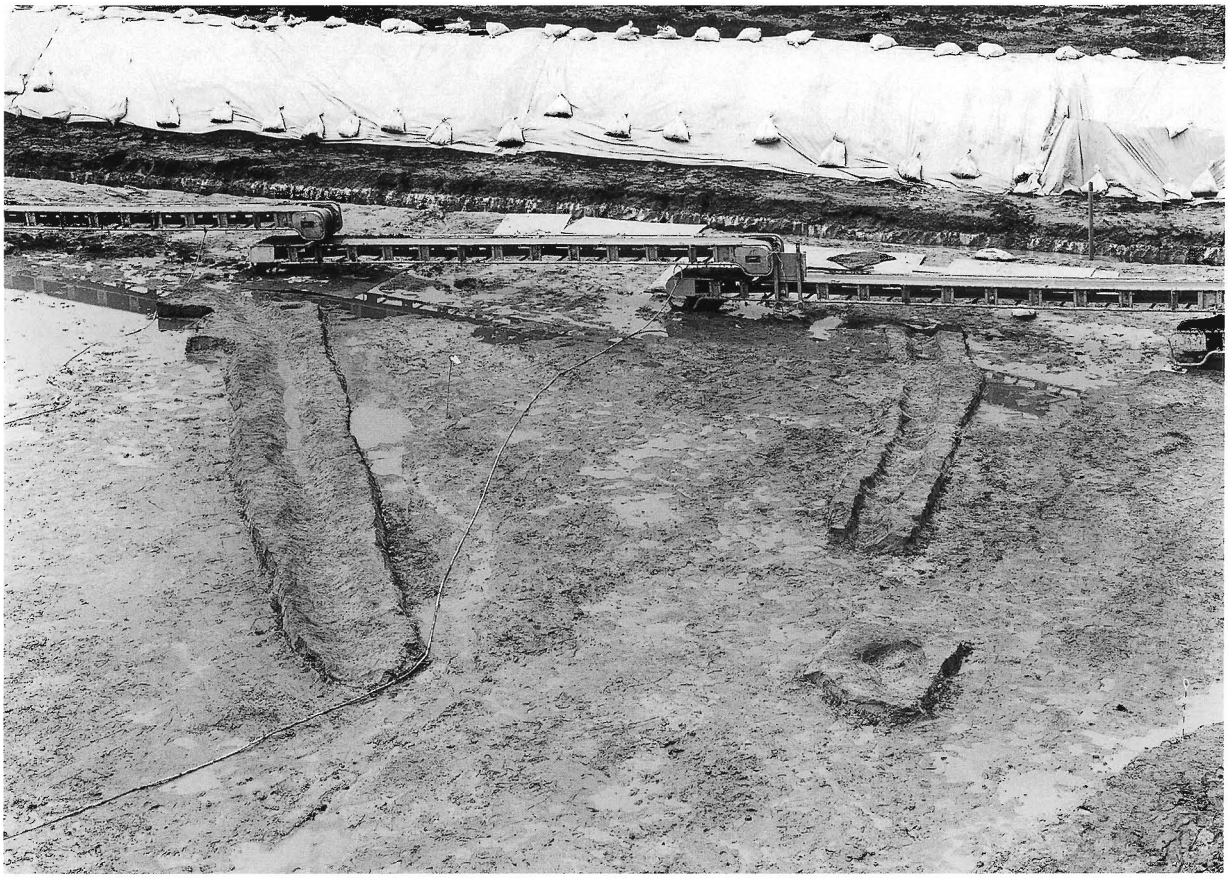
3. 2 区 AB ライン土層

1.2 区粘土採掘坑検出



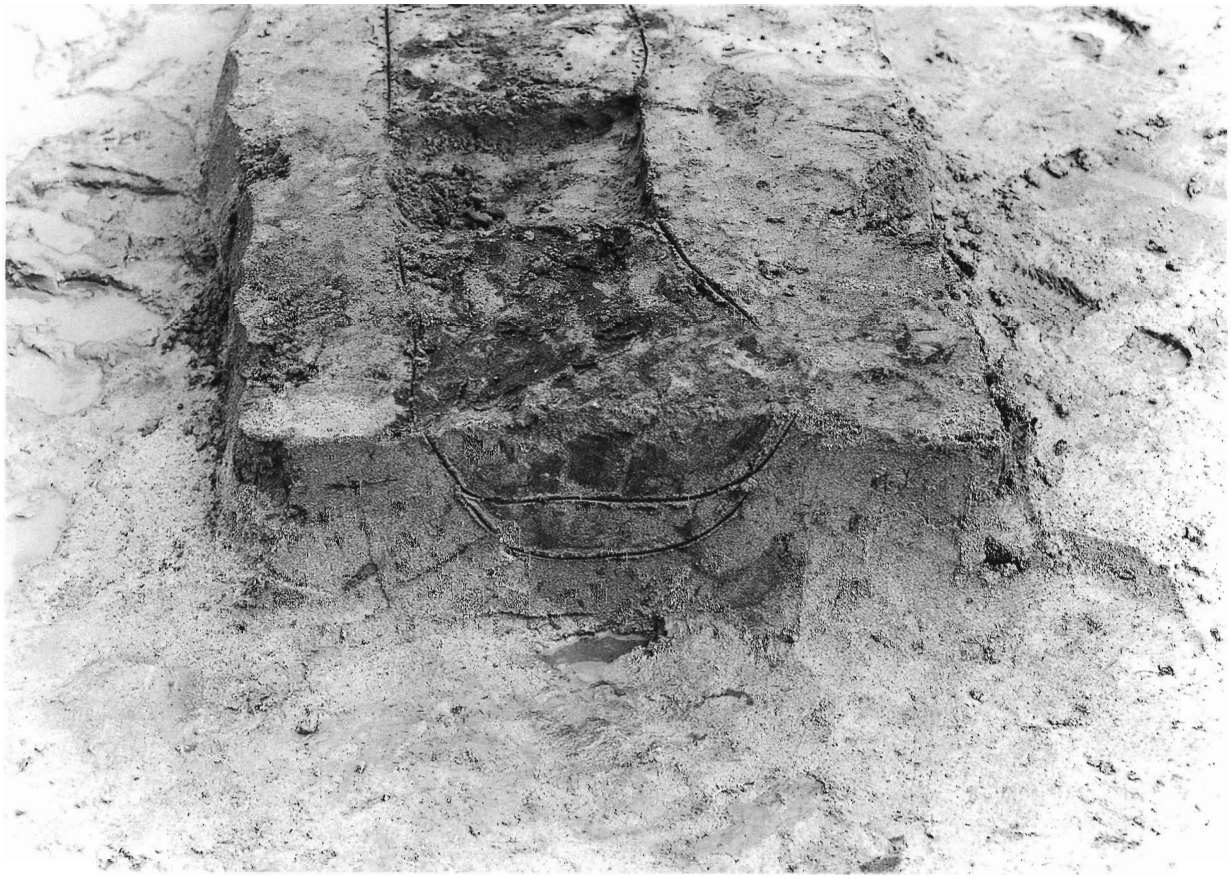
2.2 区粘土採掘坑完掘

3.3 区 AB ライン土層



1.4区 SD02（右），SD03 完掘

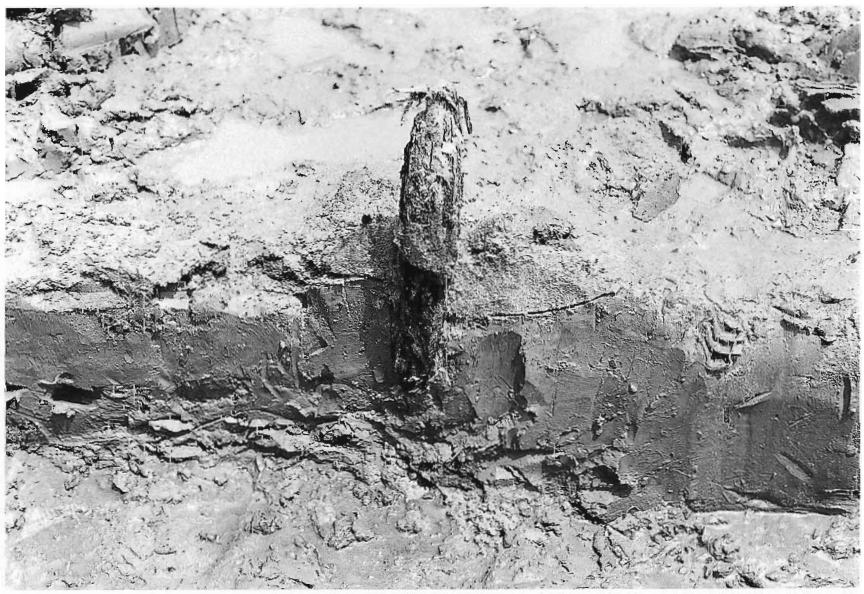
2.4区 AB ライン土層



1.4 区 SD02 土層

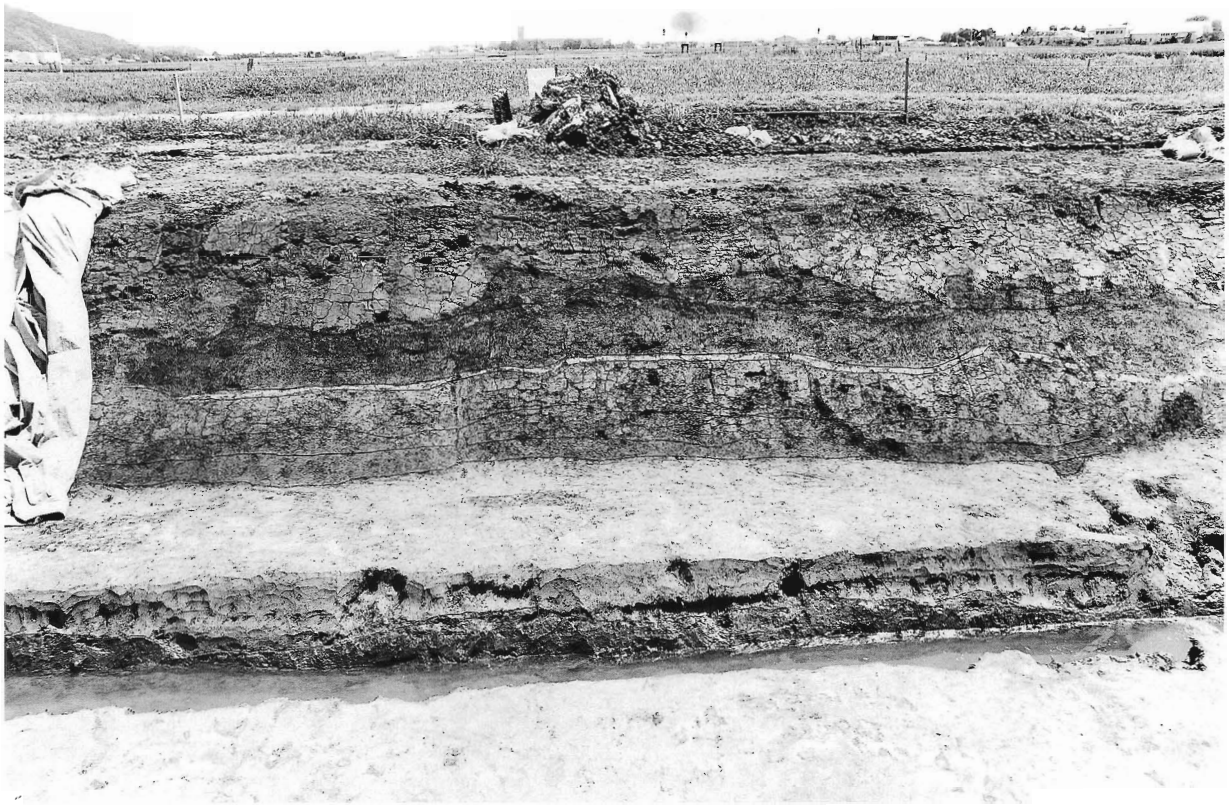
2.4 区 SK01 完掘

1.4 区木質遺物
(179, 180) 検出



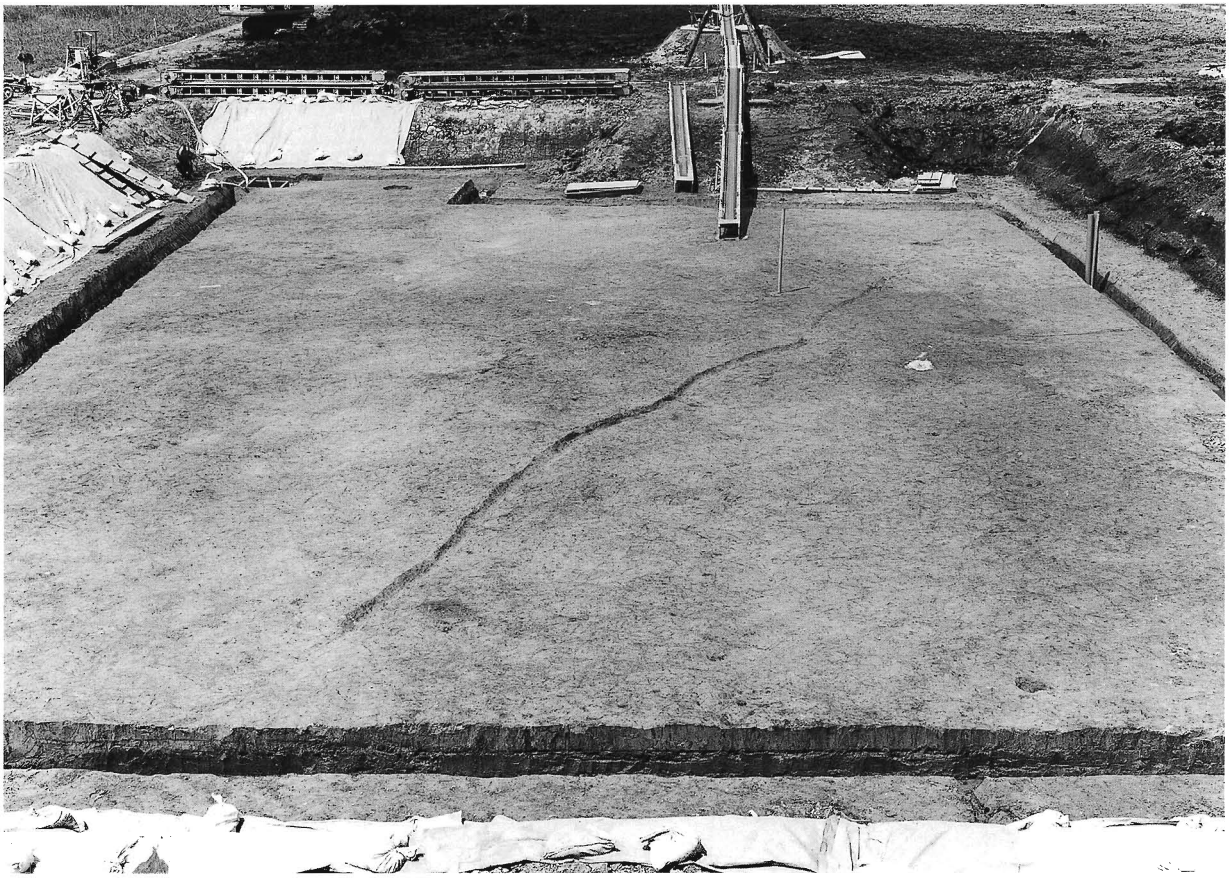
2.4 区杭 2

3.4 区杭 4

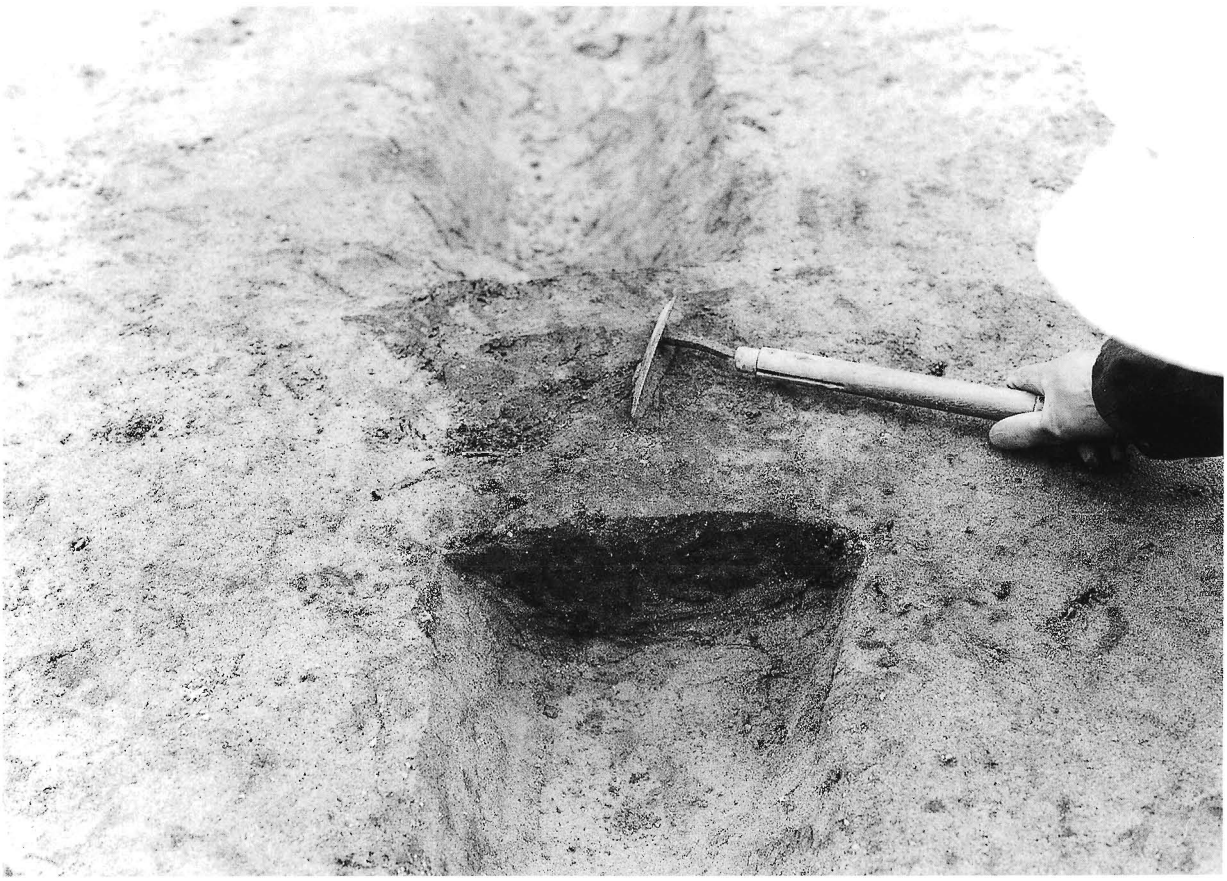


1.5 区 AB ライン土層

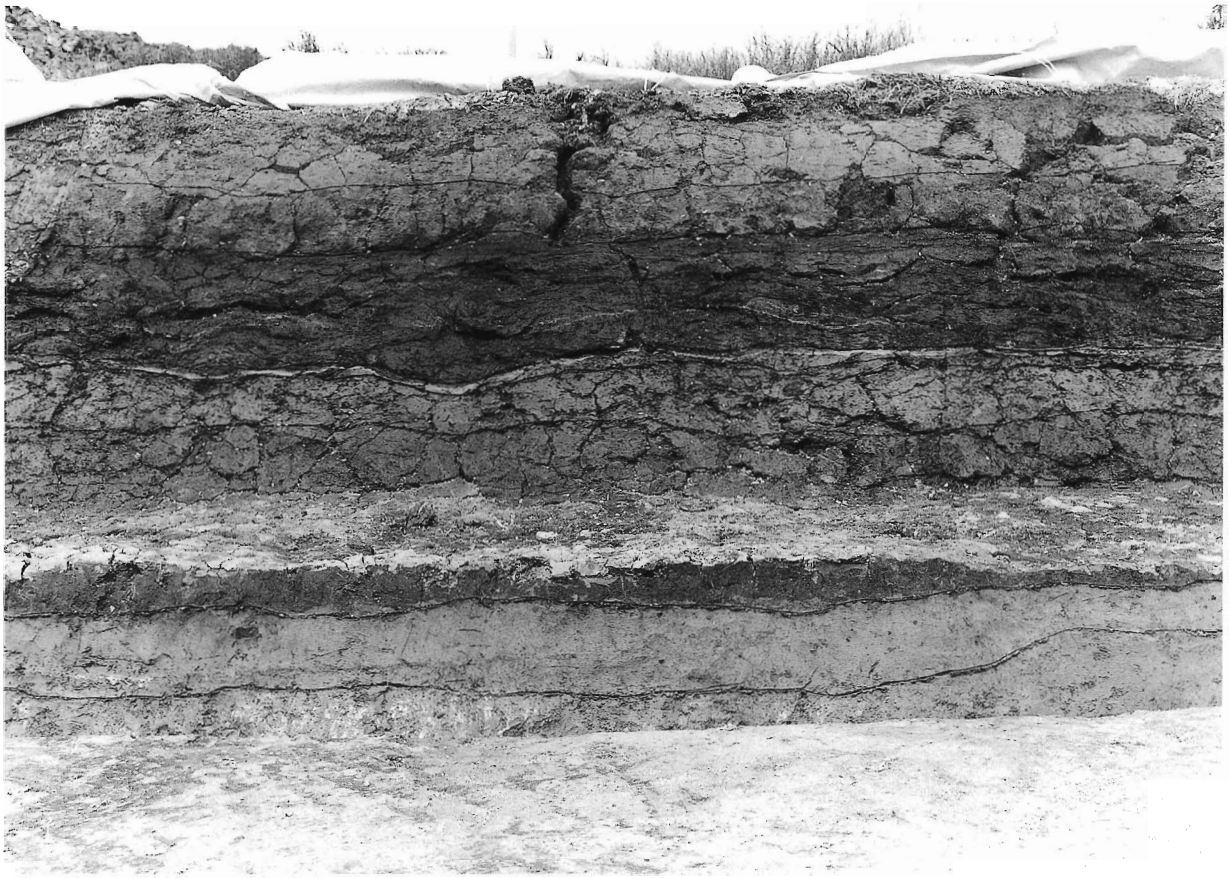
2.5 区完掘



1.5 区 SD04 完掘



2.5 区 SD04 土層



1.6区ABライン土層

2.6区遺構完掘